山岡荘八
徳川家康
25
孤城落月の巻

講談社文庫

徳川家康 25 孤城落月の巻

山岡荘八

講談社

目次

挿絵　木下二介

徳川家康　25　孤城落月の巻

夏の陣開戦

一

大坂夏の陣は、大野治房の兵二千あまりが、暗り峠を越えて郡山に放火したときから開始されたとされている。

その日時は四月二十六日と記録されているが、その時にはすでに郡山の東北の村落はすっかり焼きはらわれて、捨ておくと奈良一帯も焦土になりかねない危機を迎えていた。

そこで五条城の城主であり幕府の代官でもあった松倉豊後守重正は、奥田忠次とともにそれを迎え討つため、国分越えに引きあげ、大和はすでに戦場になってしまっていた。

大野治房をこうしてはげしく強硬な主戦論者に仕立てあげた理由は幾つかある。

兄の治長の態度が煮えきらなかったのもその理由の一つだが、直接の動機は、彼が次第に信頼していった甲州牢人の小幡景憲が、軍師どころか実は、所司代板倉勝重と示し合わせてまぎれ込んだ関東の間諜であったとわかったことであった。

治房は景憲を信じきって、軍評定の席では、つねに景憲の意見を支持して真田幸村に対抗していた。

そして、いよいよ景憲に心酔し、景憲のためにわが屋敷内へ、わざわざ居室まで新築してやっていたのである。
その小幡景憲が、堺の様子を探りにゆくと称して城を出たまま失踪してしまったのだから、彼の立場はまことにおかしなものになった。
「——手のつけられぬお人好し……」
そうした蔭口を封じ去るには、彼は、手のつけられぬ強硬な主戦論者にならなければならなかったのだ……
彼の景憲に裏切られた心の傷は大きかった。
（——人は信じられぬ！）
まだ若いせいもある。彼の人間不信は一躍して、極端にニヒルな自力信者に一変した。
家康や秀忠ばかりか、実兄の治長や、母の大蔵の局までも信じようとはしなくなった。むろん秀頼も信じていない。ただ秀頼を煽り、秀頼を駆って戦うのでなければ、戦い得ないゆえそれを戴いているのに過ぎない。
そうした彼が、兄や母の心の底に、秀頼を郡山に移したい……という心の動きが何程かにせよあると知れば、まずまっ先にそこを焼き払って、その夢を断とうとするのは当然だった。
こうして彼の繰り出させた軍勢の、郡山と奈良方面の攪乱が発火点となり、続いて彼の狙ったのは、和歌山勢の挾み討ちであった。
和歌山の浅野長晟は若くして亡くなった先代幸長の弟である。豊家とは切っても切れないその浅野家の当主が、兄治長や秀頼の招請には一顧も与えず、その妹を、名古屋の義直に嫁がせて、

家康に媚びてゆくというのは、許せない不潔さに見えた。

「――今に見よ。思い知らせてやるぞ」

そこで彼は、直接長晟を説くことをやめ、領地内の郷士や、吉野、熊野などの地侍を煽って各所に蜂起させる手段をとった。

そしてすでに彼等は無気味なのろしをあげだしている。これに呼応して、治房はその弟道犬とともに、堺を焼いて岸和田へ進出し、豊家から家康に寝返った小出家の当主吉英らを踏みつぶして、この方面を固めておこうとしたのである。

そうした情勢の中で、板倉勝重から浅野勢に急遽進発するよう催促があったのは、四月二十八日で、その日、堺の街は紅蓮の炎に包まれて燃えつつあった。

二

四月二十八日は、炎上している堺で、関東方の水軍、向井忠勝、九鬼守隆等が、大野治長、槙島玄蕃などとはげしく戦っていただけではなく、京都においても危機一髪の大事件が持ちあがり、市民の動揺は一方ならぬものがあった。

「――大坂方から京都を焼き払うために、多くの密偵がまぎれ込んでいる」

その噂におびえきっている混乱の中で、板倉勝重が、

「――安堵せよ。放火の首謀者以下、そっくり所司代の手で召し捕ったぞ」

そうした布告がなされたばかりでなく、二十八日と決まっていた家康の出陣が、五月三日に延期されたのだ……

てられた。
首謀者は言うまでもなく、大野治房と呼応して京へ潜入して来た古田家の家老木村宗喜で、宗喜の配下として捕えられた者は三十余人であった。
そしてこの時すでに、大和の郡山では、郡山城の守将筒井正次は城を捨てて走り、大坂勢は奈良へ殺到していたのだから、この日の武運が若しも豊家側に幸いしてあったら、炎上しているのは堺だけではなくて、奈良、京都という日本の古都は、二つながら灰燼に帰していたに違いない。
全くハラハラするような国土受難の危機をはらんだ日であった。
むろんこうした危機を察すればこその板倉勝重の浅野勢進発の催促だったのだが……
水野勝成を主将とした大和口一番手の軍勢はこれも奈良方面に急行していたが、彼等の到着する寸前に、奈良を焼き払われる危険がある。
そうなれば浅野勢を和歌山から進発させて堺に向わせ、この方面に大野治房の眼をそらさせて、彼等の前に立ちふさがらせるより他にない……と、勝重は考えたのに違いない。
「――京と奈良はどのような事があろうと焼かせてはならんぞ」
それは家康の厳命であった。
この厳命が無かったら、「義――」によるつもりの大坂勢は、豊家と古都の比重など考えてゆく余裕のない暴兵として、末代まで悪名を残すことになったであろう。
浅野長晟は、そうした危機一髪のところで、領民たちの暴動を心にかけながら、五千の兵を率

いて出陣した。
これを大野治房側から眺めてゆくと、奈良方面はとにかく、この紀州口では、見事に長晟が、罠にかかって呉れた……と見えたに違いない。
こうして浅野勢を誘き出しておいて、その間隙を狙って領民の暴徒に、和歌山城を襲わせて、挟撃するのが、彼等の作戦だったのだ……
浅野勢の先頭が、佐野に着いたのは九ツ半（午後一時）で、この時長晟の本隊はそれより後方、樫井川を距てた信達に達していた。
この信達は大野修理の旧領だったので、治長の老臣北村喜太夫と大野弥五右衛門が大坂勢の到着を待って蜂起しようとし、まさに、行動を起こそうとしている時で、それを探知した浅野勢は直ちに喜太夫を引っ捕え、弥五右衛門は抵抗したので斬り捨て、ここに両軍の火蓋は切られた。

三

この時の大坂方の人数は一説によれば四万ともいわれ、又二万とも記されている。
四万は少し過大であるとしても、五千の浅野勢にとっては、とにかく四、五倍以上の人数であったことは推察出来る。
大坂方の総大将はいうまでもなく大野治房で、その下に道犬治胤、郡主馬、岡部大学、塙団右衛門、淡輪六郎兵衛、御宿勘兵衛、米田監物など、ひとかどの侍大将がそろっていた。
それが関ヶ原のおりに抜け駆けして叱られたのに憤慨し、さっさと立ち去った人物であり、御宿勘兵衛正友は、越前の忠直に仕えていて、これも主君と衝突して退去した人物だった。今でも

彼は戦に勝ったら越前一国は自分が貰おうと放言している。

大野道犬や郡主馬はもともと豊家の家臣であったが、岡部大学則綱にせよ、米田監物にせよみな一癖も二癖もある大将分で、二万の大軍のうち、その殆んどが、合戦と聞いて馳せ集まった牢人たちだった。

それだけに、彼等の放火と放火のあとの奪略狼藉は徹底したもので、堺の町民は憎悪をこめて震えあがった。

堺の焼き討ちを指揮したのは治房の弟の道犬であったが、そのため道犬は後に至って町民たちに惨殺されている。

そうした乱暴きわまる部隊が、二十八日には堺から岸和田、貝塚近くまで押し出して来ていたのだから、正面からぶつかっては浅野勢に勝味はなかった。

総大将の大野治房は、塙団右衛門と岡部大学を先鋒にして、一挙に岸和田の小出吉英を打ち破り、紀州路へ押し出すつもりであったが、小出吉英は援将の金森可重とともに、東軍の命を守り、城に籠って撃っては出ない。

そこで治房は、弟の道犬を、岸和田城の押えに残して、そのまま貝塚から佐野をめざしておし進んだ。

一方浅野勢の先鋒は佐野に着くと、二陣、三陣が、樫井、信達に達したのを確かめて、ここで後陣との連絡をとることにした。

先陣の大将は、浅野左衛門佐、浅野右近、それに亀田大隅の三人だったが、三人が一緒になって、遅い昼食を開いているところへ、尾崎村の九右衛門という百姓が、駈けこんで来て、大野治

房勢の接近を知らせてくれた。
「申し上げます！　大野主馬亮治房さまが二万以上の大軍を率いてこれへ進んで参ります。もう先頭は貝塚へ着いているかも知れません」
それまでまだ浅野勢は、敵の動きを摑んでいなかったのだ。
「それは一大事だ。すぐに斥候を出して見よう」
出された斥候は間もなく戻って、
「如何にも敵は貝塚まで来ています」
「して人数は、何程じゃ」
「はい。大野治房、塙直之、岡部則綱、御宿正友、米田監物などの軍勢で、二万と号していますが」
「なに二万……」
浅野左衛門佐は即座に答えた。
「仮りに二万あろうと三万あろうと烏合の衆じゃ。すぐに蹴散らして通るとしよう」
すると、亀田大隅がきびしくこれに反対した。

四

戦争に勢いは付きものだ。味方の先鋒は三千に足りなかったが、ここまでやって来て、引っ返したのでは士気にかかわる。
そう思って浅野左衛門佐は、一挙に蹴散らそうと言ったのだが、亀田大隅の考えは逆であっ

た。

「烏合の衆にも押うべからざる勢いの付くことがござる。それは、味方の人数が敵を圧倒して優勢の場合と、勝ちに乗じた時でござる。聞けば人数は二万に近く、しかも堺から岸和田まで焼き払って進んで来ている。そうした勢いのついている時には軽はずみは禁物でござる」

「では、折角士気の揚っている味方に、退却を命じるのでござるか」

「退却ではござらぬ。大軍と遭遇したゆえ、これを蹴散らすに都合のよい地点まで引っ返して、そこへ敵を誘い込むのでござる」

「わしはそうは思わぬ。それではやはり敵を怖れたことになる」

「いや、そうではござらぬ。ここに止って守ればよい……という戦ならば、このまま頑張るのもよかろう。この佐野はそのような足場のよいところではない。それゆえ、さっさと安松、長滝のあたりまで引き揚げて敵の勢いの衰えたところで、これを突破して大坂へ近づく……その方が戦の駈け引きに叶うものでござる」

何ちらも気が立っているので、なかなか意見はまとまらなかった。

そこで浅野右近が仲裁に入って、両人の意見をそのまま本陣にある浅野長晟に告げて決裁を仰ぐことになった。

長晟は、領内に蜂起している暴徒の動きを案じている時だけに慎重だった。

「――なるほど、佐野で敵を迎えるのは地の利からして宜しくない。右近と大隅とは、安松、長滝のあたりまで退き、左衛門佐は樫井川の手前までさがって、川を前にし、切岸の上に陣を張って敵を待つように」

長晟にそう決裁されてはこれに従うより他にない。
浅野勢は、いったん手に納めた佐野を捨てて、その日の昏方から兵を退きだした。
進んで来る時にはまっ蒼に晴れていた夏空が次第に雲量を増して来て、夜半すぎからシトシト雨が降りだした。
「何のことじゃ。このようなことなら、汗を流して急ぐのではなかった」
「その事よ。雨の中を、夜中にわざわざ退いてゆく……これでは始めから負け戦の練習をしているようなものだぞ」
「しかし、大御所のお気には叶うかも知れないなあ。進むことを知って、退くことを知らざれば禍いその身に至る……と、仰せられているそうな」
「おくがよい。それは勝つことを知って、負くることを知らざればじゃ！　戦に負けることなど知ったら一大事じゃわい」
　ついに、こうして雨夜の陣変えに朝までかかった。幸い暁方には雨は止み、その代りに霧が深く立ちこめて、長滝には浅野右近、安松には亀田大隅、いちばん退くことの不平だった浅野左衛門佐は、更にその後方の樫井川の手前まで退いて、誰にも発見されずに陣をしき直した。
　ところが一方大坂勢は、勢いこんで貝塚までやって来ると、
「腹が減っては戦が出来ぬぞ。さあ徴発じゃ徴発じゃ」
　寄せ集め軍の本性をあらわして、暮れ方からいっせいに腹ごしらえにかかって行った。

住民のいちばん怖れているのは、この大坂勢の「徴発――」であった。

五

彼等はすでに世に容れられず、不平満々の人生の生き場を、合戦に求めて集まった戦国人なのだ。

それだけに戦場ではこの「徴発――」が唯一の楽しみになっている。家康は必要ギリギリのものを徴発した場合には、必ず代金を支払うように厳命している。大坂方でもむろんそうした命令は出ているのだろうが、実行はされていなかった。

「それ、押し出していって食物を集めて来い」

そうなると、これに便乗して騒ぎまわる無頼の徒もまた必ずといってよいほど出て来るものだ。

「食糧ならば、わしが集めて進ぜましょう」

この時も貝塚の願泉寺に卜半斎という俄坊主がいて、これがまっ先に立って兵糧集めを手伝った。

とにかく、大坂城を前夜のうちに出て、そのまま、まる一日強行軍を続けて来ているのだ。人馬ともに、空腹も疲れも並々ならぬものがあった。

「米だけではとても足りぬ。麦を混ぜた握飯を分けるように」

卜半斎は、気負い立って百姓や町人から有無をいわさず米、麦を取りあげて廻っていたが、やがてどこで手に入れたのか、おびただしい酒を陣中に運びこんだ。

「こりゃ気の利く坊主だぞ。酒まで見つけてくれるとは」
「話せる奴だ。もっとあるだろう、みな持って来い」
こうした場合の酒がどのような働きをするものかは改めて書くまでもあるまい。
そうでなくともあぶれ者の多い烏合の衆なのだ。彼等は先を争って酒をとりあい、中には足腰が立たなくなっても、夜が明けかけても、まだ盃を手から離さない者がたくさんあった。
「呆れた奴等だ。夜が明けたというのに」
今日の先鋒は塙団右衛門、続いて岡部大学という順であったが、岡部大学が起出してみると、殆んどがまだ住民を追い出した空屋のそこここで寝こけている。
そこで大学は、起きている自分の手勢を引きつれて、さっさと先に出発してしまった。
この岡部大学と塙団右衛門はひどく仲がわるかった。それも大した深い原因があるのではない。冬の陣のおりに先陣争いをしたという、如何にも戦国人らしい意地からだった。
塙団右衛門は、雨のあとの朝霧の中で眼を覚してみると、もはや岡部大学の一隊が先発してしまっている。
彼は鞍壺を叩いて憤慨した。
「おのれ、又しても先手に断わりもなく勝手に出て失せおった。すぐに追いかけよ」
紀州路の案内役として連行している淡輪六郎兵衛重政を先に立てて岡部勢のあとを追った。
そして岡部勢に追いついたのは、前夜、浅野勢の退いた佐野から更に先の、蟻通しの北であった。ここまで来て岡部勢はひと息いれていたのだ。
「こりゃ岡部、功名争いも時によるぞ。今日の戦の先手の大将を承るはこの団右衛門だ。それ

を出し抜いて勝手に進むという軍法をうぬはどこで習ったのだ。これが原因で味方の不利を招いたら、おのれ等のゴミ溜腹の一つ二つ切ったとて申し訳が立つものではないぞ。この宿無し犬め」

団右衛門は火のようになって大学を罵った。

六

戦国人の悪口雑言は愛嬌の一つだ。いや、時にはそれが勇名をかざる名物にもなっている。

塙団右衛門の口汚い悪罵にあって、岡部大学も負けてはいなかった。

「フフン、ゴミ溜腹はそっちのことじゃ。飲みつけぬ振舞い酒に喰い酔って、出立の時刻を忘れるのが先手の大将の心得か。詰らぬ戦をして腹を切ると、出て来るのはどぶろくばかりだろう」

「うぬッ、言わせておけば口の減らぬ。見事その鼻あかしてくりょうぞ」

「おう、望むところだ。どっちが強いかやって見よ」

「よくぞ申した。その高言を忘れるなッ」

団右衛門は、吐くだけ毒気を吐くと、すぐさま紀州路の道案内を声高に呼び立てた。

「やあやあ、山口兄弟、山口兵内、兵吉兄弟出て参れ」

「はッ。山口兄弟、これにござりまする」

「おう、今日のうちに、われ等は和歌山まで押し寄せる。敵もそろそろ出て来ている筈じゃ。すぐさま斥候を仕れ」

「心得ました」

こうして二人を先に出発させて、団右衛門は先頭に立った。むろん岡部大学もぴたりとその後について進んで来る。と、いよいよ蟻通しにかかろうとするところで、斥候の兵内兵吉兄弟が引っ返して来るのが見えた。
「いよいよ出て来たか」
塙団右衛門はあぶみの上に突立って大声で問いかけた。
「はいッ、人数はまだ見えませんが、前方で銃声が致しました」
「たわけめ、それが敵じゃ。よしッ。一揉みに揉みつぶしてしまえ！」
そのまま駈け続けようとするので、淡輪六郎兵衛があわてて馬を廻して来た。
「このあたりは、まだそれがしの案内区域、猪突は危のうございまする」
「な、なんだと。おぬしここで停止せよとか」
「如何にも。ここから樫井までのおよそ半里がほどは、ところどころに坂があり、土手があって伏勢をおくに最も都合のよい地勢にござりまする。それゆえ、百騎ばかりのこの小勢で進むは危険千万。貝塚より後陣の到着を待つがよろしかろうと存じます」
「だまらっしゃい！」
団右衛門はまた鞍壺をたたいて怒鳴った。
「伏兵を恐れて先陣の役がつとまろうや。蹴散らして進むまでじゃ」
「それはなりませぬ。それならばせめて、貝塚に使者を立て、後陣の出立を急がせてからになさるよう」
「ええい用心深い……岡部めが先へ出ようとして狙っているわ」

そうは言ったが、淡輪重政の言葉にも一理ある。そこで団右衛門は近侍の一人を貝塚の大野治房の本陣へ走らせた。

「さあ、これでよかろう。これで今日は、塙団右衛門がどのように怖ろしい者か見せてやろう。みなみな続けッ」

言うなりはげしく馬に鞭をくれた。

団右衛門の旗差物は、自信満々「――塙団右衛門藤原直之」とわが名を大書しただけのもの……

それを霧の晴れた南風にひるがえして、そのまま蟻通しに突進する。

淡輪六郎兵衛は、責任を感じて、素早く団右衛門を追い越した。

雲が切れて、青い空が点々とのぞきだしている。

七

塙団右衛門の斥候に出た山口兵内、兵吉兄弟が、最初に聞いた銃声は、浅野方の先鋒亀田大隅守の放させたものであった。

亀田大隅守は、長晟の命に従って、前夜のうちに安松まで陣をしりぞけ、そこから逆に蟻通しの方へ向き直って朝を迎えた。

つまりいったん進んだ道を引っ返し、そのうえ更に安松から自身で一隊を引きつれて斥候に出たのである。こうすれば、三度実地を検分して、地勢はくわしく頭に入る。

こちらは兵の総数が少ないと思っているので、どこまでも行動は慎重だったのだ。

その亀田大隅守が、わが目で、塙団右衛門の放った斥候山口兄弟の姿を見たのである。
「よし、一発銃声を聞かせておけ。倒すにはあたらぬぞ」
山口兄弟は、大隅の予期したとおり、銃声を聞くと、急いで報告に引っ返した。
「いよいよ面白くなったぞ。敵は近くまでやって来ている。そろそろ伏勢じゃ。よいか、近づくまで射ってはならぬぞ」
大隅自身はその場へ伏せ、それから一陣、二陣と、筒口を進路に向けて、左右の堤や石垣のかげに伏させた。
と間もなく前方に塙団右衛門の旗差物が見えて来た。人数はさして多くはない。せいぜい百二、三十人がほどの一団をなしてまっしぐらに進んで来る。
それを近々と引きつけておいて、蟻通しの入口の石垣の上から鉄砲の狙いをつけさせた。
鉄砲組の人数は五十人。
「射てッ！」
ダ、ダ、ダーンと、いっせいに火蓋を切った。
不意をうたれて、三十人近い人数がいっせいに馬から落ちた。
だが、団右衛門は馬を停めてあたりを睨みまわしている。
「今だ！　すぐさま鉄砲組は三陣の位置につけ」
待つ方と、待たれる方の差が出来た。
立ち停っては却って危険と、団右衛門は、また疾風のように駈けぬける。むろん生き残った人々もそれに続いた。

と、第二陣の銃声がとどろきわたった。
こんどは十数名がもんどり打って落ちてゆく。戦列がのびたので、狙(ねら)いはいくぶん疎(まば)らだった。
が、その間に、亀田勢の第一陣は、二陣の後方四、五丁のところへ退いて、次の弾丸ごめを終わっている。
二度鉄砲を浴(あ)びせかけられて、団右衛門の一団はいよいよ猛(たけ)り立った。
「もう伏勢も居るまい。今の間に駈けぬけよ」
と、この時、岡部の一隊が、街道の左にひらけた河原に道をとっているのが見えた。
「団右衛門におくれを取ってはならぬぞ。進め！　進んで河原から追い越すのだ」
この方はそのまま進むと、長滝に陣取った浅野右近の陣にぶつかる。
右近は鉄砲を射(う)たなかった。彼は岡部勢を小人数と見て、取りかこんで刀槍の餌食(えじき)にする気らしい。近くに引きつけて、ワーッと声をあげた時には、岡部大学の一団は浅野右近の槍(やり)ぶすまの中にとりこめられていた。
ダ、ダ、ダーンと亀田大隅の第三弾が、団右衛門の一団めざして射ちこまれた。団右衛門はもう樫井の町に入っていた……

八

塙団右衛門の方では、遮二無二(しゃにむに)敵中を突破したつもりであったが浅野勢にすれば巧々(うまうま)と、彼等を安松から樫井の町に誘いこんだことになる。

「今だ！　かかれッ」
射っては退り、退っては射っていた亀田大隅は、樫井の町へ入ると一転していきなり攻勢をとりだした。
ここにはすでに、長晟の本陣から上田主水正の一隊が繰り出して着いている。その上田勢と亀田勢の双方から斬りかかられて、流石の塙団右衛門の突風進撃もここで止まった。
「やあやあ、われこそは塙団右衛門の家来にその人ありと知られたる坂田正二郎。一騎討ちの勝負をせい」
乱戦になると、まだまだ昔の癖はぬけない。高々と名乗りかけて団右衛門に突きかかろうとする上田主水正の槍先に、一人の武者がこれも槍でなぐりつけるようにして掛って来た。
「なんじゃ又者（陪臣）か。よし、相手にとっては不足ながら、上田主水正と知ってかかって来た心意気に感じて相手をしてやろう、さあ来い」
「なんだと、上田主水正……聞いたこともない名だな。行くぞッ」
こうした場合に、なお悪罵を投げ合うのは、如何に彼等が古い型の戦国武者かということだ。
しかもこの二人は、互いに槍を合わせているうちに、主水正の槍が千段巻に近いところでポキリと折れた。すると互いに打ち物わざ（太刀討）は面倒だから、組討ちにしようということになり、馬を寄せあって組合ったままドッと落ちた。
まことに悠々とした心境のように見えるがそうではない。地上で上になり下になりしている間に双方の家人が寄って来て、自分の主人を討たれまいと割って入るので、何ともいいようのない野獣じみた格闘になった。

こうして樫井の戦が乱戦になっている間に、河原を進んでいた岡部勢は、大将の岡部大学が傷を負って、もはや崩れだしていた。

彼等は長滝に浅野右近が控えていたのに気がつかなかったらしい。

功名争いの相手の塙団右衛門に気をとられ過ぎていたのだろう。

「ワーッ」という喊声と同時に、槍ぶすまを作った浅野右近の一隊が、錣をかたむけ首を下げて突進して来るのに出あって、一瞬ハッとたじろいだ。

こうした不意の遭遇戦では、この一瞬のたじろぎが取り返しのつかない「勢い――」の差になってゆく。

団右衛門に負けまいとして猛り立って、正面にある敵の伏兵に気のつかなかったのが岡部大学の不覚であった。ここでは名乗る暇もなければ気取っている暇もない。双方がサッと一突き、行違った時にはもはや大将の岡部大学は二ヵ所槍傷を負っていたのだ。

不意を衝かれたうえに大将が傷ついたのだからすぐその次には浮足立つ……

岡部勢がもと来た道をあわてて退きだした時、樫井の町の乱闘で、二つ続いて勝名乗りがあった。

「亀田大隅、淡輪六郎兵衛重政を討ち取ったり！」

「塙団右衛門の家来坂田正二郎を、横関新三郎が討ち取ったり」

横関新三郎は、上田主水正の小姓であった。

九

陽はカンカン照りだした。
道は乾いて海から吹きあげる風が、時々格闘している人々を煙のような埃りでつつむ。
その先の海は眼のさめるような蒼さなのだが、そうしたものは誰の目にも入るまい。
塙団右衛門は時々馬上から町の方をふり返った。今になって脳裏をかすめるのは、すでに亀田大隅守に討たれてしまった淡輪重政の忠告だった。
(使いは出してあるのだ。後陣の治房はまだ着かぬであろうか……?)
しかし見えるのはあちこちで敵に取りまかれている味方の姿だけで、後詰めのやって来る気配はない。
(してやられたか。こうなったら、ひと先ず退くより他にあるまい)
味方はあらかた討たれて、もう二十人にも足りない人数になっている。歯がみをしながら馬を返そうとした時に、ヒュッと鋭い矢音であった。
「あ……」
瞬間、団右衛門は手綱を引いて馬を立てた。
戦い馴れた感覚で、その矢がわが脇腹を狙って放たれた強弓に思えたからだ。
馬は一声高くいなないて立ち上がった。と同時にブスッと、わが左の太股に矢が立った。
胡簶から鴻の霜降をとって矧いだ尖り矢で、鎧の草摺を通して深々と股に喰い入っている。
団右衛門はもんどり打って鞍から落ちた。これは浅野家随一の弓の名人といわれている多胡助

左衛門の放った強弓であった。

「塙団右衛門、見参！」

落ちた刹那、槍をふるって突きかかる一人を、団右衛門はあやうく躱して、槍のけら首に手をかけた。

相手があわてて槍を引いたので、その反動で起き上がる。起き上がると同時に、太刀を横に薙いだ。

ギャッと手応えがあって、ひるむ隙に馬の手綱を拾っていた。

強弓で股を射られて、落馬してから又馬に乗ってゆくまで……それはさすがに人間業とは思えない名人芸であった。

再び馬上の人となると、すぐさま海岸寄りが手薄と見て、その方へ馬首をめぐらした時であった。

「塙団右衛門、亀田大隅見参！」

敵将だ……と、思った瞬間に、

「いやだ！」

と、団右衛門は罵り返した。

「おれはいったん引きあげる。お主の相手は後日のことだ」

これも又尋常の戦場馴れでは出て来る言葉でもなければ思案でもなかった。

亀田のそばには三十騎ほど。自分のそばには七、八騎、こんなところで戦っては勝味がないという一瞬の計算なのだ。

ところが、そうして再び町の中ほどへ退いたところで、再び悪い相手に出遭った。
「やあやあ敵の先手の大将塙団右衛門と覚えたり。われこそは、汝を待ち受けし上田主水正なり、いざ一騎討ちの勝負を致せ」
すぐさっき、彼の家来の坂田正二郎と組討ちしてのけた乱暴な男だから何とも引きあげにくいことになった。
この上田主水正は、関ケ原のおりには石田三成の家臣でその名を知られ、今は浅野長晟に仕えている、いわば塙団右衛門と同じような戦国名物男の一人である。

十

相手によってはそのまま退くつもりの塙団右衛門だったが、上田主水正に退き口へ立たれたのではそうはゆかなかった。
若しそのまま駈け抜けたら、相手は必ず聞くに耐えない悪罵を投げて嘲笑するに違いない。
「――塙団右衛門めが、上田主水正を恐れて、あれ、あのように逃げてゆくぞ。見ろや見ろや」
それがわかるだけに意地でもその場に立ちどまらなければならなかった。
「なあンじゃ、関ケ原で死にそこなった上田主水正か」
「そうだ。その後一度髪をおろして宗吉入道と名を変えたが、団右衛門が敵方にあると聞いてまた以前の主水正に戻ったのだ。逃げるな団右衛門」
「ほざくな死に損い。それほど生命が不用ならば……そうだ。太刀打ちは面倒だ。いざ組もう」
「望むところだ来い」

とにかく、これは鉄砲ばかりか大砲がものをいいだした世代の感覚ではない。
両者はすーっと馬を寄せると、
「誰も手出しは相成らんぞ！」
大手をひろげて馬の上で組み合った。組み合えば当然落ちる。
落ちると同時に二転三転するうちに団右衛門の右腕が主水正の首にかかった。
どうやら主水正は、団右衛門自慢の家臣坂田正二郎との組討ちで、だいぶ疲れていたらしい。
「あ、主水正が危い。主水正を救え！」
浅野勢の中から四、五人が駈け寄って団右衛門に槍をつけた。
団右衛門は左腕に相手の首を抱えたままですっと立った。もうその時には右手に太刀を抜き放っている。
「雑魚ども来るかッ」
ずるずると主水正を引きずりながら、近づくものを斬り払って町の出口へ歩いてゆく。
「待てッ」
主水正の小姓、横関新三郎が、あわてて団右衛門の背後から首に飛びついた。
それでもまだ団右衛門は歩みをとめない。傷ついた左脚の深傷に、大きく跛をひきながら、首に新三郎を、左腕に主水正をぶら下げたまま毒舌をふるってゆく。
「近づくとこの死にぞこないの臍をえぐるぞ。臍無し主水正にしたくなくば近よるな」
どうやら団右衛門は、こうして町の出口へ歩いてゆくうちに治房の援軍が到着するかも知れないという計算らしい。

が、その計算も、七、八歩歩いたところで崩れ去った。若い横関新三郎が、団右衛門の傷ついた左足が、大きく宙に浮いたところでいきなりうしろへ引っくり返した。

「小癪な小僧め」

それからの二、三秒は物凄まじい喚き声をからませた猛犬の噛みあいだった。そして気のついた時には新三郎が、尻餅ついた団右衛門の鼻柱に狂ったように拳の雨をくれていた。

団右衛門の眼も口も見る間に腫れ上がって血を噴き出した。

と、起き上がった主水正の豪刀が一閃して、ギャッという無気味な声を最後に団右衛門の首はカンカン照りの地べたに落ち、しわがれた主水正の勝名乗りがあがった。

「塙団右衛門藤原直之を、上田主水正が討ち取ったり！」

十一

ついに塙団右衛門の奮戦中に大野治房はやって来なかった。

いや、やって来ないと言うよりも、この時まだ治房は貝塚の願泉寺を出発していなかったのだ。

例の卜半斎が朝酒を出し、治房は上機嫌でそれを傾けていた。

むろん、酒におぼれたというわけではなく、彼には彼で別の胸算用があったのだ。

「先手はもはや樫井へ着いた由、われ等も出発の頃合いかと存じまするが」

団右衛門からの注進が届いたので、近侍が催促したのだが、治房は笑って盃を重ねていた。

「案ずるな。わしにはちゃんと成算がある。今日の戦は勝ちすぎるほどに勝てる戦じゃ。もうし

ばらく黙って待て」

彼がそう言ったのは、北村喜太夫、大野弥五右衛門の二人の家臣を、和歌山城下に潜行させてあるからだった。

この両人は、浅野長晟が和歌山城を出発するのを見定めて、すぐさま一揆の人数をまとめ、空き城を一挙に奪って知らせて来ることになっていた。

したがって先鋒の塙団右衛門が敵に遭遇したということは、とりも直さず、和歌山が空になり、難なくわが手に入るということで、戦はそれからだという判断だったのだ……

「もう程なく吉報が届くであろう。それから発進して充分に間に合う戦じゃ。その方たちも前祝のつもりで元気をつけておくがよい」

総大将の治房が朝酒をやりだすほどなのだ。寺のまわりに結集している牢人たちが飲まずに慎しんでいる筈はなく、この頃すでに大半は、前夜の酔いがよみがえり、酔眼朦朧としていたのだ。

治房があてにしている北村喜太夫と大野弥五右衛門の両人は和歌山城に入るどころか、信達で浅野勢に捕えられて斬られている。

しかし治房はそれを知らないので、岡部、塙の両勢全滅の注進が着いた時にも、

「そうかいよいよ参ったか。これへ通せ」

と弾みきっていた。

「申し上げます」

「おお大儀じゃ。北村・大野の両人からであろう。和歌山城は手に入ったか」

「いいえ、それどころではございません。先手が樫井で戦いまして、大将始め一人残らず討死致してございまする」
「な、なんだと!?　あの団右衛門や大学が……」
治房は盃を投げて立ちあがった。
「者ども続け!」
まっ先に樫井へ馬を飛ばして来てみたのだが、その時にはもうすべては終わった後であった。
路傍に累々と捨ててあるのは味方の死屍ばかり……しかも浅野勢は和歌山城下に一揆のおそれありと知って、一兵も残さずきれいに引き揚げてしまっていたのだ。
いや、それ以上に治房を混乱させたのは、彼のあとから続々と到着する酔った牢人勢の醜態であった。
「これでは敵の後も追えぬわ」
さすがの治房も、愕然とした。
先に進めないばかりでなく、背後は一々焼き払って来ているのだ。
うかつに滞陣すれば饑えねばならぬ。治房は、歯噛みをしながら大坂城へ引きあげた。

道明寺出陣

一

樫井での尖兵の全滅は、少なからず治房を狼狽させた。
（こんな筈ではなかった……）
家康の旗本勢ならばとにかく、浅野勢に敗れることなど考えても見なかったのだ。
和歌山城背後の一揆の煽動から、北村喜太夫、大野弥五右衛門の先行まで、打つべき手はきちんと打ったつもりであった。
何よりも彼が、塙団右衛門の討死を知らずに酒盃を傾けていたのが、その自信の証拠であろう。
ところが団右衛門も岡部大学も全滅して、浅野勢は殆んど無傷で和歌山城へ引きあげている。
そうなってはもはや独断専行の勇気はない。
そこで大坂城へ引きあげると共に、すぐさま兄に乞うて軍議を開いた。
この時にはすでに関東勢の主力は、水野勝成の第一番手、本多忠政の第二番手、松平忠明の第三番手、伊達政宗の第四番手、松平忠輝の第五番手と、続々として大和口へ進発しているという情報だった。
大坂城内でそうした情報を確認しあいながら、本丸大広間に集まった諸将の態度は案外なほど

落ち着きはらって見えた。
四月三十日の正午すぎである。
この日当然秀頼も臨席すべきところであったが、大野治長は、何を考えてか、
「――軍議の結果を、それがしご報告致しまするゆえ、心おきなく各自のご意見を」
そういって臨席させなかった。或いは舎弟治房の失敗を聞いて憂慮している姿を見せては士気にかかわると考えたのかも知れない。
そういえば城中で襲われたときの負傷以来治長の顔いろはいまだに冴えない。
まっ先に入って来たのは真田幸村と後藤又兵衛基次。続いて毛利勝永と福島正守（正則の弟）、渡辺内蔵助、大谷吉久、薄田兼相の順で入って来た。
みな治長には一礼するが、治長と並んで坐っている弟の治房には目もくれない。
何れも団右衛門と大学が討死するのを知らずに酒を飲んでいたという治房に、ある種の憐れみと軽蔑を感じてのことであろう。
後藤又兵衛の隣に坐った明石守重が気まずい空気を救おうとして治房に声をかけた。
「団右衛門どのは惜しいことを致してござるな。もう少し働かせてやりたかったが……」
すると、後藤又兵衛がフフンと笑った。何で笑ったのか意味はわからない。
たぶん、塙ほどの豪傑が、他人に同情されて喜ぶものかというほどの意味だったのかも知れない。
治房は聞きとがめた。
「後藤どの、何がおかしいのでござる」

「いや、かくべつおかしいことなどござらぬ。団右衛門も、今ごろ、あのヒゲ首を家康の前に持ってゆかれて、苦笑しているころかと思ったまでのことでござる」
「後藤どの！」
「なんでござるな」
「貴殿、まさか、塙は首になって家康と対面したが、わしならば生きているうちに対面する……そう思って笑ったのではござるまいな」
治長がびっくりしてさえぎった。
「舎弟、何を申すぞ!?　ここは軍議の席ではないか」
しかしその時には治房は眼をつりあげて基次に向き直っていた。

二

「それがしとて評定(ひょうじょう)の席なればこそ申すのじゃ。後藤どのは、今城内に流れている噂をご存知(ぞんじ)であろう。貴殿の陣中へ、本多正信ゆかりの者が密使として訪れたとある。事の真偽(しんぎ)をうけたまわりとうござる」
誰(たれ)の眼にも逆上(ぎゃくじょう)しているとしか見えない治房の発言だったが、しかし、その内容は聞き捨てならないものを含(ふく)んでいる。
みんなの視線はいっせいに後藤又兵衛基次の上にあつまった。
「その儀でござるか」
又兵衛基次は、又微(かす)かにフフンと笑った。

すでに畳はあげられて出入口に積みかさねられ、襖も殆んどはずされてしまった大広間は、武装した人々の心を猛々しい戦場の殺気におき変えている。

「如何にも、それがしの陣屋に本多正信ゆかりの僧、楊西堂と申すものが訪ねてござる」

「何のために訪ねられしぞ。風説によれば、戦場にてそのまま家康に寝返るようすすめに参ったとあるが、さようでござるか」

「その通りでござる」

基次は弾き返すように答えた。

「基次ほどの者を殺すは惜しい。おそらく勝敗は貴殿の去就によって決そうゆえ今のうち志を変えてお味方あれば、正信誓って大御所に推挙しようと申し越された」

一座はびっくりして顔を見合せたが、基次は態度を崩さなかった。

「そのお志は忝けない。が、今となって、弱きを見捨て、強きにつくことはこの又兵衛のなし得るところではない。われ等の去就によって勝敗が決するとはまことに名誉なお誘いながらご免蒙る。正信どのにも、大御所にも、よろしゅうお伝え願いたい……そう申して帰したればご報告申し上げる」

そこで基次は一礼して、

「さて、戦評定でござるが……」

と、真田幸村に向き直った。

幸村は薄く眼を閉じて眠ってでもいるかのように動かない。そこで基次はまた、治房を無視したままで言葉をつづけた。

「それがしの存念では、このまま城に籠ってあっても濠のない今日防ぐ手だてはありようがない。かと申して、平原で迎え撃っては老練な家康の思う壺でござる……そこで敵の主力が大和路へ向ったのを幸いに、山峡の地へ出向いてこれを待ち受け、先ず先鋒を叩き伏せるが上策と心得るが、如何でござろう」

「ご尤も」

と、すぐに毛利勝永が応じた。

「少数で大軍を迎え撃つには天険を利用するより他にござらぬ。先ず先頭を破って出口をふさげば敵は必ず奈良から郡山に退却致すに違いない。再来するにも数日はかかろうゆえ、その間に臨機応変の策も立つ。それがしは後藤どののご意見に同意でござる」

「真田どの、如何でござろう？」

声をかけたのは薄田兼相だった。

兼相たち旧臣の信頼はやはり、幸村につながれているようだった。

治房は、あっさりと基次にかわされて、膝の拳をぶるぶると震わしながら黙っている。

幸村は眼を開いて、静かにひろげられた地図の上へ視線をおとした。

渡辺内蔵助が「いかがでござろう」と、また幸村を促した。

幸村は軍扇の尖を「奈良――」におとして、すぐには返辞をしなかった。

三

後藤又兵衛基次は、大和路に入った敵が、奈良から河内へ出て来るところを待ちうけて叩こう

というのらしい。
そうすれば戦場は当然河内志紀郡の、道明寺附近になろう。道明寺は大坂城の東南約五里（二十キロ）ほどの所にあり、その東に国分村があって豊臣家所領の東南端に位置している。
したがって、東は大和に接して、奈良より堺に通じる街道と、紀伊から京都に通じる街道との十字路になっている。
大和と河内の国境は、生駒山から葛城山・金剛山にわたる一帯の連山で区切られているので、交通路はいずれも山を越えて来るより他にない。
山越えの道は細いのを入れると十七道もあったが、大軍をすすめて来れるほどの道は三道しか考えられなかった。
北の暗り峠と、南の亀瀬越え、関屋越えの三つである。
そのうち、南の亀瀬越えと関屋越えは国分村で一つになっているので、道明寺を、その三道の支点と考うべきであった。
（なるほど、ここより他に迎え討つところはあるまい）
幸村はそう思ったが、敢えてそれを口にはしなかった。
幸村は、この頃すでにこの戦の勝敗面では絶望していた。織田常真と有楽斎父子の退城もさることながら、大野治長と治房の暗闘が気負い立っている牢人たちの心をいよいよ支離滅裂のものにしている。
それで無くとも「烏合の衆――」と嘲られそうな寄せ集めの軍勢が、文字どおり、その欠陥を露呈しだしてしまっている。

（おかしな戦になってしまった……）
治長・治房兄弟が一つになれないほどなのだから、秀頼の戦意が昂まろう筈もなく、次第に城内には自暴自棄の風潮がひろがりだしている。
樫井での塙団右衛門の戦死などもその一つで、名ある豪勇の士は、もはやそれとなく死所を求めているかに見える。
「――死所を求める」
ということは義を重んじ、名を惜しむという立派な武人の心情に発した……しかし敗戦思想にほかならない、と幸村は思っている。
（勝ち戦の自信に支えられた軍勢は、そうした悲壮感など考えても見ないものだ……）
幸村はひとわたり、地図の上を軍扇でたどった後で、静かな視線を治房に移した。
「むろん戦場はここだけではありませぬ。が、主馬（治房）どのは如何？　後藤どののご意見に異存あらば承りたいと存じますが」
治房は、思いがけないところでわが名を呼ばれて、あわてて視線を兄に向けた。
「決裁は、あ、あ、兄上がなされましょう」
幸村はゆっくり頷いた。
「では、修理どのご意見を」
いわれて治長は弟以上に狼狽した。
彼は、じっと宙を見つめて、全く別のことを考えていたものらしい。
「それは……真田どの、後藤どの、が、ご同意ならば、拙者において、異存のあろう筈はござら

ぬ」

渡辺内蔵助が膝を叩いて舌打ちした。

「まだ、左衛門佐どのは、ご意見を述べては居られませぬ！」

四

その時になって、木村重成がやって来た。重成が来なかったら、内蔵助と治長の間に気まずい口論がはじまっていたかも知れない。

「遅参致して申し訳ござりませぬ。実はただいま上様のもとへご母公さまが見えられ、同席するよう命じられましたので……」

そういうと、すかさず薄田兼相が身をのり出して、今までの軍議の経過を重成に説明しだした。

重成は几帳面に一々うなずき、

「それがしも、道明寺口への出陣に同意仕る」

兼相の説明が終わると同時にさわやかに答えた。

（これももう死ぬ気でいる……）

幸村は、改めて一座の人々を見まわした。

木村重成、渡辺内蔵助、大谷吉久、後藤基次、薄田兼相、長岡興秋……何れも、もう死を決している顔であり眼の色だった。

ということは決して喜ぶべきことではなくて、幸村の胸を吹きすぎる一陣の木枯だった。

（意地に生き、意地に死ぬ……）
　そこまで人間を追い詰めてしまったものは何であろうか……？
　幸村は、再び視線を治房に移して、
「されば、われ等も、この道明寺において敵を待ち、これを撃破するに同意仕る」
　と軽くいった。
「兄上、ではご決裁を」
　治房だけは、どうやらまだこの戦の前途に望みをつないでいるらしい。
「承知致した。それがしにも異存はない。この旨早速上様に言上し、ご裁可を仰ぐと致そうが、その前に、陣立て、人数割りなどお決め願いたい」
　治長のいうあとから又治房が口を出した。
「真田どのもご賛成とあらば、直々第一陣の指揮を頼むがよろしかろう」
「それはなりませぬ」
　後藤基次が言下にさえぎった。
「第一陣は、不肖後藤又兵衛、いい出し屁でござる」
　それはもはや何人の反対にも屈さぬひびきの声であったが、治房には通じなかった。
「ならばご貴殿、第一陣として、見事東軍を蹴散らすといわっしゃるか」
「黙らっしゃい！」
　基次の癇癪玉が破裂した。
「勝敗は時の運！　敵が強ければ討死するまで。乞食酒などに喰い酔い、部下を殺してのめのめ

と戻っては来ぬということじゃ」
「人数割りを仕ろう」
幸村が、すかさずいった。
「後藤どのは第一陣をお譲りはなさるまい。それがしは第二陣の指揮を仕ろう。そこで後藤どののご意中の人数は?」
あざやかに裁かれて、治房はまた眼をつりあげて黙ってしまった。
「されば、われ等と共に第一陣として申し受けたきは、ご家中の薄田兼相どのと、明石守重どの……他は適宜にご配分願いたい」
すでに又兵衛基次は、自分と共に死ぬ者の人選まで、心づもりしているらしい。
幸村は再び胸に木枯を感じながら、そっと矢立をとり出した。
「敵の先鋒も、おそらく選りすぐった勇者ぞろいであろうゆえ、味方も粒選りでなければならぬ。そうでござりまするなあ」
ひとり言のようにいって、治長を見やった。

五

現在の大坂方では言うまでもなく大野治長が最高責任者……したがって陣立てについても彼の意見は充分に尊重されなければならない。
ところが治長は、幸村の問いかけにも、
「真田どのの、ご腹案を承りたい」

あわてて、そう答えただけであった。
決して幸村への信頼を絶対的なものとしているわけではなくて、彼はもはやこの戦を投出してしまっているのだ。
（どう考えても勝味はない……）
その絶望の前で、治長は、何が事態をこうさせたか……？　愚痴に近い反省に追いこまれてしまっている。
（冬の陣が、すでにしてはならない戦であった……）
と、彼は思う。
鐘銘問題に端を発した大坂の不満は、諸国の牢人を入城させたときを頂点とし、その武力を背景にして政治的な手を打つべきだったのだ……
（いや、片桐且元は、それを見通して動いたのに、わしはそれに気付かなんだ……）
彼に気付かせなかった原因は何であったろうかと反省すると、眼の前がまっ暗になって来る。
（わしはやはり、ご母公の寵愛に盲していたらしい）
冬の陣で戦ってみて、実力の差をハッキリと思い知らされた時には、もはや治長の力ではどうにもならない二つの勢力が城内を占領してしまっていた。
他でもない。行き場のない牢人たちと、戦争と死を前にして燃えあがった切支丹の信仰とであった。
今も城内にはポルロ、トルレスの二人の神父とおびただしい信者たちが入りこんで、これが各隊の支えになっている。

彼等の中には、いまだにフィリップ三世の大艦隊が救援にやって来ると固く信じきっている者が多く、これ等が牢人たちを退散させない鎖の役を果している。

戦の勝敗にはもともと敏感な牢人たちなのだ。この眼に見えない鎖が無ければ、或いは子孫の将来を考えて、三分の二までは城を立ち去っていたかも知れない。

（冬の陣の終わった時に、もうこの大坂城の主は上様ではなくなってしまっていた……）

治長は今にして、それを痛心しているのだ。

（家康に渡すまいとして、牢人と神父たちに城を奪られた……）

「では、この陣立てで如何でござろう」

気がつくと、幸村は、矢立をおいて、一枚の紙片を治長の前に差し出している。

治長は、あわててそれを受け取った。

　第一陣
　後藤基次、薄田兼相、井上時利、山川賢信、北川宣勝、山本公雄、槇島重利、明石守重。

　第二陣
　真田幸村、毛利勝永、福島正守、渡辺内蔵助、小倉行春、大谷吉久、長岡興秋、宮田時定。

「それがしに異存はござらぬ。これで評議をすすめられたい」

わきから治房が覗き込もうとするのを、治長は眼でたしなめて、書きつけを待ちうけている後藤基次の手にわたした。

た。

六

治長に意見はないのだから、後藤基次の希望を容れた、幸村の提案に異論のあろう筈はなかった。
「これで第一陣の兵数は、約六千五百がほどかと心得るが」
基次が言いかけると、幸村は答えた。
「如何にも。第二陣はその約倍にて一万二千あまり……第一陣の戦次第で、何れへも展開出来るように致す考えでござる」
基次は胸を叩いて、カラカラと笑った。
「これで十分！　うしろに真田どのがお控え下されば、この又兵衛も安心して死ねまする」
「後藤どの」
「何でござる真田どの」
「その、死ねまするはいけませぬ。後藤どのほどの大剛の士に、元来生死は無い筈ゆえ、あるはただ勝利だけでござろう」
「ワッハッハ……これは失言仕った。いかにもこれで勝てましょう。のう薄田うじ」
薄田兼相は六尺豊かの肩をすくめて微笑して、そのまま、書付けを毛利勝永の手に渡した。
毛利勝永はそれを福島正守に渡し、正守は更に大谷刑部の子の吉久に廻した。
「これでわれ等も、父や兄の敵になったわ」
細川忠興の子の長岡興秋が、そう言って笑ったとき、

「では、その陣立て、直ちに上様のお目にかけて参りましょう」
木村重成が口をはさんだ。
「長門どの待たれよ」
幸村はさえぎって、
「これはやはり、修理どののお手から上様のご裁可を仰ぐべきものと心得るが如何であろう」
「なるほど、これは心付かぬことを申しました。では、大野どのに」
こうして再び大野治長の手にもどった書付けは、治長の手で秀頼のもとに運ばれた。
幸村が、敢えて治長に裁可を乞いに行かせたのは、この出撃に対して秀頼がどのような反応を示すか、それを知りたかったからなのだ。
いったん城を出でて戦えば、帰らぬ者も数多く出るであろう。したがって、即刻別杯を携えて出座あり、士気を鼓舞し、行を励まして欲しかったのだ。
それでこそ秀頼、治長、幸村、基次の指揮系統も規律され、上下の心もきびしく通い合う道理であった。
ところが、治長は間もなく一人で戻って来た。
「上様にもご異存はない。軍監には伊木遠雄を仰せつけられた。油断なく、すぐさま出陣の用意あるように」
後藤又兵衛が、まっ先に聞えよがしの嘆息をして、チラと幸村をかえりみた。
幸村はわざと眼をそらした。
（又兵衛は、これで死ぬ気になった……）

幸村はそう思った。
「――武将の義理」というものは不思議な誇りと見栄につながっている。
家康が、こんどの勝敗は、お身一人の向背にかかっているとまで褒めちぎった基次を、盃もやらずに戦場に送り出す……そうなると、基次は、家康の知遇にこたえて開戦の日に戦死しようという気になるものだ……
基次につづいて、毛利勝永も起ちあがった。これもどこか淋しげだった。

七

戦の巧者と下手との差は、出陣のおりの鼓舞の仕方にかかっている。
戦国人の人間関係では、特にそれが大切なかなめをなしていた。
その一挙一動に生死が賭かっているだけに、利害だけで動くわが身……と考えると、たまらなく味気ない人生になり下る。
そこでわざわざ「義理――」という旗を心におし立てて、そこに救いを求めてゆく。
いま後藤又兵衛基次を支えているのは、その一片の「義理――」を貫こうとする人間の「意地――」であった。
又兵衛だけではない。毛利勝永にせよ福島正守にせよ、大谷吉久にせよ、みなそうした義理に支えられて胸を張っている。
いや、真田幸村自身にしても、それは十分にあることだった。
家康は、そうした戦国人の心理もまた憎いほどよく洞察している。

そこで、さしてあてにもせぬ自分に信濃のうち十万石を贈ろうなどと言わせたり、後藤基次をお身一人の向背で勝敗が決するなどとおだてたりもする。

人が人を有効に使おうとする時には、褒めるに限る……しかし、そうした人情の機微を、世間知らずの秀頼に求める方が無理であった。

とにかくこうして大和口迎撃の部署は決定し、幸村と基次は直ちに発進の準備にかかった。

むろん大坂方とて八方へ諜者やものの見は出している。それ等の報告を検討すると四月二十八日以後、東軍大和口の諸将は、いずれも奈良およびその附近にあって、伏見の秀忠、二条城の家康の発進に呼応する備えであった。

そこで、大坂方は三十日いっぱいに準備をおわり、後藤基次の第一陣は薄田隼人正兼相と明石掃部助守重を両翼として、五月一日に城を出てその夜は平野に宿営し、ここで東軍を待つことになった。

続いて第二陣の真田幸村は、毛利豊前守勝永を副将として城を出て、これは、天王寺にとどまって、更に敵が何れの進攻路を取って来るかを見きわめる位置についた。

大坂方の迎撃戦の配備はこれで完了したことになる。

これに対して水野日向守勝成の指揮する東軍大和口の第一陣、本多美濃守忠政の指揮する第二陣、松平下総守忠明の指揮する第三陣、松平上総介忠輝の第五陣と、奈良に結集したのが四月三十日。

伊達政宗の第四陣だけは、四月三十日には木津にあって、奈良に入ったのは五月二日であった。

伊達勢が何ゆえ、遅れて奈良に入ったかについては、表裏さまざまな理由があるのだが、それには今は触れないことにする。
とにかく、伊達勢が遅れて到着したために東軍の奈良進発が五月五日になったことだけは忘れてはならない。
東軍がこうして五月五日に水野勝成の第一陣から順次奈良を発し、亀瀬越え、関屋越えの進路をとって国分に向っているという知らせが、天王寺にある幸村の許に届いたのは五月五日の正午近かった。
「――いよいよ決戦の時が来た。後藤どのと最後の打合せをしておきましょう」
幸村は知らせを受けとると同時に、毛利勝永を呼び寄せて、おだやかに言った。

八

幸村が毛利勝永を伴って平野の陣中に後藤又兵衛基次を訪れた時、基次は幔幕の中で床几にかけたまま髯の手入れをしていた。
「いよいよ、出て来たようでござるなあ」
彼は鋏をおいて、道明寺附近の見取り図に向き直り、
「それがしは、今夜半に、この平野を発し、藤井寺から道明寺に到って敵を待つ。出来得ればそのまま国分に進む所存ながら、万一の時には、片山から小山に拠ってひと泡ふかす思案でござる」
その言い方があまりに淡々としているので幸村と勝永は顔を見合せた。

「後藤どの」
「万一……のおりには、直ちにご連絡下さるでござろうな」
「ハッハッハ……これはしたり！　戦は敵の出方次第。背後にご貴殿がお控え下さる。又兵衛は安心して働くつもりでござる」
「敵が国分に進出した……と、なったおりには直ちに進撃をさし控え、われ等にお知らせ願いたい。幸村もはじめから兵を協せて戦いたいところながら、若江、八尾の方面に、敵方河内口の者どもが近づいてござればそうもなりかねる」
「ハハ……」
　基次はまた大声で笑った。
「それがしは大丈夫じゃ。河内口の敵の先鋒は藤堂高虎と井伊直孝のよし、真田どのはこの方に充分お気をつけて下され。して、この先鋒に当る味方は？」
「木村長門守が若江に陣し、長曾我部と増田盛次とが八尾に陣してゆく予定でござる」
「ほう、重成どのが若江に……」
　そう言った時、ふっと又兵衛の顔は曇った。案じている……というよりも、それは若い重成を労る年長者の憂いであったろう。
　あとになって考えると、後藤基次はこの時すでに「――幸村に援軍は頼めない」そう心を決めたもののようであった。
　若江で決戦となれば、その相手は、河内口をやって来る選りぬきの家康や秀忠の旗本勢……もし、真田勢を又兵衛の方に割かせて、この方の援軍が無くなったら……戦に馴れた基次にその労

りがない筈はなかった。
「何れにせよ、それがしは仕合せ者でござる」
基次は腰のひさごをはずして、幸村の前に盃を差し出した。
「大明までお手を伸ばされた豊国大明神のお子には頼られ、江戸のご両所には惜しまれながら討死出来るワ。この仕合せは武人最高のものでござるて。ハッハッハッハ……」
幸村は、何か言おうとする毛利勝永を眼でおさえて、黙って盃を受け取った。
（もはや、又兵衛に生き残る気はないらしい）
実は、それを確めに来ずにいられなかった幸村だったのだ。
又兵衛に生き残る気があれば、後の作戦も変わって来る。が、それが無いとなれば別の覚悟がなければならぬ。
差された盃をぐっと乾して、
「では、呉々も明日は、思う存分に」
「おう、思う存分に！」
基次は、晴れ晴れと繰り返して、こんどは盃を勝永に差していった。
「毛利どの、生まれて来ただけのことはござったわ。ご貴殿も存分に」
勝永は又何か言おうとして、しかし、思い直したようにこれも笑った。

九

結局幸村と勝永は、後藤基次に何もいわずに天王寺に引きあげることになった。

「――今夜半、道明寺でわれわれ三人は出会い、夜明け前に国分の山を越えたうえ、前隊、後隊を合して、道のもっとも狭いところで東軍を迎え討とう」

　そういいたかったのだが、基次は一人で道明寺へ突入する気になっている。いや、それ以上の覚悟さえすでに出来ているようだった。

　そうなれば、敢て、自分たちの到着を待てというのは功名を争うもののようになる。

「苦戦と見たら、直ちに救援することとして、ここは黙って引きさがろう」

　勝永にそういって平野から引っ返し、天王寺へ帰り着いたのは亥の刻（午後十時）すぎだった。

　一方、別盃を汲んで二人を送り出した又兵衛基次は、そのままゴロリと横になって一刻あまり仮睡をすると、子の刻（午前零時）直前には起き出していた。

　心気は爽快。思い残すことのない久しぶりの眼ざめであった。

「みなみな起きよ。いよいよ道明寺へ出発するぞ」

　身内にみなぎる体力の充実をハチ切れそうに感じながら発進の法螺を吹かせた。

「これが大楠公ならば、ひそかに出で発つところであろうが、後藤又兵衛はそうはせぬぞ」

　用意の松明にいっせいに火を点けさせ、手勢二千八百を引きつれて、大和街道を堂々と行進しだした。

　敵の斥候が見つけたら肝をつぶして走るだろう。それでよいのだと基次は思った。

（生きようと思わなければ気軽なものだ……）

　秀頼からも、家康からも信頼されて死ぬという満足感が、この根っからの戦国人を、ふしぎな

感動にかり立てている。
（人生とは、結局死所を求めての旅なのだ）
すっぱりと割り切って、そこが地獄であろうと極楽であろうと問うところではない。ただ「死――」までを驀地に前進するだけで済む。
こうして藤井寺に着いて小憩し、同時に道明寺へ向けて斥候を放った。斥候には、敵に出遭わなんだら、そのまま進めといいつけて、夜が明けかける頃には誉田を過ぎ、道明寺に達していた。
そして、いよいよ道明寺を国分めざして発進しようとする時になって、出してあった斥候の報告に接した。
「申し上げます。敵の先鋒はすでに国分に到着致して居ります。兵力は二、三千。水野勝成の軍勢と見受けました」
「よしッ！」
と、基次は暁闇の霧の流れを見上げながら馬上で答えた。
「敵も、われ等の松明の灯を見て出て来たものと見える。面白くなって来た」
そして、直ちにわれ等は石川をおし渡って、小松山を占領するぞと馬をすすめた。
日中はすでに暑夏の季節であったが、朝霧の中に光る石川の流れは冷い。
「何も彼もおあつらえ向きよ。三途の川を渡って戦い得るとはのう」
もはや基次に恐怖の対象は一つもなかった。彼は、まっしぐらに川を渡ると、そのまま小松山を占領した。ここから片山を東に下り、一気に東方の国分の陣営になぐり込もうというのであ

る。

十

すでにあたりは明るくなりかけている。山上に立つと国分へかけての街道を取りまくようにして関東勢の旗差物が動いている。

動いているということは、敵もすでに行動を開始しているということで、常識に従えば、当然この小松山で基次は後詰めの到着を待つべきであった。

真田幸村も、毛利勝永も、そのためわざわざ彼を訪ねて来ていたのだ。が、又兵衛基次は、ここにも止まろうとはしなかった。

彼の戦になれた嗅覚によれば、幸村や勝永はすでに当てに出来ない事態に来ている。

現に、国分へ出て来た敵が動いているのが何よりの証拠であった。

彼のカンでは、二条城や京の市街の放火に失敗した木村宗喜の処刑を済ませた家康が、いまだに京へ止まっている筈はなかった。とすれば、今日の戦場はこの大和口だけではない。河内口を進んで来る秀忠、家康の先鋒たちと、随所で遭遇戦になってゆこう。

そうなれば、仮に真田勢や毛利勢が、基次と合流して戦う気であっても、何うなるものでもない。好むと好まざるとにかかわらず、今日の戦は、各自が各自の才覚で運は天に任せ、出遭ったところで奮戦するより他にないのだ……

そうした空気は後藤又兵衛基次には躰でわかる。彼は、後続が山頂にかかると同時に、ここで大きく鬨の声をあげさせた。

どこまでも放胆な、むしろ捨て身の正攻法で、しかも彼のカンはそのまま見事に的中していた。

小松山で後藤勢が鬨の声をあげた時、関東勢の水野勝成指揮下の奥田三右衛門忠次は、わずか六、七十人の手勢を引きつれ、これも先ず小松山を占領して位置の利を占めようとし、急遽山へのぼりだしたところだったのだ。

「あ、鬨の声だ！」

「すでに誰かが山を取っているぞ」

「敵ではあるまい。堀か丹羽かの手の者に違いない。急げ！」

先頭に立った奥田三右衛門が、槍をささげて手勢を叱撻したときに、ワーッという山頂の声は、そのまま雪崩を打って彼の頭上に殺到した。

「あっ、敵じゃ！　敵じゃぞ」

期せずして槍を構えて折り敷く形になった三右衛門の上を、基次をまっ先にした基次勢が奔流のように流れて過ぎた。

これがこの日の最初の遭遇戦で、後藤勢一千あまり、勢いに任せて山を駈け下った時には、奥田勢の六十は完全に消えてしまっていた。

あとに残った屍体は点々として、七、八ツ。はずみのついた人の流れが敵も味方も一つにして麓の畑に押し出してしまったのだ。

平地へ出るとあわてて奥田勢は主人の姿を探した。しかしその時にはもう奥田忠次はこの世になかった。

彼は血ぬれた槍の穂尖を天に向けたまま、その身もまた見事に腹を刺されてこと切れていた。いや、こと切れた屍体の上を、無数の土足でふみにじられていたのである。
奥田勢を一蹴すると、基次は再び山頂にもどった。
夜は完全に明け放れ、麓の道も田畑も、河原も、殺気立った人馬の往来……それを見おろして基次はゆっくりと握り飯を頰ばった。

十一

東軍の水野勝成は、これも家康に名指しで指揮を命じられるほどの豪の者だ。
彼はこの日の丑の刻（午前二時）に、藤井寺方面の道筋に松明の火を発見すると、
「――後藤又兵衛だな」
即座に言って、堀直寄と、丹羽氏信に、聞き張りの銃兵（斥候）を出させた。
「――やっぱりここを戦場に選んだか。上様も大御所もそのおつもりで河内口へ出て来られた。今宵上様は千塚、大御所さまは星田にあらせられる。いよいよ明六日が勝負どころになったぞ」
関東勢にとっても敵の出て来るところはここより他に考えられなかった。
そこで、わざわざ大和の諸勢が郡山から奈良を平定して、ここに出て来るまで、家康も秀忠も京に止って敵の誘い出しを考えていたのだ。
その意味ではこの道明寺附近から八尾、若江へかけての戦場は、関東勢の意志で選んだ戦場と言ってよい。
「――勝ったの。野戦になればこっちのものだ。そうだ。小松山を占領して敵の出方を監視する

がよい。奥田三右衛門と松倉豊後に先駆けせよと申して来い」
戦場が決まってゆくと、そのあたりの高地の占拠は、当然双方の狙うところとなってゆく。
こうして、まっ先に小松山をめざした奥田三右衛門忠次は、しかし、その寸前にこれを占領していた後藤又兵衛基次の蹄にかけられて戦死してしまったのだ。
頂きへ帰ると、後藤勢は又、声をそろえて鬨の声をあげてゆく。
「しまった！　すでに敵が山上へ陣取って居るぞ。何者の旗印じゃ」
大和五条の領主松倉豊後守重正は、それが後藤又兵衛と知ると北側から銃口をそろえて、攻略に立ち向かった。
もうこの時には、攻撃に加わる東軍は松倉勢だけではなかった。
「すわこそ、遅れを取って笑われるなッ」
藤堂高久勢につづいて、天野可古の一隊がこれは、山の北西にまわりながら攻略の輪をしぼった。
一度銃声がとどろくたびに、後藤勢の中で倒れる者が殖えだした。
「よし、敵の鉄砲隊を先ず倒せ。後藤勢の鉄砲組はごく僅かぞ」
西軍は、まっ先の鉄砲組平尾久左衛門の一隊に関東勢の筒口が向けられると、今度は猛然と槍先をそろえて松倉勢に突きかかった。
その勢いは当るべからず……あわや松倉勢は全滅……と、思われた時に、堀直寄と水野の本隊がやって来て松倉勢と入れ替った。
この頃まで双方の人数は互角に見えた。ところが小松山に銃声を聞いて、

「すでに始まっている。おくれを取るな！」

大和口の第二番手、三番手を追い抜いた伊達政宗の四番手の先頭、片倉重綱の一隊が戦場に到着したので、彼我の勢力の均衡は崩れかけた。

いや、そこへ更に第三番手の松平忠明が、

「伊達勢に追いぬかれたぞ。敵の鉄砲など物の数ではない。槍ぶすまで突き崩せ」

山の東側から猛烈な突撃を下命した。

こうして関東勢には続々と新手が加わる。しかし、西軍にはそれが無かった。

時に五ツ半（午前九時）。すでにこのあたり一帯が、はげしい戦場になっていた。

十二

後藤又兵衛基次は、阿修羅のように戦場を馳駆し、八十人近くをわが刀槍で倒しながら、敵の進退が手にとるように読みとれた。

（わしも、立派なものになったぞ）

曾つてこれほど冷静沈着に敵の見えたことはない……そう思った時には、しかし、死んでゆかなければならない宿命の戦場だった。

水野勢、伊達勢、それに若さに任せた松平忠明勢と、三方から攻め立てられたのでは、もはや小松山で戦うべきではなかった。

たぶんここへ駈けつけようとして、天王寺を出発している毛利勝永や明石守重、真田幸村なども、それぞれ途中で河内口から出て来た別の敵にさえぎられているのに違いない。

そうなれば基次もまたこの山を捨てて道明寺に退き、少しでも彼等のために、東軍の気を散らしてやるべきだと思った。
「よオし、いよいよ山はおりるぞ。だが、その前に申し聞かすことがある」
又兵衛基次は喰いちらした頰ひげに感慨（かんがい）を見せて馬上で笑った。
「よう戦ってくれた。又兵衛心から感謝する。が、人には人それぞれの胸算用（むなさんよう）がある筈じゃ。今までの働きで戦場の義理は済（す）んだ。死にたくない者は、これから又兵衛が、一気に西へ山を駆け下りるほどに、その間に戦列から離れて落ちよ。よいか、遠慮は又兵衛の供養（くよう）にならぬぞ」
そういうと、そのまま馬首を立て直して、西からまっすぐに山を下り、そのまま石川河原に近い平地まで突っ走った。
そして、そこで敵を迎え撃つため振り返ってみると、まだ千五百に近い軍勢がついて来ている。
人間は勇将の下にあると自然気強くなるものらしい。
「みなみな又兵衛と一緒（いっしょ）に死ぬか」
それに応（こた）えて、
「おーオー」
みんなの太刀（たち）がいちどにあがる。
又兵衛の顔がクシャッとゆがんだ。
「さらば、又兵衛も遠慮はせぬ。兵を二隊にわけて追う敵に突撃するぞ」
「おーオー」

「よし、かかれッ」
それは、後藤又兵衛基次の生涯で、得もいわれぬ満足感と感謝の入りまじったふしぎな戦争体験だった。
（死とは又、何という味な意味を持つものであろうか……？）
基次は快い酔いを全身に感じながら、追いすがる水野勢のまっただ中へ無二無三に馬を乗り入れた。
敵はサッと道を開き、二、三隊が、みる間に追撃の足をみだす。
「今ぞ。蹴散らせッ」
この時の後藤又兵衛基次の働きぶりを、芥田文書中におさめられた後藤助右衛門の書状では、
「――お手柄、源平以来これあるまじくと申す取り沙汰にご座候。まことに、日本の覚え、ためしなきように存じ候」云々と書かれている。
当時の戦国人が見たこともないほどの勇猛ぶりだったというのだから、おそらく心おきなく戦い抜いたのに違いない。
こうして敵を駈け悩ましているところへ、急を知って駈けつけた新手の丹羽勢が、横から一斉に銃撃を浴びせて来た。
まことに東軍各隊の連繋は、水も洩らさぬ鮮やかさであった……

十三

時刻はすでに正午に近い。

頭上の太陽は攻める者にも、攻められる者にも油照りの汗をしぼらせ、泥と疲労をまんべんなく投げかけている。
丹羽勢の一斉射撃を受けて、蝗のように隊列をみだした後藤勢は、かたわらの麦畑の中へ折り敷いた。
が、再びその麦畑の中へ立ちあがった時には、その数は五分の一にも足りなかった。
中には、われを忘れて逃げた者もあるかも知れない。しかし大半は、第二、第三の射撃の餌食になってしまった。
射撃の止んだところで又兵衛基次は再び馬に飛び乗った。
しかし、この時にはもう乗馬の無事な者は一人もなく、文字どおり単騎で、すぐ傍にはこれまで兵のまとめ役をして来ていた山田外記と古沢満興が土を掴んで死んでいた。
丹羽勢の鉄砲の数は、よほど多かったのに違いない。折り敷きながら死んでいる死屍は数えきれない。
「よし、川原へ出よう！」
と基次はいった。
これもまた本能に近いカンであった。このままここで射撃をくり返されるよりは、水の中へ飛び込んで対岸へ引きあげた方がよい。
対岸の道明寺川原には、もはや味方の後詰めが着く筈だった。そうなれば当然彼等が援護してくれるという、計算ならぬ計算だった。
事実この頃には、薄田兼相、山川賢信、北川宣勝、井上時利、明石守重、槇島重利、長岡興秋、

小倉行春、山本公雄などの諸隊が、続々として道明寺川原に集まりだしていたのである。
が、後藤又兵衛基次の武運の燈明はこの時もはや消えかけていた。
単騎陣頭に立って馬を返そうとしている時に、東軍の何度目かの斉射が再び麦畑に叩っこまれた。
「う、うッ」
と、基次は馬上で呻いた。と、同時に彼の巨体はもんどり打って畑へ落ちた。
「あ、御大将！　しっかりして下され」
あわてて飛びすがったのは従兵の金方平左衛門であった。
馬から落ちた基次は、むっくりと起き直ると大きな目玉でカーッと宙を睨んでいる。
「ご無事で何より……さ、私の肩におすがり下され」
平左衛門は基次の右腕に自分の肩を入れて立とうとした。しかし、大兵の基次は重くて持ち上がらなかった。
「さ、歩く気になって下され、一緒に歩いてとにかくもの蔭まで」
「ハハハ……」
と、基次は、口に白い泡を見せて済まなさそうに笑った。
「無理を申すな平左。腰板を砕かれたわ」
いいながら右手の掌を腰からはずして開いてみせると、べっとりとした血のりであった。
「足は立たぬ。わかったか。わかったら首を打て。そちが打たねば、わしは、まだこうして働かねばならなくなるぞ」

今度は槍をとって頭上でグルグル廻してみせた。
「相わかってござりまする！」
金方平左衛門は、涙をはらって刀を抜いた。
基次の首を打ち、これを近くの田の中に埋めて、彼はあやうく川を渡って道明寺川原へ逃げた。

若江の長門

一

後藤基次が小松山にあって戦っているところからその北方二里（八キロ）の八尾、若江方面もはげしい遭遇戦になっていた。
関東勢も、この前夜（五日）星田に仮泊した家康の本陣で最後の軍評定を開き、仔細に作戦を打ち合わせてあった。
この河内口の先鋒は藤堂勢五千と、井伊勢の三千二百。
藤堂高虎は、この時すでに大坂方の斥候一人を捕えてあったので、
「――明日はいよいよ決戦ぞ」
それは充分に察していたし、家康の指示もまた的確にそれを予想してのものであった。
したがって、藤堂高虎は、評定を終わって、千塚に進めてあるわが陣に戻って来ると、すぐさ

ま出動の準備を終えて夜明けを待った。
一方大坂方の、この方面の指揮者は長曾我部盛親と木村重成の両人だった。
木村重成は、五月二日には、秀頼の許しを得て、家康父子の進路がどこになるかを探りにかかっていた。
しかしその時にはまだ家康は二条城にあって動かないのでわかりようがない。彼がその進路を星田から、砂、千塚を経て、道明寺に向かう高野街道らしいと確め得たのは、実は五日になってからであった。
その時になって情報は二つに割れていた。
そこで秀頼は重成を呼んで、
「――今福から攻める気らしい。今福に出よ」
と、特に命じた。
秀頼の命とあらば違背出来る重成ではない。そこで重成はいったん今福へ出てみて、改めて地形を探った。しかしこの方面は敵の大軍が押し寄せて来そうな地形ではない。
(このような走駆に不便なところに野戦の得意な家康が大軍を入れてくるであろうか)
これはやはり高野街道を道明寺に抜ける気に違いない。
そうは断定したものの、自分の一存で進路を変えることはためらわれた。
(何故、上様は今福へ出よと言われるのか?)
それに不審を感じながら迷っている時に、大野治房から極秘の使者がやって来た。
「――上様は気おくれなされた。ご自身前線へお出なされて、みなを叱咜激励しようとせぬ。こ

れでは士気にかかわるゆえ、ご多忙中恐縮ながら、貴殿から上様を城外に引き出してくれるように」

というのであった。

いや、それだけならば、重成はまだ独断の覚悟はなし得なかったに違いない。

ところが、そのあとで打ち明けた使者の口上は、重成を愕然とさせずにおかないものであった。

「――上様は、ご自分が城から出ると、味方の牢人たちに背後から討たれるやも知れぬ……と、それを懸念なされておわす由にござりまする。いや、これはここだけのことでござりまするが、主馬さま（治房）まで、いざと言えば上様の首級を持って敵方へ走りかねない、そんなお疑いを持っておわすゆえ、われ等がおすすめ申しては却って拙い。是非とも長門さまに……との仰せでござりまする」

重成にとって、これほど恐ろしい言葉は無かった。

（若しそれが、まことならば、或いは……この重成も、心の底ではお疑いなのかも知れぬ？）

二

重成はすでに、塙直之はむろんのこと、真田幸村や後藤基次が何を考えているかは感じとっていた。

（何れも生き残る気は無いらしい）

重成にいわせると、それは一つの感動を伴う、しかし、歯痒いあきらめに過ぎるような気がし

ていた。
（何故もって、勝利をめざして、渾身の努力を積もうとしないのか……）
その心事がどのように清潔であっても、あきらめはやはり敗北に通じてゆく……
そう思っている矢先だけに、治房の使者の私語は真向うから彼を打ちのめした。
（すると、真田や後藤は、そうした上様のお心を見抜いていたのではあるまいか？）
もしそうだとすれば、秀頼のために殉ずるという形をとって、彼等は彼等の節操に殉ずる気なのだ……
重成は、心得た旨を使者に答えて、しかし秀頼には会わなかった。
若し彼がそれをすすめて拒絶された場合を考えると、眼の前がまっ暗になってゆく。
重成は秀頼の御前へ出る代わりに、城内のわが家を訪れて、娶って間もない妻に会った。
そして妻の手で兜の緒を詰めさせ、枕にそれを載せて香を焚きこめさせた。
妻は、真野豊後守の娘で、香枕は、淀の方のお側に仕えていたおり拝領したものであった。
「――出陣のおりにはこうするものぞ」
妻はまっ蒼な表情で、はばかるように小さくいった。
「――ややが出来ているかも知れませぬ」
「――そうか。それは芽出度い」
重成はとっくに死は覚悟していた。
秀吉に謀叛を企てたと疑われ、限りない怨みと意地を止めて自害して果てた父。その父の子が、如何に清冽な忠臣かを示して死のうと思い詰めている重成。しかし重成もまた、いま父と全

く同じ動揺の芽をわが心の底に見出してしまったのだ……
兜の緒を切り詰め、香を焚きこめて出陣するのは、妻へ示す覚悟のほど、ということよりも、動揺しそうなわが心にあてる鞭であった。
（壮烈に死んで見せるぞ！）
生きるものか。生きては意地は貫けぬ……幸村も又兵衛も、団右衛門も、みなそれを知っているのだ。
「――今日は端午の節句、菖蒲を活けよ」
それを別離の言葉にして、重成はわが家を出ると、すぐさま兵を高野街道から道明寺に出す覚悟を決めた。
ところが天王寺にある真田幸村に連絡してみると、道明寺方面には幸村と基次が出てゆくことになったという。
今となって、死を決している人のあとを追うのは臆したようで不快であった。
「――よしッ。大御所も将軍も、高野街道を出て来て、道明寺に向かうに違いない。われ等はその脇腹を衝いてやる。重成の死出の道づれは、大御所か、それとも将軍家か。一人はきっと討って見せるぞ！」
彼の指揮下に附されている山口弘定、内藤長秋の両人に昂然と覚悟を打ち明け、大和橋際への集合を六日の子の刻（午前零時）と告げていった。
しかし、この時刻にはまだ兵は集まらず、これは後藤基次とは逆に、松明は一切無し、ただ一つ先頭に提灯をかかげさせて発進したのは丑の刻（午前二時）であった。

二

木村長門守重成はそれが腑におちた場合には、いいようもなく忍耐づよい。

しかし性格そのものはかなり短気で奔湍のような激しさを持っている。今夜の行動にはその激しさの面があらわに顔を出していた。

何よりも主君と家臣の間にある信頼には、ある種の限界がありそうだ……そう思ったことが、無意識のうちに彼の感情をささくれ立たせている。

真田幸村が、彼に先んじて道明寺への出陣を決めていたことも、後藤基次がすでに先駆していることも若い彼をいら立たせた。

(みんなに負けてよいものか……)

大和橋を出発し、馬を急がせて一刻ちかく進んだところで、

「待てッ!」

と重成は、声をかけて馬をとめた。

「いま、行手で鉄砲の音が聞こえはせなんだか」

かたわらの闇の中から、

「確かに、鉄砲の音……どこかで戦が始まって居りまする」

そう答えたのは、老臣の平塚治兵衛であった。

「どこかでとは心得ぬ。行手にあたって今ごろ鉄砲を放つ者……と、あればこれは道明寺へ先駆した後藤勢に違いない」

「と、致しまするると、敵がそれを待ち伏せして居ったことに成りまするが……」
「そうだ。あ、南の方にかすかに火の手が見える。いや、松明かも知れぬ。とにかく見届けて参るよう」
「心得ました」
答えてから治兵衛は又ふり返って念を押した。
「もう程なく夜も明けましょう。夜のあけぬうち、泥田の細道を進みすぎては進退に窮しまする。それがし、若江に出でて何分の報告を仕りまするゆえ、それまでこの地にお止まり下さりまするよう」
「案ずるな。ここで待って居る。急げ」
性急に答えたが、治兵衛の姿が見えなくなると、
「南の銃火が心にかかる。よし、進むとしようぞ」
ものの十分間も経たぬうちに再び戦列を南へ急がせた。
老臣の報告をここで待ってあったら、おそらくこの日の武運は、より良い賽の目を彼に見せたに違いない。しかし、短気な本質をむき出しにした重成は、夜の明けかけた時には八尾の手前まで前進してしまっていた。
一方平塚治兵衛は、まっすぐに馬を飛ばして若江へ出た。
若江の村の百姓たちは、この時逃れられない戦火の波及を予感して、何れかへ姿をかくしてしまっている。
（家康か秀忠の先鋒が、すでに出没しているのだ……）

平塚治兵衛は馬を返して、以前のところへ戻って来た。関東勢の出没を見て、百姓たちが姿をかくすようでは、脇腹からの奇襲の時は去っている。うっかりすると、われに数倍する大敵と正面からの遭遇戦を覚悟しなければならなくなろう……

それではみすみす勝味はないゆえ、いったん大事をとって城へ引きあげるよう進言しよう……

そう思って戻ってみると、もう以前の場所に重成はいなかった。

「しまった！」

平塚治兵衛は顔いろ変えて重成のあとを追った。

四

平塚治兵衛が重成の向かったと思われる八尾の方へ向かって駈け出した時には、すでにあたりは明るくなり、行手の銃声はいよいよはげしさを加えていた。

それだけではなく、今度はハッキリ放火とわかる民家の白煙までが朝霧と混(まき)りあい、時々喊声(かんせい)が聞こえて来そうな切迫(せっぱく)した空気であった。

それにしても、田の中に曲(まが)りくねって伸(の)びる道はあまり広くはない。しかもその田は時節柄いちめんに水を張られた、田植え前後の田であった。

(この中に踏みこんだのでは戦にならぬが……)

治兵衛は次第に気が気でなくなった。

重成の引きつれていった軍勢は決して僅(わず)かなものではない。直接の配下が凡(およ)そ四千七百。それに山口弘定、内藤長秋、木村宗明の手兵を加えると六千近い数になっている。

それが若しもこうした道を突きすすんで敵の伏勢の前に出てゆくようなことがあると、引っ返すに引っ返せず、そのかみの山崎の合戦のおりの明智勢のような目に遭おう。
「やはり若くて短気すぎる。困ったものじゃ」
おびただしい馬蹄のあとを追って馬を走らせている時に、前方からやって来る大きな藁包みを背負った一人の百姓に出あった。難民の一人に違いない。
治兵衛は手綱をしぼって馬を停めた。
「これこれ、そこな百姓」
百姓は荷物を投げだしてぺたんと坐った。
「どうぞ……あの、い……生命ばかりは」
「生命など取るとはいわぬ。その方に道をたずねたいのだ」
しかし相手はわなわなと震えるばかりで、口もよく利けないらしい。
「安心せよ。わしはそなた達をいじめる気など更にない。よいか、心を落ちつけて……この道を、まっすぐ参れば何れへ出るぞ」
「や……や……八っ尾で」
「しかと、間違いないの」
「でも、馬では行かれませぬ。この道は途中で切れてござるで……そ、そうじゃ、まっすぐ行けば、沼地を埋め立てた沼の深田へはまりこむ」
「なに、沼の深田に!?」
百姓は震えながらうなずいた。

「すると、こなた、この先で、旗差物を持った大軍に出あわなんだか」
「出あいました」
「するとその大軍は、行き場のない泥の深田に向かって進んだ……そう申すのか」
百姓はコクリとした。治兵衛は舌打ちして、
「それならば、なぜ、道が違うといってやらぬのじゃ」
「でも……わしは藪にかくれたし、向こうで訊ねもしないのだから」
いわれてみればその通りであろう。
「百姓！」
「あ……あい」
「その方、先廻りしてその大軍の前へ出る近道を知らぬか」
「お……お助けを……わしはもう」
「その方に案内せよというのではない。知っていたら拙者に教えよと申すのだ」
百姓はようやくホッとして、それから治兵衛に、右なり左なりに細道をそれて、そこから小川の堤伝いに行くと八尾の前面で行きどまりの深田のあたりに出ると聞かせてくれた。治兵衛は鞭をあげてその道を突っ走った。

五

人生の運不運は幸不幸につながるだけであったが、戦場の運不運はそのまま生死につながるのだ。

（あせって、行き場のない道を進むとは何ということ……）

平素の木村重成は、若者には珍しい慎重さと沈着さを持っていた。

現に先月末から今月の一、二日にかけて、彼はこのあたりの戦場を自身でこまかく視察している筈であった。

河内の若江と八尾の間は約一里（四キロ）。

その中間に若江に接して西郡村があり、西郡の南に萱振村がある。

若江の北は岩田村。八尾の北には穴太村。八尾の西には川を距てて久宝寺村。

その久宝寺村からの道は平野を経て大坂に通じている。

重成は、その道を大坂、平野、久宝寺と逆に出て来て戦うつもりであった。それが平野からの道を、後藤、真田、毛利の諸勢が出て来ていると知り、そのあとを追うのを潔しとしないで道を変えた。

この道を変えたところに、彼の若さがあった。いや、その若さ以前に、大坂方諸将の統一を欠いたバラバラな思惑があったと言った方がよいかも知れない。

戦場ではどこまでも総大将から一兵に至る、儼とした「目的――」の合一がなければならなかったのだ……

重成が行き場のない深田めざして進んでいったと知って、平塚治兵衛は狂気のように近道を求めて朝霧の中を駈けた。

そして、八尾の少し手前でようやく先廻りしてこれを押えた。

「申し上げます」

まっ先きって進んでいた重成は、治兵衛を敵と思いこんで槍を構えて誰何した。
「何者じゃ」
「それがしにございまする。平塚治兵衛にございまする」
「おおまさしく治兵衛じゃ」
「ここを進んではなりませぬ。この先はずっと長瀬川沿いの沼地と深田にございまする。敵も攻めては来れぬかわりに、味方も進むことが出来なくなる。ここを進んではなりませぬ」
「なに、これは沼地へ出ると……」
さすがの重成も愕然としたようだった。
「しまった！　道明寺から国分へかけてもはや乱戦……味方を助けようと、馬を急がせて参ったのに」
「躊躇はなりませぬ。すぐさま引っ返して若江で敵をさえぎるのも、道明寺の味方の助けには相成る道理……ここはすぐさまお引揚げを」
「そうか。行き場のない道を進んで来てしまったのか……」
重成は唇をかんで馬首をめぐらした。再び北方の若江めざして戻るように命じながら、何度かはげしく舌打ちした。
道は狭く、一度はれた霧の流れが再びあたりを暗くしている。
その細い道を陣頭へ出ようとして二丁（二百メートル）ほど味方の人波をわけたところで、ワーッと右前方で鬨の声があがった。
重成は、全身を耳にして立ち停った。

うかつに進んで来る間に、敵に追蹤されていたのを知らずにいたのでは無かろうか？
この時はじめて重成は、ゾーッと全身の総毛立つのを意識した。

六

（しまった！）
木村勢のあとを追っていた者があるとすれば、当然それは徳川方河内口の先鋒隊、藤堂高虎勢か、それとも井伊直孝の赤備えに違いなかった。
何れも名うての戦上手。
「治兵衛！　敵の旗印は？　旗印を確めよ」
（このようなところで引き廻されて、泥田の餌食になるのだろうか……？）
重成があわてて馬廻りの中に治兵衛の姿を求めて声をかけた時、すぐ又左手の久宝寺村に近い長瀬川原のあたりで、
「ワーッ」と、別の声があがった。
「治兵衛、治兵衛は居らぬか」
「あ、これにござりまする」
「今の鬨は!?　敵に前後を囲まれたか」
「ご安堵なされませ殿！　最初の鬨は藤堂勢、これに応えて左手であがった鬨は味方の長曾我部勢にござりまする」
「なに、長曾我部が」

「されば、藤堂勢は大坂道を進んで来た長曾我部に任せ、われ等は若江に引きあげを……」
「無念なッ。敵を前にして引きあげよとか」
「これはしたり。敵は藤堂勢だけではござりませぬ。井伊の赤備えもあれば、酒井・榊原の手強い諸勢もある。相手に事欠くことはありませぬ。とにかくこの沼田の近くを寸時も早く！」
そう言うと、平塚治兵衛は馬をまわして、逆先頭の味方を、藤堂からそらして進めた。
事実、ここで応戦したのでは、木村勢は鳥もちにかかった蝶の大群になり下ったに違いない。
その意味では、長曾我部の出現は木村勢にとってまさに救いの神であった。
むろん長曾我部勢は、木村勢を救おうなどと考えて出て来たのではない。彼等は彼等の勢いに任せて八尾村を突っきり、玉串川の堤近くまで猛進してここで藤堂勢と激突してゆくことになった。
この朝藤堂高虎が、早暁から発進の用意をしているところへ、これも道明寺方面の銃声が耳に入った。
「――誰であろう。もう国分をめざして出て来た敵があるぞ」
国分からの大和口をおさえようとする者がある程ならば、当然その北の大坂街道から立石街道へ進む者も、十三街道から、高野街道へ出て徳川勢の本軍をさえぎろうとする者もある筈だった。
そこで急を星田と砂の、家康と秀忠の本陣に告げ、その指図を仰ごうと考えたのだが、その暇はなかった。
朝霧の流れの間に見るあたりはもういっぱいの旗の波であった。

木村勢、長曾我部勢、増田勢、内藤勢などの諸勢が、八尾、穴太、萱振、西郡の各村を埋めて動いている。
藤堂勢右先頭の侍大将藤堂良勝は、まさか木村勢が転進しているのだとは気がつかず、
「――木村勢はわが軍を顧みず、若江に向っている。星田と砂の本営を襲う気に違いない。これを両側から攻めたいと思います」
高虎はびっくりしてこれを許した。
家康や秀忠の本陣を襲われたのでは先鋒の顔はまるつぶれだ。こうして木村勢の側面を衝こうとして動きだした藤堂勢に、来合わせた長曾我部勢が襲いかかったというのが、この方面の戦の発端であった。

七

藤堂勢の四千七百あまりを長曾我部に任せて、木村長門守重成が若江村に軍を退け得たときはすでに六ツ（午前六時）に近かった。
夜はすっかり明け放れ、視野をさえぎる朝霧も無くなっている。
おそらく長曾我部盛親と藤堂高虎とは、互いに戦国武将の誇りを賭けて八尾村一帯に死闘を展開しているに違いない。鬨の声と、それを縫って聞こえて来る鉄砲の音が絶え間なく耳朶を叩いた。
（いったいわしは、何のために今日まで兵法を磨いて来たのか）
木村重成は、彼が若江に退ったと知って、高野街道から十三街道をこっちへ向って進んで来る

敵勢の姿を見ると、涙が出そうな無念さを覚えた。
今ごろは、家康、秀忠の本隊を側面から襲い、何れか一つ首級はあげて、木村重成の存在を天下に示し、それを今生の名残りにするつもりであった。
（それが、夜通し兵を歩かせて、今また若江に戻っている……）
みじんの失敗も許さぬ戦場の駆け引きのきびしさは、千軍万馬の間を往来して来ている諸将に決して譲らぬつもりだったのに……
（取り返さねばならぬぞ！　落ち着け）
重成は軍の末尾が到着すると、直ちに兵を三隊にわけた。
その一隊はいうまでもなく右翼の藤堂勢に。他の一隊二百余人は木村宗明に率いさせて北の岩田村に。そして、本隊は若江村の南において進んで来る敵を待った。
実はこの敵は、間もなくそれが赤備えの名で勇名とどろく井伊直孝の三千二百とわかったのだが、命令を下すころにはまだハッキリはしていなかった。
（どんな敵にせよ、必ず蹴散らして見せねばならぬ）
重成は次第に自信を取り戻し、まず、その敵の進路に向けて、山口弘定、内藤長秋を立ち向かわせておいて、自身は右翼の藤堂勢に備えた一隊の指揮をとった。藤堂勢に萱振村から追撃される危険を感じたからである。
この判断は誤ってはいなかった。
藤堂勢の藤堂良勝と良重とは、引きあげてゆく木村勢を、退却とは思わず、家康や秀忠の本隊の側面を狙っての進撃と思ったのだ。

「――このまま本隊を襲わせたとあっては、藤堂勢の名がすたるぞ」

そこで彼等は、藤堂対長曾我部の主力同士の合戦場からはずれて、木村勢に挑んだのだ。

まっ先に木村勢の右翼へ突っ込んで来たのは藤堂良重だった。続くものが追いつけず、何か声高にわめきながら、単騎で糸ひくように木村勢の中に斬りこんだ。

「よき敵ぞ。討ち洩らすな」

重成の若さが良重の猪突ぶりにあって爆発した。爆発するとこれは強い。ワーッと畑の中で良重を取りかこみ、その輪が開いた時には良重の姿はすでに馬上になかった。

重傷らしい。落馬した良重の周囲に駈けつけた兵たちが寄ってたかって助け起こしているのが見える。

「一将は討ち取った。幸先よいぞ！　今の間に蹴散らせや」

木村重成はもう陣頭に起とうとしなかった。ようやく落ち着いた指揮者として、全軍に目のとどく冷静さを取りもどし、がっしりと馬の足掻きをおさえていた。

八

いったん戦端が開始されると、もはやもろもろの雑念は重成の胸に入りこむ隙はなかった。

敵は良重の負傷により、明らかに狂相をおびて来た。序戦の常識がいっぺんに吹き飛んで、この頃から人間は牙をむきだし、爪による猛獣に一変する。この猛獣心理の持続の長い方がその戦場の肉弾戦では勝者になる。

したがって指揮者は冷静に、部下のこの狂相の続く時間を計算してあらねばならない。

ド、ド、ドーンと味方の西側から敵の鉄砲の音がひびいた。
（藤堂良勝が西へ廻った）
木村重成は、それを察すると、
「斬り込めッ！」
先頭に立ち、西に向かって槍を構えて馬を煽った。眼でわかるよう指揮者の意志を示してゆくのである。「ワーッ」と、味方も西へ向き直り、煙硝の匂いと煙の中から襲いかかって来る藤堂勢の中へ突き進んだ。
藤堂良勝は、発砲と同時に、これも斬り込ませるつもりだったのだから、ここでも重成のカンの冴えは良勝にまさっていた。
こうした場合、敵に向き直って一歩踏み出しているか否かが、勢いの流れを決定してゆく。押されだしては止まることの出来ない敗勢に移るものだ。
両勢は芽出ちだしている野菜畑で激突した。
「退くなッ。藤堂勢の意気を見せろッ」
良勝は、あせって陣頭に出て来てしまった。
（勝った！）
と、重成が鞍壺を叩いたときに、一人の武者が良勝に槍をつけて襲いかかった。
良勝は槍を捨てて太刀を抜き、その周囲にバラバラッと郎従が駈け寄った。
郎従の駈け寄る時は、主人の不運のきっかけと見てよかった。
斬られたのか？　それとも突かれたのか？　人の輪の中から良勝の乗馬が大地を蹴手繰るよう

な姿勢で逸走していった。
むろん馬上に良勝の姿はない。
ワーッと味方の勝鬨があがり、敵の向きが逆になった。
大将二人を討たれて崩れだしてしまったのだ。そうなると狂気の味方は勢いに乗って追おうとする。
「勝ったのだ。追うには及ばぬ。それよりも手負いの者を介抱して、すぐさま若江の本隊に合流せよ」
重成の采配を見て、すぐさま、兵を納めよの法螺が鳴った。
「待てッ。追うではない」
命を伝えると、重成はもう馬首をめぐらして引き揚げの先頭に立っていた。
(わが敵は藤堂勢ではない。いよいよ激突しなければならない井伊直孝の采配する精鋭なのだ)
井伊直孝もこの時まだ重成とさして変わらぬ若武者だった。
しかも兄の直勝が病弱のゆえをもって本家の相続を命ぜられ、父直政の鳴りひびいた武名を汚すまいと、燃え立つような覇気をもっての出陣だった。
(井伊ならば、相手にとって不足はない)
重成は、こうして先ず藤堂の右翼を破り、いったん若江の南端、玉串川の堤の近くに引きあげて、そこで持参の兵糧包みを開かせてゆっくりと腹ごしらえにとりかかった。

九

　この日、木村重成と運命的な激突を約束されていた井伊直孝は、風采も弁舌も重成とは凡そ対照的の、武骨で寡黙な青年だった。
　眼光は射抜くような鋭さに輝き、鬼上官と呼ばれた清正ばりの頬髯をたくわえ、他人を見ても笑うことは殆んど無かった。
　重成が若い女性たちの胸を燃やす端麗な美貌をもっているのに比べ、これは声をかけようと近づいても取りつくしまもない感じで、しかも両者の闘魂と用心深さには共通したものがあった。
　井伊直孝はこの朝九ツ半（午前一時）に起き出すと、
「――みな、腹ごしらえをするように」
　先ず全員に食事をさせ、それから昼食を腰につけさせて夜明けを待った。
　そして老臣の庵原朝昌がやって来て、
「――今日の主戦場は道明寺と心得ます。早速それへご出陣あるように」
　そう言うと、ギロリと大きく眼を剝いて首を振った。
「――ならぬ。今日の戦は八尾、若江方面じゃ。これを避ければ後悔することになろう」
　何が後悔のタネになるかには触れようともせず、
「――お許は、右先頭として銃隊を引き連れ、若江の前提へすすんで夜明けを待つように」
　重い口調で躊躇なく命じていった。
　いったん言い出すとそれを翻す直孝でない。庵原朝昌は言われるままに十三街道を西に向かっ

て進み、玉串川の堤へ出て右に備えた。
左の先頭は川手良利が命ぜられ、これは堤を左へさがり、直孝の本隊は若江から高野街道へ出てゆく十三街道を固く封じて敵を待った。
その行動から逆に考えると、井伊直孝は大坂方の武将のうちに、家康や秀忠の本隊を側面から襲おうとする者が、必ずこの道を出て来ると睨んでの備えに違いなかった。
こうして、夜が明けてみると、両者は玉串川をはさんで相対していたのだから、直孝の着眼は正しく的中していたのだ。
(ここを通してなるものか!)
口には出さなかったが、兜の下に光る直孝の眼は明らかにそれを物語っていた。
「——敵は木村重成の精鋭にござりまする。すぐに撃ちかけましては」
川手良利から催促があったが、直孝は、
「早まるな。早まると疲れるぞ」
そう言っただけで六ツ半(午前七時)ごろまで仕掛けようとはさせなかった。
一方——
川を距てて相対した木村重成は敵の配置を確めながら食事を済ますと、
「鉄砲隊三百六十人を堤のかげに伏させるよう」
と、山口弘定に命じていった。
このまま時を移しては、夜通し歩いて来ている味方の不利。重成は、西岸の堤の上から一斉射撃を浴びせかけ、それをきっかけに進撃すると見せかけて逆に敵に川を渡らせ、深田の細道へ井

伊勢を誘い込んで戦う気になった。
命を受けて鉄砲隊は出ていった。
と、入れ違いに弓隊長の飯島喜右衛門がやって来て、重成の前に片膝突いた。
「敵の左翼が動き出しました。この方の大将は川手良利。戦機は熟してござりまする」
うなずいて、重成は起ちあがった。

十

なるほど井伊勢の左先手、川手良利の一隊が玉串川をわたって来る。
（あせりだしたな）
と、重成は思った。
この一隊が岸へあがったところを狙って一斉射撃を浴びせかける。さすれば敵はひるむか、それとも逆にのぼせあがって猪突するか？
何れにせよ、これを見て井伊直孝の本隊は進撃を開始して来るに違いない。味方はその勢いに押された態にして田の中の細道伝いに退却する。
そして井伊勢が深田の細道に出おわった時を見て反撃を開始する。さすれば若い直孝は必ず先頭に立っていて退き得ず、ここで生命を落としてゆくことになろう。
大将を討ち取られてはそれで終わりだ。相手は算をみだして退却するに違いない。
戦はそれからだと重成は思った。
崩れて退く井伊勢を追って十三街道をまっしぐらに高野街道へ出て行くのだ。

その時果たして高野街道にあるものは、家康の本隊か？　それとも将軍秀忠の本隊か？　何れでもよい。すでにここを死所と思い定めている重成なのだ。家康にせよ秀忠にせよ、何れか一つの首級をあげて斬り死する……

その作戦も、作戦を構成している考え方もまことに爽やかな割り切り方の重成だった。

「射てッ！」

そうした重成の作戦を知るべくもない井伊の左先手、川手良利は先頭に立って玉串川の左岸へたどりついた。

ド、ド、ド、ドンと波立つように銃声がとどろき渡った。

「あ！」

と、重成は低く叫んだ。

たしかに最初の銃声は味方だった……が、その銃声の切れないうちに、対岸の右手からも別の銃声が湧いて来たのだ。

その発砲の主は重成の狙っている井伊直孝の本隊からではなくて、どうやら右先手の庵原朝昌の隊かららしい。

とすれば朝昌は、川手良利が対岸へ辿り着いた時が危いと判断し、堤の向こうで敏速に移動を開始し、間髪を容れずに援護射撃をしてのけたと見るべきだった。

両者の銃声で、左岸に幾十かの死屍がむざんにころがった。

と、同時に、重成の命令してあるとおり、木村勢はいっせいに田の畔道を退きだし、まだ無事な川手良利が小堤の上にかけあがって、狂気のように何か喚いているのが見えた。

「――川手良利は退かない。狂ったように追って来る」
そこまでは重成の予想どおり……と、思った時、退きかかって敵に背を見せた味方のうしろで、ワーッと敵の喊声だった。
重成は裂けるような眼をして、新しく川を渡り出した敵を睨んだ。
井伊直孝の本隊ではない。川手勢を援護していた右先手の庵原勢が、そのまま川原を横切ってやって来る。
重成の唇からはげしい舌打ちが洩れた。
庵原勢など深田の中へ誘いこんでも意味はない。彼の狙っていたのは井伊直孝の本隊なのだ。
「引っ返せ！　退くなッ。引き返して川手勢を踏みつぶせッ」
重成の声が甲高く田の面にひびいた。

十一

木村勢は、重成の下知によって向きを変えた。
そして、追いすがる川手勢の前に槍ぶすまを作って立ちふさがった。
これは追撃して来た川手勢にとっても、もっと深く田の間に誘い込むつもりであった木村勢にとっても、思いがけないことであった。
その予期に反したわずかな変化が、戦場では決定的な意味を持って混乱に道を開く。
体力の個人差で、追う者と追われる者がいりまじり、見る間に双方の隊形が崩れてゆく。
「退くなッ。ここが大事の瀬戸際ぞ」

川手良利は、もうその時に深傷を負っていた。最初の槍ぶすまを突破する時に、強か股を突かれていたのだ。
しかし彼は背後を見ようとしなかった。
木村重成が、彼の手勢の動き出した瞬間に、
「――あせりだしたな」
そう見たのは的中していた。
無理もない。ほど遠からぬ八尾から道明寺へかけての戦の、銃声と鬨の声とが波のように聞こえてくるからだ。
だが、右先手に選び出された井伊家の老将庵原朝昌は、何度も使者を出して良利を押さえていた。
射って出る時は、右先手も左先手も同時がよいと。
ところが若い良利は、そうは思わなかった。何れか一方が討って出るとその方面へ敵の注意は集中し、他の一方が出易くなると計算して、すすんで先に討って出たのである。
しかし今は、その庵原勢に援護され、更に背後から支援されている。
ここで川手勢が崩れ去ったら、それこそ庵原勢までその勢いに捲き込んで、救いがたい混乱を描き出すに違いない。
「退くなッ。退くとあとから来る庵原勢の邪魔になるぞ。進んで死ぬのだ。すすんで……」
その怒号もしかし、長くは続かなかった。「ワーッ」という潮のような庵原勢の喊声が川手勢に追いついた時には、もう川手良利の姿は先頭には無かった。

乱戦の中で壮烈な斬り死をしてしまっていたのだ。
こうして庵原勢と川手勢は入れ代わった。と、思った時には木村勢の退き方もまた、最初に予期していた作戦ではなくなってしまっていた。
木村重成が、
「しまった！」
と、ほぞをかんだのはこの時だ。
川手勢、庵原勢を斬り込ませておいて、井伊直孝の本隊は、不思議な重量感で、ゆっくりと動きだしている。
直孝に決戦を挑むには先ず庵原勢を蹴散らさなければならないのだが、肝心の味方の方が崩れだしてしまっている……
重成は浮足立った味方に、踏みとどまれと叱撻する代わりに、いきなり馬をあおってやって来る敵の流れの中へ割って入った。
それは、しばらく、激流にさからう一個の巌のように見えた。おそらく十数人は斬っておとしたに違いない。やがて、その流れを行き過ごさせると、こんどは岸辺の小堤をおどり越え、青萱の群れ立つ川辺に来て武者ぶるいをしながら馬を降りた。
咽喉がヒリ付きそうに渇いている。
ここで馬もわが身も最後の水をふくんで、井伊直孝の本隊に、真向うから斬り込もうというのであった。

十二

ここにも敵味方のあげる喊声が津波のように聞こえて来る。

重成は汀に腹ばって、むさぼるように両手で掬って水を飲んだ。そして、ふと手を離した瞬間、みずもに映っている自分の姿にギョッとなった。相好が変わっている。端然ととり済ました自分の代わりに、眼を血走らせ、いっぱい汗を噴かせて、歪みきった男の顔が重成を睨み返している。

（これが、木村長門守重成か!?）

そう思った刹那、何の関連もなしに、悲鳴をあげて飛びのく、新妻の阿菊の恐怖にみちた顔が見えた。

（おどろくな、これが重成のもう一つの顔なのだ）

その証拠に鍬形の兜の前立、段々おどしの鎧、赤地錦の直垂と、武装はまぎれもないものだった。いや、その武装にも所々に血がしぶき、わが身も又数ヵ所手傷は受けている。しかも、渇をいやした肉体にはまだ凛々とした力のたぎりが感じられる。

「おお!」

と、重成は声をあげた。汀から勢いこんで立ち上がろうとした時に、兜の前立につと止まった蜻蛉が、一匹、描いたように水に映った。

「そちもまた忙しそうに生きている……」

すぐに頭をふりかねて、思わず微笑を洩してゆくと、それは見なれたわが顔だった。

「よし、しばらく翅を休めてゆけ……」
と、その時だった。
「やあやあ、敵方の大将分と覚えたり。音に聞こえた井伊勢の、先手の大将庵原助右衛門！」——
その声が、意外の近さで耳に入ったときには、あわてて重成に追いついた忠僕太兵衛が馬を川から曳きあげようとしているところであった。
「旦那さま危い！」
下僕の叫ぶのと、重成が飛び起きて太刀を抜くのとが一緒であった。
「なに、庵原助右衛門朝昌とな」
「来いッ」
この時朝昌は七十歳。一間半の槍をしごいて、ぴたりと穂尖を重成の咽喉につけた。
重成はカーッと全身が熱くなった。
戦いなれた老将だけに朝昌の構えにはみじんの隙もなく、穂尖を払う余裕がない。
彼もまたすぐさっきまでは二間一尺五寸、北国流の直槍を揮って戦っていたのだ。
(あの槍を捨てなんだら、内冑が突けようものを……)
それでも、太刀を垂直にして、いきなり躰ごととびかかった。
武器の比較からあせりが出たのだ。
「たッ！」と、朝昌は身を引いた。頬のあたりを太刀の切ッ尖でかすられながら……
そして、落とした腰が伸びた時には、眼にとまらぬ早さで槍はくり出されていた。
「ム……」

突かれたのは股から左の腹へかけてであった。
「南無阿弥陀仏」
朝昌は、素早く槍を手許に引くと、二度目は繰り出さずに、とんと石突きを立てて倒れた重成を見おろしている。
「まだ若いの、南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏」
重成は太刀を逆手に突いて、ヨロめきながら立ちあがろうとあせった。
この老人のたった一突き……それだけで木村長門守重成ほどの者が討たれていってよいものか。
気がつくと老人は首に大きな数珠をかけ、もう重成は立ち上がれないものと見て、片手おがみにおがんでいる……

十三

憐れまれている——という感じは若者にとって耐えられることではない。
「ム……来いッ」
もう立てないと観念すると、重成は切ッ尖だけを相手に向けた。
しかし相手は念仏をやめようともせずに、
「戦場とはむざんなものよ。強がるな」
そういってから、又訊ねた。
「名は何というぞ。遺族に伝言もあらば聞いておいてやってもよい」

「黙れッ。なぜ、すぐに首をはねぬのじゃ」
「その事か」
　と、庵原朝昌は苦笑した。
「わしはの、七十歳になる井伊家ノ方の大将じゃ。おぬしのような若僧の首をとってみたとて、自慢になるほど武功の少ないものではない。立ちあがれぬとわかったら、おぬしも念仏してはどうじゃ」
「ええッ、ほざくな。さ、早く首を打てッ」
「やれやれわからぬ若僧だ。草摺の下から流れるわが血がとんとわからぬらしい。誰が討たなんでも程なく浄土へ行けるだろう。南無阿弥陀仏……ナム……」
　そのまま行こうとするので重成はクラクラした。これほど大きな侮辱を感じたことは曾ってない。
「待てッ！　うぬ……ま……ま……待てッ」
　と、その時――
「ご老人！」
　この場へ駈けつけて、庵原朝昌に青萱のかげから呼びかけた者がある。
「何だ。安藤長三郎ではないか」
「ご老人……それがしは、本日の戦いで、まだ一つも敵の首級をあげて居りませぬ」
「首にこだわるな……と、殿が申していたであろうが」
「と、申して、一つも取らぬでは同輩に対して顔が立たぬ。見れば身分ありげな兜首、その首、

それがしに賜りたい。まだ切ッ尖をあげているゆえ、拾い首にはなりますまい」
するると老人は、チラと重成の方をふり返って、
「その方が供養になるかも知れぬなあ。勝手にせよ」
そういい捨ててそのまますっさと去ってしまった。
安藤長三郎は「ありがたい！」と、言いって重成に近づいた。
もう重成は太刀はあげていたが視力は無くなりかけていた。朝昌のいうとおり、草摺の下から
ぬるぬると伸びだした血潮が膝をひたしている。
「やあ、何者か知らぬが首は貰うた。ご免！」
それは、まことに奇怪な……木村重成ほどの者が、その短い生涯で想像してみたこともないな
りゆきの最期であった……
「よしよし、これで顔が立つわ」
安藤長三郎は、重成の首を打つと、遺体の腰につけてあった白熊の旗をぬき取ってそれに包
み、無造作に自分の腰へぶら下げて駈け去った。
すぐさっきまで近くにあった下僕も馬もあたりに見えず、首のなくなった胴体に早くも蠅がむ
らがり寄っている。
戦は完全に木村勢の負けであった。いや木村勢だけではない、この頃には、すぐ隣りの八尾で
戦っていた長曾我部勢もまた敗色をおおうべくもなく、五月六日の午後の戦場は、次第に薄陽の
ひろがりと、静けさを取り戻してゆきつつあった……

真田軍記

一

真田幸村は兵三千をひきいて天王寺から道明寺への道をすすんだ。
この方面の第一陣は後藤又兵衛基次。
これを支援するため第二陣の毛利勝永は、これも三千の兵をひきいて夜明け前に天王寺を出発している。
したがって、先鋒の後藤勢から連絡があれば、当然真田勢はもっと進軍を急いでよい筈であった。
だが幸村ははやる部下をおさえて、敢えてこれを急がせなかった。
むろん若江に出て行った木村重成勢を案ずる気持ちもなくはなかったが、それだけではない。
（――後藤基次はすでに死ぬ気になっている……）
無理はないと、幸村は思った。
「――士はおのれを知る者のために死す」
戦国人のその性根を生き甲斐として、気に入らぬことがあれば主君に暇を出し、黒田家をさっさと退去して来るという無類の意地をもった又兵衛基次なのだ。
それが、秀頼以上に、自分の実力を買ってくれているのは、実は家康であり、秀忠であったと

感じとっている。そうなれば、両者に義理を立てて、その第一陣で戦死を希うことになる。
その気持ちがわかるだけに、幸村はわざと急がなかったのだ……
急いで後藤勢と合体したのでは、真田勢もまたその勢いに捲き込まれて、一緒に討死せねばならぬ破目になる。
（まだまだ、死ねぬぞ！）
それは決して生死の迷いではなくて、これもまた一歩も譲れない真田左衛門佐幸村の人生の意地であった。
（――この世に戦がなくなるものか……）
そう信じて踏みきったこんどの大坂入城なのだ。相手の家康が、その反対に「泰平の世が作れる！」そう信じている以上、意味もなく討死しては、この好敵手に対しても不誠実になってゆく。
「――泰平の世が作れる……」などというのは思いあがった人間の慢心に過ぎない。いや、仮にそれが作れるものであったら、尚更その油断を戒めるためにも、一泡も二泡も吹かしておいてやるのが武人の情誼であろう。
（――わしはまだ死ねぬ！　まだ、家康にも秀忠にも、贈りものをして居らぬ）
それはおそらくこの戦場に駆られて来ている誰にも簡単には理解し得ないふしぎな人間の意地であった。
いや、その意地すらも夜明けを待って天王寺を発したときには消え失せて、いまはただどうして戦いぬくかの一点だけ……

彼は、家康の陣していると思われる星田のあたりの山ぎわの空に、冷静な視線をなげて駒をすすめた。

生駒から続いたそのあたりの山脈に、霧とだけは思われない雨雲のただよいが感じられる。

（星田は今朝は小雨気味かも知れぬ……）

若し小雨が降っているとすれば、家康は自分の年齢を考えて陣は出まい。家康の居らぬ戦場で斬死しても意味はない……

こうして、後藤基次や毛利勝永から救援の求めのあった場合は急行出来るようにして、幸村はむしろ悠々と進んで来た。

むろん若江から八尾の方へも気はくばっている。

藤井寺村に着いたのは四ツ半（午前十一時）ごろであった。

二

藤井寺にはすでに毛利勝永がひきいる三千が先着していた。

幸村はすぐさま勝永の陣をおとずれて道明寺方面の、後藤、薄田両勢の戦況をたずねた。

「もはや勝敗は決した様子にござる」

民家の一軒に床几を据えさせた毛利勝永は、幸村の肚を薄々察しているらしい。

「敗れた両隊の残兵が続々こっちへやって来る。何れも見るかげもなく戦い疲れた雑兵たちでござる」

「それは残念な」

と幸村は澄して答えた。
「それがしの到着が、いま少し早かったら、ご貴殿と共に後詰め出来たものを……気の毒なことを致しました」
そうした時の幸村は憎いほど冷静な嘘つきでもあった。
彼は、彼が到着しなければ毛利勝永も前進し得ないことをよく知っていた。
彼がわざと急行しなかったのは、後藤基次の掉尾を飾るための戦に、毛利勝永まで巻き込ませてはならないという思案もあった……
そこへ又福島正守、渡辺内蔵助、大谷吉久、伊木遠雄等も続々とやって来た。彼等は何れも眼のいろ変えて駈けつけたのだ。出発が真田勢より遅れていたからであろう。
これで藤井寺へ結集した西軍の数は一万二千を超える数になった。
「あせってはならない!」
諸将を前にして幸村はおだやかにいった。
「後藤勢を破り、勝ちに乗じて強襲して来る敵は、水野勝成だけではない。伊達勢の一万もあれば松平忠輝の九千もある。これ等の大軍を午後の戦でどのようにあしらい、どのように撃ち減らせるかが、大坂の明日の運命を決することになりましょう。敵が怒濤の勢いで来る時には、わが方は槍ぶすまを作って折り敷くように……彼等は必ず馬上で発砲するに違いないゆえ、折り敷いてあれば弾丸は頭上をそれよう。それから猛然と立って近づく敵を人馬もろとも突き伏せる」
それは、幸村が九度山にあるおりからしきりに試みた用兵であった。
騎乗銃隊に狙われたおりには突っ立っていてはならない。いったん伏せて、弾丸を避ければ

火縄銃なのだから後は続かず、勢いに任せて駈けて来る敵は、すすんで味方の槍にかかる道理であった。

しかし、それだけで戦勢を左右出来る戦ではなかった。

「むろん味方の銃隊は、敵の発砲のおりを狙って射ちまくる。だが、勢いに乗じて進みすぎることのないように……」

幸村はそういってから、ふと合掌して何者かを拝んでみせた。

「思わぬ遅着により、後藤、薄田の両将はじめ多くの勇士を失うたはみなこの幸村が罪……今日の戦機はすでに去った。それゆえ、若江から八尾の味方が敗れたとわかったおりには、早々に兵をまとめて引揚げられたい。むろんその時はこの幸村が殿軍を仕ろう。決戦は明日の天王寺と茶磨山！　それまでは呉々も兵を惜しみ、生命を大切にしてくれるよう」

これが幸村の真偽とりまぜた作戦に違いない。いや、基次や兼相を見殺しにせねばならなかった詫びは決して嘘ではあるまい。そうしなければ西軍すべてがすでに浮足立っていたかも知れないのだ……

三

すべての者が狂人に一変してゆく戦場の中で、水のような冷静さを保つということは奇蹟に近い至難事だった。

真田幸村はその至難な理性の活用によって、痛烈に関東勢に一撃をくれ、そのまま今日の戦場は立ち去るべきだと考えている。

誰も、どこからも、家康の本隊が出て来たという報告はない。
正午になって、このあたりは薄陽が射しそうになっていたが、星田の今朝は小雨だったに違いなく、家康はそれで、泥濘に馬の足をとられてはと警戒し、陣を出なかったと思われる。その用心深い家康の前で、幸村は退却してみせる……すると、家康は、勝機をのがすまいとして、今夜のうちに陣を移して進んで来るに違いない。
ここから退けば戦場に選ばれるのは、冬の陣のおりにも激戦場になった天王寺から岡山のあたりより他になかった。
（そうなると家康は、勝手を知った茶磨山へ再び陣を構えようとするであろう……）
人間にはそうした習性があるものだ。
そこで、その茶磨山の近くへ幸村も網を張って家康を捕えてやる。
勝敗はすでに眼中にはなかった。あるのは戦争は永遠に絶えないという意地だけである。彼に信濃十万石を与えようといった家康……その情誼にまけて後藤基次は、すすんで討死していったが、真田左衛門佐幸村は、それほど単純な人情家ではない。
ほんとうの恩返しは、家康自身の生命を奪って、安易な泰平などの存在しないことを世人に思い知らせてやることであった。
（それでこそ十万石の恩返し……）
藤井寺村の民家で打ち合わせをすますとすでに正午。若江では木村重成がゆっくりと腹ごしらえにかかっていた頃である。
幸村は、毛利勢とわかれて、自らは渡辺内蔵助の一隊と合し、右翼をなして道明寺川原の右手

にあたる誉田村に向かって進んだ。動きだしてみると、そこにもかしこにも後藤勢の落ち武者が手傷を負ってかくれている。誰もが基次の戦死のさまは知らず、戦は完全な負けとわかった。

幸村は、出来るだけ道明寺口の正面を西に避けようとした。そこには必ず伊達勢がやって来る。伊達勢の中には彼の婿の片倉小十郎の指揮する一隊がある筈だった。

（それと打つかり合っては拙い……）

そんな気持ちもあったが、それ以上に、彼には一つの興味と疑問があるからだった。

伊達政宗と大坂城内の切支丹の神父たちの間に、何かつながりがありそうな気がしてならない。

（いったい伊達勢はどんな戦ぶりを見せて来るか……？）

それを見きわめておくことは明日の決戦に重大な意味を持ってくる。しかもその戦ぶりを見きわめるには、自分の敵としない方が好都合でもあると思った。

川原へ出ようとしたところで、バラバラと左前方から算をみだして退却して来るひと群れの雑兵にあった。

「誰じゃ。何れの手の者ぞ」

馬上で幸村が誰何すると、相手は味方の北川宣勝の手勢であった。

味方とあれば捨ておけぬ。幸村は舌打ちして馬首をめぐらした。

四

（幸村の生死を賭ける戦場はここではない！）

そうは思っているものの、明日の戦場の士気は今日の戦と無縁ではない。今日の士気が、そのまま明日に尾を曳くからだ。

幸村は北川宣勝勢の苦戦を見てとると、突嗟に同行していた倅の大助幸綱に命じて味方をその場に展開させ、自身は単騎で先行している北川宣勝の許へ駈けつけた。

その時、まだ幸村は北川勢を圧迫して来ている敵が何者であるかを知らなかった。

「北川どの、二、三丁がほどは退き候え。そして、わが手の者と入れ替られよ。あとはわれ等が引き受け申すぞ」

いったん追い立てられて、敵に背を向けだした軍勢を立ち直らせるには、これよりほかに手段はないものだ。

つまり……真田勢の後方まで北川勢をいっきに退かせて、真田勢は追いかけて来る騎馬銃隊を、折り敷いて槍ぶすまで待ちうける。いうまでもなく両者激突の寸前に一斉射撃を浴びせておいてそれをきっかけに肉弾戦を展開する。

そうなれば、いったん真田勢と入れ替った北川勢もまた、背後からの追撃をさえぎられ、安心して敵に向き直れるのだ。

向き直れば、これはもう浮足立った敗兵ではない。自分たちの苦境を救ってくれた真田勢と意気を競う第二陣に甦生する。

幸村の軍配は、つねにこうした力学と人情の巧緻な組合わせであったが、この時もあざやかにそれは功を奏した。

浮足立った北川勢は、幸村の指揮でいっせいに退きだした。

と、敵ははげしくそれを追ってくる。幸村の騎乗姿が大助幸綱と渡辺内蔵助の展開している味方の戦線におどり込むと同時に待機していた真田銃隊は敵の先頭めざして斉射を浴びせた。

いや、その斉射があたりの山河をふるわしてとどろき渡ったときには、戦場の空気は完全に一変していた。

北川勢の浮足は喰止められ、彼等の敗勢が、そのまま見事な誘いの囮に変わった結果になっている。

真田勢が自信満々に槍をそろえて突撃してゆくと、敵もさるもの、十数分の激闘でサッと兵を引いてしまった。両者の距離は五、六丁もあろうか。

「仲々あざやかな用兵ぞ。敵を見きわめよ。何れの手勢じゃ」

幸村は、立ち直って、これも向きを変えている北川勢を点検しながら声をかけた。

「はい。敵は音に聞こえた伊達勢の、片倉小十郎が手勢にござりまする」

北川宣勝に答えられて、

「なに、片倉か……」

さすがの幸村もこの時ばかりは凍り付いたような顔になった。

「そうか、片倉勢であったのか……」

戦国の戦場にはつねに予期しない無情な伏勢があるものだ。

(幸村がみずから避けたいと希っていた婿の手勢……)

それがいきなり彼の前面に立ちふさがって来ようとは……

しかも、この緒戦は、味方の士気の鼓舞をめざしてわざわざ買って出た一戦なのだ。退くこと

など思いもよらない。

同じことが、この時、片倉勢の中でも当然大きなおどろきになっていた……

五

おそらく伊達勢の方でも真田勢との決戦は避けたかったのに違いない。

道明寺口の正面にあたるいちばん北には水野勝成と大和勢の諸将をおき、その次には本多忠政の伊勢勢、松平忠明の美濃勢とおいて、いちばん南の誉田村めざして進んで来たのが伊達勢だった。

ところが、真田幸村もまた、道明寺口の正面を避けて同じく誉田村へ出て来てしまった。そして、両者ははしなくもここで激突しなければならない破目におかれた。

それでも片倉小十郎は独断を避けて部下の将に相談のかたちを取った。

「——さあ敵は前面にわれ等の選ぶに任せている。どの軍勢に立ち向かうぞ」

北川宣勝の軍勢はすでに真田勢と重なり合ったが、その右手には山川賢信、その左には福島正守、大谷吉久、伊木遠雄などの軍勢が三丁ほどの間隔をおいて旗をならべている。

少し爪尖の向きを変えれば、何れを突破口に選ぶも自由な位置にあったが、しかしこれも、

(——決戦は明日になろう)

という思案のうえでの士気の配慮を忘れ得ない。

下手な戦をして一度気鋒をくじかせると、負け犬同様、あとの戦が出来なくなる。

そこでわざわざ相談の形をとったのだが、みんなの答えは、片倉小十郎にとって非情きわまる

ものであった。
「──いわいでものこと赤隊じゃ。赤隊こそよき敵、これを討たせて下され」
赤隊……とはいうまでもなく、幟旗から甲冑まで、すべて赤を用いた真田勢にほかならない。
「──よし、それで決まった。それならばわれ等も騎乗の者を二隊にわけるぞ。そして、銃隊はその二隊の左右に伏せて、敵の将を狙い射つのだ。音に聞こえた赤隊にも、ただ一点の弱味はある。それは大将を失うと、いちどに崩れてゆくということだ。大将を狙うのだ」
人情と戦略は両立しない。
いや、そうした人情に拘泥しないことを以て戦場の心得の第一としている武人なのだ。
真田幸村は、片倉勢の前面にまとめた赤隊の中央に立って、ひっそりと相手の動きを見やっている。
こちらも又、ここで敗退などは思いも寄らない。相手がかわしてゆけばとにかく、打つかって来る気ならば、是が非でもこれを駈け散らして見せなければならない。
片倉勢が敗れ去っても、それは伊達勢の中の一翼にすぎず、関東勢という大軍団をひきいる家康にとっては蚊に刺されたほどのことであろうが、若しも真田勢が敗れるようなことがあれば、それはそのまま大坂の士気の潰滅を意味するのだ……
(人生とはまた、何という味な伏勢をくり出すものか……?)
「お父上！　いよいよ敵は向かって来ます」
大助幸綱が、息をはずませ馬を寄せたが、幸村はまだ采配をあげなかった。
「あわてることはない。待つのだ。備えて待つのはあせって攻めるに数倍する。そうだ大助、敵

将の首級はそなたの手で挙げるがよいぞ」
「心得ました！」
大助ははじけるような声で答えた。

六

法螺貝は先ず片倉勢の方から吹き鳴らされた。
と、同時に騎馬の一隊が喊声をあげて真田勢のまっただ中におどり込んだ。
真田勢は伏せて迎えて槍をそろえて突いて出る。
と、すでに真田勢のその戦法を予期している騎馬隊は、畑から河原へ旋風を捲き立ててもう一隊と入れ代わる。
入れ交りながら狙い撃ちする鉄砲の正確さは身の毛のよだつものがあった。
「危い！　真田どの父子があぶない」
横から渡辺内蔵助の一隊が割って入ったときには、敵味方ともどれが大将やら指揮者やら見わけのつかぬ大混戦になっていた。
「片倉小十郎は何れにありや」
真田大助は緋おどしの具足にまっ赤な旗差物をつけて入れ代わり、立ち交る騎馬武者の流れの中へ五度び六度びと割って入った。
しかし、誰も彼の前に立ちどまって名乗ろうとする者はない。何れも立ちどまっては飛び道具の餌食になる……と知っている旋風の中の突撃であった。

気がついてみると大助はすでに右の股に負傷している。
むろん自分だけがやられたのではない。こっちもまた三、四人にはひと槍ずつ付けてやった……と、思って見直すと、旋風を捲き立てる伊達勢の殆んどが血を流しているのがわかった。
（今、ひと息だ！）
と、大助は眼を血走らせて小十郎の姿を求めた。
地上に倒れているのは敵か味方か？　次第に落伍するものが殖え、あと二巻もするうちに、精魂尽きたこの戦場の最後が来る……と、思ったときに、敵の真先の一隊が、赤隊の味方二人を右と左に斬っておとして、
「退けーえッ」
と、高く怒号しながら駈け去った。
実はそれが大助のめざす片倉小十郎の引きあげ命令だったのだが、大助はまだ気がつかなかった。
「追えッ。今だ！　敵はひるんだぞ」
敵の退く方向に誉田の村落を認めた時に大助は勝ったと思った。
「お父上！　お父上は……」
「おお、大助どのか。お父上はあれにおわすぞ」
駈け寄って後方の堤を指さす渡辺内蔵助も、左の頬はべっとりと血のりであった。
「内蔵助どの、今じゃ！　追おう」
「心得た！」

しかし、その時幸村の軍配は伏せられた。
引きあげの法螺が今度は真田勢の側から吹かれた。
「ここで退くとは何としたこと!?」
だが、父の眼の方が正確だった。片倉勢は意味なく退いたのではない。
片倉勢危うしと見てとって、伊達勢の手から奥山出羽の精鋭が、これも自慢の騎馬隊をくり出して来た……それを見きわめての引きあげだったのだ。
大助が若し勢いに任せて敵を追っていたら、その奥山隊に退路を断たれて、若い生涯をここで閉じたに違いなかった。
奥山隊の到着寸前、真田勢は誉田の村落の西に向かって整々と退きだした。若江で木村重成が討死してゆく頃であった……

七

後に至ってわかったことながら、この日の片倉隊で、無傷の者は一人もなかった……というのだから、この時の激突がどのようにはげしいものであったかが想像出来よう。
真田方でも大助幸綱はじめ、渡辺内蔵助も、福島正守も、大谷吉久も、みな何ほどかの手傷を受けていた。
いや、それよりも冷静無比の幸村の軍配がなかったら、ここで西軍は壊滅していたかも知れない。
幸村は誉田村の西に兵をおさめると、すぐさま西軍全体の戦況を集めにかかった。

彼が、冬の陣から今までに、最後まで信用出来る戦力……と期待しているのは、実は毛利勝永勢と長曾我部盛親勢ぐらいのものであった。

あとは勇ましすぎたり、感情に走りすぎたり、自我が強すぎてお山の大将でありすぎた。

(ほんとうの戦はむずかしいものだ……)

それだけに幸村もそれに憑かれてしまったのかも知れない。が、戦に憑かれた男だけに彼の計算には狂いがなかった。

八ツ半(午後三時)近くには、もう敵も味方もヘトヘトに疲れて、体力の限界を越えてしまっている。無理もない。

殆んどの軍勢が、夜中の八ツ(午前二時)には行動を起こしていたのだから……

したがって、これからは、誰が、何うして、何のくらいの戦力を明日に残し得るかの問題になってくる。

「さ、戦はこれからだ。ひと先ず休め」

小休止を命じて各口の情報を集めてみると、八尾の長曾我部勢は藤堂勢に手痛い打撃を与えられて、久宝寺に残兵をまとめていることはわかったが、若江口に出ていった木村勢は居所がわからなかった。

わからない筈である。本陣が壊滅してしまっているのだから……

そこへ、生き残った木村宗明の一隊から報告があったとして、大野治長からの使者が駈けつけた。

「——木村長門守は討死。若江口、八尾口ともに敗れてござれば、早々に退却ありたし。これは

秀頼公のご命令でござる」
幸村は、丁重にその使者を帰した。
命令を出すのは容易であったが、無事に引きあげるのには、攻撃以上の策戦がなければならない。
しかし、そうした不満を口にする時はすでに過ぎた。
塙団右衛門、後藤又兵衛、薄田兼相、木村重成と、すでにこの世に居なくなっている。
(あとは残った者で明日を如何に戦うかだ)
使者を帰してやると幸村は諸将を集めて退き口の相談にとりかかった。
「実はまだ、この戦場に全然顔を出さない大敵が一つござる。他でもない松平忠輝の大軍……これは今朝から一戦もしていない筈ゆえ、万が一にも、これに追撃されたのでは一大事、それゆえ、暮れ方までここにとどまって、敵の出方を見ようと存ずるが如何に?」
むろん諸将に反対のあろう筈はなかった。
退くのならば早いがよい。松平忠輝の軍勢は、少くとも一万以上ある筈だった。その新手に追撃戦をやられたのではたまらない。
「では、七ツ半(午後五時)から引きあげにとりかかる。それまで少しでも兵を休ませておくように」
幸村は依然として、おだやかな口調であった。

八

幸村が誉田の森で引きあげの時を待っている間に関東勢から新手の攻撃があったら、おそらく大坂勢はこの日のうちに潰滅していたに違いない。
しかし関東勢は攻めなかった。決して攻める新手の軍勢が無かったわけではない。
前にも記したように、伊達政宗の婿である越後高田の城主松平上総介忠輝の軍勢はまだ無傷で残っている。
しかもその人数は、忠輝の直接指揮している手勢が九千、村上義明の手勢が千八百、それに溝口宣勝の手勢が千……合計一万千八百という上杉謙信以来、健脚で鳴る越後勢が道明寺口の伊達勢のうしろに陣取ったまま動こうとしなかったのだ。
何故であろうか……？
ここにこの日の戦場……というよりも、この大坂の役全体の大きな謎を解く鍵の一つが秘められている。
家康の六男松平上総介忠輝は、冬の陣のおりには江戸の留守居役を命ぜられ、若さを持てあましてジリジリしていた。
それが今度は一万二千に近い軍勢を預けられ、功名心に燃え立って戦場にのぞんでいる。
むろんまだ戦に馴れているとはいいがたく、これが補佐は舅である伊達政宗に命じられていたのだが、その忠輝が、道明寺口の戦場に近い国分の先までやって来て、他の何れの部隊も眼の前で死闘をくり返しているというのに、何故動こうとしなかったのか？

この事について当時の戦記には、当日の模様が次のように書き残されている。
「――東軍五番手の松平忠輝は、朝遅く奈良を出て、途中で開戦の報告をきき急ぎはしたものの、国分を経て片山に着いたのは午後になり、ついに戦機に遅れてしまった。それを残念に思った部将の花井主水（忠輝の異父姉の婿）は、これから直ちに西軍を攻撃したいといったが、玉虫対馬、林平之丞は反対した。忠輝は主水を使者として伊達政宗の許につかわし、政宗に代わって進んで戦いたいと申し入れたが、政宗は忠輝が進むことを許さなかった。
皆川広照（忠輝の傅役）忠輝に謁して、午前中戦った敵は疲れている。これから敵を討てば一刻あまりで敗走させることが出来よう。その敗走する敵を天王寺まで追って大坂へ入れば当然われ等は武功第一、私にその先頭を仰せつけ下されたいと申し出た。しかし、伊達政宗に止められている忠輝はこれを許さなかった……」と。
忠輝が進出を許さなかった理由はこれで明瞭になっている。彼が花井主水を使者として、政宗の許へ遣わしたにもかかわらず、政宗がこれを厳禁しているからだ。
では、何故政宗はわざわざ忠輝をここにとどめて、大切な戦場の勝機を逸させたのであろうか……？
この時政宗が表面では熱心な切支丹旧教の信者を装っていたことはすでに書いた。
そして大坂城内にはたくさんの神父や信者が入城していることも書いた。
いや、それ以上にもう一つ、大切なことは、忠輝が、大坂城を自分に呉れと父にせがんだこと

がある……それを政宗は警戒したのだろうか……？

九

とにかく忠輝は若く猛く、大久保長安や大久保忠隣にいわせると、信長に詰腹切らせられた、「――ご嫡男、信康君と瓜二つ」の猛将的な一面をもっていた。

その忠輝が、一挙に敵を追って大坂に入ってゆくと、天王寺ではとどまらず、そのままわが欲する城内へ猪突してゆきかねない。

そして「――私の占領した城ゆえ、私に下され……」などといい出しては、それでなくとも、秀忠の側近たちに警戒されている忠輝は、思わぬ敵を作ってゆくであろう……政宗は、そう考えて止めたのだといっている。

が、果たしてそうであったのかどうか？

とにかく、このおり片山にとどまり、円明村に泊まって、西軍を追うことを怠った……と、そのことを理由にされて忠輝の生涯は葬り去られることになったのだから、この問題の謎は大きい。

忠輝が花井主水を伊達政宗のもとへ遣わしたおりに、政宗はこういったと、伝えられている。

「――大将というものは、まっ先に出るものではないと、そう申しあげよ。まだ上総介さまは戦場にお馴れなさらぬからご存知ないが戦場の敵は真向かいの敵だけではない。時には背後から味方にやられることもある。わかるか、将軍家ご側近にとっては、上総さまは眩しいお方だ。それ

に大久保忠隣や長安の事件のあとで、上総さまは将軍家にとって代わって、幕政を執ろうという野心を持たれておわす……などと、あらぬ噂を立てられたお方だ。それを真に受けている者が、若し日暮れから夜にかけての戦場で、このドサクサに失い申すが、将軍家のおんため……などと考えたら何とするぞ」

そういわれて戻った花井主水は、これも戦場のことにあまり馴れない能役者あがりの家老なのだ。それに、前から玉虫対馬、林平之丞などが反対しているので、忠輝ははやる心をおさえて、皆川広照の追撃を許さなかったものらしい。

むろんこれだけではまだまだ割り切れない疑問が無数に残る。

というのは、片倉勢と奥山勢をあれほど奮戦させておきながら、伊達政宗はいよいよ真田勢が誉田の森に引きあげると、水野勝成から、

「――今こそ追撃の好機と思うゆえ、一緒に進撃して欲しい」そう申し入れられて、きびしくこれを断っている。

「――わが隊は力戦して、士卒みな疲れてござれば、これ以上戦うことは無理でござる」

水野勝成は、とにかく道明寺口一番手の総大将なのだ。戦っている点では決して四番手の伊達勢におとるものではない。にもかかわらず、彼は追撃戦をきびしくことわって同時に新手の、第五番手、松平忠輝をも動かさせなかったのだ。

いったいこの老雄の肚裏にある作戦は何であったろう……？

逆説すれば、この日西軍の引きあげを助けたのは、まぎれもなく伊達政宗であったといってよい。

真田幸村は、こうしてしばらく誉田の森にとどまって松平忠輝の越後勢動かず……と、見てとると、毛利勝永の銃隊をあとに残して、附近の民家にいっせいに火を放させた。
この火で逆襲と見せかけて、その間隙を縫って引きあげようというのである……

十

いよいよ引き揚げる時に、真田幸村は伊達勢の先頭に向かって、
「――ヤアヤア、百万と号して居りながら、関東勢にはついに一人の男の子も居らぬのか」
大声で見得を切り、それから引き揚げたと伝えられている。
むろんこれは味方の士気を煽るためであったろう。しかしその裏に、幸村だけは、政宗のこの日の肚を見抜いていて、そのうえの啖呵であったとも受け取れる。
（――伊達勢にはもはや、われ等を追う気はない）
そう見きわめなければ幸村ほどの者がこのような見得は切るまい。
或いは政宗の方でも又、後日家康への言いわけのために、片倉小十郎をいちばん強い真田勢に立ち向かわせておいて、もう一日、大坂の運命を見る気であった……のかも知れない。
とにかくこうして五月六日の戦は終わった。
この日秀忠は、前夜藤堂勢の陣取っていた千塚に進み、家康は星田から枚岡にすすんで宿営した。
その千塚と枚岡の宿営に、藤堂高虎は使者を送って、
「――本日の合戦にて死傷多く、おそれながら明日の先鋒は勤めかねると存じまするゆえ、ご遠

慮申し上げまする」
　と、届け出た。
　先鋒は当時の武将にとって最上の名誉なのだから、それを遠慮しなければならなかった藤堂勢の打撃が、如何に大きなものであったか想像出来よう。
　そこで家康は藤堂高虎と井伊直孝には秀忠麾下の先頭を命じ、翌日の岡山口の先鋒は前田利常に変えていった。
　前田利常はこの日大坂道の久宝寺村に至って宿営していたのである。
　茶磨山まで無事に引きあげた真田幸村は、疲労に鞭打ちながら早速軍評定をひらかなければならなかった。
　すでに深夜――
　だが、まだ引き揚げ得た部将の損害の程度はよくわからなかった。
（誰の痛手がどのようなものであったか……）
　自分に続いて引きあげた軍勢の中から、大谷吉久、渡辺内蔵助、伊木遠雄、福島正守などが、次々に幔幕の中へ顔を見せたが、どれもこれもひどく疲れて、考えるよりも先ず眠らせる必要のある顔ばかりであった。
「みな集まったところでお起し申そう。それまでまずひと眠りされるがよい」
　わずかな焚火をかこんで、鼾の声がふくれあがった。毛利勝永とその子の勝栄がやって来た。吉田好是、木村宗明、篠原忠照、石川貞矩、浅井長房、竹田永翁とあとにつづいて、これ等もまた鼾の声に加わった。

山川賢信が大野治房を迎えにゆき、治房が根来の僧兵三十名あまりに前後をまもられてやって来ると、幸村ははじめて、眠っている人々を起して戦評定を開いた。

評定……といっても終日戦って来た人々には殆んど意見らしい意見はなかった。

彼等は、すでに今日の戦で敗れてしまったと思い込んでいる。敵方にはまだ無数の新手が残っているが、味方にはもはや新手はない。

（これでは戦になりそうもない……）

そう思うと、幸村ははげしい声で、まだ眠っている伜の大助幸綱を呼び立てた。

十一

「大助、これへ参れッ」

幸村の何時にないはげしい声を聞いて、幸綱よりも列座の諸将が姿勢を正した。

「これは寝すぎました。ご免下され」

あわてて起きて来る前髪立ちの大助に、

「坐れッ！」

幸村はもう一度はげしい声で叱咤した。

一座は一瞬シーンと静まり、夜気はきびしく引き緊められた。

「よいか、父の申すこと、骨に刻んで違背はならぬぞ」

「は……」

大助はびっくりしたように眼をこすり、それからあわてて父の前に両手をつかえた。

「こなたは、夜の明け次第、ここを立ち退きご城内に入るのだ……とだけではわかるまい。よいか。この父が討死する日は明日と決まった。それゆえこなたは城内に引きあげて、上様のお側に参らねば相成らぬ」

いわせも果てず、大助は身をふるわして叫んだ。

「それはなりませぬ！」

「なに、父の命に従えぬと申すのか」

「他のことならばとにかく、父上が討死のお覚悟……と、あっては、大助、絶対にお側を去るわけには参りませぬ」

「ほう、それは、又、何故であろうの？」

「いわいでものこと！　明日の決戦には信濃より出陣の、われ等の従兄弟ども、真田信吉兄弟が、われ等に挑んで来るに違いござりませぬ。そのおりに、お父上のそばにこの大助の死骸が無い……となったら何といわれましょうや。大助めは心おくれ、父を見捨てて城内へ逃げこんだ……父を見捨てた臆病者……と笑われまする。他のことならばとにかく、これだけは……他の者に仰せつけ下さるよう、この通り……この通りでござりまする」

語尾が泣き声になったのは、冷然と見おろしている幸村の表情に、何の感動も現われて来ないからであった。

「理由はそれだけか」

「それ以上の理由がどこにありましょう。大助は……九度山をおりる時から、お父上と一緒に死ぬ気で来ています」

「たわけ者！」
　どうやら幸村は大助を一喝しているのではなく、列座の諸将の胸に巣喰う敗北感を吹き払おうとしているものらしい。
「この戦、勝敗を考えての戦ではない。生死を超えて男の意地を貫く戦と、かねがね申し聞かせてあるであろうが」
「それは、しかし……」
「大楠公は湊川に赴くおり、わが子正行を伴ったか。伴いはせなんだ筈じゃ。そなたは小楠公にまさる年齢になっていながら、ここの道理がわからぬのか。そなたを上様のお側に帰すは、生き残れと申しているのではない。父と子とは一心同体。われは戦場で、こなたはお側で二人分の働きを尽し、父ともども義を貫けと申しているのじゃ。上様ご最期のこともあらば潔く殉死するがよい。父の厳命！　違背はならぬぞ」
　大助は顔をゆがめて泣き出したが、しかし列座の諸将の眼は、これで爛々と生色をとりもどした。

　空には星は見えなかったが、雨も降らない。
　幸村は、ゆっくりと諸将の方へ向き直った。

十二

「さて明日の戦場でござるが……」
　幸村が軍扇を膝に立てて言いだした時には、みんなの視線はまだ大助と幸村の上に半々におか

れていた。

大助の打ちしおれた姿から、わが身の位置をハッキリと見つけ出しておかなければならなかったのだ……

(そうか、今度の戦も、いよいよ明日をもって幕を閉ずるか……)

死所を選ばなければならないのは、大助父子だけではなくて、実はこの場に居合わす、すべての人々に課せられた運命だったのだ……

「改めて申し上げるまでもなく、雌雄を決するはこの天王寺附近となりましょう。冬の陣のおりは籠城という手もござったが、今度びは総濠を埋め尽されてそれも無い……」

幸村は、そこで微かに笑った。淡々とした死に対する心のゆとりを、ハッキリとみなに甦らせようとしての笑いであった。

「仰せの通り、こんどはきれいさっぱりでござるて」

と、毛利勝永も笑いに応じた。

「されば、城中の諸将にはみな出て戦うて貰わねばならなくなりましょうなあ真田どの」

幸村は頷いた。

「城中の諸将もみなこの茶磨山から天王寺附近に出て貰うて、ここに東軍を誘致する。相手が無うては決戦もなりかねるからの」

「ハハ……ごもっともでござる」

「そして、別に一隊を船場におき、正面に相対した総勢の合戦最中に、ひそかに下寺町を経て、この茶磨山の南の方に迂回させる」

「なるほど。これはよい!」
毛利勝永は、さすがに合槌の打ち方が巧みであった。彼もすでに幸村の胸中は察しすぎるほどに察しているからであった。
「すると迂回して来た一手は、ここで敵の背後に斬り込む。このあたりが家康の本陣になろうというお見込みでござるな」
「仰せの通り、ここが勝敗の決するところと成りましょう。と申すは、本日引きあげの途中の散見ながら、このあたり一帯の沼地、深田、池、壕などの近くにはそれぞれ目印の紙片をつけた竹竿がさりげなく立ててござった。家康の指図によって、何者かがひそかに地勢を調べまわったものと見える。用心深い敵ゆえ名残りなく戦いたいものでござる」
「ほう、そのような目印まで、立ててござりましたか」
「さすがに家康、油断のない戦上手で」
「ハハ……それをうかがって気力が出まいた。その家康の首、明日は誰の手に落つるか」
気がつくと涙をおさめた大助幸綱は、この時そっと立って末座へ坐り直していた。
「さて、そこで配備の人数割りでござるが」
幸村が、図面のわきに到着帳をおいたところで大助は声をかけた。
「お父上!　大助は城内へ参りまする」
「おう、わかったか、そなたの役目が」
「はいッ。大助は決して死に急ぎは致しませぬ」
「ほう……」

「上様が生きておわす間は、大助、必ずお側にあって、お父上と二人分、きびしくご奉公致しまする」
「それが頼みたかったのだ。そうか……」
はじめて幸村の眼に光るものが感じられた。
幸村はしかし、声も曇らせなかったし、落涙を見せるようなこともなかった。
「上様には、或いは城を出でさせられて、陣頭に立とうと遊ばされることがあるやも知れぬ」
静かな声でそう言って、チラリと治長の方を見やった。
「しかし、相成るべくは、それはお止めせねばなるまい。何故かわかるであろう」
「は……はい。乱戦の中に死屍をさらせるは恐れ多いゆえ……」
「如何にも。それゆえ、そなたはお側を離れては相成らぬ。しかも尚お上様が出でて戦おうと、仰せられて止まぬ時には、そうだ……警護役の奥原信十郎に相談するがよい」
「信十郎豊政どのに」
「あのご仁はご年輩ゆえ、おそらくそのおりの判断に誤りはござるまい。そして、奥原信十郎が意見に上様がお従い申す場合は、こなたも無条件でこれに従い、生死何れへなりとも、謹しんでお供申し上げねばならぬ」
「相わかってござりまする」
「他に言うことはない。呉々も父の子であることを忘れぬよう……では、往かっしゃるがよい」
一座の中には何時か鼻をすする者が殖え、誰も立って出てゆく大助に声をかけ得る者はなかった。

大助が出てゆくと、幸村は磊落に笑った。
「さ、これで未熟者は片付きました。では人数割を仕ろう」
矢立から筆を抜いて、
「茶磨山――」
と先ず認めてから、みんなの顔を見渡した。
「この茶磨山にはそれがしが陣取りたいと存じますがご異存は？」
「そうなくてはなりますまい。お願い申す」
毛利勝永がすかさず応じた。
「真田どのに茶磨山、それがしはこの天王寺の南門に備えたいと存ずるが如何？」
むろんこれにも異論のあろう筈はなく、幸村はもうさらさらと茶磨山へ自分と共に備える者の名を書き加えている。
茶磨山――
真田幸村、大谷吉久、渡辺内蔵助、伊木遠雄、福島正守、同正鎮。
そう書いてそのまま筆を添えて勝永の手に渡した。
勝永は、それをチラリとわが子勝栄に見せてから「――天王寺南門毛利勝永」としるし、その前面にわが子勝栄の名と、浅井長房、竹田永翁と二老臣の名をおき、更に、左右に、吉田好是、篠原忠照、石川貞矩、木村宗明と、一々その人の承認を眼顔でもとめながら記入していった。
表面はどこまでも淡々とした磊落さを装ってはいるものの、

（これが最後の戦か……）
そうした感慨は、誰の胸にも言い知れぬ重みでのしかかっている。自分の名の所在を確めたあとでは、大抵が大きく嘆息した。
長岡興秋、槇島重利、江原高次の諸将は天王寺と一心寺の間にある石華表の南に陣を敷くことになり、毛利隊の東前方に大野治長の銃隊を伏せ、後方の毘沙門池の南には治長の本隊と後藤、薄田、井上、木村、山本等の残兵がおかれることになった。
舎弟の大野治房は、言うまでもなく左方岡山口の総大将である。

家康の旗

一

大坂方の諸将が、茶磨山で最後の軍議を重ねているおりに、家康は、星田から枚岡にすすめた陣中で、思いがけない訪客を迎えて、しばらくこれと密談していた。
正直なところこの日の家康はあまり機嫌がよくなかった。
戦となると、彼の全神経はふしぎな躍動を開始する。
戦国時代を生きぬいた男の血潮が暴々しく甦り、全身これ触角と言った別人になって来るのである。
その触角にふれて来る六日の戦は、まことに歯痒ゆいものであった。

むろん負ける筈のない戦であり、そのような重厚さを持たせた陣立てだった。
ところが、その「負けることのない戦――」
という自信によりかかって、事毎に歯痒ゆい裏目を出した。
どうせ勝つ戦なのだからという安心のせいであろう。殆んどが全力を出していない。
「――誰も彼も、われ等父子への義理だけ果せばよいとしている」
戦とはそのような生やさしいものではない。ひとつ間違うと取り返しのつかない敗北につながるものだ。
六日の戦闘でよく戦ったと褒め得るものは水野勝成と井伊直孝ぐらいのもので、藤堂高虎にせよ、伊達政宗にせよみな歯痒ゆい限りであった。
(今日中に、大坂城へ追い込める戦をわざわざ攻め足のろくして、明日に延してしまっている)
今日と明日との一日の差は、兵数千の生命にかかわる大事なのだ……と、何故わからぬものであろうか!?
今日城内に追い込んでおけば明日の朝は、
「――戦は終わった。投降せよ」
と、一挙に終戦へ持ち込める。
あの総濠のない城で籠城は出来ないと、一兵の末に至るまで理解していることだからだ。
ところが、それを討ち洩らして帰してしまった。
そうなれば当然彼等は天王寺から岡山の線に陣地を構えて待ち受けることになる。
しかも味方は勝つと決めての義理の戦。敵は今生の名残りにと、勢いこんだ決死の反噬。犠牲

の数は計り知れないことになろう。

伊達勢の進撃拒否につづいて、藤堂高虎からも明日の先鋒はご辞退申しあげたいと言って来た。今日の負傷が多くて第一陣は勤まらぬというのだ。

そこで早速家康は、明日の先陣を前田利常に命じてやったのだが、

「――このようなことでは戦にならぬぞ」

枚岡へ連れて来て同宿している義直や頼宣にまで、けわしい表情で怒気を見せていた。

それが、思いがけない僧衣の客の来訪から、次第に表情を和らげて、時おり笑声がもれだした。

客は天王寺のすぐそばにある一心寺の住職の本誉存牟で、存牟は明日の戦を避けて高野山へ落ちてゆく途中だと言った。

そう言えば、存牟は墨染の旅姿で、どこかの雲水と言った目立たぬ身なりであった。

「気の毒なことになったの。うっかりするとこなたの寺も焼かねばならぬやも知れぬ」

家康が床几に腰をおろしてそう言うと、存牟は数珠を頂につけて、

「それについて、実はお耳に入れておきたいことがござりまする」

と、あたりをはばかる顔になった。

二

一心寺の存牟上人と家康は怨親平等、倶会一処の既知の間柄である。

冬の陣に、家康が本陣をおいた茶磨山とこの坂松山一心寺とは隣あっている関係で、存牟は時

おり陣中に訪ねて仏を語り、茶を語った。

いや、それより前に家康がまだ大坂城の西の丸にいた頃、慶長五年の二月に、この寺へ嬰児のままみまかった男子ひとりを葬ってある仲なのだ。

その嬰児の名は仙千代。高岳院華窓林陽大童子……その葬儀の導師をつとめた浄土宗の存牟なのだ。

「私は、また、あのあたりが戦場になると存じ、丘のあちこちに目印の小竿を立てさせておきました。それにご注意あるよう、出陣の衆にお申し渡し下されとう存じます」

「それはかたじけない」

「紙片に○印のあるものはぬかるみでございまする。それから△印は小池、何もないのが行きどまりとご承知下さるよう」

「それはかたじけない。直次、控えておいて知らせてやれ」

家康は側にいた安藤直次にそういってから、

「今宵のうちに彼等はあのあたりを固めにかかっているであろうな」

「それについてゼヒともお耳に入れ申さねばならぬことが……」

「何ぞ、大事なことを耳になされてか」

「はい。茶磨山へは真田左衛門佐が陣取りまする」

「そうであろうな」

「真田の郎党衆が申していたこと。ここに陣取ってあれば、大御所さまか将軍家か、必ず一人は討ち取れよう。それを冥土の土産にしようぞと……いや、不吉なことを申し上げて恐れ入ります

る」
「ハハ……何の不吉なことがあるものか。戦は首の取り合いじゃ。向こうで取らねばこっちで取る」
「それにもう一つ、明日は、真田左衛門佐が八人戦場に現われまする」
「なに八人……」
「はい。赤ぞなえの緋おどし八領に鹿の抱角を打たせた兜八個。それに紅鞦をかけました白馬八頭、用意は出来た……と、洩して居りましたそうで」
「なるほどのう」
「真田幸村八人が、神出鬼没、どの隊にも現われて督戦する。敵の混乱、眼に見えるようだと」
「かたじけない。いや、そのくらいの事はするであろうと、家康もかねがね思うて居った。すると、まことの幸村は茶磨山か」
「はい。それも全員討死の覚悟と見え、番僧どもにひどく優しかったとござりまする」
「そうか。僧侶にやさしい兵はこわい。よくぞ知らせてくれた。かたじけない。それから上人に、われ等の方からも頼みおきたい事がある」
「何でござりましょう」
「明日の戦、たぶん寺の近辺は敵味方の屍の山になってゆこう。怨親平等、倶会一処、こなたに戦場掃除と供養の儀を頼みおきたい」
「それは仰せまでもなく、われ等の勤めでござりますれば」
「直次、金子を持て。供養料をな。そして、上人を高野口まで誰ぞに送らせてやるがよい」

家康は、その頃から次第に機嫌がよくなった。

三

一心寺の存牟は、また寺域が戦場になると知って、寺宝を安全な場所に移し、自身は高野山へ難を避ける途中だったのだ。

いや、難を避ける……ということにしないと、途中の通行が出来なかったかも知れない。

「そうか、真田左衛門佐が八人で働くか」

存牟が出てゆくと、家康は呟き返した。

「敵方には、一人で八人分働こうとしている者があるのに、味方には一人で、一人分働くまいとしている者が多い」

そういってから安藤直次に向かって、

「どうだ直次、前田は一人前に働きそうか」

直次は答えられなかった。

「思うままをいってみよ」

「しかし……」

「しかし、どうしたのだ？」

「そのようなことは、お口になさるべきではない……かと存じますが」

「ほう、なぜだな？」

「真田幸村が八人あらわれる……ということは、必ず味方の陣営を引っ掻きまわして見せる

ぞ……ということになりましょう……」
「それはそうだの」
「さすれば、必ずこの八人は、関東勢の中に裏切った者が出た……といいふらしたいところで」
「なるほど」
「そういいふらして動揺させ得る名前となると、誰々でござりましょう？　先ず、伊達、そして、前田、浅野などの名ではないかと心得ます。それゆえ、前田利常も闘志満々……とお考えき遊ばされるのが宜しかろうと存じまする」
家康はフフンと笑って、すぐに次のことをいい出した。
「直次、忠輝と忠直を呼んで来い！」
しかし、すぐ又それを訂正した。
「そうだ忠輝はよい。忠輝には、そちの言葉によれば信じなければならぬ伊達が付いている。忠直だけを呼んで来い」
「越前さまを……かしこまりました」
「外様や旗本だけを働かせて、肉親をかばった……と、思われては、この戦の瑕瑾になろう。孫の忠直に重い荷を背負わせてくれようぞ」
直次はかしこまってすぐさま使者の小栗又一を忠直の陣にやった。
忠直がやって来たのはそれから小半刻してからだったが、家康は忠直を見ると浴びせかけるような一喝をくれた。
「越前、そちは今日の戦いに昼寝をして居ったのかッ」

「は……？」
「そなたの父は、戦場で昼寝はせぬ男であったぞ。たわけ者め」
若い忠直は、はじめ呆然としていたが、やがてその言葉の意味をさとってまっ赤になった。
「では……では、明日の戦、この忠直に先陣を仰せつけ下されまするか」
「ならぬ！」
「ならぬ……」
「そうじゃ。先陣に昼寝をされては勝てる戦が負けになる」
「すると、先陣は？」
「前田利常と決まった。そなたを呼んだは今日の怠慢を叱りおくためじゃ。退れッ」
「はッ」
散々であった。一度まっ赤になった秀康の子の忠直はこんどはまっ蒼になり、ワナワナと唇辺の肉をふるわしながら出ていった。

四

一言も返せぬ権力者の祖父に、昼寝をしていたのかと叱られて退らせられたのだ。越前の松平忠直がそのまま済ます筈はない……と、実は家康の方がよく知っている。
「大御所さま、すこし、手きびしすぎはしませぬか」
「何が……？」
と、家康はそらとぼけた。

「越前さまはまだ若うござりまする。必ず老臣が押しかえしに参りましょう。先陣を、前田と取り替えてくれるようにと」

家康は、それには答えず、

「直次、大炊を呼んでくれ。利勝を」

「かしこまりました。しかし、お呼びにならずとも、もう向うから推して参る頃かと存じますが」

「そうか。そちもそう思うか」

「はい。まだ、将軍家が岡山と茶磨山と、何れへ向うかハッキリと致して居りませぬ。必ずお打ち合わせに来られましょう」

「フン、そちも仲々局面がよく見えるようになったの」

「恐れ入ります」

「よい。では葛根湯を一杯持てと言え」

「は……？」

「孫ばかり叱れぬ。わしも明日は生命を捨てる気で戦う。力をつけておかねばならぬ」

「ハハ……」

と、直次は笑った。

「まさか大御所さまが、そのお齢で」

「黙らっしゃい！」

「はッ」

「わしはもう以前のわしではない。将軍家は別におわす……討死してもよい隠居じゃ。いやその覚悟がわしに無いゆえ全軍の惰気が払えぬ。戦とはおそろしいものよ。鏡以上に大将の覚悟を写してゆくものだ」

その時には、まだ安藤直次には、家康の言葉の意味がわからなかった。

（今日、誰も追い討ちをかけなかったことで、ひどく機嫌をそこねておわす……）

ただそう思っただけであったが、やがて彼の想像どおり、忠直の許から越前の家老、本多富正がやって来ると、家康が何を考えているのかが、おぼろげながらわかって来た。

本多富正はこれも血相を変えていた。癇癪持ちでは父におとらぬ忠直が、昼寝をしていたのかと叱られて、その忿懣を老臣に叩きつけたのに違いない。

「実は、本日わが君の前進をお止め申したのはそれがしにござりまする。それを大御所さまは、昼寝とお叱りなされたそうで」

「叱ったがわるいと言うのか」

「いいえ、ひどくそれをお嘆きなされて、明日の先陣、ゼヒともわれ等に……と、お願いに参上しました。明日をおいてはこの恥をそそぐ日はない。万一先陣を仰付けられぬ時は、高野山へ隠退すると申しまする」

「そうか。では隠退させよ。先陣は前田と決まったからの」

「それでは、あまり……」

「黙らっしゃい！」

家康は一喝しておいて、それから床几を立ちあがった。

「その方たちが付いていて、この家康が覚悟を見抜けぬのか。家康はな、孫ばかり叱るような怠け者ではないぞ。明日の戦で祖父が討死したと聞いたら、忠直は高野山へ止って回向せよと……そう申せッ」

五

そこへ槍奉行の大久保彦左衛門が、秀忠の許からやって来た土井利勝を伴って入って来たので、本多富正は口をつぐんだ。

口はつぐんだが、富正も、この家康の一言にはギョッとしたようであった。

「ではそれがしは、仰せのおもむきわが君に取次ぎまする、ご免」

そう言ったあと、チラリと眼顔で安藤直次に合図を送った。

直次は心得て幔幕の外へ出た。

今夜も空は黒い。内も外も蒸し暑く、あたりは蛙の声でいっぱいだった。

「安藤どの、大変なご見幕で気骨が折れようの」

「お互いでござるよ。だが手きびしい！」

「いや、これで覚悟は決まった。われ等は命令にそむいてぬけ駆けつかまつる。むろんわが君一人は殺せぬゆえ、われ等もおん供仕る。あとにはご舎弟もあることゆえ、よろしくおとりなしの程頼み入る」

直次はこれでよいのだ……と、秘かに思った。さすがに忠直の老臣だけのことはある。

「したが本多どの、先駆してても相手によっては考課のほどは違いましょうぞ」

「仰せまでもないこと。越前忠直卿のお相手は、真田左衛門佐のほかにはござらぬ」
「よかろう」
「では、あとのことは呉々も。ご免」
直次は富正の蹄の音が消えてゆくまで闇の中に立っていた。
（これでほんとうの戦らしくなって来た……）
それは、切なく張りつめた実感以上の実感であった。
（たしかに、戦は片手間で出来ることではなかった……）
そして、再び幔幕の中へ引っ返して来ると、ここでも土井利勝が、声高に叱りつけられているところであった。
「その方、将軍家のお側にありながら、それで補佐の役がつとまると思うてかッ」
床几をきしませて家康が言うのに、
「他のこととは違いまする」
土井利勝もそのまま負けてはいなかった。
「齢七十をお越しなされた父君を、真田の前に立たせて、ご自身は岡山に赴かれる……それで大御所さまのお身に万一のこともあらば、将軍家のご孝道が立ちませぬ。大御所さまは何と仰せられました。これからの世は人倫第一、将軍家は聖人になられよと……」
「たわけめ！　それは常時のことじゃ。ここは戦場だぞ」
「しかし、何と仰せられても、その儀はご勘考願わねばなりませぬ。敵がなに人かわからぬうちならばとにかく、茶磨山には真田、岡山には大野治房……と、相わかって居りまする。いったい

真田勢と大野勢と何れが強敵とおぼし召すや。齢を重ねた父君を強敵の前にさらしたのでは向後、将軍家のご威信が保てませぬ。それゆえ、大御所さまにはまげて岡山に向わせられまするよう……利勝、この通りお願い申し上げまする」

「ならぬ」

「これほどまでに、お願い申し上げても」

「ならぬ」

家康はにべもなく息を継いで、

「さてさて大炊はもう少しましな者かと思うていたが、困ったものよのう直次」

語尾と視線をそのまま直次に移して来た。

六

安藤直次には、もう事態はのみこめていた。

どうやら土井利勝は、明日の戦に将軍秀忠が茶磨山へ赴くゆえ、家康は岡山へ出てくれるように……と、いって来たものらしい。

将軍として当然な申し出であろう。岡山へは大野治房があり、天王寺から茶磨山へは真田幸村と毛利勝永が布陣している。

そもそも茶磨山も岡山も、幅二十丁ほどの同じ丘陵にある高地であったが、攻める道は平野から左右にわかれて違ってくる。いや、いちばん右が平野川に添って岡山に通じ、もう一本は奈良街道から天王寺に通じている。

その更に左に紀州街道があって、これを進んでくるのは伊達政宗と松平忠輝、溝口、村上などの越後勢であった。むろん和歌山の浅野長晟もこの道をすすんで来るだろう。
したがって茶磨山から天王寺に通じている奈良街道は三本の道の中央にあたり、敵の主力と真正面からぶつかり合う位置であった。
「直次、大炊に説明してやるがよい。何故、わしが茶磨山へ赴かねばならぬかを」
家康は、投げ出すようにいって、また葛根湯をすすりだした。
直次は、やむなく利勝に向き直って首を振ってみせた。いい出したら聞く相手ではない……という眼くばせを先ずしておいて、
「大炊どの、大御所さまはまだまだご元気でいらせられる。将軍家が、お案じなされておわすほどお疲れではござりませぬ」
と、謎のようなことをいい出した。
「それはようわかってござる。が、それでは孝道が立たぬと申して居られるのだ」
「大炊頭どの、世の中に大切なものは、孝道だけ……孝道が最上のものでござろうか」
「何といわれる？　孝は百行の基、お身はそれを軽んじてもよいといわっしゃるか」
「さにあらず……」
直次は頭を振って、チラリと大久保彦左衛門を見やり、
「笑うな彦左」
と、たしなめてから、さて仰々しい顔になった。
「孝は大切ながらそれが最上のものではない。その証拠に、大義親を滅す……という言葉もあ

る」
「な、なんだと!?」
「大御所さまはご隠居のお身、将軍家はそのあとをお継ぎなされて、これから立派に世を治めてゆかねばならぬご当代さまじゃ。さすれば大きな眼で見て、天下のためには何れのお躰をいとうが大切か……」
「黙られよッ」
「まあまあ、お聞き下され。大御所さまが、並みのお方ならば、将軍家のそのお言葉を、涙を流してお喜びなさろう。それを怒っておわす……なるほどこれは、一段も二段も高いご心境……老いの身は捨ててもよいが、将軍家は天下万民のためにかけ替えのないお方……そう思召されてのお言葉と思うたがどうであろう」
　すると、隣の彦左衛門が、口を押えて噴きだした。
「こりゃおかしい！　フッフッフそうではないぞ大炊どの、大御所さまはな、戦場の手柄で、まだまだ将軍家などに負けたくないのじゃ、我儘じゃ。その我儘には負けてやるのが孝行じゃ。そういわねば、将軍家がおさまるものか。フッフッフ」
　家康は苦い顔をしてわきを向いた。

七

「なるほど」
　彦左衛門忠教のあけすけな言葉を聞くと土井利勝ははじめて唸った。

唸ると同時に安藤直次の言葉も素直に胸にとおるから妙であった。
（そうか。大御所は、将軍家のお身に万一のことがあってはならぬと思うておわすのか）
みぞおちのあたりがジーンと熱くしびれかけたときに、彦左衛門がまたいった。
「大御所さまはな、真田左衛門佐と智恵比べ、腕くらべがしてみとうてたまらぬのじゃ。この忠教が耳にしたところでは、左衛門佐、明日は、影武者十数騎を用意して八面六臂の働きをするそうな。大御所さまもそれに負けず、四人から六人の家康公をお出しなされてご奮戦。そのお覚悟でおわす楽しみを、将軍家に横取りされてなるものか。チト将軍家にご遠慮なさるよう申し上ぐるがよいわ」
「フーム」
「さもないと、また安藤が先刻のようなこじつけの理屈を申すぞ。物事はの、あまりくどく持ってまわらず、あっさりとするものじゃ」
「平助！」
たまりかねて家康が口を出した。
「大炊はもうわかったわ。口を慎しめ」
「はッ」
「よいか。これで決まったぞ大炊。平野までは将軍家がご先頭なさることは申すまでもない。平野より将軍家は岡山よりにお進みなされ。われ等は茶磨山をめざしてすすむ。警戒すべきは、布陣分明の敵ではなくて、何れに動くかわからぬ遊軍の存在じゃ」
土井利勝は、もう抗弁しなかった。

「心得ました。では、仰せの通りに」
「それがよい。そして、明日の号令は一切将軍家のもとより出すこと。これをしかと言上しておくように」
「号令一切は将軍家から……」
「そうじゃ。家康は亡きものと思え。その方が申すように、何分にも年齢じゃ。馬上でウーンと呻いてそれぎりになるやも知れぬ。そのようなものに采配を任せてあっては万一の際、収拾出来ぬ混乱が起ころう。それからも一つ」
「は……」
「味方諸隊へつかわす伝令使に、こういわせよ。本日……つまり明日のことじゃ。本日は、義直と頼宣に合戦を教示しようとする戦ゆえ、やたらに開戦しては相成らぬ。馬を一、二丁後方におき、槍をとって徐々に敵に向かうがよいと」
「馬を後方におき、徒歩で槍をかまえまするので」
「その方が水も洩らさぬ戦になる。あせって駈け散らすと却って怪我が大きくなる。相わかったか」
「なるほど、あせって駈け散らすと、どこの陣に乱入するかわからなくなりまするなあ」
「死にもの狂いの、狂い獅子が出て来る戦じゃ。いつも冷たく相手から眼をそらすな。そして、さて最後の一手じゃ」
「最後の一手……まだ、ござりまするか？」
「念には念を。将軍家のお名で改めて城中へ最後の使者を送れ。いうまでもなく降伏をすすめる

使者じゃ」
「この期に至って……」
「それが戦の礼だと思え。くれぐれも家康は無き者と……よし、帰れ！」

八

　土井利勝が帰ってゆくと、家康は本多正重を呼んで、もう一度敵方の宿営の状態を探っておくように命じて、それから義直と頼宣を就寝させた。
　この時尾張義直は数え年十六歳、後の紀伊頼宣（頼将）に至ってはまだ十四歳であった。両人とも、明日はいよいよ戦を教えてやるぞと言われ、緊張しきって枚岡の民家の一室へ引き取った。
　間もなく本多正重が戻って来て、
「味方の陣でただ一人、寝もやらず動いている者がござりまする」
と、報告した。すでに四ツ半（午後十一時）近かった。
「越前の忠直であろう。捨ておけ」
と、家康は言った。
「忠直も義直、頼宣も、みな明日は力の限り戦わせてみてやろう。誰が討死しても嘆くでないぞ」
　この時にも大久保彦左衛門はニヤニヤした。
（嘆くでない……というのは、こっちの言うことだ）

口に出しては言わなかったが、家康の肚はわかりきっている。
「平助！」
「何でござりまする」
「気になる奴だ。何彼と申せばニヤニヤして、その方も、もう寝てよいぞ」
「そうはなりませぬ。大御所より先に寝た……となっては明日の手柄にひびが入る。眠っていたゆえ、あたりまえのことだとなりまする」
「口の減らぬ男だ。では夜通し起きているがよいわ」
「大御所さま、まだ一つ大切なことをお忘れではござりませぬか。なあ安藤……」
と、彦左衛門はまた揶揄するような口調で言った。この男は一族の大久保忠隣が罰されてから、眼に見えて皮肉笑いを見せるようになっている。
内心にあふれている不満を、わざと隠そうとしないのだ。
「忘れていること……」
「そうだ。いちばん大切なことで」
「何だ大久保？」
「他でもない。大御所さまお覚悟のほどがわかれば、当然訊いておかねばならぬことだ。それをおぬしも訊き洩らしているわ」
「ほう……何であろうな？」
するとと彦左衛門はフフフッと又含み笑いをしたあとで、
「大御所さま討死遊ばされた時は、首級は何れへ、ご遺骸は何れへ……と、まだ伺うてはあるま

いが」
家康の眼が張りさけそうに見開かれて彦左衛門にそそがれた。
さすがの安藤直次も、息をのんだ。
「いや、ほんものの大御所さまだけではない。駿河から連れて来ている百姓竹右衛門以下の大御所さまが、討死したり傷ついたりしたおりには、どこへ運んで、どのような手当をするか。戦場掃除のことまで心の行き届く上様に、そのような手ぬかりがあっては笑いもの、そうでござりましょうが大御所さま」
家康はすぐに答えが出なかったらしい。唇辺の肉がぶるぶると震え、舌がもつれたかに見えたが、やがて言った。
「そうだ。家康どもが討死の場合には誰れ彼れなしに、焼け残っている堺の寺へ担ぎこめ」
そう言いすててそのまま寝所へ入っていった。

五月七日

一

ついに五月七日の朝となった。
いや、朝というよりまだ夜中であったが、越前の松平忠直勢は、殆んど夜どおし動いて水野勝成、本多忠政などの宿営地をかけぬけ、堀直寄の前方まで出ていって、天王寺と一心寺の、敵の

陣営の見えるところまで来て止っていた。

将軍秀忠もまた陣営で夜明けの待てる男ではない。丑の刻（午前二時）には千塚を出発し、夜のほのぼの明けに前日の戦場若江、八尾をくわしく巡察しながら、各隊に伝令を飛ばして陣備えの順序を知らせた。

家康は恰度その頃まで、ぐっすりと眠って枚岡の陣屋を出た。片山、道明寺の戦場をひとわたりまわって、これは巳の刻（午前十時）までに平野へ出る予定だ。

この日の平野から前面の陣地は禄高一万石ごとに正面一間（一・八メートル）の割当てで、同志討ちを避けるための暗号は、

「――采か山か？」と問いかけると、

「――采！」と、答えることになっている。

岡山口の先鋒を命ぜられた前田隊は兵数約一万五千。家老の山崎閑斎、奥村河内、本多正重等が先導をなして久宝寺の陣を発し、岡山の前面まですすむと、直ちに陣を張って後続の到着を待った。

その前田勢の右には本多康俊と康紀、遠藤康隆の諸隊が並び、左には片桐且元、同貞隆、宮木豊盛の諸勢が並んだ。

片桐且元が、こんども又第一線へ出て来ている心は哀しい。万一にも秀頼が出て来たおり、これを他人に渡したくないのに違いない。

こうして右翼の先鋒と並んで左翼のまっ先に出て来ているのは、何と真田信吉の一隊だった。これが、越前の松平忠直勢より、斜め前方の右手最先頭に出てしまっている。

言うまでもなく、これも義理と意地との進撃に違いない。真田信吉は言うまでもなく幸村の兄の子であり、その母は本多忠勝の娘である。冬の陣のおりには十五歳だから、この時尾張義直と同年の十六歳。それが頼宣と同年の十四歳の弟内記と連れ立って出て来ているのだ。

こんども又、叔父の幸村はわれ等の手で討ち取ろうという悲壮な覚悟に違いない。

その真田信吉の左に忠勝の二男の本多忠朝、浅野長重、秋田実季の順で並び、それより少しさがって、松平忠直と並んでいるのが左から諏訪忠澄、榊原康勝、保科正光、小笠原秀政の各隊だった。

そして、そのうしろに続いているのが、本多忠政の二千である。大和口の指揮をとった水野勝成は、手勢はわずか六百だったのが、今までの戦でかなり痛手を蒙っているので、この時は本多忠政勢の前衛と言った形で合流してしまっていた。

そして、更に左のもう一本の紀州街道……ここには伊達勢が、片倉小十郎の先頭隊と、政宗の本隊が二つにわかれて居り、更にその後方に溝口宣勝、村上義明の越後勢をおき、四段の最後に松平忠輝の九千が続いていた。

松平忠輝だけが、どうしてこうも後方におかれるのか？　むろんそれは伊達政宗の考慮によるのだが、それには何れゆっくり触れるとして、こうして関東勢の体勢が整ったときが巳の刻（午前十時）。

家康も秀忠も平野に着いて、いよいよ合戦の火蓋は切られることになった。

二

この日の戦で家康が最も警戒したのは流言飛語であった。しかし敵はここを死所と思いさだめた人々で、士気兵力では関東勢が圧倒的にすぐれている。
では味方にまさっている。
この人々が、戦いながら「――何々どの裏切り」の噂を流すと、動揺は避けがたい。いまだに豊家に心を寄せる大名もある筈……と、心の底で互いに思い込んでいるからであった。
家康は、平野へ着くと改めて、わが子義直と頼宣を招いて戦の心得を申し渡した。
弟の頼宣は、この時遠江中将と呼ばれていたが気性は兄の義直以上にはげしく、ともすれば陣頭に躍り出て戦いそうな危惧があった。
「中将は決して進みすぎないこと。進みすぎると敵の遊軍に側面を衝かれて、味方寸断のおそれがある。つねに行列の中央にあって、八方に心を配りながら進むこと」
そして、義直には全く違ったことを言った。
「宰相どのは、こんどの戦いで、じっくりと部下の者の働きを見ておくこと。どのような時に、人間はどのような形相になるものかを、しっかりと確めておかれるがよい」
家康のこの教訓を義直がどのように実践してあったかは、尾州記録の中に次のように記されていることでよくわかる。
「――(前略)今度味方崩れの時に、源敬公(義直)ご覧ありしに、踏みこたえたる者は、みな黒眼上へ付きたりとぞ。又御旗色も乱れしに尾崎内蔵介、左右田与平下知して立ち直りける。こ

の時与平が眼は四ツもあるように、顔中みな眼のように見えたりしと、後に源敬公お話しありし。かく騒乱の節に、少しもお心動かされず、人々の眼のいろまで見留め給いしこと、いずれも感心したりける……（後略）」

こうして、家康は二人の子供にそれぞれ注意を与え、昼食をしたためて天王寺口の茶磨山に向って兵をすすめた。

義直には成瀬正成が付き、頼宣には直次が付いていたことは言うまでもない。

この日の家康は柿かたびらに山駕籠姿で、馬は曳かせてあったが乗ってはいなかった。

駕籠わきにはお使番の小栗又一忠政、旗奉行の保坂金右衛門、槍奉行の大久保彦左衛門忠教。それに、永井直勝、板倉重昌、本多正信、植村家政などの参謀が馬で従っていた。

こうしてそろそろ正午……と、おぼえた頃に、前方で銃声がわき起った。

まっ先に駈け出していた越前の忠直勢が、茶磨山にひるがえる真田の赤旗めがけて攻撃を開始したのだ。

越前の先制攻撃は言うまでもなく命令を待たない「——抜駆け」である。

若い忠直は、家康に昼寝していたかと言われて激怒している。

「——敗れたら高野山入りじゃ」

あっさりと割り切って、全軍に食事を済ませてあったのだ。

「——よいか。われわれはいま食事をすませた。腹は充分にふくれているゆえ、死んだとて餓鬼道におちることはあるまい。さ、安心して直ちに閻魔の庁へ行こうぞ」

この時、越前勢と敵との距離は約十丁、銃声におどろいて、右先方にあった本多忠朝勢が、こ

れもすぐさま前進を開始した。

「越前勢におくれを取っては先鋒隊の恥辱になる。おくれを取るなッ！」

三

家康が忠直を叱ったのは言うまでもなく激励の意味であった。しかし、それにしてもこの薬は少し利きすぎたようである。

この時の越前勢の猛進ぶりが、如何にはげしいものであったかは、当時の民謡に残っているので想像される。

かかれ、かかれの越前勢
たんだ掛れの越前勢
命知らずのつま黒の旗……

若い忠直がまっ先に立って声をからしているさまが眼に見えるようだ。

と、言うのは、越前勢と真田勢の距離は約十丁ほどだったが、その間には小さな池や窪地などがあり、その小丘と小丘の間には、実は、毛利勝永の四千の兵が伏されてあったのだ。

この毛利勢の伏勢に、まっ先にぶつかったのは、越前勢におくれまいとして、動きだした本多忠朝の銃隊で、両者の激突に越前勢がからんでいった。

「――まだ早い！　われ等の狙っているのは越前勢ではなくて、そのあとから進んで来る家康の

本隊なのだ」

　この思いがけない開戦を顔いろを変えて止めようとしたのは真田幸村だった。

　その意味では忠直の若い無謀の怒りが、老巧な真田幸村の作戦を、根底からゆさぶり立てる結果になった。

（こんな無謀な戦があるものか……）

　と言ってみても何うなることでもなかった。腹はふくれているゆえ、餓鬼道におちいることはない。さあ、真っすぐに閻魔の庁へ行けというのだから、手がつけられない。

「掛れッ！　掛れッ！」

　忠直の怒号の下で、本多忠朝勢はバタバタと倒れてゆく。

　いや、その本多勢と越前勢が一つになって次々に毛利勢の銃前に立ちふさがり屍を越えて突撃を続けるのだ。

　そうなると、伏勢は四千。越前勢と本多勢を合わせると二万を超える数になる。

　むろん、忠朝指揮下の真田信吉兄弟も動きだしたし、浅野長重、秋田実季、松平重綱、植村泰勝などの人数も競い立って動きだした。

　このおりの毛利勝永の銃隊の働きぶりは古今に絶するほど巧妙なものであったが、しかし、それでも数から来る制約はまぬがれがたい。

「掛れッ！　掛れッ！」

　生命知らずのつま黒の旗は、退く気などみじんもない。全滅させない限り、この敵の出足はさえぎり得ない。

そうなると、どんなに好まぬ敵でも相手にせずにはいられない破目になる。真田幸村はついに軍配をあげてこれに立ち向かった。

幸村にしては、言いようもなく残念だったに違いない。幸村が床几を起つと、同じ装束の八人の幸村が八方に飛んだ。

毛利勢はこの時すでに伏兵戦から逆襲戦に転じている。

彼等は本多勢を中央に引き入れて、左右からこれを挟撃しだしている。

真田兄弟が退きだした。

と、その時になって、ふしぎな流言が飛びだした。

「浅野長晟勢が、寝返ったぞ！」

その流言は、言うまでもなく幸村の影武者が放ってまわったものに違いない……

四

この日激戦の渦の中で、関東勢を混乱させるため、最も効果のある流言は、浅野勢の寝返りか、前田勢の寝返りであった。

まさかに徳川方の親藩や譜代の者が反乱をおこす筈はない。と、すれば、浅野家も前田家も、豊家とは特別の関係にあり、家康や秀忠の旗本には、心ひそかにこの両勢を警戒する空気があったかも知れない。

しかしこの日の、この時点では、

「——浅野長晟の寝返り！」

が、その位置からいって最上のものであった。
浅野勢は、関東方の最左翼にあたる紀州街道を、伊達政宗や松平忠輝の軍勢よりも少し遅れて進んで来た。
ところが前方に銃声がしだしたのだ。
浅野長晟は当然のこととして、
(若しも決戦に間に合わなんだら……?)
という危惧を抱いた。
そこで、彼等は伊達や松平勢の脇を一気に駈けぬけ、まっしぐらに今宮村から生玉、松屋口の方向に出ようとした。
その瞬間を狙って流言は放されたのだ。
「——見よ！　浅野勢は寝返って、大坂城めざして進みだしたぞ」
「——それはまことか、間違いないか」
「——何の間違いがあろうぞ。見よ、あの勢を」
この流言が与えた影響は大きかった。何れも全神経を右手の敵に向けている時に、左手の背後から浅野勢に襲われたのでは、ひとたまりもなく潰走しなければならなくなる。
先ず越前勢が動揺し、続いて、小笠原、諏訪、榊原、秋田、浅野(長重)、水野と体型を崩しだした。
しかもそれと殆んど時を同じくして、船場に陣取り、関東勢の側面から斬りこむ手筈の明石守重の一隊が狼火をあげて進撃を開始した。

このあたりの駆け引きは、真田幸村が前々から考えぬいていた奇襲の手筈に違いない。
そうなると浮足立った関東勢には、遊軍の明石勢の進撃が浅野勢の反乱と区別のつかないものに見えて来る。
「――油断するなッ。浅野勢が裏切ったぞ」
「――退き口を考えよ」
ただその中で、越前の大将忠直だけは声をからして怒号している。
「掛れッ！　退くなッ。臆病者めが、掛れッ！」
こうした混乱を戦い馴れた大坂方の毛利勝永が見落とす筈はなかった。
「――今だ。一挙に秀忠の本陣を衝けっ」
苦戦している本多忠朝勢の中を突っ切って、そのまま将軍秀忠の先備、前田利常勢のまん前へ出て来てしまったのだ。
前田勢の前衛の位置には本多康紀と片桐且元が控えていたのだが、これは見事に不意を衝かれた形になった。
と、その岡山の前方にあった大野治長、治房勢が、これまた七手組の面々を従え、斉射をあびせて猛進撃を開始した。
正午まではまだ悠々としていた戦場は、一瞬にして眼もあてられぬ砲煙と叫喚の坩堝に変わった。
「退くなッ……退いてはならぬぞ。将軍家と大御所の御前なるぞ！」
すでに双方の旗本たちもこの流言の渦巻にまき込まれかけて、その間を、飛び歩く赤装束の真

田勢と、白装束の毛利勢とが、手のつけられぬ羅刹のように眼立ちだした。

家康は正午にはまだ天王寺の前面までは到達していなかった。若しこれが、進みすぎていたら、まっ先に彼の本営が乱戦の中心になってしまっていたであろう。

おそらく本多忠朝や小笠原秀政は、その家康の本営を突かせまいとして死守の覚悟を決めたのに違いない。

五

大坂方の大野治長、治房が行動を開始した時には本多忠朝はすでに全身に二十余ヵ所の傷を負っていた。しかし一歩も退かずに毛利勢の槍ぶすまの前に立ちふさがって奮戦し、小溝につまずいてのめったところを毛利勢の槍隊の一人に突き伏せられて戦死した。

小笠原秀政父子も同じであった。

保科正貞と共に、毛利勢の竹田永翁の隊を破り、天王寺を左に見て進みだしたところで大野勢の先鋒と出あった。そして、それを必死であしらっているところへ、更に別の毛利勢が勝ちに乗じて押し寄せて来たのにあって、先ず父の小笠原秀政が重傷を負い、更に伜の忠脩は斬死した。

忠脩はこの時、父に代わって松本城の守備を命じられていたのだが、命にそむいて戦場に駈けつけて来た事がわかり、やがて軍令違反で罰されるものと思って斬死したといわれている。父はその夜息を引きとった。

とにかく緒戦ではあざやかに大坂方の作戦勝ちであった。

家康は次第に旗本の諸勢が前線へ出向いて身辺の、手うすになるのを感じながら、しかし前進

はやめなかった。
何時か義直、頼宣の両勢とも離れてしまい、左右にあるのは小栗又一と永井直勝だけになっている。
そして、皮肉なことに、彼のぴたりとついてしまっている前方の隊は孫の忠直が進め進めと怒号し続けている越前勢の後尾であった。
おそらく家康が前進を止めなかったのは、秀忠の命が無かったからであろう。
「――今日の戦の一切の命令は将軍が発するように」
そう命じた命令を、粛然と守ろうとする老将の胸中には無限の感慨があったに違いない。
飛弾は山駕籠をつらぬき、附き添っていた乗馬の姿もあたりに見えない。
時たま砲煙の間から真田勢とわかる赤装束の騎馬が眼先をかすめ、死は手の届く距離にあって明滅している。
若しこの時、自慢の大金扇の旗印が近くにあったら家康は何といったであろうか。
「――馬印をかくせ」
と、いっていたかも知れない。ところが、その自慢の大金扇は、今日は秀忠に譲ってあった。
そして、どこまでも彼は関東の隠居として戦場にのぞんでいるのである。
すでに戦死者の数は殖えるばかり……家康は少しはなれた槙の根元に、自分の弁当箱が落ちたまま、誰かに踏みつぶされているのを見ると、苦笑して小栗又一を呼んだ。
「見苦しい。拾うて鞍に結いつけておけ」
その頃大金扇の馬印を渡されて岡山口へ向かっている秀忠はどのような戦をしていたであろう

か……？
秀忠が天王寺口の銃声を聞いて開戦の命令を出した時は正午であった。
秀忠はそれまで、あまり急いで進まぬようにという家康の注意を守って、しばらく戦況を見るつもりだったのだ……

六

もしも勝ちに乗じた毛利勢が前方へ姿を見せなかったら、将軍秀忠はもうしばらく開戦を延ばしていたかも知れない。
というのは恰度昼食の時刻にあたり、戦に馴れない幼い弟たちが、父のうしろで弁当を開いているころ……と、察せられたからであった。
ところが毛利勢の逸走が、有無をいわさず開戦させるきっかけになってしまった。
それにしても、いささか油断を衝かれた感はまぬがれ得ない。
前田勢の先鋒本多正重の隊は、急いで東方よりに進み、書院番頭の猛将青山忠俊、大番頭阿部正次、大番組高木正次の順ですすんで毛利勢に応戦したが、その時更に岡山口から大野治房、道犬兄弟の軍勢が、真一文字に秀忠の本陣めざして進撃を開始して来たので、戦場はあっという間に敵味方を判別しがたいほどの大混戦になってしまった。
阿部正次は縦横に馬を駆って味方を叱撻してまわった。
「――同志討ちをするなッ。味方は長途をやって来ているので色が黒いぞ！　陽焼けしている色の黒いが味方なるぞ！」

駆けまわりながら秀忠の本陣の方を見やると、本陣のすぐ左前方にあった藤堂高虎勢と井伊直孝勢は、何と！　天王寺側の味方が破られたと見てとって、その方向へ進撃を開始しているではないか……

（これでは将軍家の御本陣が裸になる……）

「退くなッ。進め！　何のこれしきの敵に」

　槍をふるって周囲の敵を見わけては突き、突いては見わけている間に、ぐんぐんと敵の流れは秀忠の旗下近くに殺到する。

（いったい土井勢や酒井忠世勢は何をしているのか!?）

　ところが、酒井勢も土井勢もすすみ過ぎて、敵に背後にまわられたらしい。戦場で背後にまわられた兵ほど弱いものはない。

　土井利勝の軍勢はよほど狼狽したと見えて、越前勢が「かかれ、かかれの越前勢――」と、その勇ましさを謳われているのに、遁げぶりを謳われることになってしまった。

　すべてはほんの数十歩の間隔差であったが、その間に、大野治房と道犬兄弟、それに木村宗明、内藤長宗等の軍勢をなだれ込ましてしまったための手違いであった。

　崩れて逃げて来る酒井と土井両勢の前へ、この時、槍をひっさげて駆けつけた黒糸おどしの二騎がある。

　黒田長政と加藤嘉明の両将であった。

「御前ぞ！　恥を知れッ。返せッ」

　すでに数十歩のところに秀忠がいると知って両将は槍をふるって、退却してくる味方を追いか

けだした。無謀というよりも、浮足立った味方を喰いとめる方法はこれより他にないと知っている両老将の非常手段。
進むも槍、退くも槍……となれば、味方に刺されるよりは敵に向かう心になる。
こうなると秀忠自身もじっとしている筈はなかった。
「よしッ、続け！」
いきなり馬に一鞭くれたのを、安藤彦四郎があわてて馬に飛びついた。
「なりませぬ。なりませぬ！　なりませぬ」
同時に両脇の小姓たちは、いっせいに抜刀して敵の中へ飛びこんだ。

七

秀忠の前備えにこのような空隙が出来ようなどとは誰も思っていなかった。
しかし、最も有力な井伊直孝と藤堂高虎の二部隊は、本多忠朝勢と小笠原勢の崩れを見て、
「——すわこそ大御所の一大事！」
と、左方へ進路を変えてしまっている。
こうなれば秀忠の危急を救うものは馬廻りの者よりほかにない。
いや、戦い馴れた黒田長政と加藤嘉明の両将が近くにいなかったら、その馬廻りもあっという間に混乱の渦の中に没し去ったに違いない。安藤彦四郎が、秀忠のくつわに飛びついた時は、まさに危機一髪。
「来るかッ！」

両脇を固めていた小姓たちは裸体の肌に具足をつけた荒々しい姿で近づく敵の中へ割って入った。
それ等はいうまでもなく一瞬の流動で、気がついた時にはもう秀忠の馬前にある武者はただ一人になっている。安藤彦四郎まで、秀忠が馬を控えた瞬間に敵の中へ躍りこんでしまっていたのだ。
「誰かッ」
手綱をしぼって秀忠がたずねた。
「ご安堵なされ。柳生又右衛門」
その声が終わらぬうちに、一人の敵が槍を構えてのめるように突きかかった。
サッと又右衛門の太刀が一閃。相手は二間柄の槍と兜を真ッ向うから断ち割られて馬の足許にのめって来た。
と、続いて、又一人が肩をおとして矢のように突きかかる。
又右衛門の口から裂帛の気合いがもれ、パッと薄陽に血虹が立った。
「上様！　馬を」
「おう」
三人目と四人目は、斜線をなして殆んど同時に突きかかった。
が、それも穂尖を秀忠の馬腹には届かせ得なかった。一本の槍が宙にからめあげられたと思った時には、一人は肩を、一人は脚を断たれていた。
柳生又右衛門宗矩が生涯ではじめて揮う殺人剣。それは、凄まじいというよりも氷のような冷

たさを持った的確無比の妙技であった。
四人斬っておとされると、さすがの敵の猪突の足も止まった。
誘いもしなければ気負いもしない。両脚をぐっと開いて、太刀はつねに右斜めに切ッ尖を下げている。
秀忠は、はじめてホッとした。
ホッとすると同時に、味方が見えだした。
「誰ぞある。前田の本隊がまだ動かぬぞ。早々に出て戦えと申して来いッ」
「はッ」
と、答えたのはこれも殺到する敵を斬りおとして一息いれに戻った安藤彦四郎であった。
彦四郎は直次の長男である。この時二十九歳。隆々たる裸体に汗を光らせて、羅漢像を見るような逞ましさであった。
「――見て参られよ」
と、又右衛門が口を添えた。
「あとは又右衛門が引き受け申す」
その声の終わらぬうちに彦四郎の馬は、一声高くいないて前面の敵の中へ躍り込んだ。
まだ馬廻りに人はない。
油照りの空の下に立ちはだかって残った主従二人……乱闘の中の一瞬の静であった。

八

「又右衛門、あせってはならぬものだな」
秀忠が声をかけた時は、敵の輪がかなりの空地を作っていた。
「御意。すでに潮は引きかけました」
「そうか。潮か……潮時を見誤ってはならぬのだ。何事も」
この時柳生宗矩は秀忠の馬前で七人を斬っておとしたと伝えられている。しかし、これはどこまでも秀忠の見ていた数であって、又右衛門宗矩の述懐ではない。宗矩は、自分が人を殺傷したことを、武道の名誉にかけて恥じているので口外したことはなかった。
こうした戦場で、旗下に斬り込まれるというようなことは、不覚も不覚。あってはならないことだと思っているのだから口外する筈はない。
そう言えばこの時前田の本陣に駈け出していった安藤彦四郎重能は、そのまま帰って来なかった。
彼が駈けつけた時に、前衛隊を出している前田勢は、まだこの切迫に気がつかず、昼食の最中だった。
そして急き立てる彦四郎を嘲笑うような調子で、
「――折角ながら昼食中なれば、今暫く」
と他人ごとのような挨拶だった。
彦四郎は激昂した。そして、自分のあとに従って来ていた荒小姓たちを引きつれて、そのま

ま、まっしぐらに大野勢の側面へ斬り込んだ。
むろん斬死である。
死体だけ辛うじて持って帰った家の子どもが、
「——若の死体は如何致しましょうや」
父の直次の許に駈けつけてそう言うと、
「——犬に喰わせろッ」
そう答えたまま、見向きもせずに頼宣の軍勢を指揮していたという。
しかしそれは後のこと——
柳生又右衛門が潮が引きかけたと呟いたときに、秀忠の馬印を持っていた旗奉行の三村昌吉が、何を思ったのか行きどまりの小さな池に向って走り出した。
秀忠はおどろいて、
「昌吉め、人も居らぬあのようなところで、何をする気であろうか」
思わず宗矩をふり返ったが、その時にはもう宗矩が答える必要はなくなっていた。
馬印を池のみぎわに突っ立てると三村昌吉は大声で喚きだした。
「見苦しいぞ。上様はこれにおわす。この馬印の下に返せッ！」
それは不思議な戦場の知恵であった。
前面に池があるので敵は来れない。敵の来れないところへ集まれというのだから浮足立って、敵に背を向けていた人々がホッとしてその下に集まりだした。
「上様も、いざ」

間髪を入れず、柳生宗矩はくつわをとった。
そして馬印のもとへ着いたところへ、土井利勝がまっ蒼に眼を引きつらせて戻って来た。
「昌吉も味な知恵を出し居ったぞ」
その時には、秀忠の周囲は血と汗に濡れた味方の人数でひしひしと固め直されていた。
しかし、その人数の中に、再び姿を見せなかったのは安藤彦四郎だけではなかった。成瀬正武、篠田為七などの荒小姓たちは、みんな半裸のまま敵の中で斬死して、この思いがけない危機脱出の人柱になっていたのだ……

九

まことに五月七日の一戦は、家康の生涯を飾る最後の戦としては出来のわるい戦であった。岡山口に向かった秀忠も九死に一生を得た感があったが、家康の旗下も三度び斬り崩されて危機に追いこまれた。
この混乱の原因はやはり、東西両者の心構えの相違から来ていたといってよい。
一方は、みな今日を最後の心意気なのに、一方はそれぞれ泰平の世の大名として、複雑な計算が胸にあったからであろう。
それに毛利勝永の戦上手と、真田幸村の神経戦があざやかに功を奏したせいもあった。
それにしても、家康の旗下までが無人になろうとは……
その日の激戦ぶりが「細川家記」には次のように記されている。
「――こちらより、ひたもの無理に戦をかけ候ところ（越前勢の仕掛けに続いて）一戦におよ

多数(たあま)これあるにつき御勝ちに成る……」

たしかにそれは圧倒的な人数の勝利で、戦上手の勝利とはいいがたいものがあった。

この日家康の本陣の側面を突こうとして船場(せんば)にあった明石(あかし)勢の遊撃が成功していたら、恐らく家康か、秀忠か、何(いず)れか一人は討死していたに違いない。明石勢は越前勢の一部は撃破したものの、水野勝成の隊にさえぎられて、ついに目的を達し得なかった。

したがって家康の旗下を三度びも無人にしたのは他(ほか)ならぬ真田勢であり、更(さら)に、これに家康を討つ機会を与えなかったのは全員斬死の覚悟をもって、

「——かかれッ！　かかれッ！」

と怒号しつづけた越前忠直の若々しい激闘ぶりであったといえる。

家康は最初に身辺に人影の薄くなったとき、内藤主馬(しゅめ)を呼んで、

「——尾張家は敵の茶磨山に出で候え。又、遠江中将(とおとうみ)もそれに続けと申し伝えよ」

そう命じたので、近くにあった本多正信はびっくりして問い返した。

「まだ戦いなれぬお二方を大乱戦の中へは……」

いいかけると、家康ははげしい眼をして叱りつけた。

「何をいうぞ。早く参り合わさなんだら戦が終わる。戦が終わったのでは教えようが無いわ」

それは、七十四歳の老人の顔では無くて、齢(よわい)を忘れた猛将の、自信にみちた嘯(うそぶ)きだった。

(負けるなどとは、みじんも思うておわさぬのだ)

それから暫(しばら)くして家康は又北見長五郎を呼んで尾張勢の進出を催促(さいそく)させた。

「何とした事じゃ。隼人正（成瀬正成）の腰ぬけめは、何をまごまごしているのだ。腰がぬけたかとそう申せ！」

顔をゆがめて怒鳴りつけた。

時が時だけに北見長五郎は、尾張勢の本陣へ駈けつけて、家康のいったままに伝えた。

すると、成瀬正成がまた大声をあげて怒鳴り返した。

「なに、腰抜けだと!?　フン、この隼人正を腰抜けといわるる大御所も、甲斐の信玄に出会ったときは腰が抜けたわ」

このとき正成は義直に昼食を摂らせている最中だったのだ。

十

十六歳の尾張義直はびっくりして箸をおき、それからみんなに進撃を命じた。むろん監督は成瀬正成がしたのだが、昼食を中途でやめて乱戦に加わった義直が、味方の危く崩れ立つとき、左右田与平の眼は、四つもあるように見えたなどといっているのだから、その性格の沈着さがわかるであろう。

義直の弟、頼宣はこれと逆であった。

この方には安藤直次が付いていたのだが、あまり気負って乱戦の渦の中へ駈け込もうとするので、

「――早まってはなりませぬ。まだ殿はお若い。手柄は何時でも樹てられまする」

そういって馬を引きとめようとすると、

「――たわけめ！　十四歳の時が二度あると思うのか」
叱りつけて敵に立ち向かった。気性は兄よりぐっと激しい。
戦を教えるつもりの義直や頼宣までこのような危機にさらされたのだからその激戦のさまは想像出来よう。
おそらく家康は、両児の到着を待って、悠々と力攻めにしてみせる計画だったのに違いない。そこで幅二十丁の台地に横いっぱいの布陣をさせて、大坂城まで、粛然と押し切ろうとして進んだところに僅かな無理が感じられる。
人には人それぞれの気性があり、闘志や功名心や、各自の立ち場の差異がある。
そして孫の越前忠直を励まそうとして叱ったのがききすぎた。
そういえば、関東勢の中で、この日猪突して、却って戦列をみだす結果になったものは、越前の忠直をはじめとし、小笠原父子にせよ、本多忠朝にせよ、みな前日の戦いでは、あまり手柄を立てる機会のなかった人々である。
一時にせよ家康の本陣が潰乱したことについて「薩藩旧記」におさめられている書状には次のように書かれている。
「――五月七日に、大御所さまのご陣へ、真田左衛門佐、しかかり候て、ご陣衆追いちらし討取り申し候。ご陣衆三里ほどずつ逃げ候衆は皆々生きのこられ候。三度目に真田も討死にて候。真田日本一の兵、いにしえよりの物語にもこれ無きよし、惣別これのみ申すことに候」
この潰乱状態の時、いったん流れの渦に巻き込まれた大久保彦左衛門が戻ってみると、家康のそばには、たった一人小栗又一が馬に乗って残っていただけだった。

そこで彦左衛門は、あわてて家康の旗を立てたと書き残しているのだから、七十四歳の家康が、この時、又もや、死に直面させられたことはいうまでもあるまい。

家康が連れて来ている影武者はこの騒ぎの間に消えてしまい、その遺族は、戦後それぞれ手当てをされている。どこで討死したのか誰に討ち取られたのか、肝腎の真田勢が、殆んどすべて……といってよいほど斬死してしまっているので、知りようはない。

或いは斬死した真田の郎党の中に、家康を討ち取った！　そう思い込んで死んでいった者があったかも知れない。

このギリギリの危機は、あわてて秀忠の左前方から駈けつけた井伊、藤堂の両勢によって立ち直り、いよいよ五月七日は運命の八ツ半（午後三時）どきを迎えることになった……

十一

大坂方の真田幸村にとっても、この日の開戦が会心のもので無かったことはすでに記した。

彼は、もっと近々と家康を茶磨山の近くに引きつけておいて戦闘開始の軍配をあげるつもりだったのだ。

そうすれば、船場に待っていた明石勢と狼火で打ち合わせ、幸村は前面から、明石守重は家康の背後を衝いて、その本陣を挾撃出来る。挾撃すれば七分の勝ち味という計算だったのだ。

おそらくこの作戦が成功していたら、この日の戦況は大きく一転していたに違いない。

如何に采配はすべて秀忠に任せて出陣してあったとはいえ、家康が討たれたとなれば関東勢の受ける打撃は決して小さなものではない。

幸村の計算では、それこそが、今日の合戦の戦い甲斐であり、勝敗とわが運命の岐路であったのだ。

彼は人の世に戦や争いは絶えないものという見方を少しも変えていない。

その見方に従えば、家康が討たれた瞬間に、関東勢の内部には、人間そのものの本能に従って、はげしい分裂と結合の繰り返しが開始されるという計算があった。

そうなると真ッ先に戦列から離れるのは伊達政宗であろう。続いて前田利常、浅野長晟など、家康の泰平保持という、息づまるような屈服の新秩序にあきたらない……いい変えれば、幸村と同じ自由を求める人間の分裂と保身の動きがはじまる。

秀忠の危機を救った黒田長政にせよ加藤嘉明にせよ、片桐且元にせよ、みな解き放たれた奔馬に一変するに違いない。

その分裂のキッカケを作ってやるのが今日の戦に賭けた彼の作戦のすべてであったのだ。

ところが、それはその開戦の最初に小さな崩れを見せた。

越前の松平勢が、理性を蹴散らして攻撃態勢に入って来ると、おくれてなるものかと、本多忠朝勢がうごきだし、小笠原勢が発砲しだして、否応なく毛利勢の発進を促してしまったのだ。

(――これはいけない！)

と、幸村は、すぐさま伝令を毛利勝永のもとへ飛ばした。

「――まだ早い！　すぐさま銃撃をやめるように」

されば敵も攻撃を手控えようし、その間に家康は、彼の狙っている最良の挟撃地点へすすんで来る。

その時狼火で明石勢に合図をして、それから一挙に本陣を覆滅し去る作戦だった。

むろん彼も士気を鼓舞するために、

「――今日こそ死のうぞ！」

とは、いってあったが、その死を賭けた戦の実相を忘れている筈はなかった。戦には勝敗一転の尽きせぬ変化がかくされている。それが無ければ始めから手を引く方が賢明なのだ。

ところが、毛利勝永は、そこまで深く幸村の心を読んではいなかった。両者の違いはそこにあった。彼は、ほんとうに、俠気と意地のために玉砕する気になっている。

（どうせ死ぬのだ。一泡吹かせて！）

その二人の差が、ついに毛利勢を踏みとどまらせず、一挙に応戦、そのまま進撃させてしまう結果になってしまった……

十二

（緒戦の勝利は勝利ではない！）

これでは無計算な斬死に終わろうものを……

幸村にとっては眼の前がまっ暗になるほど大きな衝撃であったであろう。

が、いったん動きだした毛利勢はもはや、どう引き止めようもない、文字どおり騎虎の勢いで戦場の鬼になってしまっている。

そうなれば幸村の方で、この変化に応じてやるより他になかった。

そこへ松平忠直の、毛利勢以上に無計算な尖兵が襲いかかって来たのである。
この時、越前勢と茶磨山の真田勢との距離は十丁あまりであったことはすでに書いた。
その十丁の間で両者の激突が始まるまでに、幸村は、わが身の目的も執着も、きれいに捨てなければならなかったのだから苦しかったろう。
文字に書くと「臨機応変——」の四文字にすぎない。しかし、その中には、幾千万人の生命と運命がむごたらしく賭かっている。
真田幸村は、直ちに浅野勢裏切りの流言を飛ばして、激撃から進撃に転じさせた。
いかに目的に齟齬した開戦であっても、次善の好機は的確に掴まなければならない。
昼食はすでに取らせてあったしあと自分をのぞいて七騎の影武者たちに、誰は何の方面に出没せよという命も伝えてあった。
伜大助の叔父にあたる大谷吉久。たびたび自分を九度山へ誘い出しにおとずれた正栄尼の子渡辺内蔵助。それに、冬の陣のおりに、真田丸へ軍監として乗りこんで来ていた伊木遠雄。それ等が参謀で、九度山以来の郎党はいうまでもなく、いま幸村の指揮下にある者は、どれを取っても戦うために生まれたかのような俊秀ぞろいであった。
家康の陣は？　と見ると、
「——かかれッ！　かかれ！」
と絶叫している越前忠直の本陣のうしろに続いている。
「——昌栄、昌栄坊はおらぬか」
幸村の声に応じて、これも緋おどしの具足をつけた兜武者が現われた。

以前に僧衣姿で駿府の様子を探りにいっていた忍者の一人が、今日はひとかどの大将といった身なりで出て来たのだ。

「――あれを見よ、あれが家康の本陣じゃ」

「――しかと見まいた」

「――すぐ前方を固めているのは本多正純」

「――その右は松平定綱の旗のようで」

「――いかにもそうじゃ。本多と松平、あの邪魔石二つをとり除け」

「心得まいた!」

昌栄と呼ばれた武者は、身ぶるいしてわが馬に駈けよると、

「――行くぞオ」

野太い声で槍をあげた。と、彼の手勢であろう、バラバラと十六、七騎の騎馬武者が、槍をそろえて彼をとり巻いた。

とり巻いた時には、これが矢のように本多正純と松平定綱両隊のわずかな隙間へ向けて突進を始めている。

援護の筒音がはじめて茶磨山にとどろいて、これが真田勢開戦の最初の動きになった。

進撃開始と見てとって、先ず本多勢が鬨の声をあげ、続いて松平勢も邀撃の姿勢に変わった。

そのまっただ中へ、真田の尖兵はわき目もふらずに進んでゆく……

十三

真田の尖兵の発進は、どこまでも正攻法のように見えた。
本多正純勢と松平定綱勢をとり除けば、家康攻撃の二枚のウロコはとり剝がれて、それだけ家康の本陣へ庖丁は立てやすくなる道理であった。
したがってこの尖兵こそ決死の挺身隊……と、敵も味方も思い込んだ。
ところが、この一隊は両勢の間をさして大きな抵抗も受けずに駈けぬけると、そのまま馬首を越前勢の横腹めざして向け変えた。
すると、幸村が邪魔石二つとり除けといったのは何の意味であったろう……？
越前勢の攻撃を牽制するだけの目的ならば、もっと別の攻め方がある筈なのに……？
と、思ったときに、尖兵たちの動きは更に意表を衝いた。
ふり返って応戦する越前勢と、ほんの四、五度び槍を合わせたかと思うと、くるりともう一度反転してもと来た道を引き返しだしたのだ。
越前勢は手ごわいと見て、やはり本多正純勢を攻める気になったのだろうか？
その時には本多勢と松平定綱勢は、双方から寄り合って帰りの道をふさいでいた。
その中へ再び駈け込んだのだから、こんどは前ほど楽々と通れるわけはない。
双方の槍と馬とがはげしい渦をまき立てて雄叫びの声が一気に闘魂を盛り上げる……かに見えた。
と、又しても真田の尖兵は、馬首をめぐらし、こんどは越前勢の手薄な場所を、風のように紀

州街道の方向へ消えていってしまったのだ……

それは前後せいぜい四、五分間のまことに奇怪な動きであったが、実は、奇怪な動きはこうして尖兵の消えてしまった後に起こった。

他でもない。この二十騎に足りない真田の尖兵を討ち取ろうとして、双方から寄り合った本多正純勢と松平定綱勢の間に、はげしい同志討ちが始まってしまったのだ。

それぞれの守備幅が決められて、可成り入りくんだ戦場ではあったが、しかし真昼間同志討ちをしなければならないほどまだ混戦にはなっていない。

いったい何のために、こうした間違いが起こったのか？

その事については、後日に至っても誰もハッキリとした言明は避けたが、風聞では、この時両者の間には真田勢の置いて逃げた一つの櫃があり、両勢はそれを奪りあったのだといわれている。

ところが、真田の尖兵は何れも騎乗で、櫃など誰も持って来ている筈はなかった。

実はそれは彼等が落として行った文箱の奪り合いだったというのが真相らしい。

むろんそれは、如何にも各自が内応しあっているかのごとく錯覚させる偽書が入れられてあったのに違いない……と思うがそれも想像の域を出ない。

とにかく、両勢は、他勢の守備区域に立ち入るなとおめき叫んで、はげしい同志討ちをはじめてしまった……

と、その時茶磨山の幸村の軍配は挙げられた。すでに、左翼で越前勢とのこぜりあいが始まってはいたものの、幸村自身の率いる旗下勢が疾風のように、味方同志で争っている本多、松平両

勢の脇を駆けぬけ、家康の本営へ襲いかかっていったのはこの時だった……

十四

家康の旗下は不意を衝かれて崩れ立った。あらゆる混乱は、この時に起こったのだが、崩れることは家康を討死させることになる。
そこで、各人臨機の才覚で、八方へ向けて走りだした。
薩藩旧記に載せられた手紙の、
「――ご陣衆、三里がほどずつ逃げ候衆は皆生きのこられ候」
は、この時の狼狽ぶりを述べたもので、みながみな逃げたのではないことは言うまでもない。みなが逃げたのであれば、真田幸村は楽々と家康の首級を挙げ得た筈だからである。
家康の弁当箱まで投げだして、身辺には御使番の小栗又一ただ一人……というような危機にはなったが、しかし、幸村ほどの者も、家康に躍りかかってゆく余裕はなかった。
逃げた者もあったが、大方は、狂ったように真田勢へ向って来ているのだ。
その大混乱の中へ駈けつけたのが、秀忠の左翼にあった井伊勢と藤堂勢であった。
「――大御所の一大事!」
彼等は、真田勢の来襲を知ると、秀忠の存在を忘れてしまった。いや、秀忠の先手には前田勢があり、本多康紀、片桐且元なども居るので、この方へ大野治房の猛攻があろうなどとは思っても見ず、そのまま真田勢の中へ突進していった。
この両勢の到着が八半刻（十五分）も遅れていたら勝敗はとにかく、家康は戦場で落命するこ

とになったに違いない。

「――大坂衆、手柄なかなか申すに及ばず候。さりながら今度の御勝にまかり成り候は、大御所さま御運つよきにて、御勝にまかり成り候」

同じ薩藩旧記の一節にあるこの「御運つよき――」の一語はまさにその通りであったと言ってよい。そして、この家康の「御運つよき――」を裏返すと、それはそのまま幸村の不運につながることになる。

幸村はまさに家康の咽喉笛へ刀の切ッ尖をあてようとするところで、井伊勢と藤堂勢にしりぞけられなければならなかった。

彼はいったん兵を茶磨山に引いた。

そして、その時、伜の大助に、秀頼の出馬を乞わせたという異説もあるが、この時にはもう大助は城内へ入っていたのだから側にはいない。

おそらく幸村は、井伊、藤堂の新手の来襲を予期していなかったのに違いない。

と、すれば幸村も家康の肝を奪う奇襲は敢行したものの、井伊、藤堂の両勢に、奇襲を受ける結果になった……

いや、奇襲と言えば、越前勢の猪突がすでにケタはずれの奇襲だったのだから、この戦場は最も整然とした力攻めを企図しながら、それと全く違った狂瀾怒濤の戦場になったものと言える。

いったん引きあげた幸村は、

「――かかれ！　かかれ！」

と、喚きつづける越前勢に、少なからず神経を痛めながら、再び家康の本陣へ斬りこんだ。

「――真田勢の名誉にかけて、一人たりとも生き残るなッ！」
その武者ぶりは猛勇をもって鳴る薩摩人の眼にも「いにしえの物語にもこれ無き――」ほどのものに見えたのだから、果敢をきわめたものであった。

十五

いったん新手の出現によって好機をのがすと、もはや真田勢は家康のそば近くへ、接近することは出来なかった。
浮足立った人々も、愕然として戻ってくるし、旗本勢も死にもの狂いで斬り込みを繰り返す。
何よりも幸村が感心したのは、陣容を立て直すと同時に、家康の本営は、大河の流れるような不思議な荘重さで、ゆっくりと前進していることであった。
踏みとどまっていてくれたら起死回生の対抗策が考えられる。
ところが、流れている大河は堰きとめ得ない。しかも、この大河のわきで、越前勢は退けても退けても破れた噴水のように執拗な飛沫を浴びせて攻めて来るのだ。
この方の水圧はさして高いものでは無かった。しかし、これも蟻の一穴ほどの隙を見せても、たちまち奔流に変りかねない。
再び幸村は兵を引いた。
この頃には、いったん崩れた秀忠の本営もまたすっかり立ち直り、大河の河幅は台地二十丁をきびしく埋めて、ヒシヒシと流れだしている。
（これをさえぎる力は誰にもない……）

家康はいったんの奇襲は受けたものの、その危機を見事にしりぞけて、彼の思案どおりに陣容を立て直し得たのである。
幸村の茶磨山と大河の間隙は次第にせばめられた。もはや幸村の知略をのべる平面は殆んど無くなってしまっている。
三度斬りこんだと書き残されているが、幸村自身、敵中へ馬をのり入れたのは、三度や五度のことではない。
何よりも馬の疲れが甚だしかった。
二度替え馬を乗りつぶして、三度目に、引きあげようとしてみると、わが陣の一角に越前勢の旗がひるがえっていた。
忠直はついに、茶磨山へ取りついたのだ。
その時、幸村が、何を考えたかは知る由もない……
忠直の暴勇を褒め千切ったか？
自分の戦争観と、家康の泰平観の何れを採ったか……
とにかく彼は闘志を捨てた。彼と家康の最後の戦は終ったのだ……と、はっきり思い、台地のはずれにある安居天神の狭い境内で馬を降りた。
疲れすぎて、全身の感覚までが無くなりかけている。
地上に立って、立っているという意識がすでにおぼろげだった。
ヒョロヒョロと燈籠の台石に腰をおろした時にすぐ右うしろで声があった。
「越前の士、西尾仁左衛門見参！」

幸村は、立とうとした。立って相手に幸村だと名乗ってやり、
「――手柄にせよ」
そう言ってやるつもりであったが、身体が思うままにならず、立ち上がる前に脇腹へ熱鉄をあてられたような痛みを感じて、声は言葉にならなかった。
（これが死か……）
たぶんそれは、生きるということに比べて、まことに粗雑な、あっ気ない、そして、あまりに手軽なものであることにびっくりしたに違いない。
西尾仁左衛門と名乗った武者は、一槍つけるとおどりかかって足蹴にし、相手に抵抗して来る力のないのを確めて首を掻っ切った。

敗将の兜

一

秀頼がこの日の戦の敗れをハッキリ自認したのは八ツ半（午後三時）過ぎであった。
それまでにも城の東北方からひしひしと敵は城へ近づきつつあった。
しかしそれは、秀頼には「敵――」とばかりは断じきれない人々だった。
石川忠総、京極忠高、同じく高知。
枚方から守口を経て、備前島に進んで来ているのだが、それ等は、いざといえば城内へ入って

来て秀頼を守護してくれる人々のように思えた。
水路をやって来ている池田利隆の軍勢が天満から中島を守備している。むろんこれも七日の決戦のなりゆきを眺めているのだが、それすら秀頼には「敵――」とは思えぬものがあった。
（ほんとうに家康は、豊家を滅ぼすつもりなのだろうか？）
もしそうならば、何故石川、京極など、豊家とゆかりの深い人々に搦め手を任せておくのであろうか？
仮に岡山、天王寺方面の決戦中に、搦め手にあたるこの方面から攻撃をかけられたら秀頼は一も二もなく陣頭指揮をとらなければならなくなる。
それなのに、母の淀の方と家康の間を、最後まで往復して平和のために必死の努力をしつづけた叔母常高院の子たちにこれを任せている……
ということは、家康に秀頼を殺そうとする意志のないことを、ハッキリと示しているような気がした。
正午すぎに、毛利勝永の手の者から、出陣懇請のことがあったが、秀頼は、それに応ずる気になれなかった。
（これがほんとうにこの城の運命を決する戦なのだろうか……？）
どこかで、そんな疑問が絶えず彼にふしぎな問いかけをしているのだ。
木村重成は死んだ。何時の評定でもつねに陽気をふりまいた後藤又兵衛も死んだ……しかし、それ等は夢の中の出来事のようにしか秀頼には受け取れなかった。
したがって出陣を促されて、これに応じなかった秀頼を、「山本豊久記」には次のように書い

ている。

「――茶臼山に真田左衛門佐、赤旗備にて、天王寺表、岡山の東まで、箕手になり備え立てたり。この時秀頼公、軽き大将にておわさば未明に先手へ出馬あって、味方の士気を勇める下知あらば、諸軍勢も勇気出で来りて、勝負は時の運とは言え、たとえ敗軍に及ぶとも、天王寺鳥居の前に床几をすえ、死を極めましまさば、如何なる弱兵もいかで見捨ててのがるべき。さすれば古今に比類なき一戦あって、前代未聞なるべきを、出馬おくれて、僅かに馬印ばかりを使番に持たせ、八町目へ遣わし、自身はようやく二の丸まで、ゆるぎ出させられ、時刻移れば、滅亡をせかるると見えたり」

しかし、この嘆きはあまりに常識的な感傷にすぎて、秀頼の心理を計るには遠いものであった。秀頼とて、この期に及んで生命をおしむものではない。むろん出陣してゆくぐらいの勇気はあった。

しかし、それ以上に、次第に彼の闘志をそらすものは、相対している関東勢に、何としても敵意の湧かないものがあったのだ……

（これが果たして、自分を滅ぼそうとする戦なのだろうか……？）

二

茶磨山に越前勢の旗が立ち、真田幸村が戦死すると、岡山口の大坂勢も先を争って退きだした。

戦況は申の刻（午後四時）に至ってついに決したのだ。

本丸の桜門にあった秀頼の許へ、
「――池田利隆の軍勢が川を渡って城門へすすんで来ます」
そう報告しているところへ、大野治長が重傷を負って城内へ運びこまれた。
それでもまだ秀頼は敗北感が湧かなかった。冬の陣のおりもそうであったが、彼には実際に戦った経験もなければ、敗北した経験もないのだから無理もない。
しかし、その秀頼が、
「――よし、予も討って出て討死するぞ」
そう言いだしたのは、身辺にあった真田大助が、父の死を知り、歯を喰いしばって泣くのを見てからだった。
だが、それも実行はされなかった。秀頼が馬に乗ろうとしているところへ、天王寺から退却して来た速水甲斐が飛びつくようにして、これを引きとめたからである。
「――なりませぬ！」
と、甲斐は返り血をいっぱい浴びた乱髪をふり立てながら馬を遠ざけた。
「――もはや戦場は大乱れ……主将が死体を乱軍の中にさらすものではございませぬ。むしろ退いて本丸を守り、力尽きてのちはご自害なさるがよろしゅうございましょう」
もうその時には、勝ちに乗じた関東勢は、三の丸に迫っていた。秀頼の心はようやく動揺しだした。
迫った……と、いうよりも、すでに乱入しだしている。
と、更にその動揺を大きくしたのは、本丸の台所から火を発したことであった。
台所頭の大隅与右衛門が、ひしひしと迫って来る関東勢の接近を見て、放火内応したのだとい

う噂が火の粉と一緒に乱れ飛んだ。

(ほんとうに内応したのだろうか?)

しかし、それも的確な答えの出ない間に、更に第三の悲報が届いた。

三の丸に乱入した越前勢が大野治長の屋敷に火をつけて、ここからも凄まじい勢いで焔が噴きだしたのだ。

「——もはや二の丸も危のうございます。すぐさま、ご本丸へお引きあげを!」

一度駈け去った速水甲斐が、再び駈けもどって、秀頼の旗と馬印を、太閤自慢の千畳敷へ運びこむように命じた時には、火に追われた雑兵が、そこここでなだれを打って逃げまどっている。

(負けたのだ!)

秀頼は、それを自身で確めたかった。いや負けるという事が、どのような結果を招くか、まだハッキリとはしていなかった。

追い立てられる思いで、旗や馬印に少し遅れて千畳敷へ踏みこんで、はじめてギョッと立ちどまった。

傷ついた人々は見ていたが、まだ死屍は見ていない。その秀頼の眼に、次々にわが腹に太刀を突き立ててゆく一群の人々の姿が映し出されたのだ。

郡主馬がいる。津川左近がいる、渡辺内蔵助がいる。中堀図書が……野々村伊予がいる……

いや、それ等の人々が、秀頼の存在など忘れたように、あげた畳に腰かけたまま眼を血走らせて死を急いでいるのではなかったか……

三

(これが敗戦の結果なのだろうか……?)
どの顔も大きく歪んで何かに憑かれている。眼はものを見ず、五感はその働きを停止しているかに見える。
が、それは実は、腹に刀を突き立てるまでの切ッぱつまった僅かな時間で、突き立てると、その表情はすぐにゆるんだ。
中島式部が駈け込んで来て、すでに静かな表情になっている渡辺内蔵助に何か話しかけた。と、その時だった。
「内蔵助、ようしやった!」
黒い物の怪が糸ひくように内蔵助に走り寄って、あっ! と言う間に懐剣を自分の胸に突き立てた。
秀頼の眼がひき裂けそうに見開かれたのは、その黒衣の影が、実は、肉体の半ば以上は枯れ切っているかに見える内蔵助の母の正栄尼だと知ったときであった。
(あの老尼のどこにあのような力が……?)
その疑問を抱く間隙もないほど、それは凄まじい死への挑みであった。
「長い間の苦しみだった。さあ、母子ともども六根を清めてなあ、大師のおそばへ参りましょうぞ」
それは人の声ではなくて、やはり憑かれた物の怪の声に違いない。ゾーッと背筋が粟立って、

そのものの怪はそのまま秀頼の胸へすべりこみそうであった。
「上様！」と、いきなりうしろから、はげしく秀頼を突き飛ばした者がある。気がつくと、秀頼もまたその場に坐り込もうとしていたらしい。
「火がまわりました。ここでは危のうござりまする」
「おお、奥原信十郎……」
「いざ、山里曲輪へご避難を。修理どのも甲斐どの等も、お待ちなされてござりまする」
すでに東側から煙の渦があふれこんで、死んだもの、死にかけている者の姿を見る間につつみだしている。
その煙の中に、郡良列の立てた自分の旗印が、金色にポツンと取り残されているのが見えたが、何の感傷も湧かなかった。
再びはげしく背を突かれて、秀頼はよろよろッと前のめりに歩きだした。その手を誰かがしっかりと執っている。
（おお、大助幸綱だ……）
秀頼ははじめてドッと涙が出た。大助の歯をくいしばって泣いた顔が、どうにもならない悲愁をこころに呼び戻したのだ。
「ご母公さまも御台所も、山里曲輪に難を避けておいでなさりまする。ご冷静に」
「おお……」
「みなみな、あのように、上様に殉じてゆく。一声お声をかけられて、急がせられまするよう」
「おお……」

そうは言ったが、こんな場合に何と言うべきかを秀頼は誰にも教えられてはいなかった。
「みなみな……済まぬことぞ」
「はい。それでよろしゅうござりまする。いざ」
自分の意志でないのは言うまでもなく、それから、どこをどう歩いたかも夢うつつであった。
そして再びハッと気づいた時には彼の眼の前に、又全く違った別の情景が展開していた。
母がいる。妻がいる。大野治長がいる。速水甲斐がいる……いや、その中では母の姿だけが空間の半ば以上を占める大きさで、そこからはげしい声がかかった。
「上様！　いよいよご最期の時が参りましたぞ」

四

秀頼が、大助に手を曳かれて、放心したように設けの床几に腰をおろした時、
「それはなりませぬ！」と、唇までまっ白にして大野治長がさえぎった。
「上様やご母公さまを、ご自害させてよいものならば、何を好んでこのような苦しみを……ご最期はなりませせぬ」
秀頼は、それが何を意味しているのかまだ的確にはわからなかった。
「黙られよ！」
と母の声が甲高い。
「この期におよんで未練であろう！」
「何の未練で申しましょうぞ。冷静に敵の陣容をご覧なされませ。南の岡山口からは片桐且元、

北からは京極兄弟……これこそ上様ご武運の尽きせぬ証拠、打つ手もあらば最後まで……それがわれ等のつとめにござりまする」
「これはおもしろい！　みなも聞いたか。修理はまだ戦に負けぬそうな。城に火をつけられ、三の丸にも二の丸にも敵の乱入を許しておいて、まだわれ等に恥をかかせる道が残っているそうな」
「ご母公さま！」
「なんじゃ。聞きましょう！　さ、どのような手だてが残ってあるぞ。それを聞こう」
「大御所は、決してご母公や上様を……」
「殺そうとはしていないか。ホホ……豊家は滅ぼすが、わらわや秀頼は憎んでいないと申すのか」
「まずお心を静めさせられませ。残っている手と申すは御台所さまのことでござりまする」
「ホホ……於千はならぬ。於千はわらわの娘ゆえ、決して手放すことではない。連れ立って黄泉へ参ろうぞ」
「それはなりませぬ。ここではひと先ず御台所さまを岡山の将軍家の御陣まで落とさせられませ。そして御台所さまのお口から、上様やご母公さまのお生命乞いをさせるのでござりまする」
秀頼はびっくりしたように千姫の方を見やった。千姫は淀の方と刑部卿の局の間に、せまく小さく坐らせられたまま、この時もまた、不思議な無表情さで宙を見ている。
不思議な無表情さといえば、そのうしろに胡座している奥原信十郎豊政の表情もまたおよそこの場の緊迫感とはなじまぬ悠揚さを感じさせる姿勢であった。

（あれ等二人は、落ち着いている……）
そう思う頃から秀頼は切ないほどハッキリとわが身のおかれている立ち場がわかった。
（敗れたのだ……）
そして、いま、豊家も、母も、妻も、自分も、すべて生死の関頭に立たされて、最後の思考をせまられているのだ……と。
涙がふたたび視野をくもらせ、五体がわなわなと震えだした。
「まだいい張るのかッ！」
と、母の声が今度は秀頼の胸に突き立つ白刃になった。
「それほど、そちがいい張るのならば……よい！　上様にお決め願おう。上様！　お聞きの通り、修理は於千にわれ等の生命乞いをせよと申します。上様は、この上恥をかさねて、あの家康や秀忠に憐れみを乞いまするか。それとも、この天下さまのお建てなされた大坂城と共にご自害なさりまするか」
もう他人ごとではない。秀頼は静かに眼を閉じた。

五

（そうだ。決めなければならないのは、この秀頼だった……）
そう思ったときに、又しても治長のはげしい反駁だった。
「上様！　上様には郡良列や渡辺内蔵助の最期の心はおわかりでござりましょう。彼等は、みな城外で死ぬべかりしを、わざわざ生きながらえて立ち戻ったは、上様が、生き残られると信じた

からに他なりませぬ……生き残られる上様ゆえ、旗や馬印を、敵の手に渡したり踏みにじらせてはならぬ……その考えで立ち戻り、千畳敷にこれを立て、敗れた罪のお詫びに自決したのでござります」
「なに、あれ等は、この秀頼に生き残れと……」
「はい。それ等のご忠節を、上様は無になされまするか」
その問いに、しかし、答えている暇はなかった。
「ご注進！」
血にまみれた若者が、秀頼の足許に倒れ込んで来て、声高に喚きだしたからであった。
「敵はいよいよ二の丸に乱入、堀田正高どの、真野頼包どの、成田兵蔵どの、火焔のため本丸には立ち入れず、二の丸との間の石壁の上にて、それぞれ割腹なされてござります」
「なに、それでは……もはや天守閣には、のぼれぬと申すのか」
切りつけるように問いかけたのは速水甲斐であった。
「御意にござりまする。何れも、わが君さまの御武運長久を祈りつつ……」
「何がご武運の長久ぞ」
淀の方が床を蹴って起ちあがった。どうやら彼女は、まだ煙をくぐって、天守閣で死ぬ気らしい。
「御注進！」
その淀の方の足許へも、火の粉を浴びた若者が倒れ込んだ。
「仙石宗也どの、負け戦と見て、何れかへ逐電致してござりまする」

「なに、逐電したと!?」
秀頼がきき返すのと、
「そうではない!」
治長が叩き返すようにさえぎるのとが一緒であった。
「仙石は、上様生き残られるを知って、後日のために備えているのだ」
「ご注進!」
どうやらもう考える間もない時が来ているらしい。ゴーッと焔の渦巻く音の中から次々に、絶望を知らせる注進の到着だった。
「大野治房さま、同じく道犬さま、何れかへ逐電なされてござりまする」
「逐電ではない!」
治長は又叫んだ。
「みなが討死してのけて、生き残られた上様に誰がお仕え申すのじゃ。よい、退れッ」
「ご注進!」
しかし、その時にはもう速水甲斐は、秀頼の手をとって無理にその場から歩き出していた。
「火に追われてはご相談もなりませぬ。芦田曲輪の籾蔵に難をお避けなさるよう」
続いて治長の母の大蔵局が淀の方の手を引いて歩きだし、淀の方は、あわてて千姫の袖をつかんだ。
奥原信十郎は冷やかにそれ等を確かめてから立ち上がった。

六

秀頼を急き立てながら、
「――勝敗は兵家の常にござりまする」
速水甲斐は、何度もそれを繰り返した。狼狽している秀頼よりも、むしろ自分にいい聞かせているのかも知れない。
「死は易く生は難い！　ここでは、先ず、修理どののお言葉をお用い下さりまするよう」
奥原信十郎は、つと治長に近づいて肩を貸した。舎弟の治房に傷つけられた傷の治りきらぬうちに、今度の戦……治長としてはよく戦った。小手にも頬にも、右足にも生々しく血が付いて、すでに気力だけで生きている感じであった。
「おお、信十郎か、かたじけない」
「何の……芦田曲輪の御蔵でござりまするなあ」
「そうじゃ。頼む！　あそこならば、誰も気付く者はなく、本丸の火も移るまい。と、申してあれへ御台所をお連れしてはならぬのじゃ」
奥原信十郎はそれには答えず、
「もはや、ご本丸は火の海にござりまする」
「信十郎どの！　頼む」
「…………」
「わが君母子を……いや、御台所を城外に……そして、わが君母子のご助命を、大御所に嘆願し

てくれるよう……」
それは人々への聞こえをはばかる早口で、足はすでに動こうとしなかった。
奥原信十郎はそれを軽々と担いだままでみんなの後について歩いた。
（この人も城とともに最期の時を迎えている……）
たぶん今日は夕焼けの美しい日であろう。それが、空いっぱいの煙に捲き立てられて、まだ昏れ落ちる前なのに、天守をかえりみることも出来ない。
風下はおそらく焦熱地獄。そしてそこでは銃声と喊声とが、火のはぜる音にまじってまだ絶えない。
時々持ってゆき場のない澱んだ怒りが胸に噴きだす。そのたびに担いでいる治長を抛り出したい衝動にかられた。
（この人の優柔不断が、ついに、このような大きな悲劇を盛り上げてしまったのだ……）
しかし、信十郎はその治長を憎みきれない。
彼はいま、わが身自身の生死は忘れて、秀頼と、そして奇怪な愛情で結ばれた淀の方の無事を案じつづけている。
そして、その最期の希いは、奇しくも奥原信十郎豊政が、男の意地を賭けた目的と同じなのだ。
眼の前に芦田曲輪への桝形が見えてきた。このあたりは風上のうえに石垣でさえぎられているので、黒煙の間からわずかに空が見えている。
誰かがはげしく咳き込んだ。空気がきれいになったので、却って吸い込んだ煙と煤を吐き出す

ことになったのかも知れない。
「静かにせよ」
と、速水甲斐の声であった。
「この中に入るのだ。入って誰も声は発てるな。やがて船が迎えに来るぞ」
速水甲斐のこの言葉の意味も信十郎にはよくわかった。
彼は、ここから秀頼を船に移して薩摩へ逃がれさせる気に違いない……
速水や明石は熱心な切支丹信者なので、治長とは又別に、秀頼を薩摩へ落として、フィリップ三世からの援軍を待つ気らしい。

七

芦田曲輪のかくれ家は、土蔵造りの籾置場で、間口五間に奥行きはせいぜい三間足らず……次第に迫る暮色で中は薄暗かった。
その中へ速水甲斐は秀頼の手首をつかんで引き入れると、有無をいわさず、その背から兜をとって籾俵の上にのせた。もう馬印もなければ一本の旗もない。わずかに兜一つが、敗将の飾りになった。
と、とつぜん甲高い淀の方の泣き声が湧きあがった。
奥原信十郎豊政は、治長を背負い込んで改めてその人数にびっくりした。千畳敷の大広間の上段の間の半ばにも及ばぬ狭い場所に、身動き出来ないほどの男女が入りこんでいる。
むろん秀頼と淀の方のあとを追って来た人々なのだが、それにしてもよくこれほど人間が入れ

たものだ。
六十人……いや、もっといるかも知れない。
(若しもここに大砲一発撃ち込まれたら……)
慄然として眼をこらして、
「あ！」
と、信十郎は声をあげた。
(御台所が見えぬ！　千姫さまが……)
彼の考えでは、淀の方は、千姫の手を離す筈はなかったのだ。
彼女の憤怒はもう狂乱の夜叉に等しい。自分と家康の心の通い路に、どのような障碍物があったかなど、冷静に考えられる女性ではなくなっている。
したがって、自決するとき、必ず千姫も道づれにする気に違いない……信十郎豊政はそう信じきっていた。
(しまったッ！)
彼は治長を伜の治徳に渡して、
「とにかく傷の手当てをなされ」
そのまま人をおしわけて淀の方に近づいた。
気がつくと、姿を消しているのは、千姫だけではない。淀の方と二人で、千姫を奪い合うような形で縋りついていたおちょぼの刑部卿の局もまた姿を消してしまっている。
(遁げたのだ！)

それは無謀といういより、むしろ、大きな信十郎への挑戦だった。
(秀頼も千姫も、淀の方も殺すものか)
それが奥原信十郎の、柳生又右衛門に賭けた心の底の意地であったのだ。
「ご母公さま、御台所さまを逃がしましたな」
いわいでものことであったが、信十郎は念をおさずにいられなかった。
それほど彼は狼狽していたともいえる。
ヒーッと又、不思議な声で淀の方は泣き崩れた。
「信十郎、追ってはならぬ!」
「えっ!? それは……それは、何故でござりまする」
「わらわが命じました! わらわが於千に頼んだのじゃ」
あまりのことに信十郎はわが耳を疑った。
「な、なんと、仰せられますご母公さま」
「わらわが於千に頼んだのじゃ。上様の生命乞いの出来る者は於千をおいて他にはない。許してたもれみなの者……」
その悲鳴に近い泣き声で、信十郎よりも秀頼が身をのり出した。
「なに、於千を予が生命乞いに……!?」
秀頼の表情には、再びはげしい生色がよみがえった。
おそらく千姫を逃がしたのは、淀の方の独断だったに違いない。

八

「この期におよんで何という無用なことを!?」
秀頼は身を揉んで母を責めた。
「恥ずかしいと思いませぬか。いや、於千が無事に城を出られると思いまするか」
「許してたもれ。わらわは上様を見殺しには……」
語尾ははげしい嗚咽にみだれて聞きとれない。
奥原信十郎は凝然として淀の方を見おろしていた。
(そうか、やはりこれが母の姿か……)
それは感動というよりもむしろ、どうにもならない業相を突きつけられた感じであった。母が子を愛す……それは、どのような敵も、どのような理知の垣も、さえぎり得ない瀑布のような凄まじさを持ったもの……
「信十郎!」
と、秀頼の尖った癇立った声であった。
「何をしているぞ。早く探して、御台をここへ連れ戻せ! もしも逆上している牢人どもの手に渡ったら何とするのだッ」
奥原信十郎は、それにはさしておどろかなかった。
(やはりこのお方も御台所は愛しておわす)
「――ご心配はいりませぬ」

そう言ってやりたいところだったが、しかし、それはさし控えた。
次第に落ち着きを取戻した信十郎には、千姫は無事……という自信があった。
万一のおりには、ひそかに彼が助け出す手だてを打ち合わせてあった者が二人ある。その一人は大野治長の家来の米村権右衛門であり、もう一人は堀内氏久であった。それに子供の時からつき従っている刑部卿の局が付いてあれば、先ず案ずることは無かった。
権右衛門か氏久が寄手の前へ連れてゆき、刑部卿の局が、千姫であることを告げたら、どんなに血に狂った者でも、これに危害を加えることはあり得ない。
それよりも問題は千姫と離れ離れになった秀頼と淀の方をどうして救い出すかということだった。
（これは、うっかりすると、又右衛門の言うとおりになりそうだぞ）
柳生又右衛門は、まず千姫をして生命乞いをさせ、それから二人を助け出させる。さすれば双方の面目も立ち、千姫の婦道も立つ……と、八方美談ずくめの思案を述べていた。
（そんなに巧くゆくものか）
信十郎は内心これを嘲笑っていた。それよりも誰か寄手の大将が三人の前に現われた時に、はじめて千姫に口を利かせるつもりであった。
「――さ、三人を大御所の前に引き立てよ。わらわからお話し申し上げることがある」
そして、それを守護してゆけば事は一度に済む筈と……ところがそれは淀の方の哀れな母性愛から狂ってしまった。
千姫が居なくなって、寄手の大将が果たして彼の申し出を聞くかどうか？

徳川譜代の者の、秀頼や淀の方への憎しみは想像以上のものがある。助けるどころか事によったら「死人に口なし――」と、すすんで葬り去ろうとするに違いない。
「信十郎！」
と、また秀頼がいら立って喚き立てた。
「於千を探せと申すがわからぬかッ」
「かしこまってござる」
信十郎はやむなく一度外へ出た。

九

外はすでに暗くなり、焰のいろが無気味に空を覆っている。
もう殆んど銃声も聞こえず、太刀打ちの音も絶えている。寄手はどうやら二の丸、三の丸に守備の者だけ残して引き揚げたものらしい。
今ごろは、茶磨山の家康の本陣でも、岡山の秀忠の本陣でも、戦勝祝賀の殺到でごった返しているであろう。
「こうなることは始めからわかっていたのに……」
信十郎は改めて、籾蔵をふり返って嘆息した。
戸を閉めた曲輪の中からわずかに一筋糸のような光りが洩れているだけで、シーンとあたりは静まり返り、焰の照り返している曲輪内には、人ッ子一人、猫の仔一匹姿を見せない。
（死ぬ者は死に、逃げる者は逃げてしまった……）

傍若無人に存在を誇っているのは焔の余映だけ……
信十郎は、不意にせかせかと歩きだした。
彼の仕事はまだ始まったばかりなのだ。家康も、柳生又右衛門も、彼を大坂城内に忍び込ませた味方と信じているのであろう。
しかし彼は人の指図で動くような、召し使いになりきれる男ではない。
(誰が、他人の意志などで生きるものか……)
信十郎は歩きながら何度も唾を吐きちらした。
「おれは、おれの意地に生きる……!」
その意地を貫く手段が、淀の方のために大きく狂った。
今夜はもうここへは誰もやって来まい。秀頼のかくれ場所が、ここと知っている者は、みなあの籾蔵の中に入ってしまっているからだ。
問題は明日であった。
夜が明けたら、家康や秀忠の旗本たちは血眼になって秀頼母子を探すであろう。
仮に千姫が今夜のうちに父と祖父とに生命乞いをして、助けることになったとする……
そこ迄考えて、信十郎はフフンと笑った。
彼自身が仮に徳川家の旗本であったとして、あれだけ手を尽して和議をすすめたのに、一顧も与えなかった相手を、今更許しておく筈はなかった。
「きっと斬る!」
が、斬らせてしまったのでは奥原信十郎の意地は立たない。

（これはいっそ、明石や、速水の考えているように、そっと水門から舟を出し、薩摩へ落としてやる方がよいかも知れぬ……）

それを知ったらおそらく又右衛門はカンカンに怒るだろう。が、ここでは彼を怒らせるほど、きびしく自分を持った男にならねば……

気がつくと火事明りで自分の姿が地上に影を描いている。信十郎はあわてて柳の木蔭にあゆみを移し、こんどはそこにある船繋ぎ石に腰をおろしてまた唸った。

赤いのは空ばかりではなく、満潮の川面もまた熱いほどあざやかに燃えている。

いや、その川面の向こうで焚かれている、包囲勢のかがり火もまた、岸辺に焔を並べていた。

（何も彼も燃え尽せば却ってせいせいするであろうに）

ふとえりあしの汗を平手で拭ったときに、水門口の土塀の端に黒い人影が浮きあがった。

「旦那さま、奥原の……旦那さまで」

おし殺した若い男の声であった。

十

奥原信十郎豊政は、その声に近づく代わりに、素早くあたりを見廻した。

「誰だ。出て参れ」

「はい。宗三郎でござります。御台所さまは、無事に茶磨山の御陣所へ向かわれてござりまする。はい」

大和の奥ケ原から連れて来ている一族のこの若者は、どうやら、千姫を落とさせたのは信十郎

豊政の指図と思い込んでいるらしい。
「そうか。無事にのう」
「はい。途中で肝を冷やすことが二、三度ござりましたが、万事お手配どおりにゆきました」
「手配どおり、にな」
「何分にも火の廻りが早く、天守閣下の石垣から空濠の中に、刑部さま（おちょぼ）が突きおとした時には、どうなさることかとヒヤヒヤしました」
「空濠へ突き落としたか……」
「はい。堀内さまと米村さまの計らいでござりまする。御台さまは一人でお城を出るは嫌じゃと仰せられる。上様とともに自害するのじゃ……わらわは祖父の孫でもなければ父の娘でもない。この城で育った上様の妻じゃ……そう仰せられておむずかりなされ」
「わかった！」
　と、信十郎はさえぎった。
「それで、空濠から先は何としたぞッ」
「気を失っておわすをそのまま三人で担ぎあげました。わし等もむろん見えかくれに、これをご守護申し上げ、空濠を渡りきったところでまた行手は焔の海……もはや出口はないぞと迷っているところへ、寄手の強襲……」
　若者はいまも眼の前に紅蓮の焔があるかのように両手で虚空をわけて見せながら、
「もはや絶体絶命と見てとって、堀内さまが声高に、これにおわすは、千姫さまぞ！　右大臣の御台所ぞ……と、到頭身分をあかされました」

と、息をついだ。

奥原信十郎はもう若者を見ていなかった。じっと、秀頼のかくれ場所に視線を投げて聞いている。

「御台さまと知って相手もびっくりなされ……そう、たしか坂崎さまといわれました……坂崎出羽守さまと……これでお供の数はふえ、焔をくぐって出たところは、ホッとするほど涼しい猫間川のほとり……それから乗り物を見つけられて、そのまま茶磨山へ向かわれてござりまする」

「………」

「もはや程なくご陣所へ着かれましょう。そこでわれ等は再び指図どおり川筋からこの柳をめあてに小舟で戻ってござりまする。が、旦那さま……」

「………」

「人の心は計られませぬもので……戻ってみると、奥ケ原から一緒に参った者の数が半分ほどに減っていました。いいえ、斬り死したのではございません。火に追われて散り散りに……と、思うて頂きたいもので。奥ケ原からお供をして来たもので、旦那さまを裏切るような腰抜けは一人もない……はい。一人もない、筈でございます」

「ご苦労だった！」

と、信十郎は立ちあがった。

「その小舟な、それを大切にして、誰の眼にもつくではないぞ。じっと芦辺に秘んでいるのだ」

「は……はい」

「これからが大事な瀬戸、見つかるなよ」

十一

若者の姿が消えると、あたりは一段と無気味な火事明り……その下を、奥原信十郎豊政は、またひとしきり、一歩一歩と、噛みしめるような歩速で歩きつづけた。
千姫の脱出は、いざという時、三人を救い出す、ひとつの手筈として彼の考えていたとおりに実行された。
米村権右衛門は家康とも面識のある大野治長の老臣なのだし、それに、途中で出会ったのが、従兄弟の柳生又右衛門とも親交のある坂崎出羽守であったとすれば、千姫の身はもはや案ずることはあるまい。
坂崎出羽守は、世間では、宇喜多秀家の血縁と思われているのだが、実は朝鮮人……と、信十郎は又右衛門に聞かされている。
文禄の役のおり、彼の地で宇喜多秀家は、出羽のために生命の無事を保ち得たほどの恩義を受けたものらしい。
それで、血縁と称し、宇喜多の姓を与え、宇喜多右京亮直盛として日本に伴い帰ったのだが、関ケ原の合戦のおりにはこの直盛は家康に味方した。
家康に理のある戦……と、異国生まれの彼はハッキリ割り切って、泰平招来のために犬馬の労を尽したのだ。
「——異国人ながら、気骨も胆力も、あっぱれな武人！」
と、又右衛門が褒めているほどの人物で、家康もまたこれを認め、石州浜田に三万石を与えて

いる。
その宇喜多直盛が、宇喜多家滅亡後に、姓を坂崎とし、名も成正と改めているのが坂崎出羽守成正だと聞いている。
その坂崎出羽守が一緒になって供をしていったというのだから千姫の身は無事に違いない。しかしその千姫の無事が、今ははげしく奥原信十郎豊政の武士の意地と衝突するのだ。
千姫だけは助かって、秀頼も淀の方も自害した……となったら、いったい何うなろうか？　家康はわが孫だけは助け出し、太閤の遺孤には冷然と死を課した身勝手者と評されるに違いなく、それでは奥原信十郎は柳生又右衛門の心遣いすら理解し得なかったおろかな田舎者になりさがる。
いや、そうした世評などはこの際問うまい。
（いったい、奥原信十郎は、何のために家郷を捨てて大坂城に入ったのか……？）
これも、天下大乱の一旗組で、一族郎党とともに出世をめざして大坂に身売りして来た牢人の一人……と、誤解されたら、無刀取りをもって天地の心とする柳生石舟斎の高弟としての誇りはいったいどうなるのか……？
小さくいえば、自分を信じきってついて来ている郎党たちにも済まなかったし、従兄弟の又右衛門に会わせる顔もないことだった。
「問題は……」
と、火事明りの下を歩きまわりながら信十郎は又、ふみ破るように呟いた。
「是が非でも、お二方を助け出してみせねばならぬ……ということだ」

しかし、それは彼の意地の述懐であって、事態の解決に通ずる水路ではなかった。
ほんとうは「如何なる手段によれば助け出せるか？」にかかっている。
信十郎は、気がつくと再び柳の下に腰をおろして、秀頼母子のかくれ場所を喰いつくような眼で睨みあげていた。

孤忠の刺刀

一

この日片桐且元は、茶磨山と岡山の陣営に戦勝の賀詞をのべて、黒門口に近いわが陣屋に帰って来ると、床几を幔幕の外に持ち出させ、夜空をこがす本丸の余燼に何時までも見入っていた。頬もえり足もげっそりと削りとられたようにやつれている。決して連日の戦のためではなくて、これも異常な「豊家存続――」の執念のためであった。
城内の人々から裏切り者と呼ばれ、内通したとして生命まで狙われたのだから、
「――もはやこれまで！」
と憎めそうなものであったが、感情は全然逆であった。
（有楽どのは羨やましい）
織田有楽斎は駿府から再び京に戻ってどうやらこの戦を、茶道三昧を口実の傍観者になり済ませてしまったらしい。が、片桐且元は、どうしてもそう冷静には構えていられなかった。

（動けば動くほど、誤解を重ねる結果になるのだが……）
そうわかっていながら、尚家康の側を離れず、刀槍を持ち出して心にもない戦を重ねている。
（業だ……この諦めわるさが、わしの業だ）
見方によれば、家康にへつらって、どうして自分だけは生き残ろうかとあがき廻っている見苦しい俗物にも見えるだろう。その意味では有楽の方が一段と賢しく、高尚なのかも知れない。
しかしその有楽をすら許して庇護する家康なのだ。決して秀頼を滅ぼそうとか、除こうとか考えている筈はない……と、思うところに、彼の執念の火元があった。
武人の棟梁として、将軍が政治一切を委任されてしまった今の日本国……そうなれば、それがたとえ何者の血筋であろうと、その制令には服さなければならない道理がある。
太閤の治下に、二百五十五万七千石という尨大な領地と武力を有しながら、家康が忠実に大老の一人として仕えて来ていたように、一大名としての秀頼は、舅である将軍の統治の圏外に住める筈はない……
というのはしかし、どこまでも理解出来る道理であって感情ではない。
道理からいえば、冬の陣、こんどの陣と、二度にわたって叛旗をひるがえした秀頼なのだ。もはや豊家の存続はおろか、生命乞いする余地などは全くない。
しかし感情はそのように簡単に処理出来るものではなかった。
いまも赤くひろがる頭上の夜空で、
「——助作よ。お拾いを頼むぞよ」
そういう秀吉の声が、天地をつつんでいる気がする。

（みんなわしの器量が足りないゆえに……）
時代の推移を家中に徹底させるだけの説得力が自分にあったら、こうまで悲惨なことにはならなかったろう……
関ヶ原のおりにさえ無事であり得た大坂城なのだ。それがいまあとかたも無くなってゆく……この城こそは、豊太閤を上に頂いた、且元以下の荒小姓どもが、各自の生命を礎石にきざみ込んで建てた偉業の塔であったのに……
（塔は無くなった……しかし、まだ、秀頼は生きている！）
且元は、夜空を見つめているうちに、とめどない追憶の涙の中におちこんでしまっていた……

二

太閤の偉業一切が灰になる……ということは、片桐且元という人間が、何のためにこの世に生まれてあったのか、その存在一切を掻き消すことのような気がしてくる。
（殉死すべきであった……殿下の、お亡くなりなされたおりに……）
自分の生涯は、豊家……というよりは、実は、秀吉の羽柴筑前守時代に終わっていたのかも知れない。
あの頃の日々には、単純に割り切った充足があった。
が……太閤の死後はそうではなかった。身分だけは出世したかに見えながら、その実、荷物の重さに肩のきしみ続ける日々だった。そして、ついにその重荷を投げ出さなければならない破目に追込まれた……

（いや、投げ出したのではない。まだ、秀頼さまは生きている……）
それゆえにこそ、今日も、あわてて茶磨山を訪れたり、岡山で機嫌を取りむすんだりして来ているのではないか……
「お父上、何をご覧なされておわすので」
何時の間にやって来たのか、伜の出雲守孝利に声をかけられ、且元はハッとして涙を拭った。
「おお、お許は、何時岡山のご陣から」
「お父上！」
鋭く呼びかけて、孝利は、あたりをはばかる声になった。時刻はすでに四ツ半（午後十一時）近くになっている。
「上様のこと、気拙いことになりそうでござりまする」
「上様とは……将軍家のことか」
且元はわざととぼけて訊き返した。むろん秀頼のこと……と、わかり切っていながら、哀しい父の用心だった。
「いいえ、秀頼さまのことで」
「秀頼さまは、わしにとってはとにかく、お許には上様と呼ばねばならぬお方ではない」
孝利はそうした父のこだわりに舌打ちして、
「将軍家は千姫さまご嘆願を、お許しなさる気配はござりませぬ。本多佐渡どののお取り次なされたご助命のご嘆願を、はげしいお声で叱りつけられました。それがしはお側にあって、それをこの眼で見ていたのでござりまする」

「ほう、何と仰せられたぞ」
「妻は良人に殉ずべきもの。何故於千は秀頼どのと共に自害しようとせなんだぞ。一人で城を脱け出すなどもっての他の所業……於千にそう申して自害させよと」
「そうか……それはしかし言葉の理じゃ。言葉の理が、必ずしも人間の本心とは限らぬものよ」
「いいえ、それがしには、そのようには見えませなんだ」
「取りなしは、本多正信どのであったのだな」
「はい」
「案ずるな、本多どのは、大御所の肚をようご存知。大御所は、御台所さまのご貞節に免じて、秀頼さまも、ご母公さまも助けてやろうというお考えに違いない。もう少し静かに成行きを見てゆくことじゃ」
「ところが、そうは参りませぬ！」
孝利は自信あり気にいい切った。
「将軍家は明早朝、焼け残った曲輪一切をしらみ潰しに探すよう、いまに至って降服せぬ者は一人も容赦すまいぞと、すでに厳命を発されてござりまする」

三

「なに、虱つぶしに焼け残っている曲輪を……」
さすがに且元の顔いろは変った。
「たしかにそう仰せられたのか、将軍家は」

「はい、たしかに！」
孝利はきっぱりと答えてから、不意に小さく首を傾げた。
「そうそう、そういえば、その前にそれがしに一つ質問がございました」
「お許に……何をお訊ねなされたのだ」
「まだ焼け続けておることゆえ、何と何が残るかわからぬが、その方はたびたび城内に出入りして、どのような建物が、どこにあるかはよく存じているであろう。千畳敷きの屍体の中には秀頼のそれは無かった。いったい秀頼は、何れにかくれていると思うぞ……そうご質問なされたので」
且元の顔がピクピクと引きつりだした。しかし声だけは意外にしずかに、
「して、何とお答え申し上げたぞ」
孝利は、首を振った。
「いよいよ敗戦と決まれば天守か千畳敷きでご切腹……それ以外の場所にかくれておわすなどとは考えられませぬと」
「フーム。すると、将軍家は？」
「川筋もきびしく見張られてあることゆえ、城内に秘んでいるに違いないが、そうか、知らぬか……そう仰せられたあとで、井伊直孝どのを呼びつけられ、焼け残った曲輪一切、残らず叩きこわせとお命じなされたのでござりまする」
「すると、そのおり、同座なされた方々は？」
「されば、大番頭の阿部正次どの、安藤重信（直次の弟）どのにござりまする」

「阿部どのと、安藤どのか」

「何でそのようなことをお訊ねなさりまする。もしや父上は……」

　そこまでいって孝利は声をおとした。

「上様、おかくれの場所をご存知なのでは？」

　且元ははげしく首を振って叱りつけた。

「何の……何のわしが知ろうぞ！　たわけたことを申すな」

「これはご免なされませ。父上もわれ等同様城外で戦っておわしたものゆえ……しかし、或いは探して見つからぬと、お父上に捜索のご命令があるやも知れませぬなあ」

　且元は眼をつむって、それにはすぐに答えなかった。どのような城にも危急のさいの密室やぬけ道などはあるものだった。

（大坂城のそれを知るのは、片桐父子……）

　誰もそう思うに違いなく、正直にいって、ごく最近までの金蔵の黄金量まで、くわしく知っている且元だった。

「本多正信どのも、その隠れ場所を知ろうとして、御台さま附のお女中に、あれこれお訊ねなされたそうで。しかし御台さまも刑部の局も、天守からご本丸を出るまではご一緒だったが、それから先はご存知ないというので」

「………」

「お父上ならば、いったいどこにお連れ申すか？　これは伜のそれがしも訊ねてみたいところでござりまする」

「伜よ」
「はいッ」
「わしは将軍家の許へ参って来るぞ。まだ将軍家はお休みではござるまい」
そういうと、いきなり起ち上がった且元の表情は土気いろ……と、思ったとたんに、はげしく咳込んだ。

四

その咳込み方が尋常ではない……と見てとって、孝利はあわてて父のうしろにまわった。
何かが、いっぱい胸元から鼻腔までふさいでしまったような切迫した咳入り方だ。
「父上！　しっかりなされませ」
はげしく背を叩いているうちに、グワッと何か吐きだした。生あたたかい液体が、口にあてた指の間から、ぬるぬると孝利の手にも伝わった。
「何ぞ食あたりをなされましたな。さ、とにかく内へ入られませ」
汚物によごれた手を額にそっとすべらせると、びっくりするほど熱が高い。
風邪か？　それともおこりの類か？
幕舎の中に連れ込んで、灯りを近づけてみて、孝利はギョッとして息をのんだ。
吐いたのは、ドス黒い血のかたまりだった。いやその血のついた手で、額やらえりあしやら、肩やらを孝利が撫でまわしてしまったので、見るも無残な形相に変っている。
「誰ぞある、水を持て」

この頃すでに且元は労咳の身の無理がたたって、生命の灯は尽きかけていたものらしい。
おびただしい吐血が、今少しで呼吸をふさぎ、そのまま絶息するところだったのだ。
小屋のうちに抱え込まれ、汚血を拭い取ってもらいながら、且元はぐったりと眼を閉じていた。
彼自身は、すでに吐血することを知っていたのに違いない。
「伜よ……」
しばらくすると、熱にうるんだ眼をあけて、且元は孝利に下から呼びかけた。
「何でござりまする？　今しばらく静かにして」
「わしはな……今宵は、岡山の御陣所へは行けぬようじゃ」
「なんなら、それがしが参りましょうか」
且元はゆっくりと首を振った。
「明早朝でよい、明早朝、わしが参ろう」
「それなら、静かにお休みなされませ」
「そうもゆくまい。言い残しておかねばならぬことがある」
「言い残して……？」
「そうじゃ。もうわしも永くはないぞ。わかっているのじゃ。これでよいのじゃ」
「何を心弱いことを」
「上様なあ」
「は……はい。秀頼さまのこと」

「わしにはわかる。上様が、どこに秘んでおわすかがな」
「やはり……そうだ、と思うていました」
「わしは、吐く血がのどに詰る時、何時も亡くなられた太閤殿下が、大きな掌で、わしの鼻も口もすっかり塞ぐような気がするのだ。この器量なしめ、死んでしまえ……と、仰せられてな」
「そのような、バカなことが……」
「いや、それでよいのだ……その時わしも反抗する。この片桐且元が、秀頼さまを見殺しにするような者かどうか見てござれと……今もその闘いでわしは勝った……わしはその手をとりのけた……わしは明早朝、岡山をおとずれて、必ず将軍家に、上様を討たぬように頼んで来る」
　そして、ちょっと間をおいてから、弱々しく咳いた。
「しかし、わしに万一のことがあったら、こなた代りに、往んでくれねばならぬぞ」

五

「万一のこと……など、あろう筈はない。お心確かにお持ちなされませ」
　言いながら孝利もまた、おびただしい血を吐いた父の病いが、すでに軽いものではないことをまざまざと感じとっていた。
　そこで眼くばせして近侍を遠ざけると、もう一度冷たい水で、顔から首を丁寧に拭いてやった。
「上様はな、芦田曲輪の籾蔵にかくれておわすに違いない」
　且元は、伜のなすがままに身を任せながら、ボソボソと話しだした。

「わしが以前にその話をしたことがある。万が一にもこの城に敵兵が攻め入るようなことがあったら落ちる場所が二個所あると……」
「二個所……ござりまするか」
「しかし、そのうち一個所は総濠を埋められたおりに、外から出口をふさがれてしまったので今はもう使用にたえぬ。それゆえあとは芦田曲輪のその蔵だけじゃ」
「なるほど……」
「その蔵は、そのおり上様をお囲い申すよう、金屏風が二双入れてある。武人は用心深いがよいと思うてな、ところがその金屏風が……きっと今宵は役に立って居るに違いないわ」
「芦田曲輪……そのかくれ場所から、いったい何れへ落ちてゆくので」
「川筋じゃ。舟でゆくのじゃ。籾と見せてもよし、雑穀、野菜のたぐいと見せてもよい。とにかく上へ荒ゴモをかけて何か積んだら、おそらくその底に人が秘んで居るとは思うまい。こうして川筋を下ってゆくと島津の船が待っている……というのが、万が一のおりのわしの思案であった」
「と、言われると、今も、それと同じ思案で秘んでいる……と、言い切れまするか」
「他によい思案などあろう筈はないからの……それにご城内にある切支丹の信徒どもは、いまだにイスパニア国から助けの軍艦がやって来ると夢見ている。それゆえ、先ず上様を薩摩にお落し申して、その援軍の到着を待つ……と、考えてゆくに違いない」
「果たして！　果たして、そうしたことが出来ましょうか？」
「その事よ。今となっては、そのようなことはみな夢よ。夢なのじゃ。そこでこなたに申してお

くが、わしに万一のことがあったおりには、こなた、大御所の許へ参って訴人せよ。よいか大御所の許へじゃぞ」
　孝利はいぶかしげに首を傾げた。
「父上は、先ほど岡山の御陣所に、将軍家をおたずねする……と、申されましたな」
「さよう。父ならば将軍家じゃ。しかし伜ならば大御所でなければならぬ。わかるであろう。将軍家は上様のご助命には反対なのじゃ。それゆえ父が参って嘆願してゆくつもりじゃが、伜のこなたでは将軍家は動かされぬ。そこで、こなたは大御所のお前に駈けつけ、上様の居所はここと思われまするが、ゼヒともお助け下さるよう、父がそう申して息を引きとった……と、申し上げるのじゃ。それでこなたにおとがめはかからず、上様のご助命はなるやも知れぬ。よいか、そのおりに、駈け込むところは大御所のご陣所じゃぞ」
　孝利がうなずくと、はじめて且元は、ウトウトと眠りだした。
（まだ死ぬようなことはない！）
が、これがすぐさっきまで重い具足姿で戦っていた人とも思えぬ切なく細い呼吸であった。

六

　翌八日の朝になった。
出雲守孝利は、殆んど寝ずに父の看病をしていたのだが、夜明けになってウトウトと仮睡した。ハッとして眼をさましてみると父はもう起き出している。
　顔いろはまっ蒼だったが、しかし、夜前に「死――」を口にした人のようには見えなかった。

もう誰かに聞かされたあとと見え、持参の香炉に香を燻じながら、
「やはり大御所は、上様ご助命のお考えに相違ない。わしはこれから、将軍家のご陣所に伺候して来るぞ」
と、おだやかに言った。
「大御所はの、旗本の士、加賀爪忠澄と豊島刑部を城内につかわして、生き残ってある者の姓名を書き出すように命じられた」
「命じた……と、仰せられると、誰に……？　みなみな上様と共にかくれておるのでござりましょう」
「むろん宛名は治長じゃ。かくれていても、誰ぞ知っている者がある……そう睨まれて使者を出されたに違いない」
そう言ってから、且元はホロ苦く微笑した。
「大御所の知恵は常人とは違うからの。案のごとく、生き残っている人々の姓名を書きつらねた返事を持って二位の局が城を出たそうな」
「二位の局が……!?」
「そうじゃ。治長も、局に上様やご母公の助命をさせる気であろう……が、この知恵は大御所とは比ぶべくもない……局は女性じゃ。御陣所へ止めおかれ、誰ぞに拷問されたら、一も二もなく居場所を白状するに相違ない。そうなってはわしの苦心は水の泡じゃ」
孝利には、わかったような、わからない父の言葉であった。
しかし、そう言うと、父は胸元に合掌して、何か祈りを凝らしてそのまま立った。

「今日はもうさしたる戦もあるまいほどに、充分気をつけて、兵馬を休ませておくように」

まだ城のあちこちから煙は立ち続けているものの、もはや空いっぱいの焰ではなかった。大天守のあたりの空がむなしく広く、ところどころに焼け残ったやぐらが玩具のように小さく見えた。

(そうか！　その意味か……)

且元が乗物を用意させて岡山に向かってから、孝利ははじめて父の言葉をさとった。

父は、二位の局の口から、秀頼母子の居場所が洩れる前に、自分からすすんで秀忠に、

「——隠れてあるは芦田曲輪」

と、訴人してゆくつもりに違いない。

そうして、どこまでも徳川家に忠誠の者と見せかけて、それから秀頼の助命嘆願をしてゆくつもりと受け取れた。

(そうか……それにしては危ない橋だ)

どうせ局の口から洩れるものを、且元が訴人したと……ただそれだけの事実が語り継がれると、父の上には「上様を売った不届者——」という汚名が烙印されるであろう。

しかし、それを止める気には、孝利はなれなかった。

(わしが知っている！　伜のわしが、親父どのの哀しさは知り尽すほどに知っている……)

一方岡山の陣所に着いた且元は、すぐさま秀忠の前に通された。

秀忠は、いよいよ焼けあとへ刺刀の部隊をくり出させようとして、土井、井伊、安藤等の者と絵図をかこんで、焼失曲輪を朱筆で抹消しているところであった。

七

「おお市正か、よう見えられた」
秀忠は機嫌よく評議を中止して、且元に向き直った。
且元が、何のためにやって来たかを、すでに察しているのかも知れない。
「わしはこれから茶磨山へ赴いて、大御所に戦勝のお礼言上に向かうところであった」
そういってから小姓に、
「いま何刻か？」
と、小さく訊いた。
「はい。ただいま六ツ半（午前七時）ごろかと心得ます」
「そうか。五ツまでに参ればよいのだ。まだ少々間がある。実はの、大野修理がもとから二位の局が大御所のご陣内に参ったそうでな。いや、そこ許も今日までいろいろとご苦労であった」
秀忠は珍しく今朝は多弁で、
「――実はその事につき……」
且元がいい出そうとする前に、また明るく言葉を続けた。
「この秀忠も昨夜は大御所にお褒めの言葉を頂いた。曾って無いこと……といってよかろう。中にはお心に染まぬこともあったに違いないのだが、惣じて士気も旺盛、采配ぶりもよかったと……これからいよいよ統治に出精せよ。向こう三年間は、諸大名に江戸城の修理を命ぜぬよう……みなの疲れをいたわるようにと仰せられての」

「それは又、何時に変わらぬご仁慈のお言葉」
「そうそう。そのおり、お許のことも話に出たわ。市正にはずいぶんと辛う当たった……しかし、これで騒ぎの根は断った。向後は山城、大和、河内、和泉の諸国のうちで四万石は安堵してやるように、との内意であったぞ」
「それは……ありがたきこと」
いっているうちに、且元はハラハラと涙がこぼれた。わが身のために来たのではない。
いや、秀忠もまたそれをよく知っていて先手を打っているに違いないのだ。
「この四ヵ国の所領のうちに城も三つはあろうでの。何れへなり居を定め、悠々老後を養うたがよいぞ」
「恐れながら……申し上げたい儀が」
「申し上げたい儀か……そうか。何事じゃ」
「秀頼様のおわす場所、ご城内の何れの地か、二位の局は言上致してござりましょうか」
「いや、そのようなことは、まだ聞かぬが」
「それならば、この市正に心当たりがござりまする」
「ほう、それは幸いじゃ」
秀忠はチラリと井伊直孝に眼くばせして、
「なるほど……市正ならば城内のことは蟻の道まで知りぬいている筈であったの」
「はい。まず間違いはござりませぬ。芦田曲輪の籾蔵のうち……」
こんどは額から首筋まで、豆を並べたような脂汗の玉になった。

（許されよ太閤さま……不肖の助作が、一世一代の苦しい芝居にござりまする）
秀忠はひどく軽く、
「そうか、籾蔵か」と、いい捨てた。
「はい。万々間違いはござりませぬ。それゆえ、この討手、且元にお任せ願いとう存じまする。この通りにござりまする」
秀忠はもう一度かるく視線を井伊直孝に向けて、それからゆっくりと首を振った。
「それは遅かったの。すでに決まってしもうたわ」

八

「決まった……と、仰せられますると」
意気込んで問い返す且元に、井伊直孝が、無愛想な声で答えた。
「あのあたりの掃除は一切それがしが仕る。もはや先手の者どもは出発した頃でござろう」
「あの、もはや出発……」
弱々しく呟いたと思うと、且元は、狂ったように秀忠に向き直った。
「お願いでござりまする！　このお役目、それがしに仰せつけ下さるよう……さもないと、片桐且元、ふ……ふ……不忠の者になりさがりまする！」
「そのことならば、お案じには及ぶまい」
今度はわきから土井利勝が、あわれむように口をはさんだ。
「市正どののご忠誠は、将軍家も大御所もようご存知じゃ。今朝もこうして、秀頼母子のかくれ

家を、わざわざ此処へ知らせに来られる……なみの者では出来ない忠義じゃ。もっとも、それなればこそ、大御所さまも老後のためのご加増までご心配下されておわすのだが……」
「大炊どの！」
「なんでござる」
「それはあまりに心ないおからかいじゃ！　武士の情けをご存知ない……それではこの且元は……」
　いいつづけるのを利勝ははげしい声で叱りつけた。
「控えさっしゃい市正！　将軍家の御前でござるぞ」
「は……」
「お身がさように申すならばハッキリと申し聞かそう。お身の希いは叶わぬ願いじゃ」
「と、仰せられると……」
「お身がわざわざ知らせに来なんでも、凡そのかくれ家など、わからぬわれ等ではない。大御所のお情けに甘えすぎ、片桐家の将来を忘れては相成るまい」
「と、申しても……」
「まだいわるるか。お手前はよくよくふん切りのわるいお人じゃ。よいかの市正、お身が決断すべき時に断平として決断してあったら、冬、夏二つの御陣は無くて済む筈の戦であった。お身はそれが出来ずに、ついに大坂城の今日を迎えとったと気づかぬのか」
「それなればこそ、お願い申し上ぐる……」
「ならぬ！」

利勝はもう一度大喝しておいて、
「もはや、お出かけの時刻にござりまする」
秀忠に一礼し、茶磨山への出発を促しておいてから、声をおとして且元をなぐさめた。
「やり損いは一度でたくさんであろう市正。せっかく将軍家や大御所が、片桐家のあとの立つようご配慮下されておわすものを、お身の、決断のつかぬふん切りわるさで、わざわざ又潰してゆくにも当たるまい。お身はもう心身共に疲れているのだ。ゆっくりと休まれるがよい。わかったか……」
その一言は、且元の胸にいいようもなく鋭く哀しい刺刀の一刀を打ち込んだ。
そして、それなりみな席を立ってゆく。
「あ……」
立ちかけて、前へのめって、且元は両手でかたく口をふさいだ。またしてもはげしい咳込みが襲って来る。ここで血を吐くと、それはそのまま彼の生涯の終わりになろう。
「お……お……お待ち……」
口をおさえたまま胸の中でくり返して、且元は体を伏せたまま、全身をふるわして泣きだした……

杜鵑落月

一

芦田曲輪にある籾蔵の夜の蒸し暑さはかくべつだった。
照りきらず、かといって降りもしない梅雨ぞらの、狭い場所におびただしい人数が入り込んでいるのだから無理もない。
しかもここで夜を明かすとなると雑居もならず、以前から入れてあった金屏風を立てて蔵の内を三つに区切った。
その一方に淀の方をはじめ女性たちをおき、奥には秀頼とその稚児姓たちをおいて、中の間に、生き残った、大野治長、毛利勝永、速水守久以下の侍たちが詰めかけた。
女性たちの髪油の匂いもさることながら、男たちはその殆んどが手傷をうけたり返り血を浴びたりしている。それが梅雨どきの暑さに蒸され、汗にまじっていいようのない悪臭となって鼻腔を苦しめた。
奥原信十郎豊政は、そうした蔵の内をのぞいては外に出て、外の空気をしばらく呼吸してはまた内に入って人々を監視した。
もはやどの顔にも生色は無く、それはすでに狂う気力さえ失った人々の群れに見える。
(もう暫くの辛抱だぞ)

夜中には何度も小雨がパラついたが、その中で信十郎は、いざといえば彼の目的だけは達せるよう……ある種の用意だけはしてあった。
いや、ある種の……などと持ってまわった隠し立ての要はあるまい。
それはどんな場合にも密室に籠ってある人間を苦しめる、生理の要求から考えついた用意であった。
人々は、夜半ごろまで誰もが、生理の要求など忘れていたかに見えたが、一人の小女が、まっ蒼になってそれを訴えたとき、信十郎はハタと膝を叩いて立った。
籾蔵のすぐそばに厠は作れない。そこで川岸近くの柳の下の芦のそばに、わずかに土を掘り、その周囲を、土蔵の内にあった菰で囲ってやって用を果たさせた。
「――苦しいお方はあれへ」
みなにそういい渡しながら、その急造の厠の先に小舟をかくしておくように部下に命じた。
万一のおりには、秀頼と淀の方を、生理の用と見せかけて誘き出し、有無をいわさず小舟で運び出すつもりであった。
その用意が出来たころから、信十郎は落ち着けた。
(果たして、千姫の助命が功を奏すや否や……?)
家康か秀忠の手の者が、堂々と迎え取りに来ればそれに引き渡してよいのだが、そうでなければ、二人の躰だけには誰の手もふれさせてなるものかと、眼を光らし続けている。
信十郎のいちばん怖れたのは暑さに蒸れた絶望で、突然狂い出す者があらわれはすまいかということだった。

狂った挙句、自分で自分を傷つけるのはよいとして、若し凶刃を秀頼や淀の方に向けられては一大事……その意味でジーッと監視を続けていると、淀の方は、信十郎自身が眼を見はるほどに立派であった。

（いちばん狂いわめくのはこのお方……）

そう思っていたのに、夜半を過ぎても膝も崩さず、静かに数珠をつまぐりながら、ひっそりと唱名をくりかえしている。

その間が実は、千姫の助命にすがる母の姿……と、わかったのは、夜明けになって二位の局を家康の許へ送り出すときであった……

二

二位の局を家康の許へ送ったのは、家康の許から加賀爪忠澄、豊島刑部が、城内に残っている者の名を書き出すようにといって軍使の形でやって来たからであった。

この両人はすでにこのあたりの蔵の内に、みんなが秘んでいることを薄々は感付いているようだったが、信十郎の配下の知らせでこれに会ったのは、信十郎自身と毛利勝永の弟の勘解由であった。

勘解由はまだ生き残って一戦しようと頑張っている……そういって、決して芦田曲輪に彼等を踏み込ませようとしなかった。

先方ではそれを、まだ相当な手勢があると見たのだろう、二位の局に残った人々の名簿を渡して差し出すまで、おとなしく待っていた。

いよいよ局が出てゆく時、治長は這うようにして寄ってゆき、その耳元にくどくどと囁いた。
「――ここに書き記した人々はみな責任を取って自害しようほどに、秀頼さまとご母公さまだけはご助命ありたいと……よいか、秀頼さまは稚児姓両三人、身辺のご用を足す者だけであとはご無用……ご母公さまとて同じこと、侍女一人だけにても十分ゆえ、ぜひともお助けあるようにと……よいのう、その他は一人も生など希う者はない。みな潔く死ぬほどに、その旨を、よくよく大御所に申し上げてくれるよう……」
その時、淀の方は、数珠を繰る手を止めてはっきりとした声でいった。
「――見苦しいぞ修理。わらわはの、二位の局の助命で助かろうとは思うて居らぬ」
「――はて、そのようなことは……」
「――そうではない。わらわが若し助かることがあったら、それは千姫どのの孝心で助かりたい。何よりも姫は無事に御陣所へ着いたかどうかを訊ねてくりやれ」
その一言を聞いた時に、奥原信十郎は、わが伯母の声を聞いたような気がした。
柳生石舟斎の妻であった春桃御前の……その伯母は、何事も母は子供のためにあるのだとハッキリいい、わが子に孝道を立てさせるために生きているのだとよくいった。
いま淀の方もそうした澄みきった心境らしい。秀頼のために千姫を送り出し、千姫の孝道をとげさせるためならば助かりたいと……
そういえば、局が出てゆくと、すぐまた静かに瞑目して口のうちで唱名をつづけ出した。
たぶん、今まであれこれと煩悩の虫のうごくに任せて、責め立てた過去の罪業を静かに悔いているのであろう。

秀頼はしかし、母のように寂然と澄んだ感じではなかった。
彼は夜通しぶつぶつと蚊を叩き、二位の局が出てゆく時には、居汚く俵にもたれて眠っていた。愚痴に疲れて、もうどうにでもなるがよいと、あれもこれも抛り出してしまった感じであった。
その前で膝も崩さずに坐っているのが真田大助……これはまだ父の死と、その最後の言葉をじっと噛みしめているかに見える。
その端然とした大助と並んで、十五歳の高橋半三郎と、十三歳の弟十三郎が、あでやかといいたいほどの前髪姿で、コクリ、コクリと無心に舟を漕いでいる。
二位の局が出てゆくと間もなくこの曲輪を井伊の軍勢が取り巻いた……

三

井伊勢は取り巻きはしたが、すぐに攻撃はしかけて来ない。
奥原信十郎はホッとした。
(ここに秀頼母子がひそんでいることを、二位の局が家康に洩したのに違いない)
そこで家康は、母子を保護するために井伊勢を派遣した……と、解したのだ。
そうなると奥原信十郎豊政の不思議な意地も、もうしばらくで貫けることになる。
改めて誰が母子を迎えとりにやって来るか？　とにかくその者の手に二人を引き渡したときに、彼の仕事は終わるのだ……
と、続いて井伊勢のほかに、安藤重信、阿部正次などの旗印が見えだした。

「本多上野介正純どのも、寄手のうちにござりまする」
郎党の一人からそう報告されたとき、
「来たか、上野どのが……」
奥原信十郎はいよいよ心の紐を解いた。
安藤重信や阿部正次は将軍秀忠の側近だったが、本多正純は家康の床几代も勤める懐刀なのだ……
（たぶんこの人が秀頼母子を迎えとってゆくに違いない……）
そう思うと、信十郎は糀蔵に引っ返して、ぐったりとしている大野治長に耳打ちした。
治長は、もう半死半生と言ってよい疲れ方だったが、異様な闘志で起きあがり、
「上さまに、朝の手洗水を！」
と、小姓たちに命じた。むろん洗面だらいや水の用意などあろう筈はない。
「はッ」と、答えて、秀頼の髪を直しにかかったのは十七歳の土肥庄五郎であった。
これも女かと見まごうあでやかな前髪姿で、彼はふところに小さな手鏡をしのばせていた。
髪を梳き終わると庄五郎はその手鏡を秀頼に渡していった。
「ご機嫌うるわしゅう、重畳に存じまする」
それは何時もの口なれた朝の挨拶だったが、この場合には、ゾーッとするほど冷たく胸に突き立つ言葉になった。
「半三郎と十三郎は、いつものようにお肩を」
「はい」

土肥庄五郎を娘ざかりに見立てると、高橋半三郎と十三郎兄弟は、まだ肩あげのとれない小娘に見える。
二人が左右から肥った秀頼の肩にとりついた時、秀頼ははじめて庄五郎に渡された鏡の中に視線をおとした。
事実、それ迄の秀頼は、まだはっきり眼覚めてはいない……ように見えた。
眼も口も乱酔のあとのようにしまりなく、心の焦点も決まらぬ感じで、ボーッとしていた。
それが鏡の中の自分と対面した時から次第に生色をとりもどした。
「半三郎、十三郎、もうよいッ」
二人の手を払いのけるようにしてから、
「大儀であったの」
あわてて労をねぎらう口調になり、高く小さな窓から射しこむ光線に向き直って、もう一度自分の顔を改め直した。
奥原信十郎豊政が、あわてて外へ出たのはその時だった。
言いようもない感情のたかまりが、いちどに号泣になりそうで、その場に同座しかねたのだ……

四

大野治長はすでに起ち居の自由を欠いている。自由に起てたら、彼は、必ず自分で、寄手の大将に会いに行ったに違いない。

（おかしなものだ……）

と、涙をおさえながら、信十郎は空を見上げた。

今日も照りしぶっている梅雨ぞらで、陽のありかから察すると、かれこれ四ツ（十時）ちかいと思われる。蒸し暑さはいくぶんおさまり、川筋から吹きあげる風がかすかに柳の枝をなぶっている。

（あの人も、ようやく大坂城の城代のつとまる人物に近づいたというのに……）

今までの治長では、どうにも器量が足りなかった。それが、片桐且元の退去から冬の陣を経て、見違えるように人物が出来て来た……と、思った時は、しかし、大坂城の運命も、彼の運命も窮まった時であろうとは……

（わしならば、這っても井伊をたずねていくが……）

そして、今の彼の赤心を、まともに直孝にぶつけていったら、相手も動かずに居れない反応を示すであろうし、彼もまた一段と高い境地で死に就けよう。

（いや、それほどの勇気を示していったらあの大御所だ、或いは治長も許せといい出すかも知れない……）

しかし、信十郎が軒先へ出たあとの治長は、やはり疲労に負けていった。

「わが身で交渉したいところながら、このありさまじゃ。速水氏、よしなに頼むぞ」

「心得ました」

「すべてはこの修理の心得違いであった……上様には、何もご存知あらせられず……」

速水甲斐は舌打ちして、

「さらば参ろう。ご免！」
気負った様子で信十郎の前へ出て来た。
「ご警護を」
信十郎が立ち寄ると、
「無用！」
叩きつけるようにいい捨てて、背中の小旗を立て直し、大股に井伊の馬印めざして歩いてゆく。
（これも、だいぶ人物は出来ては来たが……）
信十郎は、速水甲斐が、自分に向かって太刀をつけて来た場合を想像して苦笑した。
（固すぎる……）
柔軟自在の剣ではなくて、わが意志に固縛されて、身動き出来ない硬さを残している。
といって、相手が助けるつもりのところへ出てゆく助命の使者なのだ。これで充分使命は果たせよう……
奥原信十郎は、あわてて四、五歩あとを追って、思い直して立ちどまった。
もうこうした人の出入りで、ここが秀頼母子のかくれ家とは、はっきり知れてしまったのだ。
知れた以上は、ここに馬印を立つべきだったが、それはすでに本丸で、郡良列や渡辺内蔵助が自害のおりに焼失してしまっている。
（負け戦の生命乞い……それほどこだわることもあるまい）
信十郎は思い直して、また土蔵の中へ引っ返したのだが、その頃、彼の案じたとおり、井伊直

孝の馬印を立てた幕舎のうちへ、速水甲斐は必要以上に昂然と胸をそらして入っていったところであった。
「軍使、ご苦労に存ずる」
そこにはもはや、本多上野介の姿はなく、甲斐を迎えたのは、井伊直孝、安藤重信、阿部正次の三人であった。

五

人間は、わが身の生命を捨てきった時にふしぎな勇気を持てるものだ。
といって、その勇気と、平素の自分とは無縁のものと考えるのは間違いだった。平素の鍛練があらければ、その勇気も又あらくなり、平素の練磨が緻密であれば、その勇気の質もまた緻密になる。
速水甲斐は、その意味ではいささか自分に甘かった。
事実、主君秀頼母子の助命はしても、みずから助かろうとする気はみじんもない。それだけに
(死を決したのだ。何の恐るるところがあろうぞ)
彼は高飛車だった。
この事は立場を変えて考えると逆になる。死を決していながらも、なお相手を怖れているゆえ虚勢は捨て切れない……という答えにもなるからだった。
しかし戦国時代の人々はみな死を怖れまいとして、実は虚勢に生死していたのだから、この混乱は当然ある筈だったのだが……

とにかく、速水甲斐守守久は敗軍の将として、先ず相手の言葉を丁重に聞くことの利を忘れていた。
彼は、井伊、安藤、阿部の三人に迎えられて幔幕のうちに入ると、
「前の右大臣豊臣秀頼公の軍使として、速水守久まかり越してござる。床几を頂きたい」
と、先ずいった。
みじめに土下座させられたのでは、いうこともいわれまい……、という用心だったに違いなく、これが家康の前であったら、無くてはならない一語であったかも知れない。
おそらくこうした事の好きな家康は、
「――われを怖れぬ。天晴れの者！」
褒め千切って胸襟をひらいて行ったであろう。
ところが相手はまだ血気の人々なのだ。
（いわいでものことをぬかしくさる！）
最初からムッとして、
「あっぱれなご見識。城は焼失しても、右大臣は右大臣でござるからの」
実は、この最初のやりとりが、この日の悲劇を決定的にしてしまったのだ……
むろん速水甲斐も気付かなければ、井伊直孝も、阿部正次も気付いていない。
「上様ご口上は、大野修理より毎々言上、大御所にも将軍家にも十分ご承知のことと存ずる」
「いかにも、わざわざ城を焼かなんでも済むものを、まことに残念な仕儀でござった」
安藤重信が、からかうようにいった。

「それゆえ、面倒なご挨拶はぬきにして、早速ご用談に入りたい。秀頼公は、何刻ごろにご降伏あるや？　それを承って将軍家のお指図を仰ぐことと致そう」
どうやら談判の手順では安藤重信の方が手なれている。
「されば、正午を期して桜御門より出御のようにお取り計らい願いたい」
「正午……と、申すと、もはや一刻か」
「御意にござる。毎々申し入れてあるとおり、上様ご母子のご助命さえなれば、われ等一同は如何ような罪科を仰せつけられようと、いささかも異議は申さぬ。上様だけは、かくべつ丁重にお取り扱い願いたい」
すると、井伊直孝が肚にすえかねたように笑いだした。
「かくべつ丁重とは、雲にでも乗せてゆけといわっしゃるか。秀頼公は二度の叛乱にやぶれた大罪人、ありようは捕虜でござるぞ」

六

「捕虜と、申されると……」
速水甲斐の顔がひきつった。
「前の右大臣としては取り扱わぬ……と、いう意味でござるか」
「その通り……と、申したら何となさるな」
再び安藤重信が口をはさんだ。重信は兄の直次よりは短気で皮肉が好きなところがある。甲斐はその皮肉につられて声を荒らげた。

「それでは大御所や将軍家の御意に叶いますまい。大御所も将軍家も、上様が豊太閤のおん後とりであらせられることをお忘れはない筈じゃ」
「なるほど」
重信は、いよいよもの静かに、
「すると豊太閤の御後とりは、どのようにして扱うのが定法でござろうかの」
「輿のご用意を願いたい！」
「はて、お輿をの……井伊どの、この戦場のどこかに高貴なお方の召されるような御輿があったかの」
「フン」と、直孝は鼻の尖であざ笑った。
「七十四歳の大御所さえ、山駕籠に召されて出陣なされた戦場じゃ。都にでも参って探せばあるかも知れぬが、この焼跡にあるものか」
「お聞きのとおりじゃ」
と、安藤重信は速水甲斐に向き直った。
「無いものは無い……ということは、ここは戦場だからの。そして残念ながら豊太閤の御後とりは、再度謀叛を企てて降参して引き立てられて参られる捕虜なれば……お輿の所望には、応じたくても応じられぬ。仮にお輿があったとして、お縄はかけようか、かけまいか、その辺は如何なものでで」
「なに、お縄を!?　ぶ……無礼なッ」
「と、いわっしゃると、縄は掛けるな……という事で」

「いうまでもないこと！　お身たちはいったい、大御所のお心を何と思うてござるぞ」
「さあ……ここには大御所のご側近は居合わさぬ。われ等には、あのような巨木のお心など、到底わかる筈はない……と、素直にお詫びするより他にあるまい」
「ええッ、そのような気でお身たちは居られたのか。では、いったいどうして上様をご陣中までお伴い申すつもりじゃ」
「歩くのがおいや……と、仰せあればやむを得まい。馬の用意をするつもりであったが」
「ご母公さまにも、馬に乗れといわっしゃるのか」
「歩けぬ……と、仰せあれば、やむを得まい。まさか手車や口車で運ぶわけにも参るまいで」
「ならぬ！」
　速水甲斐は眼を血走らせて一喝した。
「仮にも豊太閤の御後とり、前の右大臣の御顔を諸人のさらしものにして、諸国大名の陣中を通行さすことなど、断じて許せることではない！」
「ほう……」
　と、又井伊直孝が呆れたようにため息した。
「すると、輿がなければ、右大臣は切腹なさるといわっしゃるか。しかと、左様に仰せられたのでござるな？」
　この問いかけは皮肉以上のものであった。
　速水甲斐はぐっと言句に詰まって、
（これはやり過ぎたぞ……）

そう感じた時には、しかし、輿か馬かの問答に、ケリをつけなければならないぎりぎりの時になってしまっていた……

七

どう考えても、秀頼母子の顔を諸大名の軍中や人夫、人足どもの間にさらさせることは出来ない……

（そのくらいのことは当然、寄手も考えていてくれると思っていたのに）

速水甲斐は、歯を喰いしばって善後策を考えた。ちょっとした言葉の行違いから、輿が無ければ切腹するのか？　と、問い返されてみると、そうした乗り物のことなど、彼は秀頼母子とも、大野治長とも、何の打ち合わせもしてなかった事に気付いたのだ。

（少なからず激昂して、自分でわざわざ相手に大きな罠を与えてしまった……）

「如何でござるな？」

と、こんどは取りなすように阿部正次が口を開いた。

「ご城内の輿などは、ご覧のとおり悉皆焼けてしまって見当たらぬ。と、すれば乗り物を探したところで、せいぜい負傷者を運んだ垂れもない山駕籠か、粗末な町人の辻駕籠より他にあるまい。そうした乗り物を探すがよいか、それとも武将でもおわすことゆえ、誰ぞの乗馬でご承知下さるか？」

速水甲斐はわなわなと震えだした。

阿部正次の言葉は情理をつくした感じであったが、しかし、甲斐に迫る返事の苦痛は同じで

あった。
「では、輿はない……と、いわれるのじゃな」
「ご覧のとおりの焼けあとでござるゆえ」
「さらば、今しばらくお待ち願いたい」
「お待ち……と申すと、正午を過ぎるということでござるかな」
「いや、その前に輿か馬かのことを、上様におたずね申して参りたい」
「今更(いまさら)……」
と、また井伊直孝がいいかけるのを、阿部正次はおだやかに押さえた。
「速水どののひとりの判断では決めかねる……と、あれば少々待ちましょう。なるべく早くお決め願いたい」
「心得た」
その場に居耐えぬものを覚えて速水甲斐は立ちあがった。
実はこれが、最後の使者としての彼の第二の失敗であった。
彼が、必要以上に胸をそらして出てゆくと、三人は顔を見合って舌打ちした。
「全然、わるいことをしたという悔(く)いのあとは見られぬの」
と正次がいった。
「引きちぎってやりたいような気がしたわ」
井伊直孝は気が立っているらしく、平素の彼の無口さと、全く違った昂(たか)ぶりかたであった。
「どうだ。このままでよいのか」

安藤重信は謎めいたことをいってニヤニヤと笑った。
「大御所は何百年か、何千年かに一人、出て来るか来られぬかという稀有のお人じゃ。そのお人の眼から見れば、秀頼の謀叛など問題ではあるまい。しかし、大御所のお亡くなりなされたのち、度々こうした謀叛があっては、凡人の御治世は危いものじゃ」
「ということは、どうしろといわれるのじゃ」
「何うしろ……と、わたしにいう資格はない。がちょっとこれは、考えてみなければならぬ大きな問題ではなかろうかの」
三人は、もう一度互いの心をさぐるように顔を見合って沈黙した。

八

速水甲斐が、籾蔵に引っ返した時、女性たちは淀の方に声を合わせて念仏しだしていた。
ここに残った者の名はすべて書き出し、それ等はことごとく自害しようと申し出ている。秀頼や淀の方は助かっても、あとの者は死なねばならぬ……そうした無常観が期せずして声になったのに違いない。
「やあやあ、泣きごと念仏はお止めなされ！」
帰って来ると切支丹信者の速水甲斐は、憎悪をこめてみんなにいった。
その場に奥原信十郎は居合わさず、半死半生の治長が甲斐の声をききつけて眼を開いた。
「おお速水どのか。して首尾は？」
「されば……」

投げ出すように治長の前に坐って、
「井伊直孝め、無礼至極の者でござる」
「というと……不首尾でござったか」
「あやつめ、上様ご母子を馬に乗せ、諸国諸大名の軍勢の中を引きまわす所存に違いござらぬ」
「なに、上様のお顔を……」
「さらしものにする所存……その証拠に、乗り物一挺の用意もない。この儀、何と致しましょうぞ」
問いかけられても、治長にそうした答えの用意のあろう筈はなかった。
念仏の声はやんで、籾蔵の内部は異様な静けさにしめられた。おそらくみんな全神経を耳にあつめて聞いているのに違いない。
「修理どの」
と、また甲斐は大きく舌打ちした。
「われ等は巧々と計られ申したぞ。いや、今の談判から察して、それに相違ない！」
「相違ないとは……？」
「あの大御所の古狸め、始めから上様を助ける気など無かったのじゃ」
「なに、大御所に助ける気は……」
「さよう、修理どのは人がよい。助けようと思うておわすのならば、井伊にせよ、安藤、阿部にせよ、あのような無礼な態度がとれるものではない。そうだ、これは安藤めであった。上様にお縄をかけて、山駕籠に乗せようかなどと吐かしくさった」

吐き出すようにいったとき、
「甲斐、これへ参られよ」
屛風の奥から淀の方の鋭い呼び声であった。
「は、お耳を汚して恐れ入り奉る」
「修理も来よ。今の一言、聞き捨てには相成らぬ。上様もお聞きであろう。参って、もう一度掛けあいの模様仔細にわらわの前で述べて見よ」
速水甲斐が、自身で怒りを発していなかったら、狼狽して前言をひるがえしたに違いない。ところが彼は逆に淀の方の疑惑に油をそそいでいった。
「はい。申し上げませいでか。それがし参って、上様軍使と申し立てましたにもかかわらず、彼等はそれがしを愚弄し続け……」
「先ず、こなた、何といわれたのじゃ」
「はい。上様は正午にここをお出でなさるゆえ、桜御門よりご案内あるように……と、申しましたるところ、雲にでも乗って行くのかと、これが井伊の無礼な嘲笑。それゆえそれがしは、輿で参る！　輿の用意を致されよと申してござりまする」
「すると、向こうは何といわれた？」
淀の方は、冷静であろうとして、じっと眸を宙にすえ、声をころして訊き返した。

九

「輿などはない！　と、にべもない返事……いや、ここは戦場なるぞと嘲笑って……」

甲斐は自分の憤怒が必要以上に言辞をはげしく歪めているのに気がつかなかった。

「強って乗物が必要ならば、死人を運んだ山駕籠か、路傍の辻駕籠を見つけて来て、上様を後手にしばりあげて乗せてやろうかと……」

「上様も聞いておわす。もうよい！」

淀の方は身を震わしてさえぎった。

「そうか……井伊は、大御所の命をうけ、上様をお迎えに参ったのではなかったのか」

「おそれながら、上様もご母公さまも取り遁すなと……」

「修理！」

「は……はいッ」

「於千は、上様やわらわのために……」

「いや、そのようなことはありませぬ。直接御台さまはご承知なくとも、助命嘆願のことは、お側を離れぬ刑部の局がよう心得て居る筈にござりまする」

「では……では、井伊の無礼は？」

「恐れながら、井伊直孝は、将軍家のご采配にて繰り出したるものかと存じまする」

「秀忠どのは、上様やわらわを助けおくなと申すのじゃな」

「は……はい。いや、内心のことは知らず、大御所さまほどには、お気遣い下さらぬかと」

「そうか。やはりそうであったか……」

手にした数珠を、額にあてて放心したように呟いたとき、

「そうではない！」

と、速水甲斐はまた言った。
「これは、何も彼も、腹黒い大御所の、計算し尽した筋の運びじゃ」
「甲斐どの、控えさっしゃい」
「いや控えてはおれぬ。わしはもう一度戻って相手に上様の御意志をお伝えせねばならぬ。輿か馬かじゃ！」
速水甲斐は奥の秀頼に問いかける口調になって、
「上様は、馬で、誰れ彼れのご陣中を引き廻されながらのご連行に、耐えさせられまするや否や？　お伺い申しとう存じまする」
「待ちや甲斐」
また淀の方はさえぎった。
「これは、どうやら大事になった……天下さまの御あと取りが、捕われ人として敵の陣中を引き廻される……いや、引き廻されてよいものか何うか……すぐにご返事もなるまいゆえ、上様のご思案の定まるまでは静かに待とうぞ」
そう言われると、甲斐はギョッとしてわれに返った。
（そうだ！　これは、やはり馬か自害かの問題だった……）
「甲斐……」
「はいッ」
「誰ぞ竹筒に水が残っているであろう。別れの盃の用意をしやれ」
「別れの水盃……」

「そうじゃ。上様だけはお助け申したい。が、わらわはここに残るとしよう。いや、残るも行くも、これが今生の別れと決まった……」

女たちがいっせいに泣きだした。

まだ秀頼の返事はない。おそらく彼は、次第に身近になって来る自分の生死を手さぐりながら味わい直しているのに違いない。

速水甲斐が、小姓たちの竹筒に、わずかに残っている水をあつめてまわった。

十

集めた水を腰のひさごに入れ直しながら速水甲斐は次第に冷静さを取り戻した。

（馬で行くことを承知するか？　それともここで生害せねばならなくなるか？）

これはわずかな面目にこだわったり、言葉尻を取りあったりしていてよいことではなかった。生きるか死ぬか？　すでに動かしようのない二者択一の時が迫っている。

いや、それだけではない、水盃の用意を命じた淀の方は、自分はここで果てるぞ、と言い出してしまっているのだ……

そうなれば、秀頼の返事ももう七分以上は、聞かずとも想像できる。

（――母を失い、みなを見殺しにして、わし一人で何でおめおめと生き残れようぞ）

甲斐は愕然として、そっとひさごのかげから秀頼の様子をぬすみ見た。

秀頼は膝に扇子を立てて、眼を閉じてまっすぐに上体を立てて坐っている。肥りすぎていて端然とは言いがたかったが、少なくとも気おくれしたり取り乱したりしている姿ではなかった。

（このお方には珍しい、きちんとなされたご姿勢じゃ……）

「甲斐、用意はよいか」

淀の方が、彼のうしろから呼びかけた。

「用意がよくば、先に参るこの母から、先ずお盃を頂きましょう」

「は……はい」

「あいの屏風を除けてたもれ、上様、お眼をおあけなされて、この母をよう見ておいて……」

高橋半三郎が立って屏風をとりのけると、秀頼は、言われるままに眼を開いた。眼のふちがまっ赤になっているのは、彼もまたすでに最期の時の切迫を知り、とつおいつ思案していた証拠であろう。

「上様、わらわは、上様と共にあってはならぬ、罪業深い女子であったような」

秀頼は答えなかった。ジーッと母を見つめたまま、かすかに腹を波打たせている。

「わらわは、これで三度、わが住まう城の焼ける焔を見まいた」

「………」

「最初は、父浅井長政の自害した小谷の城、次は、母を焼いた越前北ノ庄の城……そしてこんどは……こんどは……ただ一人の、わが子の住まうこの大坂城にござりまする」

「………」

「最初に父を失い、次には母を焼き、そしてこんどは子を殺す……これ以上に呪われたおそろしい宿業が又とあろうや……わらわのあるところ、必ず不幸がつきまとう……」

そこまで言って、しかし、はげしく淀の方は首を振った。

「いいえ、それゆえにこそ、上様に、この不吉な母と別れて貰わねばならぬのじゃ。わが子の運まで破るこの母と、ここで別れて貰わねば上様のご生涯に陽は射しませぬ……さ、十三郎、その水盃、呪われた母から上様にまわして縁を切りましょう。注いでたもれ」

速水甲斐は黙ってひさごを愛くるしい十三郎の手に渡した。十三郎は言われるままに、食器箱から小さな朱盃をはずして淀の方の前にすすんだ。

淀の方はかすかに笑ってそれを受けた。ほんとうに、これで不幸と縁が切れる……そんなふうに考えていたのかも知れない。

秀頼はまだ射すような眼でじっと母を見つめている。

十一

速水甲斐は、淀の方が呑みほした水盃を、高橋十三郎が、秀頼の前にささげてゆくまで、声をかける隙が無かった。

それほど淀の方の悠揚さが、逆に彼の心を緊縛してしまっていたのだ。

そのいうことの内容はとにかくとして、呪われた母と離れて生きてくれるよう……そうした才覚は母でなければ考えられない無限の慈愛をかくしている。

(果たして、これで上様は、生きる気になってくれるかどうか……?)

「さ、これで悪縁は断ち切れました。母から子への別離の盃……」

そこまでいって淀の方は、きびしい表情になって甲斐をかえりみた。

「お盃が済んだらの、上様をすぐにお伴い申すのじゃ。上様はご武将なれば、馬上のご通行もさ

して恥辱にはなるまいほどに」
「は……はいッ」
「そうじゃ。お供はの、半三郎と十三郎、他に一両人の稚児姓だけでよい」
秀頼は黙って十三郎の手から盃を受け取った。
「母上、頂きまする」
「おお、ようこそお聞きわけ下された」
顔をあおのけて、ぐっとそれを呑み乾すまで、淀の方だけではなく、速水甲斐も大野治長も、秀頼が母の言葉を聞き入れる気になった、と思うほど、それは自然な動作であった。
呑みほすと秀頼はかすかに笑った。笑いながら、
「荻野道喜、これへ出よ。その方に頼みおかねばならぬことがある」
と、さりげなく盃を差し出した。
「ははッ」と、道喜は入道頭の鉢巻きをとってすすみ出た。酌は依然十三郎である。
「道喜、ご苦労ながらそなたには母上と女中どもの介錯を頼みたい」
瞬間一座はギョッとなった。
「胸を刺してから長く苦しむは不愍ゆえ、手ぎわよく頼み入るぞ」
「は……はいッ」
「次には毛利勝永」
秀頼は、黙然として弟勘解由と右手の奥に並んでいる勝永を手招いた。
「お許に、このわしの介錯を頼もう。よう戦ってくれた……忘れはおかぬぞ」

勝永は茫然として、盃を持ったまま治長を見やり淀の方をうかがった。淀の方が何か叫んだ。

と、その瞬間だった。パチパチと屋根のあたりで火のはぜるような音がして、続いてダダーンとあたりをふるわす銃声だった。

監視している井伊勢の銃隊が、速水甲斐の帰りがあまりにおそいので、約束の時刻の切迫を警告する威嚇の発砲をして来たのだ。

「それはなりませぬ！」

勢いこんで淀君が、秀頼をなじりだすのと、この催促の銃声とが皮肉なことに一緒になった。

「あ！」と、甲斐は居すくんだ。

「やはり、われ等を陥入れる気であったぞ」

大野治長はポカンと口を開けたまま言葉もない。

（やはり話はまとまらなんだと見える……）

そうした心で聞くとこの銃声は、井伊勢の攻撃再開の銃声にしか受け取れない。

人生の随所に伏せられている偶然の陥穽は、更に皮肉な渦を添えた。ワーッと女たちは悲鳴をあげて身をよせ合い、男たちは血相変えて立ち上がってしまったのだ……

童心俗心

一

この朝、家康は眼に見えて上機嫌であった。

合戦の犠牲は決して小さくない。しかし本丸炎上のおりに、火焰の中で果てたと思った秀頼夫妻が生きていた……

いや、ただ生きていたのではなくて千姫はすでに坂崎出羽守の手で、本多正信の陣所へ担ぎこまれ、家康が前々から考えていたとおり、良人秀頼と淀の方の生命乞いをしているのだ。

「——わしに異存はない。ようやった！　と、褒めてやりたい……だが、わしは采配一切を将軍家にお任せした隠居の身じゃ。その方たちから将軍家へよろしゅう取りなしてやってくれ」

本多正信と大野治長の家老米村権右衛門にそう言った。

（これで、これは片付いた……）

ホッとしているところへ、更に二位の局が生き残っている人々の連名状を携えてやって来たのだ。

この事の意味は、戦場の習慣からして、言うまでもなく「降伏——」である。

生き残ってある者のうち誰々を助け、誰々に責任をとらせるか。それさえ決定すれば一切は終わりである。家康はホッとして、わざと責任者の指名は秀忠に任せることにした。

「佐渡、われ等が、あまり差し出ては相成るまい。が、味方も多く死んでいるのだ。修理や速水甲斐は許せまい。いや、毛利勝永も……」

と言いかけて、家康は惜しそうに舌打ちした。

「全く無意味な戦をしたものじゃ。真田にせよ、毛利にせよ、天晴れな者であったがのう」

本多正信は、つつしんでその旨を秀忠に伝えると約束して引きさがった。

それから間もなく秀忠自身、土井利勝を伴って茶磨山へ挨拶にやって来た。

その時には、家康は、於千にあいたいと、しきりに思っていた。

そこで型どおりの挨拶が済むと、また正信を呼び出して、千姫と一緒に脱出して来ている刑部卿の局を呼んでくれるように言いつけた。

「おお、こなたがおちょぼか!?」

刑部卿の局がやって来ると、家康は眼を見はってため息した。

「そうか、なるほどこれは立派に刑部の局じゃわい。われ等が年齢をとる筈よ。したが、ご苦労だった! 御台所の望むよう、秀頼どのも、淀どのも、生命の助かるように計ろうてつかわすゆえ安堵しやれや」

「はい……いいえ……」

「どうじゃ、於千は喜んで居るであろうな」

ともすれば眼を曇らせながら、手ずから局に一ふりの短刀を与えていった。

「はい、いいえ……と、申すとどちらなのだ。まだ戦のおどろきが納まらぬと申すのか」

「あのう、御台所さまは、上様がご自害なさると……」

「なに、秀頼どのが自害する……そう思い込んでふさいでいると申すか」
「は……はい」
「ハハ……案ずな、秀頼どのはの、芦田曲輪の糘蔵にいるそうな。そこでその糘蔵を井伊直孝が守護して居る。わしも上野どのを見にやらせたが、安藤重信、阿部正次など屈強なものどもが出向いて力を協わせているゆえ、心配はないと申して参った。そうか、於千はそのように良人の身を案じているのか」
又ひとしきり老人らしい感慨にふけってから、
「そうだ、わしが迎えに行ってやろう！」
眼をかがやかせて言い出した。

二

おちょぼの刑部卿の局は、こんな子供のような家康を見たことはなかった。
彼女の記憶にある家康は、いつもあたりへ重々しい威圧をひろげて口を閉じずにいられない存在だった。それが、今では、風の中のタンポポの種子のような気軽な感じに変わっている。
そこで局は自身の不安を、必要以上にくどくど打ち明けることが出来た。
「大御所さまのお心はようわかって居ります。しかし、将軍家は、御台所をきびしくお叱りなされました」
「ほう、何といってお叱りなされたぞ」
「妻は良人に殉ずべきもの、於千は何故秀頼のそばで自害せなんだと……もし、そのような思召

しが上様のお耳に入りますると、上様は生きてはおわさぬ。やはりわらわは上様のおそばを離れてはならなかったのじゃ……おちょぼ、こなたを怨むぞと……」

「そうか、於千が……そのような、いじらしいことを申したか」

その時には家康は、ほんとうにダラダラと涙を流した。そして、自分でも少なからずテレ臭かったと見えて、

「おちょぼ、わしの涙はな、悲しいから出るという涙ではない。年齢のせいでの、眼のしまりが無くなったのじゃ。ハハハ……」

そういいわけをしたあとで、本多正純を呼びつけた。

「今何刻ぞ」

「はい、四ツ半（午前十一時）にござりまする」

「そうか。秀頼が桜御門へ出て来るのは、正午の約束であったな」

「仰せのとおり」

「よし、桜御門まで迎えに参ろう。わしは馬でゆく。が、べつに輿一挺を用意させよ」

「かしこまりました」

正純は、敢て輿については問い返さなかった。問い返すまでもなく、これには淀の方を乗せるつもりと解釈できるからであった。

「ではおちょぼはの、戻って於千をなぐさめてやってくりゃれ。於千の代わりに家康が迎えに参った。ほどなく三人手をとって無事を喜びあえるであろうと」

刑部卿の局は、そうなると、もう一つ甘えて訊かずにいられない事があった。

「すると、大御所さま。上様や御台所さまのために……あの大和へのお国替えは、そのままに……？」
「おお、その事か」
家康はちょっと渋い顔になり、
「大和……とは参るまいの。何しろ秀頼は我意を張りすぎた。江戸の近く、下総のあたりかの……しかし、それまで於千が案ずることはないと申せ」
「は……はい」
「では、出かけようぞ」
こうして家康は、本多正純以下の旗本五十騎あまりを従えて桜御門に向かった。
桜御門は大坂城の大手にあたり、本丸千畳敷の大玄関に通ずる正門に当たっている。
秀頼は必ずこの門から出たいというに違いない……そう察して、ここから出るように計らったのも家康だった。
内部はいちめんの焼野原であったが、門だけはいかめしく残っている。
家康は門前で馬を降りると、床几にかけて、
「いま何刻じゃな」
とその時だった。
問題の芦田曲輪の方角で思いがけない銃声が沸き起ったのは……

三

「今のは何だ？」
と、軽く小首を傾げてから、家康は、事の重大さに気付いたらしい。
「今のは何だ正純ッ!?」
と、膝をたたいて眉をあげた。
「はて、たしかに銃声のようでござりましたが」
「銃声はわかって居る。糀蔵にかくれている者共は、鉄砲を持っていたのかッ」
「さて……？」
正純は、半ばとぼけて、
「そのようなことは、まさか……」
「と、申すと撃ったのは、井伊の手の者か」
「何ぞ不穏な空気を見せたのでござりましょうか、秀頼公が」
「見て来いッ」
たまりかねて家康は怒号した。
「直孝のあわて者めがッ。わしが……わしが迎えに来ているものを……」
「では、早々参って……」
「待てッ！」
「は……」

「正純！　まさか、その方たちは、将軍家のかくべつな密命を受けているのでは……そのようなことを、予にかくしているのではあるまいなあ」
「いいえ、さようなことは余人は知らず、私めは」
「そうか。では参れッ。参ってきびしく……」
そこまでいった時に、またドドドッという、筒口そろえた二、三十挺の銃声だった。
本多正純は、さすがにキッと顔をあげると、
「ご免！」
そのまま立って走り出し、バラバラと四、五人正純の家来がこれに続いた。
家康は床几から突っ立ったまま、顔中を眼にして前方を睨んでいる。
パチパチと、三度目の銃声は単発だった。
（これだけ、銃声が重なるということは何であろうか……？）
糀蔵から、あわて者が斬って出たのか、それとも秀頼の従者の中から井伊勢に向かって乱暴を働く者があったのか……
約束の正午になって、雲の切れ目はなかったが、真上の太陽は上半身をジリジリと蒸しあげて来る感じであった。
家康は何度か籠手で汗を拭いながら宙を睨んで考えた。
（仮に、秀忠が、家康の意志如何にかかわらず、秀頼は助けまい……）
そう決意して、井伊直孝や阿部正次に旨をふくめてあった……としたら何うなろうか……？
秀頼が蔵を出て来る。直孝がそれを射撃する。みんなが騒ぐ……それでもう一度撃ちまく

る……何れにせよ、これは大坂城内の、ほんの一角で、見ている者は井伊勢の他にないという条件下の出来事なのだ。

「――秀頼は、最後に斬り込んで参ったので」

止むなく撃ったといわれたら、それまでの事ではなかったか……

家康は爪を噛みだした。

七十四歳の戦場で、まさかに、これほど意外な終幕が彼を待っていようとは思いもよらず、眼のくらみそうな怒りと、もどかしさとが胸いっぱいの渦になった。

「うぬッ、たわけどもめが……」

家康は、到頭檻の中の野獣のように、ぐるぐると床几のまわりを歩きだした……

四

本多正純が、井伊直孝の指揮所へ着いた時には、あちこちの井伊勢の中から高笑いが聞こえていた。

どこにも敵の姿はなく、前方七、八十歩の糒蔵との中間は、蒸しつくされたような芝草の空間をなして静まり返っている。

(何という不手際な……)

と正純は舌打ちしながら幕舎の中へ駈けこんだ。

(これで秀頼母子は、ほんとうに助かってしまったわ……)

それは本多正純にとっては、かなり腹立たしい成行きだった。

家康が、桜御門まで出迎えに来ている……そうなっては、将軍秀忠の意志がどうあろうと、もはや誰も手出しは出来ない。
「何としたのだ。今の銃声は？」
幕舎の中でも、緊張などとは凡そ縁遠い表情で、井伊直孝、安藤重信、阿部正次の三人が笑いながら冷水で汗を拭き合っている。
「大御所が、待ちきれずに、わざわざ桜御門へお出でなされたぞ。何とか……」
と言いかけて、正純は舌打ちした。
それ以前に、事を処理出来なかったのかという言外の詰問だった。
「なに、大御所が……」
と安藤重信は、おどろいたように言ってニヤリと笑った。
「そうか。出て来られたのか」
「おちょぼどのに会われての、千姫さまが、秀頼公は自害なさる……と、お案じのよし聞こしめされ、じっとしておられなくなったらしい。それにしても、さっきの銃声は何であったぞ」
「約束の時刻が参ったゆえ、催促致したまでのこと」
井伊直孝がぶっきらぼうに答えるあとから、安藤重信がまた笑った。
「前の右大臣さまはの、輿でなければ籾蔵を出られないと申すのだ。諸人の前に玉顔をさらすことなど思いも寄らぬ。そこでご母公さまの分と二挺用意せよと……天子にでもなった気でいくさるわ」
「乗物ならば……」

と言いかけて、本多正純もハッとしたように顔から緊張を解いていった。
「そうか……牛車の用意、とまでは言わなんだか」
「とにかく、馬の用意はある。ご母公は、やむなければ山駕籠……それでよいかどうか訊ねて参れと、掛合いに参った速水甲斐に申しわたしたのだ」
井伊直孝の説明するあとから、阿部正次がはじめて慎重に口を開いた。
「速水甲斐が戻ったまま、なかなか返事をして来ませぬ。約束は正午の刻。それが到来したゆえ、催促の発砲をしてみては……と、提案したのは、この正次でござる」
「フーム」
正純は、またあいまいに笑いをころして頷いた。
「約束の時刻を無視した……とあっては捨ておきがたい。阿部氏の計らいは戦場の理に叶うて居る……よろしい！　まだ出て来る気配はない。こんどは、この上野介が提案仕ろう。井伊どの、もう一度ご催促を……」
正純は、あっさりと言ってのけて、到頭これもニヤリと底深い笑みをもらした。

五

もう四人の間には、ハッキリと通い合う「意志——」があった。
輿か馬かの問題で、一応交渉を切りあげて行ったのは相手の方だ。それが約束の時刻に返事をもたらさないというのは、充分攻撃の口実になり得る落度だ。
「これ以上待つ必要はない」

と、正純はいった。
「大御所が、わざわざ桜御門までお出迎え下さっているというのに、ベンベンとここで待つ手はあるまい。もう一度銃声で催促なさるがよいわ、井伊どの」
「心得た」
と、井伊直孝は幔幕を出かけて、
「無礼な者どもだ。約束を何と心得ていくさるのか」
わざわざ捨てぜりふを残して出ていった。
いちばん慎重な阿部正次が、
「やむを得ぬなりゆきでござる」
そういってため息すると、安藤重信はしきりに頷きをくり返した。
「全く、止むを得ぬ……相手がたとえ何者であろうと、このような無礼を許しておいたのでは天下の御法は相立たぬ。しかもここは戦場だ。戦場には戦場の……」
そこまでいった時に、第四の銃声が声をうばった。
三人はギョッとして顔を見合わせ、それからいい合わせたように外へ出た。
依然として、籾蔵からは何の応答もない。と思った時に土蔵の右斜めに立っている柳の木蔭から一つの人影が、尾を引くように土蔵のかげへ消えていった。
「何者だろう!?　外から内へ入っていったぞ」
「はて？　遁げ出すのならばわかって居るが、入ってゆくというのは……」
阿部正次が首を傾げて、

た。

「しまった！」――と、小さく叫ぶのと、本多正純が、手をあげて井伊直孝を呼ぶのと同時であった。

「井伊どの、土蔵から水門へ、ぬけ穴があるやも知れぬぞ。もはや遠慮はいらぬことじゃ」

「心得た」

実は、このおりの人影は、奥原信十郎豊政だったのだが、寄手の人々は、信十郎が、何のために、城内に入って働いていたかなど知るよしもなかった。

井伊の手は再びあがった。

パチパチとまた銃声がまばらに鳴りだし、ワーッと寄手は頭を下げて地上を這い出した。

殆んど裸体の上に黒い鉄砲、鎧をつけた異形ないでたちで、声ほどに獰猛ではなかったが、動き出すともはやそれは停まらなかった。

依然、糀蔵のうちからは一発の反撃もない。ジリジリ地を這う鉄砲隊のうしろから、槍隊も穂尖きをそろえて動きだした。

この方はがっしりと腰をすえた赤備えの勇士たちで、しかし誰も昨日までの戦のように猪突はしようとしなかった。

（土蔵の中に秀頼母子がいる……）

そうした配慮……というよりも、それは、すでに反抗のない戦と、本能的にわかっているからに違いない。

それでも槍隊は、土蔵から三十歩ほどの位置で、鉄砲隊と入れかわり、改めて喊声をあげ直した。そして、そのまま、兜を下げて応答のない糀蔵に突入していった。

先頭の突入してゆくさまを、指揮所の前で四人はジーッと睨んでいる。

井伊直孝はむろんのこと、本多正純も、阿部正次も、安藤重信も、息をこらしてしばらく身動きもしなかった。

六

（この戦の最後に焦点をしぼられた、小さな建物の中で、いま何事が起ころうとしているか……？）

それは突入していった将兵以上に息の詰まる、想像と期待の的であった。

改めていうまでもなく、四人とも決して秀頼の生存など希っていない。ここへ来るまでに、それぞれ多くの犠牲を強いられ、はげしい憎悪と敵対感情を盛りあげて来ているのだ。

いや、それ以上に彼等を猛々しくしているのは将軍秀忠の意志が奈辺にあるかを、彼等はよく知っている……という自信であった。

その意味では彼等は家康よりも、ずっと秀忠に近い時代と感情を生きて来ている。

（眼に余る大坂のわがまま！）

これをしも許しておいて、何うして天下の示しが付こうか。口実は何とでも付けられる。隙があったら討ち取ることだ……そうした意志はいわず語らずの間に、彼等の胸に通い合っている。

しかし、先頭の一隊を呑みこんだ糈蔵の中は意外なほどに静かであった。

井伊直孝がたまりかねてせかせかと土蔵へ向かって歩きだした。

空はさっきよりまた暗く垂れ下がり、照りしぶったまま蒸し返している大地に、再び細い陰雨がおちだしそうな気配であった。

「フン、降りだしたわ」
次に歩きだしたのは、本多正純であった。正純は、生き残っている大野治長や速水甲斐や毛利勝永兄弟などが、改めて寄手と交渉を蒸し返している……と思ったらしい。
「この期におよんで何をぐずぐず……」
彼の先を行く井伊直孝は、すでに土蔵に十数歩……と、思った時に、また意外な喊声があがった。
籾蔵からではない。京橋口のあたりである。正純は、歩みを止めて振り返り、その喊声を聞き直した。
喊声をあげたのはいうまでもなく味方であろうが、その声には無数の悲鳴が混じっている。男たちだけではなくて女子供の必死の声が……
「京橋口を開いたな」
と、正純は思った。
そこには城内で死におくれ、逃げおくれて行き場をなくした雑兵や人足どもや老幼婦女子の群れがもう一団、生きた心地もなく寄りあっていたのだが……
戦が終わってから解放せよといってあったのに……
或いは秀頼の出城が手間どっているので、ここでも寄手が腹を立て、逆に外から攻め入ったのかも知れない。
「もしそうだったら、眼もあてられぬ虐殺がはじまろう。困ったものよ」
再び視線を籾蔵に転じて、

「あ！」
と正純は声をのんだ。
今までひっそりと静まり返っていた籾蔵の入口からまっ白な煙の渦が、もくもくと盛りあがってあふれだしている。
（やった！）
正純はわれを忘れて、その噴き出してくる煙の下へおどり込んだ。

七

人間の想像力……それは時に滑稽なほど的はずれの貧しさを露呈してみせるものであった。
本多正純ほどの者が、煙のうずの中に飛び込むまで、籾蔵の中の事態を想像し得なかったというのは、何という迂闊なことであったろう……
井伊直孝が、いちばん最初に発砲した時、すでに籾蔵の中では当然考えられなければならない最後の事態……を迎えていたのだ。
おそらく二度目の銃弾が、土蔵の屋根や壁に突き立った時には、すでに中では半ば以上が死んでいたのではあるまいか……それを知らずに四人は長い間、ひとり相撲をとっていたことになる。
いちど飛び込んだ正純が、はげしく煙にむせて飛び出して来た時には、
「火を消せ！　火を消さぬかッ」
井伊直孝は、あわてて外でわめいていた。

いや、その火もすでに奥は、紅蓮の焰に代わりかけているとわかると、
「火は消せぬ。屍体を運び出せ、屍体を焼くなッ」
狼狽しきった命令に代わっていた。
それからしばらくは血泥の中の火事場さわぎで、中の様子が、かなり正確に推測出来るようになったときは、中の焼けるものはみな焼けて、殻だけ残った土蔵の前の陰雨の下に、三十四の屍体が無造作に置き並べられたあとであった。
「いったい、これは何としたのだ!? 最初におどり込んだ時には火は放ってなかったのか」
茫然として屍体を見てゆく正純の耳に、井伊直孝の怒声がガンガンとひびいて来る。
「はいッ。はじめに火の気はございませなんだ。それが、屍体の数をかぞえているうちに……」
「誰ぞ味方で、放火した者があるのかッ」
「いいえございませぬ。自害した者のうち、まだ息のある者があり、それが放けたに相違ありませぬ」
「そのおり数えた屍体の数は?」
「たしかに三十五体かと……それが今数えれば三十四、数え違いであったに相違ございませぬ」
「うかつな奴等だ。とにかく大御所のご検分があろう。急いで屍体を清めておけ」
そうした声を背に聞きながら、正純は、正直なところ、これですべてが終わったような気がしなかった。
荻野道喜と、彼も顔を見知っている坊主頭の屍体が手にしていた紙片をとり、二位の局の書き出した人数と照合してみているのだが、屍体とその人間の死とが妙にちぐはぐで繋がって来な

かった。
道喜の書き残した紙片には、
「——上様二十三歳の首級、毛利勝永どのはね参らす。ご母公さま四十九歳、荻野道喜刺し参らす……」
と、書いてある。そして、そのように秀頼の屍体のわきには首が飾られ、淀の方の屍体は胸を刺されたまま薄目をあけて陰雨にうたれている。
しかし、その首と胴の離れた屍体も、胸を刺されて薄眼をあけている淀の方も、それが生前あれほどうるさかった人間なのだとは思いもよらず、これはこれで、全く別の物体としか見えないのだ……

八

「こなたが、まこと淀のお方か……」
正純は、口に出して小さく呟いてみた。
むろん屍体が言葉を返す筈はない。しかし、そこに薄眼をあけて虚空を映しているブヨブヨと白く肥えた一個の屍体が、関東の知嚢たちを、十数年にわたって激昂させ、家康も、秀忠も、翻弄して飽くことを知らなかった妖婦……そうだ、正純は、淀の方を、秀吉も、三成も、家康も、治長も狂い迷わせた稀代の妖婦と思いこんでいる……とは、思いも寄らない他愛なさであった。
どんなに深い業因を持った妖婦もまた、死んでしまえば、一匹の死魚にひとしい。蒸れた小雨にうたれて、そこからただよいだすものは、そこはかとない無常観ばかりであった。

ざくろのように傷口をひろげた胸は、すでに閉じられていたが、薄く開いた唇からはまっ黒に染められた前歯が光ってのぞき、その下に丸い舌がのぞいている。吐血の名残りであろう、妙に赤い舌の尖から雨水が薄い血になって首すじに流れていた。

「そのあたりに、打ちかけがあろう、掛けてやるがよい」

正純は、従者にそう命じておいて、次の秀頼の前に立つと荒々しく地べたを蹴った。

（この男が、まことあの、豊太閤のお子であろうか？……）

それは男として決して尊敬できる相手ではなかった。六尺を超える巨体はしまりを欠いた贅肉で、胴を離れた首級は、かつて見たこともないほど疱瘡のあばたの眼立つ顔に見えた。

「母ひとり、安心させ得なかった不肖の倅め」

そういえば、どこにも、あの鋭く張った豊太閤の面影はなく、死相はそのまま渋面をつくった草相撲の貧しさに見えた。

そしてその貧相な秀頼を取りまくようにして、右に真田大助と加藤弥平太、左に高橋半三郎と十三郎兄弟の遺骸が並べられている。

これはまた正視に耐えぬほど、思いつめた美しい少年たちの死顔だった。いや、死顔の美しかったのは少年たちだけではない……

大野治長もその子治徳も、毛利勝永兄弟も、速水甲斐とその子の出来麿も……さすがに覚悟しきった武人として、ぐっと胸にせまる悲壮美をもっていた。

「ほう、これが木村重成の母御か……」

三十余の屍体を数えながら見ていって、末尾におかれた八ツの遺体の前へ来ると、さすがに正

純は、われを忘れて手を合わさずにいられなかった。
治長の母の大蔵の局を最初にして、重成の母の右京太夫の局、淀の方の大上臈宮内の局、饗庭の局、阿玉の局の他に、正純の知らない女の屍体が三つある。
何れも誰かに刺して貰ったのだろう。おとがいの下に両掌を合せて、一突きで死んでいる者もあれば、二突き、三突きされた者もある。
しかし、何れもその死顔はおだやかで、すでに苦の現世からはのがれ出ている表情だった。
「申し上げます」
と、背後で、小姓の声がした。
「大御所さまはご気分あしく、陣中へはお戻りなさらず、このまま二条城へご帰還遊ばされる由にござりまする」
「な、なんだと」
正純は、われを忘れて怒鳴り返した。

九

「だ……だれぞ、この事を大御所のお耳に入れたのかッ」
正純が煽り立てるようにいうと、
「それがしでござる」
あとに続いて、これもひっそりと遺体を見てまわっていた阿部正次が、鬢の雨滴をはらいながら答えた。

「それがしは、事の始終を将軍家にご報告致す役儀がござる。と、申して、わざわざお出迎えなされておわす大御所のお耳に入れねばこれも手落ち……」
「この、上野介をさしおいてか⁉」
「事情ご了察下されたい。抵抗は止み、みなみな自決、委細は上野介どのよりご報告の筈とだけ」
「えいッ、差し出がましい！」
それは平素の正純とは思えない、狂ったような激怒ぶりで、
「それがしの検分の済まぬうちに……大御所と将軍家の間に、もしも、もしもお仲違いのことでもあったら何とする気じゃ」
「さようなことは……」
と、阿部正次は、低い声で、しかしハッキリといい返した。
「ご采配一切を将軍家にお任せなされておわす筈……仮に、将軍家が踏んごんで、討ち参らせようとご異存など仰せ出される大御所さまではございませぬ」
自信にみちた答えにあって、さすがの正純も口をつぐんだ。
「申し上げます」
と、又小姓がいった。
「上野介さまは急いで二条城へ参るに及ばぬ。あとの始末、丁重に致して戻るよう、又、供養の儀は、小栗忠政どのをつかわされ、先ずもって一心寺の上人にご依頼なされた。そう伝えよとの仰せでござりまする」

「待てッ」
すぐに立とうとする小姓を、正純はあわてて呼び止めた。
「むろんわれ等も追っつけ参る……が、大御所には、すでに桜御門を発たれたのか」
「はい。ご気分あしくおわしまし……」
「ご病気と見受けられてか」
「はい……いいえ」
「どちらなのだ。しかと申さぬか」
小姓はびっくりして、
「みなで……予をたばかった……と仰せられ、ご激怒なされておわしました」
「聞いたか阿部、みなで予をたばかったと」
「たばかるどころではござりませぬ」
阿部正次は顔いろも変えなかった。
「上野どのもご覧のとおり、たばかって時を稼ぎ、うまうまと自害してのけたのは、秀頼方にござりまする」
「ウウン、もうよい！　して、大御所のご側近におわすは誰じゃ」
「はい。板倉さまご父子がご守護してござりまするゆえ、二条城までのご道中に不安はない……と、心得まする」
「そうか、よしッ。何れ追いつこう。くれぐれも気をつけて……と、板倉どのに申し上げよ」
「かしこまりました」

小姓が駈け去ると、本多正純はぐるぐると遺体の前を歩きまわり、やがて立ちどまって、ポカンと雨の空を見上げた。
何も彼もが、現実ではないような、まるで手がかりのない放心であった。

十

その頃家康は、乗って来た馬は小者に曳かせて、用意して来た駕籠に乗りこんで、ふしぎな放心さで守口へ向かっていた。
とつぜん二条城へ帰る……といいだしたので、船の用意は間に合わず、守口まで陸行してもらうよりほかなかったのだ。
まだ茶磨山の陣払いも済ませていない。それどころか一応そこへ秀頼も淀の方も伴って帰るつもりで、迎える用意を命じて来てあったのだ……
おそらく一心寺の焼け残った一坊に、千姫と刑部卿の局もやって来て、その到着を待っているに違いない。
ところが家康は、問題の糘蔵に火の手があがると、
「――板倉を呼べ！　勝重を」
血相変えて怒鳴り立て、勝重がやって来ると、
「――うぬも同類かッ」
と、凄まじい憤怒を叩きつけた。
「――わしはな、秀頼母子を助けよと申したのだ。それなのに鉄砲など打ちかけて……それで相

手は、火を放って自害したといいくるめる……おのれ等のすることなど、わからぬ家康と思うて居るのかッ」

勝重は答えようがなかった。というのは心のどこかで、彼もまた、そうならねばよいが……という危惧は持っていたからだった。

（ほんとうに助けたいと思っているのは大御所さまただ一人……）

いや、秀忠も内心は、わが娘や娘の婿なのだ。助けたく無い筈はなかったが、しかしこれは天下を預かる将軍として、みじんも私情はさしはさむまいとする苦しい立ち場に立っている。

しかし他の側近はそうでは無かった。彼等は小牧の合戦以来、どのように意地わるく豊家にいじめ抜かれたかをみな父祖に聞かされながら育った人々なのだ……

いい変えれば、遠い昔の両家の怨みがいまだに消えずに糸を引き、その怨霊どもが寄ってたかって家康の意志を引き千切ってしまったのだ……

「――黙って居るところを見ると、うぬも一つ穴のむじなだわい。ようもようも、この家康をたばかりおった。こうしてくりょうわ」

いきなり鞭をふりあげて、しかし家康はそれを勝重の上に振りおろしはしなかった。

激怒と体力の均衡が失われていたようでもあり、考え直したようでもあった。

ヨロヨロとよろめいて倒れるように床几に掛けると、

「水……水を持て」

肩を波打たせて腕を垂れた。

そしてあわてててささげる小姓の水を一口のんで、こんどは放心したように動かなくなってし

まった。

「勝重、まだ燃えているか」

しばらくそうしてそういった時には、もう怒りはおさまっていた。

「――はい。煙はだんだん薄らぎましたが」

「――そうか。わしはこのまま二条城へ戻るぞ」

「――でも、それでは将軍家が……」

「――たわけめ、今会うたら眼もあてられぬこととなるわ……みんなの前で、わしが、もしも将軍家の髪を引っ掴んでひきずりまわしたら何とするぞ」

それから又しばらく、視線さえも動かそうとせずに考え込んでしまった。

十一

家康の生涯で、これほど惨めな、骨にしみる孤独を味わわされたことはなかった。

(この年齢になって……このような淋しさを)

今まではどんな時にも彼は決してひとりではなかった。少年時代には多くの旧臣たちと一緒であったし、それ以来は、家格の重みや覇気満々の闘志と希望に支えられて、つねに、重荷と感じるほどの多数の運命の中心をなして来た。

そして晩年は、いよいよそれ等の子孫の訓育に心を傾け、それはそれなりに信頼もされ、効果もあげて来ている……と、信じていたのだ。

ところがそれは一つの自惚れであったらしい。彼は自分から、

「――わしはすでに死んだと思え」
　そう言いながら、実は生きすぎるほど強烈な自我の中に生きていた。あらゆる面で、死後のことまで睨みとおして指図してゆく気であったが、それはしかし、秀忠や、その側近の若者たちには実はあまり尊重はされていなかったものらしい。
　いや、尊重されないなどというものではない。秀頼母子のことでは完全に無視されてしまっていた。
（わしが、あれほど申し聞かせてあったのに……）
　人間は、それが人間である限り、全く人情を無視して生き得るものではない。
　戦国の世を泰平の世におき替えるためには新しい秩序の必要なことは言うまでもなく、そのよりどころを示す「法度――」はきびしく守らせてゆかなければならなかったが、しかし、法度があるから人間がある……というものではなかった。
　法度も又、どうしてよりよく人間を活かすかの工夫にすぎず、その上にもう一つより大切な天地自然の「法――」がある。
「――わしが秀頼母子を助けようとするのは、その天地自然の法のためなのだ。わしは秀頼も千姫も愛おしい。それに太閤はとにかく、われ等にさまざまなことを訓えてくれた先人であり師でもあった……それゆえ、この場合私情をふみにじってまで、法秩序の維持を考えると、それは域を超えた無理になる。無理は人心を怖えさせたり萎縮させたりして、決して永続するものではない。よいか、法度もまた人間に守らせようとするものである限り、人情を全く離れてしまってはならないのだ」

おりある毎に秀忠にそれを話し、秀忠も充分それが分っていた……と見てとっての、
「──わしは死んだものと思え」の申し渡しであり、采配の委譲であった。
ところが、それは家康の思いあがりで、秀忠にもその側近にも、法と法度、法度と人情の関係など、まるきり理解されていなかった。
おそらく彼等は、
「──大御所も耄碌されたぞ」
そんな気持ちで、せせら笑っていたのかも知れない。
(そうだ。わしは……たった一人になったのだ)
秀吉が病床で、あやしい愚痴をくり返すようになった時にはもう完全に孤独であったが、それと同じ末年が家康の上にも襲いかかろうとしているのだろうか……?
「──勝重、行くぞ」
そう言って駕籠に乗った家康の眼は、どうしようもない涙でいっぱいになっていた……

十二

それでも家康は、桜御門からそのまま引っ返すことだけはしなかった。
「──駕籠を城内に入れよ。そして京橋口から出るように」
それはやって来た道筋の人々に、ひとりで戻る自分の姿を見られたくないという見栄のほかに、城内を一応検分して二条城へ引きあげたのだという、内心の怒りや秀忠との不和をみんなに悟られまいとする用心であった。

板倉勝重は心得て城内を通って京橋を渡ると野田、坂口から東野江へ道をとった。そして東関目へかかった時には、もうポツポツ行手から戦は終わったとして城下へ戻って来る町人に出あった。
家康は放心したように、依然として黙りこくっている。
小者に乗馬を曳かせ、自身は徒歩で駕籠わきを歩いていた板倉勝重は、
「もう戦は終わったぞ、早ようわが家に帰って商に精を出すがよい」
行きあった商人に声をかけておいて、家康に話しかけた。
「みなみなホッとした顔でわが家へ帰ってゆきます」
しかし家康は答えない。
「大御所さま、まだ、お怒りはおさまりませぬか」
「………」
「これはどう考えてみても、将軍家のお指図ではございませぬ。何かの手違いでございまする」
「たわけめ」
「手違いであろうと無かろうと、死んだ秀頼は戻らぬわ……」
家康は力なく舌打ちした。
「将軍家は……」
と、眼顔で駕丁の歩速をゆるめさせながら、
「大御所の御意にさからうようなお人ではございませぬ。それにお側には本多正信老もござれば、これは何かの手違いにござりまする」

「黙って歩け」

「は……」

「これで家康は人生最後の泥をかぶったわ……わしの淋しさなど、その方たちにわかるものか」

いわれるままに勝重は駕籠側をはなれた。そして、果たして家康の淋しさが、自分にはわかるまいかと自問してみた。

(わからぬことはない……)

太閤の遺孤で、すでに実力のない秀頼を無理むざんに殺していった……そうなると、千姫の脱出までが、情を知らぬ身勝手者の狡猾な策謀であったとなろう……

いや、それよりも、家康は血の通わぬ冷酷な秩序の鬼であったと解されまいものでもあるまい……世間の人情はつねに弱者に味方し易いものなのだ……

「勝重……」と、こんどは家康の方から呼んだ。

「枚方へ着いたらの、将軍家の許へ使いを走らせよ」

「かしこまりました」

「わしは疲れたゆえ、子供たちと遊びたい。遠江の中将も尾張の宰相も、すぐさま二条城へ寄こしてくれるように……」

そういってから更にもう一つつけ加えた。

「そうだ。越後の忠輝も寄こせと申せ。みなみな心もとなくて、たまらなくなって来たわ」

勝重は、ホッとした。どうやら家康の平常心が、幼い子たちの教育へ向いて来たらしい。

十三

「心得ました。すぐさま使いを出しまする」
　板倉勝重は枚方へ着くのを待たず、早速岡山の秀忠の陣営へ使者を走らせ、事のついでに茶磨山で家康の帰りを待っている伜の重昌にもなるべく早く二条城へ来るように言付けさせた。
　この時は同勢は、勝重配下の同心たちを加えて三百人あまり……しかしみんな乗れるだけの船はなく、船の中では、家康と勝重はいやでも手の届く眼と鼻の間に控えなければならなかった。
　家康は、勝重と向い合っても、しばらくはその顔を見ようとしない。細い雨あしの空へ、水のような視線を投げて放心をつづけている。
　勝重は、はじめて骨の凍りそうな、ふしぎな孤独感に襲われた。
（戦争は見事に勝ったのに……）
　家康の胸には拭い去れない傷痕を残してしまったらしい。
「勝重」
　再び家康が呼びかけた時には、曳き綱をピーンと張った船は、かなりの速力で遡江を続け、逞しい掛け声で、京支配の川筋にさしかかろうとしている頃であった。
「は……はい。何ぞご所望でござりましょうか」
「あとの処置じゃ、大坂のこと一切、その方は、将軍家に任せておいても不安はないと思うかどうじゃ」
「はい。もはや……何の不安がござりましょうや」

「そうか。すると、わしは差し出すぎていたことになる」
「それは……しかし、ご親子の情として……いや、もしも思召すこともあらば、すぐさま使いを走らせまするが」
「まあよい。考えてみると言わいでものことまで言っていたかも知れぬ。城の金銀は阿部正次、青山忠俊、安藤重信の三人に監視させよとか、城そのものは松平忠明に守らせよとか……やはりこれは年寄の愚痴であったわ」
「恐れ入りました。愚痴などではござりませぬ。当然のご配慮……と、将軍家もつつしんで、そのようにお命じなされておわしました」
「その方は、将軍家を何と見るぞ、立派に天下を治め得るご器量をお持ちと見て居るのか」
勝重ははじめて胸にたまった鬱気を吐いた。
（もはや怒りはおさまった……）
「はい。何事によらず、大御所さまのご功業を汚すまいと必死でおわすご孝心、類のない後継者かと存じまする」
「そうか……では、わしは、もう一度死に直さねばならぬわけか」
「死に直す……と、仰せられますると？」
「生きているうちに息を引きとる……むずかしいものじゃ。生きたままで死ぬことはの」
勝重は、はじめて大きく頷いた。
家康ほどの人物、家康ほどの年になっても、やはり「我執――」を捨てきったという自信はつねにゆらぐものらしい。

「よい事をうかがいました。勝重も心にとめて修練につとめまする」
「勝重」
「はいッ」
「わしは将軍家を叱らぬことにするぞ。その代わり、二条城へ着いたらの、藤堂高虎を呼んでくれ」
「はい。代わりに藤堂佐渡でもお叱りなされまするか。それがよいご思案かも知れませぬ」
家康の顔にはようやく平素の落ち着きが戻って来た。

十四

板倉勝重の苦心は、二条城へ着くとともに更に効果を顕示することになった。
というのは、家康がさっさと二条城へ引きあげたと知って、将軍秀忠は、時を移さず早馬をとばして、諸事進行の報告書を届けさせてあったからだ……
むろんその中には、秀頼母子の自害のさまも記してあったが、それと同時に、海岸方面への逃走者にそなえて、九鬼守隆と小浜光隆に命じて海岸線の警備を厳にさせ、城の金銀監視は、家康の意見どおり、阿部、青山、安藤（重信）の三人に命じ、更に城内の焼跡整理は、西国、中国の諸勢に向う百日間の期限をきって申し付けた旨詳細に認められていた。
そして、この日も関ケ原の例にならって、勝鬨はあげさせず、ただ軍神を祭り、敵味方の屍体の供養を済ませたうえ、義直、頼宣の幼い両弟と、家康が会いたがっている藤堂高虎等を引き連れて、自分も伏見城へ引きあげると報告してあった。

「――これは、誰の知恵であろうかの。本多佐渡か、藤堂高虎か？」
家康は、秀忠が急速にあとの始末をつけて、父に遅れず伏見城へ引きあげるという決定にひどく満足したらしかった。
激怒して、とつぜん桜御門から帰ると言い出したのは家康である。しかし、これは考えてみるまでもなく、人々に奇異の感を抱かせずにはおかない短気さであり異常なことであった。
それを秀忠はピーンと鋭く感じとって、時をおかずにテキパキとあとを片付け、自分もさっさと伏見城へ引きあげる……そうなれば、家康も秀忠も、前もって相談してあったのだと、誰も感情の衝突などには気付くまい。
（そうか、わしの失敗を、おぎなってくれるほどの器量を身につけて居ったのか……）
その感慨を言葉にすると、
「――誰の知恵かのう？」
となる。勝重ははじめて笑った。
「親の身になると、子供は何時までも幼いような気のするものらしゅうござりまする」
「そうか。親は無くとも子は育つか」
「神仏のお力は、まことに至妙偉大なもので」
「勝重、したが、この報告の中には、於千がことは一言も書いてない。これは何と解せばよいと思うぞ」
「ご遠慮なく」
と、勝重は落ち着きはらって言いきった。

「お爺さまが、思うままおかばいなされて宜しかろうと心得ます。孫を甘やかす祖父に許された我儘かと」
「そうか。父としては、ただ一人生き残った娘は、かばい切れぬか」
「ご賢察願わしゅう」
「よし、ではその事は……そうじゃ、もう一人会いたい男が居ったぞ。それ、こなたも懇意な、本阿弥ケ辻の翁がことよ」
「ああ光悦どので」
「そうじゃ。あの翁を呼んで孫娘の扱い方を訊ねてみよう。あれは臍もつむじも真っすぐすぎるほどに真ッ直ぐな拗ね者じゃ。そして、ことの次第を高台院に……そうじゃ、あれに報告させるがよいわ」
「では、早速光悦を呼ばせましょう」
「勝重、時々わしは泣くがの、この泣顔の話は末代までも内証じゃぞ。わしはの、於千と秀頼をここへ並べて、しみじみ説教がしてみたかった……それが……わしのたのしい夢であったものを……」

十五

板倉勝重の眼から見ても、家康はやはり涙もろい老人に還っているところがあった。
愚痴ではない。判断力はいぜんとして恐ろしいほど的確だったし、決断も鈍っているとは思えない。

しかもなお、以前の家康に比べて、ひどく性急な気がするのは、やはり天寿の切迫を知るところから来るのであろうか。

「——では、早速光悦どのを呼びにやりましょう」

勝重はそういっていったん廊下へ出たのだが、出てしまってから考え直した。

本阿弥光悦は家康のいうとおり、つむじも臍も真ッ直ぐすぎるところがある。この男を呼んで千姫の扱いなどを相談したら、秀忠よりももっと厳しい判断を下しそうであった。

「——ご母公も右大臣さまもお亡くなりなされた……と、すれば当然ご簾中さまのご自害も、お許しなさるがよろしかろうと……」

そんな答えをなされたのでは、せっかく納まりかけた家康のこころがまた乱れる。

（そうだ。まだあのまっ正直な翁を御前に呼び出す時ではない……）

そこで控えの間に入ると、勝重は全く別の意味の手紙を認めて、光悦のところへ持たせてやった。

「——秀頼母子に自害されて、大御所もがっかりしておわすが、貴殿もしみじみ人の世の無常をお感じなされてあろう。それがしの察するところでは、ご落胆の大御所の関東ご帰還は存外早くなろうかと思われる。ご帰還なされればお年齢ゆえまたの拝謁は叶うまい。ついては貴殿より高台院さまをお慰めあって、ご東下までに一度大御所をご慰問なされては如何……その時日は改めてそれがしよりお知らせ申すゆえ、そのおりの話柄などあれこれお考えおき下さらば幸甚」

という内容の手紙にした。

光悦は、関東と大坂が二度の手切れ……と聞いた時に、しみじみこの世が厭になったと嘆いて

いた。

「——人間というのは何という愚かな、救いがたいものであろうか」と。

認めた手紙を本阿弥ケ辻の光悦の許に持参させて戻って来ると、家康は脇息の上に両手をおいて、とぼんとした表情で虚空を見ていた。

「どうじゃ。本阿弥の翁はすぐに参るか」

「それが……只今他出中にて」

「そうか、長い旅にでも出ておるのか」

「旅……というほどではない。一両日中には戻るであろうと……手紙を持参させましたゆえ、帰り次第参ることと存じまする」

「そうか」家康は、答えたあとでジーッと勝重の面に見入った。

「所司代よ。わしは於千がことは、あの翁には訊ねぬことにする」

「と、仰せられまするると?」

「その方が、わざと留守……せっかくそういうてくれたものを、訊ねるにもあたるまい」

「そ、そのような……」

「よいのじゃ。時に嘘は大切な労わりじゃ。正直の方がずっと酷薄な場合がある。よいよい、本阿弥の翁がやって来たら、長いつきあいであったゆえ、何ぞ褒美を取らせて帰す。案ずるな」

板倉勝重は、肩をふるわして泣きだした……

大和の悲愁

一

柳生宗矩は、その日ずっと将軍秀忠の側にあって「秀頼母子救出——」の知らせを待っていた。

彼は岡山の陣営に詰めていたので、速水甲斐と井伊直孝等の輿か馬かの問答も知らなければ、返事催促の発砲のことも知らなかった。

(何も案ずることはない。母子のお側には奥原信十郎がついている)

彼がこの従兄によせる信頼は、柳生一族の誇りにかけて、自信にそのまま通ずるほどのものであった。

(見識もさることながら、腕も分別も他の者とは比較にならぬ)

その信十郎が、いざと言えば、関東勢に対しては、将軍秀忠や大御所の名を明かし得る立ち場にあるのだ。

したがって、この方のことでは、みじんも心配せずにただ約束の「正午——」を待った。

ところが、その正午になって実は、この戦の最も大きな汚点とも言うべき京橋口の虐殺がはじまった。

寄手にすれば無理もなかった。この時すでに家康は桜御門まで入っているし、約束の時刻は来

てしまった。というのに京橋口の先の桝形には、実力不明のかなりの人数が集まって籠ってい
る。
実はこの人数は、城内に居残った老幼婦女子がおもで、それに逃げる機会を失った傷兵や雑兵
の集まりだったのだが、その内容は寄手にはよくわからなかった。
万一これが有力な部隊で、一挙に桜御門へ押し出し、出口をふさぐようなことがあっては一大
事と、寄手は秘かに案じていたのだ。
むろん秀頼母子が正午までに、家康に迎え取られて来れば問題はなかった。
「——戦は終わった！　さあ、武器を捨てて出てゆくがよい」
それだけで簡単に済んだのだが、時刻がおくれたために逆になった。
（——もしや、何か企らんでいるのでは？）
その懐疑はそのまま警戒心にもなれば恐怖心にも発展する。
そこで、もはや待つべきではないとして、閉ざされた門扉を爆破して、桝形のうちへ突入して
しまった。
この爆破の音響を柳生宗矩は秀忠の前で耳にした。
「——何事ぞ。今の音は!?」
秀忠も血相変えて床几を立った。
「——見て参れ又右衛門」
「——心得ました」
それから馬を飛ばしてやって来て、現場へ着いた時には、あたりはもはや眼も当てられぬほど

むざんな屍体の散乱だった……
　若い女子が腹部を裂かれて死んでいる。無抵抗の子供もあれば、老人、老婆も斬られている。僧形もあり、町人風もあり、髪を引っつかんでねじ伏せられている子持ちの母の屍体もある。
　いや、その先ではまだ半裸の侍どもが狂ったように惨殺を続けているのだ。
「止めえ！　止めぬと、味方と雖も撃ち殺すぞッ」
　又右衛門宗矩は怒号しながら、自分と同じようにもう一人、抜刀したままこの乱暴を静めようとしている人物のあるのに気付いた。
「——あ、奥原信十郎……」

二

　柳生又右衛門宗矩は思わず自分の眼をこすり直したほどであった。
（こんなところにどうして信十郎が……？）
　信十郎は当然秀頼と淀の方の傍にあるものと思っていたし、あらねばならぬ人物であった。
　彼は大声で狂いまわる半裸の侍たちを叱りつけながら、信十郎とおぼしき人物に近づいた。
「そこにおるのは、奥原ではないか？」
「あ……」
　と、相手はかすかに声をあげた。
「何としたのだ。もはや引き渡しは済んだのか信十郎」
　しかしその問いに答えはなく、信十郎は身をひるがえして、石垣ぎわの濠の中へ飛びおりた。

こんどは「あっ……」と又右衛門が声をあげた。
当然はげしい水煙の立つ筈の水面から、小さな小舟が一艘あわてて漕ぎ出していったからだ。
（舟で来ていたのか、何のために……？）
柳生宗矩はしかし、目前の騒ぎをしずめるために、それ以上、その疑問について考えてみる暇はなかった。むろんその底に信十郎への深い信頼があるからで、その間に芦田曲輪の籾蔵の中まで想像を走らすことをしなかった。
奥原信十郎の方でも、実は同じであった。
彼は、家の子の一人から京橋口の危急を告げられると、
（それは拙いぞ）
と、突嗟に思った。
むろん籾蔵のうちにも眼の離せない不安のタネは幾つかあったが、京橋口で騒ぎを起こされ、引き堀の出口をふさがれてしまったのでは、最悪のときの脱出口が役に立たなくなってゆく。
「――漕いでくれ。急いで！」
夢中でやって来る途中で門扉爆破の音を聞いた。
そして到着したときにはもはや眼もあてられぬ虐殺が始まってしまっていたのだ……
それは合戦でもなければ喧嘩ですらなかった。前後を仕切られた桝形のうちに追いつめられ、戦意も闘志も失ってしまっている羊の群の中へ、それ以上の数の狼どもが牙を剝いておどり込んだ形の暴行であった。
ヒーッ、ヒーッと悲鳴があがり、その悲鳴と血しぶきが、一層狼どもを凶暴に駆りたてる。

「――待てッ！　戦は終わったのだ。待てと申すに」
奥原信十郎豊政は、文字どおりわれを忘れた。
それはほんの一瞬だったが、自分が、何のためにやって来たのかさえ思い出せず、気がついた時には、小舟を乗りすてて、みんなの中に割って入っていた。
おそらく爆破された門口から柳生宗矩が入って来なかったら、彼は、無数の狼どもの冷静さを取り戻すまで、手の引けない狂気の渦に巻きこまれてしまうことになっていたに違いない。
（そうだ！　おれは水路の安否をたしかめに来ていたのだ……）
宗矩に呼びかけられて、彼は、愕然としてわれに返った。
われに返ると、その耳に聞こえて来るのは、京橋口の悲鳴ではなくて、芦田曲輪の籾蔵へ向けて放される井伊勢の鉄砲の音であった……

三

（しまった！）
奥原信十郎は、小舟の上で、千切れるように唇を嚙みしめた。
自分の留守に何事が起ったのか？　むろん想像していないことではなかった。昨日の戦でさんざん大きな犠牲を払わせられた井伊勢が主力なのだ。気の立っているのもわかれば、反感の強さもわかる。
「――急いで漕げ！」
と、家の子をはげました。

「――水路はまだあいている。いざとなったら手筈どおり……」

それは自分自身に言いきかせる叱撻で、

「――よいか。落ち着け、落ち着いて急ぐのだ」

しかし、その信十郎が、前夜から苦心して、むしろ張りの、厠と見せかけている柳の木蔭に小舟を漕ぎ寄せて来た時には、もう井伊勢は籾蔵のまわりに殺到していた。しかし蔵のうちはシーンと静まり返って何の生気も感じられない。

ゾーッと全身が総毛立った。

「さ、着きました」

弾みきった家の子の声をききながら、信十郎はしばらく凍りついたように動かなかった。

（すべては終わってしまった……）

ほんのわずかな隙に、あたかもそれを狙ってでもいたかのごとく彼の苦心は根こそぎ叩きつぶされてしまったらしい。

誰かに惨殺されたのか？

それとも自害して果てたか？

そう言えば、彼のこの場を離れていた時刻は、ほんの一瞬であったようにも思われ、無限に永い時間であったようにも思われる。

（とにかく生きている様子はない……）

彼が真一文字に籾蔵の中へ駈けこんで、その眼でそれを、ハッキリと確め得たのはそれから何秒ほどの後であったろう……？

彼の眼に映じた死の土蔵は、三十余人の血に彩色された、言いようもなく静かで厳粛な大饗宴のあとに見えた。
（そうだ！　これをみな土足で蹂躙させてはならない……）
それは理性であったろうか、それとも「美――」をまもろうとする花守の情感であったろうか……
彼は夢中で消え残っている燈芯の火と油を、蓆や俵に点けてまわった。
井伊勢の先手が白煙の渦を見て、一気に土蔵へ躍り込んで来たのはこの時である……
当然逃げる間のない彼は、秀頼と淀の方の間にのめって死屍を装うことになった。
放心以後のそれ等の動作は、決して平素の信十郎の沈着に計算されたものではなかった。何れも熱にうかされた動物のように、ひどく本能的な動作であった。
こうして、井伊直孝と本多正純がのり込んで来た時には、彼はもう、井伊勢の雑兵の中に混って、せっせと屍体を運び出したり、浄めてまわったりしていた。
そうした素早い変身を目立たせなかったのは言うまでもなく焔と煙で、
（許して下され、許して……）
淀の方の胸に突き立った短刀をとり、まっ白にハジけて盛上った傷口を、小袖の襟で蔽ってやったのも彼であった。
その頃から奥原信十郎豊政は、ようやくわれに返ったのだと言ってよい……
われに返ると、はげしい自責の虜になった。
（豊家をおれは潰してしまった……）

四

誰がどのような意志で策動しようと、秀頼夫婦と淀の方の、二人だけはきっと助けてみせてやる……それは、大和の奥ケ原を捨てて、大坂城に入って来る時からの、信十郎豊政の何う曲げようもない意地であった。
ところが、その意地は、彼がほんのちょっと眼をそらした隙に、粉々に打ち砕かれてしまったのだ……
秀頼の屍体に首級は無く、淀の方は、まるで昨日までの心労から解放されたような安らぎを見せた死顔でこと切れてしまっている。
(助かったのは千姫ひとり……)
それが却って、あやしく彼の良心を刺戟して、洗われた秀頼の首級が、井伊直孝の手で運び去られるまで、体中に力の入れどころのない、せかせかとしたやる瀬なさにさいなまれた。
体は絶えず動かしている。動かさなければ寄手の兵に怪しまれて、この上血を流さなければならなくなると、わかっているからだ。
しかし、せかせかと追い立てられるように動いていながら、
(いったい、おれは、これから、何うすればよいというのだ……？)
泥池の表面に浮いてくる泡のように、ただブツブツと口の中でくり返すだけであった。
(おれはこれから、どうするのだ……？)
三十余人の枕を並べた死屍は、人別をあらためたうえ、ひとまず芦田曲輪のうちに埋められる

ことになった。
その指図は井伊直孝よりも、主として、本多正純と阿部正次によってとり計らわれ、岡山の本営から土井利勝が駈けつけた時には、籾蔵の周囲から、すでに戦場の昂奮は消えかけていた。
誰も彼もが細い雨に濡れながら、人間本来の、沈痛とも、無常とも、いいようのない顔になり、別の土蔵から持ち出された荒ゴモに包んで死屍を運ぶごとに、掌を合わせたり、念仏したりしだしている。
こうして築かれた新しい土饅頭がいいようもない静けさで雨を吸っている……と、思ったときには、信十郎の周囲には、もう人影はまばらであった。
井伊直孝はむろんのこと、秀忠のもとから駈けつけた土井利勝も、家康の床几代の本多正純も、阿部正次、安藤重信、青山忠俊等の姿もなかった。
彼等には戦勝のあとは時務が山積しているからであろう。
(しかし、このおれは、いったい何を……?)
信十郎は、その場に居残っている彼の姿をみんながかくべつ訝かしみもせずに去ってゆくのがたまらなく淋しかった。
「もし旦那さま……」
気が付くと家の子の新七が、彼の頭上に菅笠をかざして、不安そうに顔をのぞきこんでいた。
「みなみな対岸で待っています。早よう舟にお乗りなされては?」
その声を待ってでもいたかのように、奥原信十郎は号泣しだした。
新七は、黙って笠をかざして立っている。泣きやむのをそっと待ってやらなければ……と思っ

たのに違いない。
しかし信十郎の号泣は、すぐに止む性質のものではなかった。
雨が急に勢いを加え、音をたてて笠を叩いた。

五

奥原信十郎は、十分間あまり身を揉んで泣き続けると、ピタリと泣き声をおさめて新七をふり返った。
もうその時には血をふくんだ眼の奥に、平素の信十郎がかすかに顔を出している。
新七はホッとして、
「では、舟に」
と、またいった。信十郎は微笑した。腹にしみ入るような、底ぬけに淋しい微笑で、そのまま新七のかざす菅笠の下から出ていった。
「もし、旦那さま！」
しかし、その新七も、信十郎が何をめあてに歩きだしたのかを知ると追うのをやめた。
信十郎は小舟をかくしてある位置とは逆の、銃火を浴びて崩れかけた土蔵のわきの海桐の花に向かって歩いている。
たぶん九州か四国あたりの船乗りどもが運んで来て植えたのであろう、そこには十尺ほどの海桐の木と、まだ苗木といってよいほど稚い菩提樹が植わっていた。
（花の好きな旦那さま……）

信十郎はまっすぐにその海桐の花に近づくと、いきなりその花びらをむしりだした。

いや、花だけではない。こんどは隣の菩提樹の葉までむしって、両掌いっぱいに掴んでゆく……

新七は息をのんだ。どんな場合のどんな草花でも、蕾一つ、花びら一枚、生きているものとして大切に扱う信十郎だった。

「――植物も生きものながら、犬や猫のように苦痛も空腹も訴え得ない。いじらしいものよ」

そういっている信十郎が、なぜこのように暴々しく花や葉をいじめつけるのであろうか……？

新七が小首をかしげて、その方へ歩きだした時に、両掌いっぱいに狼藉の花を掴んだ信十郎豊政は、身をひるがえして戻って来る。

「あ……」

と、新七は首をすくめた。信十郎の視線の先に何があるかを見たからだった。

信十郎はまっすぐに、雨の中の土饅頭めざして歩いている。

それにしても、そこに捧げる花をなぜあのように乱暴に引っ千切って来たのであろうか？

海桐の花びらは、純白から黄に代わりかけてはいたが、それにしても枝ごと供えたらまだまだ立派であったろうに……

海桐の花と、菩提樹の葉をつかんだ信十郎豊政は、新しい塚の前に立ちどまると、しばらくジーッと土の中まで睨み徹すような眼をして立ち尽した。

もうあたりの血の香は大地に溶けて、泥から土に変わった川筋の地殻の匂いに掻き消されてしまっている。

「土に還るか」

ポツリと呟いて、奥原信十郎は右の手から先にふりあげた。
「これを受けよ……喝！」
続いて左の手からも花と葉とが一緒に大地へ叩きつけられた。
雨の中のはげしい一喝が、籾蔵のほとりにわずかに残っている番人たちをおどろかしたと見えて、その眼がいっせいにこっちを向いたが、もうその時には信十郎は足の向きを変えていた。
「舟……出してよいぞ」
その声は又、泣いているように小さかった。

六

万一の場合には、秀頼と淀の方を乗せてゆくつもりの船。
その船を、しかし今では、居残った番人の誰一人として怪しむ者はなかった。
敵として相対して来た豊家側の者は一人も生き残っていないのだ……そう思い込むと、奥原信十郎豊政と、彼の方々へ伏せてあった家の子たちとは、何の疑いも持たれない寄手の味方に変容してしまっている。
もともとどちらに対しても憎悪もなければ偏見もない。その立ち場の動きが極めて自然に敵も味方もない不思議な姿を顕現していったのかも知れない。
（さすがに旦那の兵法はすぐれたものだ）
船を漕ぎながら新七は思った。
（これで、又、みんな揃うて大和へ帰れる）

大和には、まだ親や妻子を残している者も少しはあったし、妻子の無い者でも数百年にわたる祖先の墓だけはみな奥ヶ原に持っている。

それ等の墓が、旦那に従って戦って戻った人々をよろこんで迎えてくれるに違いない……と、思うだけで、船を漕ぎながら新七の眼は何度か霞んだ。

(生きて帰れるとは、夢のようだ)

川筋へ漕ぎだしたところで、

「釆か山かッ」

と、九鬼守隆の吹流しをつけた船に問いかけられたが、「釆だ」と答える新七の声は弾み切っていた。

行く先は八軒家……その岸辺には、すでに家の子たちが集まって、信十郎豊政の到着を待っている。

いうまでもなく、もはや川筋でも残党狩りは始まっていた。あの岸、この岸で追う者と追われる者の小ぜりあいは見られたが、しかし堂々と漕ぎ下るこの船を怪しむものは殆んどなかった。

船の上で、奥原信十郎豊政は、じっと腕を組んだまま考えこんでいる。

(今はまだ話しかけてはならない……)

あれほど一途に助けようとしていた秀頼公もご母公も失ってしまったのだから……と、新七は包み切れないよろこびを、さまざまな故郷の風物におきかえながら黙っていた。

眼の前に天満橋が大きくあらわれ、その橋上をあわただしく戻って来る町人たちの姿が見える。何れも戦が終わったと知って、新しい明日の生き方を計算して、わが家に戻る人々に違いな

かった。

「新七……」

不意に信十郎豊政が話しかけて来たのは、八軒家が、左手に近々と見えてからであった。

「そなた、まだ母御が生きていたな」

「いいえ。もう三年も前に亡くなりました」

「そうか。墓の下であったか」

「でも、私は、戻ったら、先ずそのお墓に無事を知らせに行くつもりで……」

「そうか。墓の下にあっても、母は子を待とうほどになあ」

「旦那さまも、お墓詣りをなさるでしょう」

「うん」

「村の衆がみんなで、どんなに喜んで迎えてくれるか。まだ、しかし、子芋は小さすぎますな」

「子芋……?」

「はい。小さくとも欠き取って、芋ぼた餅……と、いきたいもので」

と、その時だった。信十郎豊政がいったのは……

「いよいよ別れか。お前たちとも」

七

「え!? いま、何とおっしゃったので」

新七はあわてて訊き返すと、

「わしは帰れぬ」

信十郎豊政はもう一度呟くようにいってから、

「新七」

と、改めて呼びかけた。

「墓の下の人間は、生きていると思うか、死んでいると思うか？」

新七は眼を丸くして、思わず櫓をくる手を停めかけた。

「そりゃ……往生……と、いいますゆえ、もう一つ……別の世界に、生きていますべ」

「そうか」

「旦那は、そう思いませんか」

「いいやそう思う。別の世界に往んで生きる……そうだ。それゆえこの世の死滅を往生というのであったな」

「はい。わし等は爺さまに、それをよう教わりました。死ぬのではないぞ。こんどは患いも悲しみもない世界へ往んで生きるのだ。それゆえ、声は聞こえずとも顔は見えずとも、そなたが正しいことをしている限り、黙ってそっと助けてやろうぞと」

「フーム」

「それゆえ帰ったら、まず墓に詣って礼をいいます。旦那さまも、そうするに違いない。旦那さまの墓は、われ等の五倍もたくさんある」

「そうか。五倍ものう」

「それゆえ、われ等より五倍もたくさんの仏さまが待ってござらっしゃるわけで」

いっているうちに、船は岸へ着いている。
「采か山か？」
「采だ」
真先に問いかけたのは、いまここを通行中の伊達勢の見張りであった。
主従は船を降りた。そして、眼の前を通りすぎる戦列をやりすごしてから、樟の古木の下にある空茶屋の軒下に歩いていった。
ここの亭主はまだ戻った様子はなく、葭簾をめぐらした土間の内に、奥原衆約四十人あまりが輪になって胡座していた。
何れも左の肩に采の小布をつけて、すっかり寄手になり済ましている。
雨は次第に細くなり、西の空が明るさを増して来た。
そういえば、屋内のかまどのあたりから、プンプンと飯の煮こぼれの匂いがしている。
「恰度よい。もう釜が吹きだしている」
「おお、旦那のお着きじゃ」
「ご苦労だった」
奥原信十郎は、土間に入ると、鬢の毛の雨滴をはらいながら、低くかすれた声でいった。
「戦は終わった。腹ごしらえを済ましたらそれぞれ、中南の、東南のにわかれて、村へ帰って貰おう」
そのいい方は新七の不安を大きくしていった。
「して、旦那さまは、何となさるので」

信十郎はゆっくりと首を振った。
「わしは帰れぬ。往生している祖先たち……わが家の墓に、合わせる顔がないからの」
「そ……それは……なぜ、なぜでござりまする」
中南の……と呼ばれた家の子が声をふるわせて詰め寄った。
「旦那が帰らぬ……というのに、われ等だけ帰れるものではない。それでは第一、村の者が承知せぬ。怒る！　みんなカンカンになって……この不忠者どもめがと……」

八

「そうだ、旦那を残して、帰れるものではない！　旦那が帰らぬというのならばわしも残る！」
もう一人が、合槌を打つと、再び一座はシーンとなった。
当然、信十郎豊政の、もっとくわしい説明が聞けると思ったからだ。
ところが信十郎は答える代わりに、腰にさげてあった小さな鹿皮の袋をはずして、みんなの前に投げ出した。
「さ、奈良路をまわって帰れ。この中に、われ等の貰うた手当てが入っている。秀頼さまからのお手当てがのう」
「しかし、それでは……」
「もう方々で店が開こう。めいめい家族に土産を買うて戻るのだ……そして、村人たちが、わしのことを訊ねたら、討死した、というてもよし、戦の途中で見えなくなったといってもよい」
「では、どうあっても旦那は」

「そうだ帰れぬのだ……」
信十郎は、顔をゆがめて微かに笑い、その眼をそのまま細い雨脚の空に移した。
「わかるであろう。わしは……帰ってはならないのだ。理由は改めていわいでもわかるであろう。わしは負けた……心の中の誓いに負けた……この敗北を忘れてはならないのだ」
「………」
「それにもう一つの理由はな、とにもかくにもこの信十郎は豊家の側にあった……それがわかって里人すべての迷惑になってはならぬ。よいか……取り調べの者が参った節は、信十郎豊政、出たきり戻って参りませぬ……ハッキリとそういうのだ。さすれば、決してその方たちにおとがめはない……いや、後日或いは思いがけぬ人を通じて、却って褒美があるやも知れぬ……」
みんなは、そっと顔を見合わせて誰も口を開くものがない。それほど、信十郎の言葉には切々として、胸にとおるふしぎな力がこもっていた。
「よいか。村人たちはこれからも仲好うな……そして、わが家の墓をみんなで守ってくれまいか……わしの願いはそれ一つじゃ。その方が、往生さっしゃっている祖霊がよろこぶ……信十郎にも意地があったと」
そういうと信十郎は、視線をそらしたまますっと立った。
「ま、ま、待って下され」
新七は草ずりに取りすがった。
「それならば……それならば、お調べの済むまで旦那さまは、お身をかくされていてもよい。だが、それには路用がいる筈じゃ。なあみんな、これを持っていんで下され」

「案ずるな」
信十郎は又わずかに笑った。
「これでのう、この世に当分戦はない。そろそろ街に店も開こうゆえ、この胴丸、この刀、みな売り払うたら、そなたたちより金持ちじゃ。よいか、墓地の手入れ……毎年のことじゃ。頼んだぞ」
「あ……」
「探すなよ。敗れた者の恥じ入る姿は探さぬが柳生の心得じゃ……誰が訊ねても知らぬとのう」
そういうと縋りついている新七の手を払って、奥原信十郎はそのまま小雨の街に消えた。
そして……そのまま永遠に故郷の土は踏まず、いまだに村人はその墓域だけをひっそりと守り伝えている……

伊達の信仰

一

「待てッ！　伊達陸奥守どのに申すことあり。この軍列、しばらく待たれよ」
七日の攻城に、いちばん左翼の紀州街道をすすんで来た伊達勢が、八日に至って城の南西から行動を起した時であった。軍列の中央にあった伊達政宗の本隊めざして駈けこんで来た二人の侍があった。

何れも胸に采の小布はつけていたが、誰の手の者ともわかりかねる乱れ髪で、胴丸の下の着衣は血と泥によごれてよれよれになっていた。
時刻は午前……そろそろ芦田曲輪の籾蔵に火の手があがり、京橋口の虐殺がはじまろうという頃であった。
「何者ぞ、ご陣中の狼藉は斬捨ご免、用捨はせぬぞ」
バラバラと槍の穂尖で取り囲むと、
一瞬、政宗の馬廻りは動揺しだした。
「黙られよ！」
飛びこんで来た二人の侍は眼を血走らせて喚き返した。
「われ等は、昨日の合戦に紀州口にて奮戦せし、神保出羽守が家臣なり。家来衆には用はない。陸奥守どの直々に申し談じたいことがあるのだ。そこを退かれよ」
「なに、神保出羽守の家来だと」
「そうじゃ。いかに小身一万石なりとは言え、伊達勢の昨日の血迷いぶり、そのままに捨ておけず、掛け合いに参ったのだ」
交互に喚く声を聞いて、さすがに馬廻りの者たちは顔を見合わせた。
実は前日の乱戦のおりに、いちばん遅れて、松平忠輝の越後勢と共に戦場に出て来た伊達勢三万は、豊臣方の明石勢が船場から出て来たのを叩こうとして逸早くこれに立ち向かっていた神保出羽守の軍勢を背後から攻め立て、これを全滅させてしまったのだ。
神保出羽守は一万石なのだからせいぜい人数も四百人足らず……それが、敵に攻められて伊達

勢の方へ向かって退却でもしていたのならばとにかく、ひたむきに敵を攻めているそのうしろから、
「――双方ともに潰してしまえ」
政宗の下知で、人数にまかせて揉みつぶしてしまったのだから、如何に気の立っている戦場とは言え、いささか乱暴にすぎた下知……と、馬廻りの者も小首をかしげていたものだった。
どうやらその全滅した神保勢の中に、生き残っている家臣があって、文句をつけに来たものらしい。
「よし、武士は相身互い。神保の家来とあらば、取り次いでやろう。名は何と申すぞ」
と、一人が言った。
「上村河内に高田六左衛門」
「待っておれッ」
そのまま行列は止まって、二人の侍ははじめて大きく息を入れた。
「上村、どうやら会う気らしいぞ」
「当然のことじゃ。如何に血迷えばとて、あのような同志討ちをしておいて、頬かむりが出来るものではない。察するところ、伊達勢は昼寝でもしていて寝ぼけていたのじゃ」
「まあそれを言うな。何と挨拶して来るかじゃ」
そこへ、先刻の取り次ぎが戻って来たが、政宗は会うとは言わなかった。
その代わりに、伊達阿波守と名乗る武士がニコニコと笑いながらやって来た。

「伊達家の副将、伊達阿波にござる。主人名代としてお目にかかる」
阿波守は、おだやかな笑顔で両人を空家の軒下に手招くと、小者の持参した床几にゆっくりと腰をおろし、

二

「混雑のおりから軍列はそのまま進めよ」
と、取り次いだ侍たちに手で示した。
「神保出羽守のご家中と申されたの」
「如何にも。何故あって昨日の戦に、伊達勢は、越後勢と共にわれ等の背後より、鉄砲を撃ちかけ、更に槍ぶすまをつらねて襲いかかりしや？　血迷うにしてもあまりの所業、ご所存を承りたい」
上村河内と名乗った男が、眼をひきつらせて詰め寄ると、
「ほう、さようなことがござったか」
相手は始めて聞くという面持で、
「何しろ双方合して三万以上の大軍のこと、あるいは幾分眼の届かぬところもあったやに思われる。して、神保どのはご無事かの」
「戦死じゃわい！」
と、もう一人が大地を踏んでわめき返した。
「いや、戦死ではない！　同志討ちに倒れたのじゃ。何としてくれる気じゃ」

「なに、神保どのは討死……ではご子息なり、ご兄弟なりは？」
「それもみな、伊達勢に殺し尽されたわ」
「なに、ご子息も!?」
「子息も一族もあるものかッ。二百八十八人、戦場へ参って死骸を見るがよい。何れもうしろから鉄砲玉のつるべ討ち、さもない者も手傷はみな背後からじゃ」
「ほう……」
と、相手は首を傾げた。
「するとそれは、敵に背を向け、算をみだして退却して来た……と、考えられないこともあるまい。伊達勢の同志討ちした証拠でもござるかの」
「だ……だまらっしゃい！　われ等は小勢なりとて、敵にうしろを見せるような者は一人も居らぬわ。みなみな明石勢に槍をそろえて立ち向かってあったのだ。その背後から……」
伊達阿波は手をあげてさえぎった。
何時か従者が十二、三人で、路傍のこの三人をとり巻く形になり、その先を間断なく軍列が流れていった。
「いま、二百八十八人と申されたの。で、生き残られた人々は？」
「われ等二人だけだわい！　われ等二人は水野どのご陣中へ使者に立ち、その場に居合さなんだために死におくれた……さもなくば二百九十人全員討死……このようなバカな話が……」
そこまで言うと、高田六左衛門と名乗った武士は、オイオイと手放しで泣きだした。
「ほう、全員討死……」

相手は気の毒そうに眉根を寄せて、
「それは、手のつけられぬ悲惨になったの。よいかのご両人、生き残ったは、その場に居合わせぬご両人だけ……しからばご両人は生き証人にはなりかねる。われ等もむろん味方を調べはするが、生き証人がなくばこの同志討ち、なかなかもってそれがしが仕ったとは申すまい」
「な、なぜでござる。現にそれは……」
「敵に背を向けて討たれた……とも、逃げて来たゆえ士気にかかわる、そこで討ち果してすすんだとも言い得る道理。どうじゃな、両人とも、このまま黙って伊達家の家臣になる気はないかな？」

三

半狂乱になって喚きこんで来た二人は、あまりに思いがけない伊達阿波の言葉に度胆をぬかれて顔を見合った。
彼等の数えた屍体の数は二百八十八人……果してそれを正直に告げてよかったのかどうか？もっと冷静に考えたら、伊達勢は誤って神保勢何十人かを同志討ちにしてしまった……そこで後日のいざこざのタネになってはと、思い切って全部これを踏みつぶす気になった……と考えられないこともないのだが、そうした冷静さは彼等にはなかった。
文字どおり全滅というあまりの出来ごとに、気も分別も顚倒してしまっていたのに違いない。
「どうじゃな。それとも両人の申し出を誰ぞが信じて、水野どのなり、将軍家なりが、おとりあげになると思うかな？」

「さあ、それは……」
「うかつなことを申すと、亡くなられた主人の死に、拭いきれない恥辱を与える結果になろう。伊達勢の先鋒は武名の高い片倉小十郎じゃ。もし神保勢が崩れ立ち、返せ返せと呼びかけたが聞き入れぬ。そこでやむなくこれを踏み潰して前進した……と、なると、このわしにしてからが、見ていたわけではないゆえ、これを信じることになる。何分にも死人に口なし、詮議の仕様はないからの」
「…………」
「そこで相談じゃ。この阿波が推挙しよう。生き残ったはよくよくの奇縁、このまま伊達家の者にならぬか」
二人はまたそろって顔を見合わせた。
どうやら昂奮はおさまって、そろそろ計算の出来る理性をとり戻して来たらしい。
「それはならぬ」
と、高田の方が、相手の動揺をおさえるように首を振った。
「二人だけ生き残ってよいものか。訴えるだけ訴えて、そのあとで切腹じゃ」
「すると……」
と、阿波はおだやかに腰をあげた。
気がつくとすでに行列は通過して、あとに残っているのは二人とそれを囲む従者たちだけだった。
「伊達家に仕える気にはならぬか」
「もっての他……」

「やむを得ぬ、だが、よくよく考えての、その気になったら参るがよい。この阿波の許へ」
そう言うと、淡々と身をひるがえして歩きだした。
と、その瞬間……
「ギャッ！」と、悲鳴が二つ続いた。
阿波守の従者が、半ば茫然と阿波を見送っている二人の背後から、いきなり首を討ち落してしまったのだ。
「たわけ者め、伊達の軍法はきびしいぞ。行列に暴れこんだ者など、そのまま許しておくと思うのか」
斬った一人がペッと唾を吐いて刀を鞘におさめたが、阿波守はふり返ろうともしなかった。どうやらすべて計算済みの接待であったらしい。
と、そこへ、またしても、この行列の最前線にあわただしく駈け込んで来た者があった。
京橋口の虐殺からのがれ出て来た城内の落人らしい。頭上に女の小袖をかざし、
「――オネガイの者……オネガイの」
叫ぶ声がひどく生硬な片言で、その時には、伊達勢の先頭はすでにそのあたりに馬印を立てて停ったところであった。

四

「何者じゃ！」
女の小袖をかぶっていたが、声は決して女ではない。鼻尖に槍を突きつけて、四十余りの侍が

誰何すると、相手は雨に濡れたドロドロのぬかるみに倒れるように膝を突いた。
「ダテの太守の軍勢でござりましょう。お助け下され、追われています」
そういえば、この時には京橋口の門はひらいて、そこから、生き残った老若男女が生命からがら逃げ出して来ていたのだ。
「心配するな。ここは伊達のご陣中、誰も近寄らせることではないわ」
すると相手はホッとしたように、始めてそっと小袖をずらせた。と、とたんに侍は一歩退って頓狂な声をあげた。
「うぬは、か、か、河童だな」
「河童、ありません」
相手はあわてて小袖を膝に丸めて、胸の十字架を指さしながら首を振った。城内にあったサン・フランシスコ派の神父ポルロであった。
ポルロはまだ歯の根も合わずに震えている。
「イスパニアの神父、神の使徒でございます。河童ありません」
そのいい方が、あまりに真剣なので、まん中をまるく剃ったお河童頭が、却って滑稽なものに見えた。
「なあんだ。切支丹のお坊さんかア」
「はい。ダテの太守のお友達でございます。太守にポルロが来たとお取り次ぎを……まだ城の中に、トルレス神父も残っています。助けなければなりません」
「なに、するとお坊さんは、殿さまを、知っているといわっしゃるか」

「はい。信仰の友……おなじ、神のお子でございます」
「よし、待っていさっしゃい。すぐに取り次いで進ぜよう」
小袖をかなぐり捨てると思いがけない南蛮河童。くぼんだ碧眼が今にも溶けそうにおどおどしている初老の異人だったので、見る間にぞろぞろと人が立った。
「何だこれは?」
「しーッ、殿さまの懇意な切支丹のお坊さんだぞ」
「ほう、すると、今まで城の中にあったのか」
「そうだ。まだ仲間が居るそうだ。それで殿に助けてくれといって駈けこんで来たらしい」
「おいおいお坊さん」
中からまだ若い一人が無遠慮に声をかけた。
「お前さん泥の中に坐ったままじゃ法衣がたまるまい。さ、これに掛けさっしゃるがよい」
しかしポルロはすぐには立てなかった。
「さ、ここに床几がある。おや、腰が抜けてしまっているのかい。ハハ……あまり強くない坊さんと見える。さ、手を貸してやろう。立ちなされ」
助け起こされて、ポルロは、胸で十字を切った。
「あなたはやさしい……太守に申し上げます。ご恩寵のあるように」
「ハハ……それには及ばないよ。おれは手柄は別に立てているからの。したが、お坊さんは、お殿さまとはよっぽどご懇意なのかい?」
「そうです。フィリップ三世陛下の軍艦の到着を、今か今かと待った間柄です。いいえ、きっと

来ます。来るまでの辛棒です」
そういうと、ポルロの今にも溶けてしまいそうな眸から、すっと涙が糸をひいた。

五

「寄るな寄るな。殿がごねんごろにわたらせられるお坊さんだ。見世物ではないぞ。無礼があってはならぬ。寄るな」
ポルロの泣き顔を見ると、若侍は手を振って人を散らした。
そして長柄を一本持参させて小雨を避けさせ、
「先刻、お坊さんは、まだ城の中に誰か残っているといわれたの」
人懐つこく、法衣の裾の泥を拭いてやりながら話しかけた。
どうやらその頃からポルロも落ち着きをとり戻したらしい。怖えた視線を周囲に泳がせながら、
「そのことでございます」
口調もいくぶんはっきりした感じになった。
「トルレスと申します、私と同じ神父が残って居る筈でございます。この方は後藤基次さまをたずねて城へ入り、ずっと有難いお説教をつづけて来られました。勇ましいお方でございます」
「すると、そのお坊さんも、戦ったのかね」
「いいえ、とんでもない、神父は武器はとりません！　ただ一日も早くフィリップ陛下の……」
いいかけて、ふっと不安そうにあたりを見廻して口をつぐんだ。

「何だね？　そのフィリップ何とかというのは」
「いいや、いいのです。ただ、正しい者が勝つように、お祈りしてあれば、それでよいのです」
「正しい者が勝つようにか……それならばちゃんと勝った。そしてお坊さんはお殿さまの許へやって来られた。もう安心というところさ」
どうやら若侍は、政宗の知人であるポルロ神父が誰かに城内へ拉致されて、監禁されていたものと錯覚しているようだ。
しかしポルロは全然その逆のことをいっている。彼は、寄手の中にあっても、政宗は大坂の味方なのだと信じこんでいる。
彼にそう信じ込ませているのは、いうまでもなく、慶長十八年の九月十五日、陸前月の浦からイスパニアに向けて政宗が出航させた、支倉常長やソテロの一行の船のことをいっているのだ。
その船には、フィリップ三世あてに、すぐさま軍艦を日本へ向けて派遣するように要請した書状が托されている。伊達政宗は、果たして要請どおりの援軍が到着すると信じているのかどうか？　しかし、今ここに逃れ出て来たポルロ神父は、必ずそれがやって来る……と、信じきっているようだった。
「遅いの」
と、若侍は、自分の呑み残りの青竹から、神父に水を呑ませてやって小首を傾げた。
「もう殿のお床几場は決まったわけだが、何をしているのかな……見て来い藤太」
と、弟らしいよく似た若者にいいつけた。
「まさか、殿が、お坊さんの名を忘れている……と、いうようなことはあるまいな」

「ございません！」
ポルロはハッキリといって首を振りながら、
「お忘れだったら、ソテロと共に製船所で度々お目にかかったポルロと申して下さりませ。江戸の浅草でもお目にかかったこともございますと」
「いや、そんなら大丈夫だ。殿は記憶力の強いお方だ。そうか……あの頃のお知りあいか。あれから、もうそろそろ二年になるな」

六

何時か戦列はと切れて、あたりの人影がまばらになった。
「つかぬことを伺いますが……」
若者が人懐つこい態度で接してゆくので、ポルロ神父は、すっかり心を許したらしく、
「こんどの戦場へ、あの、カルサどののもお見えになって居りましょうか」
と、声を落として問いかけた。
「カルサどの……カルサどの、とは何誰のことかな？」
「将軍家のご舎弟ご、大君のお子さま、伊達の太守の婿どのでございます」
「おお、松平上総介さまのことか」
「はい。そのカルサどの……このお方にも、江戸で一度お目にかかったことがあります」
「その上総介忠輝さまならば、今日もご一緒じゃ。いわば舅さまのわれ等の殿が、戦の駆け引きの指南役、軍勢も何時も一緒での」

「それはそれは。いや、ご発明なお方でございました。そうですか、カルサどのも太守とご一緒で」
「ここでも床几場は一つになろう。するとお二方とも坊さんの話を聞いて居られるかも知れぬ。そうか、上総介さまもご存知とは仲々顔のひろいお方だ」
「すると、この隣の軍勢が、そのカルサどのの軍勢で？」
「いや、隣はそうではない。隣は蜂須賀どのの軍勢だ。まさか蜂須賀どのはご存知あるまい」
「ハチスカ……よう存じて居ります」
「なに、ご存知か!?」
「はい。こんどの戦になる前、布教に参ってお目どおりしたことがあります。そうでございますか、ハチスカどの……」
　と、その時だった。
　おくれて馬でやって来て、声をかけたのは、伊達阿波であった。
「そのご仁は？」
「はッ。お殿さまご昵懇の、大坂城内にあったポルロ神父という方にて、只今お殿さまにお取り次ぎ申し上げているところでござりまする」
「なに、ポルロ神父……」
　阿波は小首をかしげて馬をおりると、手綱を小者の手に渡してポルロのそばへ近づいた。
「ポルロ神父と申されるか」
「はい。伊達の太守のお申し付けにて、大坂城内へ神のお声を届けに参っていた、ポルロでござ

います」
「なに、太守の申し付けにて……」
「はい。あなたさまは?」
しかし阿波は答えなかった。
一瞬だったが鋭い目になってあたりを見廻し、それから一層身を近づけた。
「貴僧、何の怨みがあってあらぬことを口走られるぞ。伊達政宗の内命を受けて大坂城内に……」
「いいえ、あらぬことではございません。よくよくご相談のうえにて……」
「黙られよッ!」
阿波は一喝して、あわてて周囲を見廻した。この時には、また例のごとく、神保出羽の生き残りを斬って捨てた従者たちがひっそりとポルロの背後にまわっていた。
「貴僧、戦の渦に巻き込まれ、気が動顛しているようだの。いったい何れから逃れて参られたぞ」
それは無気味なほど静かな声の問いかけだった。

七

ポルロ神父は、伊達阿波の声に異常さを感じとった。
一喝のあとの猫撫声。その豹変があまりにはげしかったからであろう。
彼は本能的に身を固くして、そっとうしろを振り返った。
「あ!」

次の瞬間、神父の軀は反射的に前へのめり、肩先すれすれのところを抜き討ちの切ッ尖が空を切って左へ流れた。
斬り損じたのだ。その男は、タッと一歩前へ出て、再び太刀をふりおろした。
しかしそれも僅かにはずれた。踏みこんだ力足が、ぬかるみの泥にすべって姿勢が崩れてしまっていたのだ。
と、思ったとたんに、
「ヒーッ」と悲鳴が糸を引いて、阿波守の草摺のわきをすりぬけた。
「逃がすなッ！」
と誰かが叫び、バラバラと従者の輪が崩れた。しかし、それよりも必死の神父の足の方がわずかに早く、
「しまった！」
追いかけた人々は小雨の中に立ちどまった。
先刻の若侍は放心したように少しはなれて眺めていて、敢えて口ははさまなかった。
「捨ておけ、あれでよいのだ」
と、伊達阿波は忌々しげに呟いて、刀を鞘におさめさせた。
「隣りは蜂須賀至鎮どのの陣営。こっちで斬らずとて、あっちで斬るわ」
「しかし……」
と、一人が言いかけて口を噤んだ。
「しかし、どうしたと申すのだ？」

「おかしなことを……いや、気になることを口走っていましたが」

「フン」

阿波は口をゆがめて笑ってみせた。

「伊達政宗ほどの者が、南蛮人の武力をたのんで大坂方へ味方する。ハハ……月の浦から船を出したのはな、うるさい南蛮人をそっくり束にして日本国から追放し、徳川家の天下の安泰を計ろうためだ。そのようなことは将軍家も大御所もようご存知……みなご相談のうえのことゆえ、気違い坊主の狂い言など、誰が信じてゆくものか」

とそこへせかせかと出て来たのは城代の片倉小十郎であった。

「どうしたのだ。殿をよう知っているとか申す切支丹の神父は？」

どうやら小十郎は、政宗たちと相談を重ねて出て来たのに違いない。

右頬のかすり傷にテラテラと膏薬を光らせて、若さと精悍さにあふれた語気で阿波に問いかけた。

「掃除は済んでござる」

「掃除は済んだと……？」

「されば……殿がお会いなさるほどの者ではあるまいと存じたれば」

「それは残念な」

小十郎はニヤリとして声を高めた。

「丁重に保護してやれという殿の仰せであったにっ。彼等を大切に保護してあれば、或いはフィリップ大王の大艦隊とやらが、はるばると日本までやって来るかも知れぬ。それを待って撃滅す

れば、当今の世界はそっくりわれ等の手に入る……いや、惜しい餌を掃除してしまったものだぞ」

八

一方は掃除と言い、一方は丁重に保護してやれという。伊達阿波と片倉小十郎の言葉は、表面の意味からは正反対の意見であった。にもかかわらず、彼等は笑い合って、そのまま打ち込まれたばかりの柵の中に消えていった。

事実大坂城内には落城数日前から奇怪な噂が流れ出していた。

その噂の源は何処であったか？

トルレス神父はポルロ神父から聞いたと言い、ポルロ神父は、トルレス神父が、この秘密をよく知っているといいふらした。

他でもない。いざ落城という時には伊達政宗の陣中へ駈け込めというのである。伊達政宗は決して徳川方ではなく、どこまでも切支丹信者の味方なのだ……

したがって城中に身をおくことが危険と思われる事態になったおりには、伊達の陣営に身を秘めよ……と。

いや、それだけではなく、彼等の間では、

「――大坂城が落ちるようなことはない！」

という希望的な観測にもなっていた。

落城……というような事態になれば、その寸前に、伊達政宗の大軍が秀頼方に寝返って、戦の

局面は一転するというのであった。
こうした噂に何の根拠があったのか？　それはついに解明されないままに終わったが、城内に信者と共に身を寄せていった宣教師や神父たちは、みなそれを信じていたらしい。
或いは神保出羽守相茂の一隊が、伊達勢との同志討ちのために全滅して果てたという事実の中にも、この噂が何かかくれた原因になっていたのかも知れない。
とにかく神保勢の中には、他にまだ二、三生き残った者があり、
「——神保出羽守主従を討ったのは伊達政宗の三万の人数にまぎれもない」
と、訴え出たが、政宗は一笑し去ったと伝えられている。
「——政宗の軍法に敵味方の差別はない。たとえ味方たりとも先手に崩れかかる者は容赦なく討ち取る。さもなくばわが大軍も共倒れとなって忠節は尽くしがたい。若し将軍家からご詮索もあらば、わし自身が申し開きをしよう」
家康も、秀忠も、むろんそのことで政宗を責めはしなかった。だが、その政宗が、当日の戦で、しきりに前へ出ようとあせる婿の松平忠輝に、全く正反対のことを言って、先進させなかったことも又事実であった。
「——大将というものは、決してまっ先に出て戦うものではありませぬ。若しも味方に意趣討ちをかけられたら何と致すや……口外しにくい事ながら、将軍家の旗本には、婿どのの器量をそねみ、隙あらばと生命を狙う者がたんとござるぞ」
この一言は、やがて家康の耳に入り、忠輝自身の運命を大きく狂わす原因になったのだが、とにかく伊達の信仰はただの弱肉強食以上に異端であった。

ポルロ神父は、隣の蜂須賀至鎮の陣営に逃げ込んで危く難をまぬがれたが、その他の信者で、政宗をたよった者は殆んどそのまま消えてしまった。
何故であろうか？
改めて考えるまでもなく、この頃の政宗はまだ天下掌握の野望を捨てきれない、精悍な猛虎であったからだ。
そしてこの猛虎もまた婿のあとを追うようにして翌々日京都へ入った。

九

伊達政宗が、二条城に家康を訪れたとき、家康は、もはや一人で起居もあぶなそうな疲れきった老爺に見えた。
その老爺が、柳生又右衛門宗矩を呼びつけて、ブツブツと口叱言をくり返している。
「なぜ、秀頼が助けられなかったのじゃ。わしは太閤に合わせる顔がない。いったいそのおりそなたは何としていたぞ」
それは、日本中の諸大名を畏怖させた、あの大御所の威厳など、どこにも感じられない愚痴で平凡な老いぼれに見えた。
（やはり、この仁もこうなるのか？）
それはまだ四十九歳の政宗には、あらぬ感慨よりも嫌悪の先立つ老醜の姿に見える。
柳生又右衛門はまたそれに必要以上にへりくだった言訳ばかり続けてゆく。
（こ奴も大した者ではないぞ）

そう思って、いささか飽々(あきあき)しているところへ、先(ま)ずまっ先に呼び込まれて来たのが、藤堂高虎であった。
家康はその高虎にもブツブツとこぼしていった。
「将軍もその側近どもも、わしの念仏の意味がわからぬ。これでは、わしは七十余年、何のために生きて来たのかわからぬではないか」
藤堂高虎は、それを老獪(ろうかい)になぐさめたり、追従(ついしょう)したりして躱(かわ)してゆく。
三人目に呼ばれて来たのは、所司代の板倉勝重で、これはまた、まだ会いたいと思っている本阿弥光悦を連れて来ないというので、叱言を喰った。
(年齢というものは不思議なものだ……)
あれだけ油断(ゆだん)のならぬ、隙(すき)のない達人の家康が、このように平凡で愚痴ばかりの人間に還(かえ)ろうとは……
事によると、大坂二度の陣が、彼の生命の泉ばかりでなく、理智も思案も枯れさせて、全く別の家康に変えてしまったのだろうか……?
そんなことを考えている時に、
「そうだ。子供たちも叱っておかねばならぬぞ」
と、家康は言いだした。
「上総(かずさ)どのから先に呼んで来い」
さすがにそのおりには政宗はひやりとした。
自分に預けられている婿(むこ)を、自分の前に呼びつけて叱ってゆく……ということは、自分が叱ら

れることでもあるからだった。しかし忠輝ももう子供ではない。叱れば叱るほど、それは父の威厳を傷つけ、器量もさげる結果になる……そう思うと、その結果に却って意地わるい興味が湧いた。

（よし、遠慮はせずに、老耄ぶりを拝見して参るとするか）

　やがて側近の板倉重昌が、松平忠輝を呼んで来た。

「上総どのか、これへ参られよ」

「はいッ」忠輝はちらっと舅の政宗を一瞥して、家康の前にすすんだ。

「お許、今日は何をしてござった」

「はい。川干しをやろうと存じ、洛外まで遠乗りして、あちこち地理を調べて来ました」

　とたんに家康は一喝した。

「たわけ者め！」

「は……？」

「何故伏見へ伺候して、将軍家のご機嫌を伺わぬぞ。何時陣払いの命が下ったのだ。手のつけられぬ愚か者めがッ」

十

　はげしく叱りつけられて、一瞬、上総介忠輝はキョトンとした顔になった。

　叱られた意味がよくわからないのに違いない……と、政宗が思ったとたんに第二の叱言が飛びだした。

「今度びの合戦で、いちばん気に入らなんだのはお許の戦ぶりじゃ。お許はいったい、この家康が何歳になったか覚えているのか」
「はい。七十四歳におなりかと存じますが」
忠輝は途方にくれたように、又チラリと政宗を見やって答えた。
「ほう覚えていたのか。ならば、その七十四歳の家康が、何故まっ先に出陣して来たかわかるであろう」
「わかる……つもりで、ございます」
「では訊ねよう。その方上方へ参る途中で、癇癪を起こし、お許の行列の先を横切った将軍家の家臣を手討ちに致したそうじゃの」
忠輝はふっと眉を曇らせたが、わるびれずにこれを肯定した。
「はい。戦場におくれはせぬかと、気が立って居りましたので……何れ兄上にお詫び致す所存でございます」
「上総どの」
「はいッ」
「こなた父の年齢を覚えていたと申す。よいか、七十四歳の父が、まっ先に出陣して来ているような危急の戦場で、将軍家の家臣を手討ちにし、万が一にも仲違い、とでもなっては一大事……とは心付かなんだか？」
「重々不覚、お詫び申し上げまする」
「それだけではないッ！」

「は……？」
「いったい道明寺口の合戦に、何故あって遅れたぞ。その方、この父や兄の苦労がわからぬのか」
「………」
「もはや尾張や遠江のとは年齢が違う。越前の忠直をご覧なされ。わしに叱られたを忘れずに、翌日の戦では遮二無二茶磨山へ一番乗りをしてのけたわ……いや、あれほど乱暴に戦えと申すのではない。が、同じ台地の上を進みでていながら、中央の父や右翼の兄が、九死に一生の危機にある時、お許はいったいどれだけの危険をおかしたのじゃ。お許は戦場で、雑兵どもが、何というて噂していいるか存じて居るのかッ」
「いいえ、一向に存じませぬが……」
「そうであろう。それゆえ、手のつけられぬたわけだと申したのだ。よいか、上総介は将軍家に協力する気は始めからないらしい。あわよくば、将軍家を戦死させ、みずからその地位に取って代わろうとしているのに違いない」
「そ、そんな、たわけたことが!?」
「ある筈はあるまい。が、出陣の途中で将軍家の家臣を斬りすて、戦場で、出ずべきところへ出て来なければ、その、ある筈のない噂に尾鰭がつくものと、平素から考えては居らなんだのか」
　こんどは政宗の方がまっ赤になった。
（これは狂ってなど、居らぬのかも知れぬぞ）
「そこでな、いよいよありようのない噂が噂を産んでくる。もともと上総介は秀頼公と密約が

あったのだ。兄を除いて、自分か秀頼かがこれに代わろうという……それを将軍家の方でも気付いた。そこで大御所……つまりわしの意志如何にかかわらず、将軍家は秀頼を許すまいと心に決めていたなどと……」
「お話の途中ながら……」
たまりかねて政宗は到頭口を出さずにいられなくなって来た。

十一

仮にも忠輝は、舅である伊達政宗に預けられて、共々戦場にのぞんでいるのだ。
忠輝の家老たちもふくめて、その戦略戦術では、一々政宗の意見に従って動いて来た。
その忠輝を、政宗の前でこのように手きびしく叱りつけられたのでは、政宗の立つ瀬はなかった。
「おそれながら、そのお叱りは、政宗の受くべきものかと存じまする」
「だまられよ！」
途方もない大声を浴びせられて、政宗はまたビクリとした。
居合わす諸将は固唾をのんで控えている。
「これはわしの伜を、わしが叱るのじゃ。よけいな口出しはさっしゃるな」
「は……」
「はアではないッ。お許は、わしに遠慮して甘すぎる。仮にこの噂をそのままにしておいて見よ。どこまで火の手がひろがるかわかるまい」

「なるほど」
「この戦……実は、上総介と秀頼とが、将軍家に対して企てた謀叛であった……それもただの御家騒動ではなく、南蛮人と紅毛人の野望も加わった戦であった……もしそうした噂がひろまると、ものの黒白もわからぬ正体不明の戦になり下るわ。儒学の聖人君子の教えなどは片腹痛い……人はみな野心のためだけに終始する。人間とは本来そのような生きものなのだ……そうなったら、わしの生涯はどうなると思うのじゃ！　畜生同然、七十余年の生涯を、ただ敵を倒そうとしてあさましく牙を剝き、爪を磨いで生きて来た一個の老獣になり下る。そのような不孝者の牙を、わしの伜は持っていた……それでこうして叱るものゆえ口出しは無用にさっしゃい」
伊達政宗は、カッと一眼を大きく見開き、
（しまった！）と、内心でほぞを嚙んだ。
（この老猾なトボケ親爺め！　先刻の愚痴は芝居であったわ……）と、思ったとたんに、
「お待ちなされッ！」
板倉勝重が、奇声をあげて忠輝に飛びついた。
気がつくと忠輝は、両眼をつりあげて短刀を抜き放ち、自分の腹に突き立てようとしていたのだ。
伊達政宗の頰がゆがんだ。ゆがんだというよりも一瞬はげしくひきつったといった方がよい。
「早まり給うなッ」
と、政宗も野太い声で忠輝を制した。もうその時には、短刀は勝重の手にあって、当の忠輝は、がっくりと頭を垂れてしまっている。

「理由のあるご自害ならば、上総介どのよりも、この政宗がまず仕る。いったい上総介どのは、いまのお父上のお言葉、何とお聞きなされましたぞ」

いっているうちに政宗は、もはやこの場での、自分のあるべき位置だけは分別していた。

この異常な光景に、柳生又右衛門は、すっと立ってみんなに背を向け、きびしい表情で出入口を見張り、板倉重昌は直ちに家康の左に膝をにじらせて側を固めていた。

藤堂高虎だけが、薄く瞼を合わせるようにして、事の真相に思いを凝らして、聞き入っているようだった。

十二

「フン、腹を切るとか」

家康はまた嘲笑うように舌打ちした。

「その方は腹を切ればそれで済む。が、そのあとはどうなるのだ。やはり噂は真実であった……若しそうなっても死に切れると思うなら死んでみよ」

政宗は、手をあげて家康と忠輝の間に割って入った。

「お父上のお言葉、もう一度静かにお考えあるように。これはどこまでも天下大切、わが子大切の、慈悲にあふれたお言葉にござりまするぞ」

いいながら政宗は、片腹痛さでいっぱいだった。

（この政宗にあてこする……）

真正面から文句がつけられず、持ってまわった叱言狂言。そんな狂言の太郎冠者にされてし

まってよいものか。

(伊達の家法には、窮することもなければ、臆するという事もないのだ)

「ただいま大御所さまの仰せにあった一条一条、考えてみるまでもなくこの政宗の責任。さりながら、政宗とて全く思案もなくて、上総介どのの先駆けを禁じたわけではござりませぬ」

それは、忠輝にというよりも、家康に向かって放つ独眼龍の大胆不敵な嘯きであった。

「それがしは、道中の将軍家ご家臣とのいざこざは知りませぬ。相手がどのような無礼を働き、それが許せる程度のものであったかどうか？　しかし道明寺のおりの手控えはその道中の事件を耳にしている政宗が、敢えて将軍家のお顔を立てようための慎しみにござりました」

家康は、黙ってわきを向いている。というのは遠くなった耳を政宗に向けているということでもあった。

「そもそもあの日の戦、われ等がまっ先駆ければ一も二もなく片付く戦でござりました。第一番手の水野勝成麾下の総勢はすべて合わせても三千二百。本多忠政の二番手を加えても八千あまりに過ぎませぬ。ところが伊達勢と松平勢を合わせまするとニ万数千……これがまっ先に出て戦ってしもうたのでは、手柄は全くひとり占め。あの折にも懇々と申し上げた筈。ここで勝つはいと易い。さりながら、将軍家の旗本たちと功を争うは後日のために面白からず……よって、彼等に攻め口を取らせ、勝敗の決するおりに出ずるが戦場の礼であろうと……ご存知の通り、戦場が河原に移ってからは、片倉が先手、まっ先に躍り出て、何れの軍勢にも劣らぬ働きを仕った……松平勢と伊達勢は一心同体、将軍家ご采配の許では関東勢すべてがこれ一心同体……一心同体の戦ゆえ、つねに全戦場を睨んでおわせせと申し上げたは、この政宗にござりまする」

家康は、聞いているのかいないのか、いよいよ以前の疲れた顔にかえって黙っている。
「また、落城前日の五月七日の戦では、政宗に気になることが三つあった……その一つはわれ等の背後より進んで来る浅野勢。もう一つは真田勢が必ず船場付近に遊撃隊を伏せ、うかつに進むと横から来るであろうということ。更にもう一つは、城内にある切支丹の信者どもが、同情のよしみを以って、松平勢に助けを乞い、ここに雪崩れ込んで来るおそれのあったこと……それゆえ、この日もわれ等が先頭に立ち、松平勢はいささか後におきましたが、これ等何れも政宗の思案。叱られるは政宗でなければならぬ」
そういってから政宗は何を思ってか声をたてて笑いだした。

十三

「ハハ……それに何ぞや早まってご自害とは。万一ご自害なされたら、それこそ風聞は風聞を呼び、事によると、忠輝、秀頼両公のご謀叛を、裏からひそかに煽動していたものは伊達政宗であろう……などという噂も立ちかねませぬ。はやまったことを成されて、噂好きの世人ばかりを喜ばされては、この政宗の立つ瀬がない。ここのところはじっくりとお父上の言葉の裏の、ご慈悲を味わい下さるよう」
政宗は、一語一語に力をこめてそう言うと、そのままくるりと家康に向き直った。
「先程からのお叱り、みなこの政宗が、よかれと思うてお指図申し上げたことなれば、今日のところはこのままお許し賜りとう……いや、何れ将軍家へも、それがしより篤とご挨拶申し上げとう存じまするが」

家康は、不思議な疲労を見せて、頷く代わりに視線を忠輝のうえにおとした。
忠輝は、うなだれたまま膝の拳を扱いかねて立てたり開いたりしてみていた。
「よかろう……」
と、別人のように、弱々しい声で家康は言った。
「今日はお許に上総介を預けよう。よくよく申し聞かせてやって欲しい。いま、世上でいちばん好む噂はの、太閤の遺児を殺めた徳川家にも、兄弟不和の騒動があることじゃ」
「心得てござりまする。いや上総介どのとてその辺のことのわからぬお方ではありませぬ」
「と、申すが、わしの眼から見ると、歯痒ゆいものじゃ」
すかさず政宗は膝をめぐらして、
「では上総介どの、ご退出を」
忠輝は、一語も発さず、まだ半ば拗ねてでもいるかのように父に一礼して起ちあがった。
家康は、何故かその後姿を見ようとしない。まだ何か、深く心にかかることのあるらしい様子であった。
「あのようにお叱りなされては……」
藤堂高虎が何か言わずにいられなくなって口をはさんだ。
「上総介さまがお可哀そうでござりまする。こんどの戦の駈け引きは、陸奥どのの言うとおり、上総介さまは与り知らぬことに違いありませぬ」
家康は、それにも答えなかった。
ホーッと大きくため息して、手さぐるように脇息を引き寄せた。もうその時には政宗たちの足

音は廊下の先に消えていた。
政宗と忠輝とは大玄関では一言も口を交わさず、大手門外で馬の手綱を渡されるまで、怒っているように視線も合わそうとしなかった。
「散々な不首尾であった。そうじゃ。ひと先ずそれがしの陣屋へお立寄りを」
くつわを並べてから、政宗は声をかけた。
政宗の仮陣屋は中立売にあって、千本屋敷の忠輝の陣屋よりは遠かった。
「何でご返事をなさらぬのじゃ。廻り道はおいやか」
馬を寄せていって政宗はフフンと笑った。
「何じゃ、あれだけの事で涙ぐんでござるのか。ハハ……他愛のないお方じゃ。世界の海へ打って出ようというほどのお方が」
忠輝ははじめてキッと顔をあげると、
「参ろう。参って話すことがある」
思い詰めた気負いで政宗の方へ馬首をめぐらした。
彼もまた心の底に、何か割り切れないしこりを父に残しているようだった。

十四

伊達家の主力は、嫡子の秀宗と片倉小十郎に率いられてまだ大坂にあった。
将軍秀忠の命によって百日の期限をつけられ、戦後の処理にあたっている。
したがって京都の仮屋は、わずかな人数にまもられた休息の場といってよい。

政宗はそれでも仰々しいほどの殿舎を構え、築地をめぐらし、門前には華美な装いの番卒を立てていたが、その仮陣屋のうちに入ると、口調も態度もガラリと変えた。

家康ほどではなかったが、舅としてはかなり出過ぎた叱声だった。

「いったい何となされたのじゃ意気地のない。見ておれぬわ」

そして、そのまま居間に導き入れると、更に舌打ちしてつけ加えた。

「あれでは、すすんで罠に落ちるようなもの。何故、申し開きをなさらなんだ。お父上の前だとて、自由に口の利けぬようなお方でもござるまい」

しかし忠輝は黙っている。

「お呼び出しのあったのを幸い、上総どのから先に大御所へ問いかける……そう思って政宗は固唾をのんでいたのだ。お父上！　このたびの合戦、一々腑におちぬ奇怪な邪魔が入りました……そして、神保出羽の一隊が、何を考えてか、進撃しようとしているそれがしの先手へ、矛を返して落ちかかった……それで止むなく、伊達勢と共にこれを踏み砕いて進んだのだが、出羽は何者に内通して、あのような無謀を企てたのでござりましょうや？　そうお問いかけなされたら、こっちが先手、後手に廻ってはならぬは決して戦場だけのことではない。それを無言で自害をしようなどと……」

「………」

「人生は眼をつむるギリギリまでが闘いでござるぞ。その気力の維持の叶わぬ者は、生きてあっても敗残者……眼の黒い間はジーッと闘志を燃やしてござれ。さなくば上総どのは消されましょうぞ」

忠輝は、消される……と、いう言葉を聞くと、怪訝そうに顔をあげてまじまじと舅を見返した。
「舅御に、訊ねたい一儀がござる」
「何なりと。あたりに人はござりませぬ」
「神保出羽は、まことわれ等に敵意を抱き、何者かに命じられて矛を逆手に襲いかかったのであろうか？」
政宗はフフンと笑った。
「もし、そうでなかったら？」
「そうでなかったら……」
首を傾げて鸚鵡返しに呟いて、
「兄上が殊更われらを憎んでおわす……と考えるのは、誤りのような気がして参る」
「なるほど」
政宗はまたはげしく舌打ちした。
「そこに上総どのの人生の甘さがござる。よろしゅうござるかな。仮に神保出羽が将軍家の密命をうけ、乱戦の間に上総どのを討とうとした……として、それに対する何の用意もなくば、すでに上総どのはこの世にない。この世から消されたのでは事は終わりでござろうが。それゆえ、敵意の有無など問題ではない。つねに千変万化、臨機応変の用心がなければ話にならぬ」
「すると、舅御は、将軍家に……」
「まだそれを仰せられる。罠や敵意は、当方に隙があれば、その時にはなくとも、五月の蝿のよ

うに湧くものでござるぞ」

十五

上総介忠輝は、びっくりしたように、まじまじと舅の政宗を見つめていった。
言葉の意味はわからぬことはない。どんな場合にも油断は破滅のもとになろう。
だが、神保出羽の引例は、引例としても穏当を欠くものだった。血肉をわけた兄の秀忠が、乱戦のうちに舎弟の自分を失おうとする……いや、その心があった……と、政宗は信じているように受け取れる。
(果たして、そのようなことがあったのだろうか?)
政宗は、あったとして、父家康に先手を打つべきだったといっている。
「ハハ……まだ、迷うておわすようじゃの」
政宗は、これも一眼で、まともに婿を見据えたまま笑っていった。
「世の中は、上総どのが考えているように甘いものではござらぬ。真田安房の用心深さをご覧なさるがよい。兄は本多忠勝が婿にして徳川家にとどめ、舎弟の幸村には大谷刑部が娘を娶って、ああして豊家に入りこませる。いや、真田だけではない。細川忠興もちゃんとわが子長岡正近を大坂城に送り込み、福島正則も正守と正鎮父子を送りこんで二股かけている。これは、眼に見える両者の優劣だけでなく、運不運の万一にまで、きびしい用心を怠らぬ証拠でござろう。この伊達政宗も同様でござるぞ」
政宗はこの時はじめて眼にもわずかな笑みを見せた。それまでは、声で笑い、頬に笑皺はきざ

んでも、一眼だけは別の生きもののように光っていたのだ。
「舅御とて、同様とは……？」
「ハハ……お気付きなされぬかな。それがしは嫡男秀宗に、奥州の所領を譲る気などはつゆほどもござらぬ。秀宗には秀宗自身の戦功がござる」
「と、いわれると、戦功のあるものゆえ、わざわざ家督を……」
「如何にも、秀宗は自立出来る一個の男子。自立出来るものには父の遺領などは要らぬものじゃ。さっさと、もう一つの伊達家を立てさせ、家督は次男の忠宗でたくさんじゃ」
「……？」
「おわかりでござろう。これも用心……つまり予測出来る将来の、どのような波風に遭おうとも、子孫や志は絶えることがない……と、ならねば一人前の分別とは申せますまい」
忠輝の頬は次第に赤くなって来た。
ようやく政宗が何をいおうとしているかが、彼なりにわかった気がしだしたのだ……
「現在のお父上のお心がどうあろうと、現在の将軍家のお心がどうあろうと……それは絶対不変というものではない。現に、大御所は、助命したく思されながら、秀頼ひとりを助け得なんだ。秀頼に助けられる者としての心のくばりがなかったからじゃ。おわかりであろう。人生を甘く考え、油断してあると、大御所ほどのお方の助力の手も及ばぬ破綻を見せてくる。上総どのなどは、その事実の有無にかかわらず、兄なる将軍家に、邪魔な奴め……と、思われて、つねに生命を狙われている……と、まあ、この位の用心は、ふだんからお持ちなさるがよいのじゃ」
そういうと政宗はもう一度眼だけ笑わぬ、不思議な笑いを浮かべていった。

「ハハ……どうやら政宗は、わが婿どのに惚れすぎてしまったそうな」
上総介忠輝は、視線を伏せてまっ赤になった。

次なる波線

一

家康は、その日諸将の引見を早目に打ち切ると、約一刻あまり、尾張の義直と遠江中将頼宣（この時にはまだ頼将といった）の二人のわが子に戦の講評をして聞かせたあとで寝についた。
京都の夏は暑苦しく、蚊帳に入ると、今更のように昼の出来事が気にかかった。
（叱りすぎた……）
何故あのように、忠輝ばかりはげしく、みんなの前で叱ってしまったのか？
それは老人の理性を欠いた溺愛の発露であったらしい。義直には成瀬正成がついている。頼宣には安藤直次がついている。
しかし、忠輝には今そうした安心出来る立派な家老は付いていなかった。
家康自身の眼がねに依ってつけてやった大久保長安は、あのような脱線をしてのけて今は無く、傅役の皆川広照は剛直ではあったが、すでに気性で忠輝に負けてしまっている。
忠輝の異父の姉婿にあたる花井吉成は家老にはしてあるものの、器量において遙かに劣り、今、忠輝に師傅としての影響を持ち得るものは舅の伊達政宗をおいて他にはない。

（そうだ。政宗に対する怒りが、忠輝を叱らせてしまったのだ……）
　そう思うと一層忠輝が不愍になった。
　忠輝は気性も面貌も、亡くなった嫡男信康によく似ていた。育て方によっては、自分と信長を一緒にしたような進取と創造力にあふれた名将の素質を持っているかも知れない……ところが、どうやらこれも信康同様傅役に人を得ず、すぐれた素質が却って逸脱のもとになりそうな危惧を絶えず感じさせていた。
　いや、それよりも最近になって家康が気になりだしたのは、舅政宗の影響であった。
（政宗だけは見損うた……）
　家康は、政宗の闘志と野心が、どのように強烈なものであったかをよく知っている。全盛時代の太閤の威圧を、静かにはねのけるほどの根性を持った者は、彼の観察するところでは、自分と伊達政宗ぐらいのものだと思った。
（これは天稟の器量人……）
　時代の推移も敏感に感じとったし、その行動で時勢に逆行することもなかった。それゆえ、人並はずれた闘志も野心も、やがては年輪の淘汰を加えて、こよない円熟を示すものと期待し、わざわざ忠輝の舅に選んでいったのだ。
　ところが、それはそう簡単な問題ではなかった。円熟はして来たものの、それと並行して野心の輪もまた底無しに大きくなった。
　彼はいま、家康がまとめあげた日本国の総力を傾けて、世界の海へ乗り出す夢を見出している。むろん用心深い野心家だけに軽率なことはすまいが、そうなると、豊太閤と五十歩、百歩、

どこへ歩いてゆくかわからない危険をはらむことになる。
その政宗が、自分の夢を自分のものとして、あれこれと将軍秀忠に進言しているうちはよかったが、しかし、それを政宗は何時のころからか婿の忠輝に見続けさせようとしだしている。
政宗がこんどの戦で、必要以上に忠輝をかばい、危険な前線に出さなかったのは、ただの愛情や義理だけではなく、その夢を大切にしたものと感じられるふしが多い。
（危いことだ……）
そう思っていたのが、忠輝への度を超えた叱声になってしまったらしい……

二

（人間には分がある……）
世の中全体の人々の希いを集約すると、先ず何をおいても、
「――戦乱の嘆きのない、泰平の世の中が欲しい」
という答えが出る。
その希いに応えるためには、おのが野心や、おのが夢は殺さなければならない。それをせずに失敗したのが、太閤の高麗出兵であった。
太閤が、日本国の統一をなし得たところで、
「――さあ、みんなの希っている泰平の世になったぞ。武力で争う考え方は捨てるがよい」
新しい泰平の世の処し方、考え方を示して内政の整備に当たっていたら、二十年前にまるで違った日本国が出来あがっていたに違いない。

ところが、太閤はそれを怠った。これは太閤自身が、合戦しか知らない環境に育ったせいでもあったし、戦えば必ず勝った……という慢心をまじえた自負のせいでもあった。

（いや、実は、その二つがからみ合って太閤の末路を滅茶滅茶にしてしまったのだ……）

太閤が高麗出兵を決めたおりに家康はそれを神仏をおそれぬ「慢心――」と受け取った。そして、わざわざ、

「――勝つことばかりを知って、負くることを知らざれば禍その身に至る」

と、自戒もしたし、側近の者も戒めて来ていたのだ……そもそも戦に「必勝――」などというものは、あろう筈のないものだ。あると思うのは粗雑な人間の錯覚にすぎない。

いや、戦だけではない。あらゆる勝負が、五分と五分の算率で勝者と敗者をわけてゆく。現実の合戦にはその上にもう一つ「和睦――」という妥協の道が残されているだけで、戦い続けてゆけば、どのような強者もついには必ず敗者に変わる。

太閤は確に稀有の名将だった。小牧山の合戦のおりには、家康に幾分の勝味があったが、あのおりとて、家康に一歩も譲る気が無かったら、やはり太閤は勝っていたであろう。

まさに太閤こそは、敗れることを知らない古今第一の英雄であった。

ところが、その「敗れを知らぬ――」ということが、実は太閤の晩年を真ッ黒に塗りつぶす大きな不幸の原因になっている。

敗れることを知らない太閤は、わざわざ進んで高麗を征し、大明国を侵し、天竺（印度）までもその版図に加えようという、途方もない夢と野心に取り憑かれてしまったのだ……

そうした悪夢の虜にならなかったら、彼は「敗れを知らぬ名将――」として、又泰平を開いて

くれた救世主として、日本中の感謝の的になり、永遠にその徳を讃えられたに違いない。
ところが、立ち止まることを知らなかったばかりに、ついに体をこわし、頭を痛めてみじめな苦悶を重ねながら亡くなった。
(神仏の罰というのは、思いがけないところに秘んでいる)
家康は、そうした豊太閤の過ちを、再び犯すものがあれば、それは伊達政宗であろうと思っている。ところが、その政宗の悪夢を、忠輝までがそっくりそのまま受け継ぎそうな心配が出て来たのだ……
気性も勝っている。頭脳の冴えは将軍以上。そして、父に向かって大坂城を寄こせというほど、これは遠慮を知らぬ、言わば負けたことすらない世間知らずなのだ……

三

家康は、忠輝のことをあれこれ考えているうちに、すっかり寝そびれてしまっていた。
(こんなことは珍しい……)
やはり、思うに任せなかった秀頼や千姫のことが、大きく心へ傷を作っているせいであろう。心配しだすと、それは忘れようとして忘れ得ない「——信康の切腹」のおりのことまで思い出させてくるのであった。
(あれも又、あのような不幸を自分から摑みとってゆく子ではあるまいか……?)
とにかく、忠輝は将軍の次弟なのだ。義直が名古屋城の主ならば、自分が大坂城の主であってもおかしくない……という考え方を持っている。

しかも、その大坂城に入って、外交上のことは一手に引き受け、南蛮人も紅毛人もない、ヨーロッパ人すべてを向こうにまわして世界中へ日本国の国威を輝やかすのだ……とハッキリ口に出していた。
(似ている。豊太閤の思いあがりに……)
しかもその覇気の裏には、伊達政宗が密着してしまっている。
おそらく今度の戦場で、まっ先に出て戦おうとしなかったのも、
「――大望のある大切な体、流れ弾丸にあたるようなところへ出ても意味はない」
そんな小賢しい計算があってのことかも知れない。
拙いことに、その忠輝のねらっていた大坂城が、今度はハッキリ空き城になってしまった。
(又言い出すかも知れぬ……)
家康自身のどこかにそれを怖れるものがあり、それであのように激しく叱ってしまったのかも知れない……
親となるとやはり子には愚痴なものだ。
そろそろ戸外が白みかけるころになって、家康はようやく一つの結論にたどりついて仮睡に入った。
それは、もう一度忠輝を呼び出して、自分自身の口から懇々と訓えてやることであった。
いまは覇気に任せて海外へ乗り出したりする時期ではない。ようやく国内の、反泰平派の掃除が終わったところだ。
ここではどこまでも兄なる将軍秀忠を助けて、日本中の大名たちに、泰平の世の仁政比べを始

めさせてゆく時だ。
いま、海外にわれ等の武備を破って侵入出来るほどの強敵はない。内なる武備を強固にして、欣求浄土の理想郷を築くときが、今をおいて他にあろうや……
（そうだ。それを先に言っては、若い者は反感を抱くであろう。呼び出して、まず一緒に参内させよう……）
家康は、長く京都にとどまる気はなかった。長くとどまると、将軍秀忠と諸侯の前で、衝突しそうな不安がある。
とにかく秀忠は徳川家の当主であり、征夷大将軍なのだ。これをみんなの前で叱りつけるようなことがあっては、それこそ秩序を紊すことになる。そこで出来るだけ早い機会に参内して、禁裏へご挨拶の済み次第、駿府へ引きあげるつもりであった。
（そうだ。参内のおりに伴って、日本の国柄についても訓えておかねばならぬ）
こうして、ウトウトすると、直ぐさま庭に賑やかな朝の小鳥のさえずりだった。
家康は起き出すと、板倉重昌を忠輝の許へ呼びにやった。参内の装束を持参して、五ツ半（午前九時）までに来るように……

四

考えてみると、今度の参内も悲しいものであった。豊家側からの働きかけで、禁裏では仲裁に入ろうとしたのだが、家康はこれを態よく拒絶してあった。
禁裏の仲裁がものを言ったとなると、後々の影響が小さくない。何か騒動を企む者が出て来る

たびに、一々禁裏へ駈け込んだり泣きついたりする習慣を残してゆく。そうなるとただに禁裏を煩わすだけでなくて、源平時代のような陰謀、院政の弊害を招きかねない。
そこで、豊家もまた幕府の統制下にある諸侯の一人という立ち場を執って、
「——禁裏はお立入りこれ無きよう」
と拒絶してあった。
むろん、家康は秀頼に非を認めさせ、豊家を万人のうなずくように存続させる肚であったからだ。
ところがその秀頼は自刃して果ててしまった。若しも主上から、ご下問があれば、くわしい事情を奏上して、ご了解を得ておかねばならない。
(辛いところだが、それだけに、黙って駿府へは戻れない……)
家康は永井直勝のさし添いで装束を改めると、居間に香を燻かせて、ここでも又説明の順序をひそかに案じつづけた。
忠輝のこともまだ心を離れない。昨日は口に出さなかったが、忠輝が大坂城を望んでいることはよくわかっているので、何と言ってそれを断念させてゆくかということだった。
「——よいか。秀頼母子は自刃しているのだ。若しもその城を、すぐさまそなたに与えてみよ。家康は、わが子可愛さに……城をわが子に与えたさに、無二、無三に大坂城攻めをやってのけた……と誤解されたら何とするぞ。父や兄の心胆を砕いている新しい世作りに、公私混同の瑾がつく。公私を混同されては天下は再び無秩序な乱世になろうが……」
そうだ。そう説明してやったらわかる。

「――大坂城には、禁裏や畿内を守護するための城代はおくが末々まで領主はおかぬ。それが父の方針なのだ……」
そこまで考えて、家康は永井直勝をかえりみた。
「忠輝はまだ来ぬかの。もうそろそろ五ツ半であろうが」
「はい……それが……」
「何としたのだ。迎えに行った重昌はまだ戻らぬのか」
と、その声が次の間に洩れたと見えて、あわただしく誰かの動きまわる足音がした。
どうやら重昌は戻っているらしい。
「板倉どのを呼んで参りましょう。もう、さきほど……」
語尾を濁して直勝は立ちあがり、やがて二人でやって来て家康の前に坐った。
「今しばらく、お待ち願いとう存じまする」
と、重昌が言った。
「今しばらく……と、申して、参内は四ツ（午前十時）と申し入れてある。間に合わぬと不敬にわたろうぞ」
「は……はい。それが……」
「それが、何としたと申すのじゃ!?　上総どのは病気だとでも申すのか」
「いいえ、それが……」
と、言いかけて、重昌は思いきったように、
「早朝から川干しにお出かけなされ、実は、まだ連絡がとれないのでござりまする」

「なに、川干しに出かけたと!?」

五

家康は、大声で重昌を呶鳴りかけて反省した。
しかし、それをなぜ今まで黙っていたのか？　何か理由がなければならない。
(重昌のせいではない……)
「重昌、お許はそれがわかっていながら、何故今までわしに知らさなんだぞ」
「は……はい。越後の家老どもも、そして、わが身の父も必ず呼び戻して参ろうゆえ、しばらく待って頂くようにと……」
「すると、みなで忠輝探しをやっているのか」
「はいッ。他ならぬ参内のお供ゆえ」
「ハハハ……」
家康は泣きたくなった。まだ戦は終わったのではない。兄の将軍は伏見の城で眼のまわるような繁忙な指揮をつづけている。
(それなのに忠輝めは……)
「重昌、何と申して出かけたのだ、あの悪戯ッ子めは」
「は……はい。散々お父上に叱られたゆえ、気晴らしに川干しにでも行って来ようぞと」
「行く先は？」
「桂川へゆくと申されましたそうで」

「それが、そこには居らぬのだな」
「はいッ」
「たわけめッ！」
「恐れ入ってござりまする」
「それならそうと、何故ハッキリ言わぬのじゃ。何事によらず、かくすことは相成らぬとあれほど申し聞かせてあるであろう。万が一にも参内の時刻におくれるようなことがあったら何とするのだ」
　すると、重昌はムッとしたように、
「それを越後の家老衆も心配しているのでございます。そうでなくとも睨まれておわす上総介さま、若しも見つからなんだら切腹を命じられる。これは御家の一大事だと、わが身の父の許まで相談に参ってござりまする」
「たわけめッ！」
「はッ」
「その方、いま何と申した!?　それでなくとも睨まれている……その、睨まれているというのは何のことじゃ」
「これはしたり、それは越後の家老どもが申したこと……つまり、大御所さまに憎まれておわす……と、考えているからでござりましょう」
　家康は呆れてしまった。
（わが子を、父が憎んでいる……）

「あれほど激しくお叱りなされば、無理はない……と、重昌も存じまする」
「ウーム」
「でも、上総介さまは、昨夜お帰りなされてから案外なほどさらりとしたご様子にて、オヤジの肚などはようわかっていると、申されました由」
「なに、オヤジの肚だと、このわしをオヤジなどと呼びつけに申すのか」
「これは恐れ入りました。実はわれらも父のことを、蔭ではオヤジと申しまする」
「そんなことを訊ねているのではない。して、そのオヤジの肚を何と読んだのじゃ上総介は」
「はい。大坂城を呉れと言い出されては一大事、そこで先手を打ち居った。喰えないオヤジじゃ……と、申されたよしにござりまする」
家康は膝を叩いて立ちあがった。
「そうか。呆れたものよ。そんな不心得な伜を、このオヤジも待っては居れぬ。参内の用意を致せッ」

六

(これは、大事になってしまった)
板倉重昌は、永井直勝とともに家康を送り出すと、あわてて所司代屋敷へ行ってみた。
到頭、忠輝はやって来ない。
いったい何処で何をしているのか？
父が戻っていたら、或いは様子がわかろうかと急いで駈けつけてみたが、父はまだ戻って居ら

ず、客間には二人の客が世間話をしながらこれも父の帰りを待っていた。
一人は本阿弥光悦で、もう一人は以前尼崎郡代をしていた建部寿徳であった。
重昌はその二人とぱったり顔を合わせてしまったので、そのまま出て行けなくなった。
「これは、建部どのに本阿弥ケ辻の翁、つかぬことを伺いまするが、お二人とも、ここへおいでの途中で、上総介忠輝さまを、お見かけなさりはせなんだであろうか」
「存じませぬ」
と、光悦が先に応じた。
「上総さまが、どうぞなされましたので？　何にやらひどく、大御所のご機嫌にふれたとか、いま承ったところでござりまするが」
「もう、聞こえましたか」
「いかにも」
と、こんどは建部寿徳であった。
「昨夜のうちに、藤堂どのご家中の者から聞きました。それにしても、伊達どのの風評、困ったものでござりまするなあ」
「伊達……陸奥守の、風評と言わるると？」
重昌は、聞きずてならない気がして二人の間に坐りこんだ。
「いや、これはどこまでも伊達どのの責任じゃ。とにかく油断のならぬお方……実はの、大坂城内に逃げこんであった神父、トルレス、ポルロの両神父が、ご陣中に駈けこんで助けを求めた。むろん伊達どのは同信のこと、一も二もなくお匿まい下さるものと思うての。ところが、それを

拒んだだけではなく、斬って捨てようとなされたそうな」
「ほう、城内にあった神父たちを……」
「されば、只今翁と、その話をしていたところでござる。伊達侯のご信仰、果たして、まことのものかどうか……」
「まことの信仰、などではない、とこの光悦は申し上げたので。伊達さまは神仏などに縋るお方ではございませぬ。わが身の才覚を神仏以上と過信なされて、これを利用なさろうとなさるお方じゃ」
「その事でござる」
建部寿徳は、これも実は切支丹の信者であった。それだけに助けを求めていった神父への不実な行為に、かなりはげしい怒りを感じているらしい。
「そもそもゼスイット派や、サン・フランシスコ派の信者が紅毛方のイゲレス人などに近づくは悪魔に近づく所業でござる。ところが伊達どのは、平気でこれを近づけられる。ご存知でござりましょう。大坂でも、又この都でも、伊達侯はイゲレス商館長コックスの手代どもの出入りを許し、上総介さまもこれに会わせて、これこそ次の将軍家ぞ……などと相手を煙に巻いてござるそうな」
板倉重昌はわざととぼけて、
「コックスと言われると、平戸に、新しく設けられた、イゲレス商館の奉行でござるな」
「いかにも。切支丹宗門の者にとっては悪魔の手代。その悪魔に手を差しのべ神父たちを斬ろうとなさる。上総介さまにも、何を吹き込むやら知れぬお方じゃ」

七

「そのような……何ぞ、上総介さまとかかわりある、伊達侯の風評が流布されてあると言われまするか?」

板倉重昌は、もしそうした噂もあらば、家康のためにも、忠輝のためにも聞いておかねばならぬと思った。

「はて、ご貴殿はご存知でござらぬのか。それならば口外はなりませぬ。あらぬ流説がわしの口から出たとなっては不謹慎、お聞き流しのほどを」

建部寿徳は、急に臆病になって口を噤んだ。本阿弥光悦は、例の気性からそれを苦々しく感じたのであろう。

「いや、それほどの事ではない。誰ぞ為めにする者の中傷でござろう。つまり、ご親子ご兄弟の間が睦じくない……というふうの」

「やはり、そのような、噂が立っていますか」

「人の口に戸は立てられぬ。だが、そうした事ならば板倉どののお父上が、よう知ってござること、お案じなさるほどの事ではない」

重昌は、風流の道を通じて父の尊敬している光悦を、彼もまた人生の師と仰いでいた。

それだけに、こだわるなと言われると、強って訊き返そうとはしなかったが、事実この頃から巷間にあやしい噂は立ちかけていたものらしい。

火元はやはり、駈け込んで斬られようとし、蜂須賀の陣中に救いを求めて逃げうせたポルロ神

父あたりであろうか。
とにかくこの翌年のわが一月二十三日にあたる日（一六一六・二・二九）の平戸の英国商館長リチャード・コックスの日記には、それを匂わすことがハッキリと書き残されている。
「——予は書状を認め、イートン君に次の件を報告せり。風評によれば戦争は今や皇帝（家康）とその子カルサ（忠輝）さまの間に起こらんとし、義父政宗どのは、カルサさまの後援をなすべしと。戦の原因は皇帝が大坂城並びにその城に帰属する領地を手中におさめし時、約束に基いてこれを子息のカルサどのに与えることを欲せず、拒みたることにあるよし。予はイートン君に対し戦争となるのおそれあらば、金子を携え帰り来るべく、なお出来得る限り、残品をすべて金子に替うべきことを勧告せり」
平戸にあるコックスの耳に、こうした風評が入り、彼はあわてて大坂出張所にあった自分の部下に、出来るだけ残品を売って平戸へ帰るように指示しているのだから、正月ごろにはこの風評がかなりの信憑性をもって、日本中に流布されていたことがうかがわれる。事実、江戸にも、正月ごろには、政宗が挙兵するであろうという風説はしきりであった。
が、それは後のこと——
板倉重昌は、胸に不安の爪あとを残したまま所司代屋敷から二条城に立ち帰った。若しも家康の禁裏退出よりも遅れるようなことがあってはと、父はまだ戻らなかったが、そのまま城へ帰ったのだ。

帰ってみてびっくりした。
彼と行き違いに、父の勝重は忠輝を連れて二条城へやって来ていたのである。
忠輝だけではなくて、忠輝の家老の皆川山城守も、花井遠江守もまっ蒼になって控えの間にあった。
忠輝はと見ると、父の勝重と二人、家康の居間につらなる別室で、凄然とした表情で、勝重を睨み天井を睨んで控えていた。

八

全く人生には、どうしてこうも意地わるい運命の伏兵があるのであろうか？　と、重昌は悲しくなった。
忠輝がもう一刻早く見つかって帰っていたら、父子の間は前夜の尖った感情を和めおわって、共に食膳についていたに違いない。
ところが家康は不機嫌そのものと言った表情で城を出てゆき、出てゆくと間もなく忠輝は父の勝重に伴われてやって来たらしい。
家老たちの控えている部屋の隅には参内の装束をおさめた衣裳箱が、黄金づくりの前差しと共におかれてあった。
しかし、そうした用意も努力も、いまは全く徒労におわり、問題は、一層険悪な次なる波線へ移行してしまっている。
重昌が入ってゆくと、父の勝重は、それまでの話をさりげなくそらして、

「何処へ参られたぞ」
と、おだやかに訊ねた。
「はい。所司代屋敷へ……上総さまのことを」
「そうか。途中での、お気が変わられて、大樌川まで遠乗りなされたそうな」
そう言ってから、勝重はすぐに話題を前にもどした。
「とにかく、早く殿のお耳に入れなんだは小姓どもの手落ち……と、申して、この手落ちは、大御所の責任ではございませぬ。それゆえ、先ずもってお詫びなさるが第一でございます」
「……………」
「おわかりでございまするな。家臣どもを叱りつけたとて、過ぎた時刻は戻りませぬ。それ等はゆっくりあとで教えるとして……正直に申して、大御所さまも、ここのところあまりご機嫌よくはわたらせられぬところゆえ……」
すると、忠輝は、いきなり癇立った声で笑い出した。
「子供にするような助言はおけ。それよりも、予があやまらぬと申したら何とする気じゃ」
「これはしたり、兄弟の間であっても長幼の序がありまする。まして相手は大御所さま、詫びずに済むことではござりますまい。大御所さまは、装束をお着けなされたまま、この暑中に、ずっと殿をお待ちなされたのでござりまする」
「フン、何彼と言えば詫びるが孝行か。そのように一々詫びさせてばかり居ると、定めしよい思案、よい性根の子が出来ようぞ」
忠輝はちらりと重昌の方を見やって、

「そこ許も、オヤジどのに叱られては詫び、詫びては又叱られて居らるるか。第一、昨夜あれほど手ひどくみなの前で辱しめた伜なのだ。参内のこともあらば、そのおり申し付けておいてもよいではないか。それを何ぞや意地わるく、こちらで気晴らしして参ろうと思い立ったあとになり、隙をねらって思い出す……何やらわざわざ落度を作らせて叱るが趣味かと思われる」
「それはひがみでござりまする。何で大御所さまがそのような……」
「よいよい。そこ許は親の味方じゃ。だが、詫びる詫びぬは子の勝手。予は黙って聞こう。何と言ってお叱りなさるか、黙って聞いて黙って考えて、納得出来たら詫びてゆこうし、納得出来ねばご意見を申し上げる。静臣は家の宝とはつねづねのご教訓じゃ。諫言する子を不孝者と決めつけるな」
　と、そこへ家康が退出して来たらしい。大玄関で高らかにふれてくる声が、シーンと静まり返った廊下を流れて聞こえて来た。

激　突

一

　家康が宮中から帰って来ると、もう勝重は、忠輝に意見をしている暇はなかった。
　家康が全身の汗を拭かせ、かたびらに着換えるのを待って、おそるおそる忠輝の来ていることを取り次いだ。

勝重には、言葉の上の叱りよりも、父のこころがよくわかる。今日の参内に伴おうと言い出したのは、とりも直さず、父の方から子への詫びごとに他ならない。
（何とか、うまくやってくれればよいが……）
と言って、勝重は伜の重昌ほどには気にしていなかった。
気性は勝ちすぎるほどに勝ってはいるが、忠輝は決して暗愚な生まれつきではなかった。それに家康もまた愛情や一時の怒りのために、人を見る眼を曇らせるようなことはない……
「そうか。呼び入れよ」
家康は大団扇で小姓に風を送らせながら、ゆっくりと冷たい葛湯をすすった。
（さして怒っている様子はない……）
父の勝重よりも重昌の方がホッとした。
相手は又、頭から呶鳴られるものと思いこんでいる。そこを躱して、柔い声で説かれたら、ずっと効果はあろうと思う。
忠輝は眼を据えて入って来た。
「お父上、お人払いを願いあげまする」
家康の方はよかったが、忠輝の方が高飛車な切口上であった。
（これは拙い！）
と、勝重が思ったときに、家康は、あっさりと受け止めた。
「そうか。上総どのが、何か折入って話があるらしい。煽がずともよい。みなこの場をはずさっしゃい」

「心得ました。では……」
不安ではあったが板倉父子は、みんなを退がらせて次の間へ引きとった。
「お父上！　世上にあらぬ噂が流れているのをお耳になされましたか」
「あらぬ噂……噂などというものは、この世のある限り絶えないもの、気にしていてはきりがないわ」
「ところが、気にせずにいられぬ噂でございます。この忠輝が、兄の将軍家に謀叛を企て、それで道明寺口の合戦以来、決して前に出なんだという噂にござりまする」
「フーム」
と、家康は、ふしぎな唸りで頷いた。
「兄弟不和の噂ならば、わしも聞いたが、お許も聞かれたか」
「心外千万！　それだけではありませぬ」
また、意気込んで言おうとする忠輝を軽くおさえて、
「待たっしゃい。で、その心外の噂を打ち消す努力、上総どのは、何をなされた？」
「努力……？」
「さよう、問題はそうした噂ではなくて、それを打ち消す努力の有無じゃ。人の口に戸は立てられぬ。これを無言で打ち消す努力が大人の分別。その分別、上総どのは、どのような努力をなされた……今日も、むろん川干しなどに参られたのでは無かろうな」
「いいえ、いいえ、川干しに参ったのです」
勝気な伜は身をのり出して父に挑戦していった。

「川千しが何でわるかろう。鷹野とおなじ、行く先々の地形をさぐって変に備える。忠輝、たしかに川千しに参ってござりまする」

二

「そうか。川千しに行かれたのか」
家康は葛湯の茶碗をしずかにおいた。
「川千しはわるくはない。若い者じゃ。だが、その前にせねばならぬことは無かったかの。さっきの話だと、心外の噂が立っていた筈じゃ。そのような噂を打ち消す努力が先でなければならなかった……と、父は思うが上総どのは？」
「何れは、わかることです！」
と、忠輝はまた弾き返した。
「お父上も申されたとおり、人の口に戸は立てられぬ。そのような噂を気にかけるよりは静かに武を練ってあればよい。それで忠輝は、川千しに……」
「黙られよ！」
家康の声がはじめて高くあたりにひびいた。
「そのような噂の話を持ち出したのは、いったいどこの誰であったぞ。お許が話しだしたゆえ、それを打ち消す努力をしたかと申したのだ。したのかせぬのか、その返事から先にさっしゃい」
「努力……それゆえ、人の口に戸は立てられぬと、川千しに……」
「上総どの」

再(ふたた)び家康の声はおだやかになった。

「すると、お許は、その噂に負けたのじゃな。その噂で気がクサクサした。そこで気晴らしに川干しに参った……そうであろう？」

「そうではありません！」

「ほほう。ではどうであったぞ？　父はこなたの本心が知りたい。本心を知らねば忠告も出来ぬ道理じゃ」

「お父上！　そのお父上も、その噂をお信じなされておわしまするか？」

「信じたくはない。が信じていたと思うてもよいぞ。さすれば、それを打ち消すための努力がなされてゆく筈じゃ。上総どの、この噂は打ち消さずにおいてよい噂ではない。家康は、天下のことに気を取られて、わが家のことに眼が届かなんだ。諸侯の動きに一々干渉(かんしょう)してゆきながら、足下のお家騒動には、少しも気のつかぬうつけ者であった……と笑われよう。どうじゃ。本心を……素直な心になって、この父に打ち明けてみてはくれぬか」

「やはりそうじゃ！」

と、忠輝は吐きすてるように胸をそらした。

「お父上ご自身がすでに疑って居られる。いや、疑っているのでなければ、考えあってのご発言じゃ。お父上は、それほどこの忠輝が信じられませぬか」

「信じられぬかとは？」

「忠輝が、又々大坂城を下されと言い出すであろう。そう思うての先走ったご弩戒、お聞きしたいのはお父上のご本心でござりまする」

一瞬家康は大きく眼を瞠って嘆息した。
（やはりこの子は、まだ大坂城にこだわりを残している……）
それは家康にとって言いようもなく悲しい無分別さに感じられた。
いま彼のいる越後の地が、日本全体の治国のためにどのように大切な要衝か、それには少しも気づいてはいない。
そもそも上杉謙信が、あの地によっていたために、武田信玄ほどの名将でも、手も足も出なかった。その地の利を活用して、伊達政宗の勢力の北陸への進出を防がせよう……そう思った家康の配慮は逆になった。
（この児は政宗に奪られてしまったのだろうか……？）
そう思うとすぐには言葉も出なかった。

三

いまいちばん大坂城を欲しがっているのは伊達政宗。忠輝を婿としてわが影響下におき得た政宗は、その忠輝を通じて大坂城を手に入れようとする。
秀忠の代になってから、大坂城のあるじになった伊達政宗を想像してみるがよい。
それは、無謀、無思慮な秀頼などとは比較にならぬ江戸の大敵になってゆこう。
「上総どの」
家康は怒るよりも泣きたくなった。
「お許は、父が、何のために、今日の参内に伴おうとしたのかわかるであろう」

「わかりませぬ！」
忠輝はまたうそぶいた。
決して、それのわからぬほど愚かな生れつきではなかったが、ただ負けぎらいが素直にうなずくことを許さなかったのだ。
「お父上のことゆえ、大坂城のことにこだわって、忠輝が川干しに行くとみて……いや、行くと知って、わざわざ呼びにお寄こしなされたのかも知れぬ。お父上は、その位の知恵者だと思うています」
「そうか。まこと、そう思うか」
「越前の忠直も、お父上に叱られて、死のうと思うたそうな。お父上は、いったん疑いを抱かれると、肉親とて容赦なさらぬお方なのじゃ」
「なるほど」
「秀頼どのとて同じことじゃ。わざわざ千姫などを嫁がせ、油断させておいてついには滅ぼす……あまりにご思案が深くて、何を考え、何を企んでおわすのか凡人にはわからぬお方……と、世上で噂して居りまする」
家康はジーッと視線をわが子に据えたまま、続けざまに嘆息した。
（やはり、秀頼の死は祟る……）
それは二重の悲しみだった。
わが子に、わが意見の通じないのはまだよいとして、それと秀頼の死とを結びつけられてはあまりに残酷むざんであった。

（そうか。そんな噂でこの子を煽るのは政宗より他にあるまい……）
　それがよくわかるだけに、うかつにものの言えない気になった。
「上総どの」
「何でござりまする」
「この父も老いての、若い者の心まで察しきれなくなったやも知れぬ。そこで改めて訊ねるのだが、問題はさっきの噂じゃ。こなたと将軍家の仲がわるいという……そのような噂の立った原因は何であろうかの」
「存じませぬ！　それがしには覚えのないこと。知ろうとも思いませぬ」
「上総どのは、血鑓九郎の弟ども……将軍家の家来を、供先を切ったと申して無礼討ちになされたそうじゃの。さようのところから噂が立ったのであろうか？」
「そのようなこと……もう忘れました」
「忘れた……長坂血鑓九郎が、わが家にとってどのような由緒を持つ家来か……それは知って居られるか」
「存じませぬ。たとえどのような家来であろうと、無礼があれば許さぬのが忠輝の気性でござりまする」
「ほう」
　と、家康は又々ため息していった。
「よいご気性じゃ。あっぱれなご気性じゃ。家康などの及ばぬそのご気性、いったい誰がこなたに伝えたものであろうかのう？」

四

忠輝は、父の言葉が意外なまでにおだやかなのに、少なからず面喰った。
(何故頭から叱りつけぬのか……?)
もう少し齢を重ねていたら、これこそ警戒せねばならぬ、衝動的な怒りよりはずっと怖ろしい堪忍なのだと気付く筈であった。
ところが、忠輝はそれを逆に受け取った。
(或いは父も内心では、自分を認めてくれているのではなかろうか?)
この解釈は父子の間では、とかく感情的な甘えになる。
「わが身の気性は、よいも悪いも、お父上に似たものと存じます」
忠輝は、父もその甘えを感情で受け止めてくれるものと思って、この際、何も彼も訴えておく気になった。
「忠輝不肖ながら、以前、お父上に大坂城が欲しいと申し上げたのは、私の欲念からではござりませぬ」
「なるほど」
「みな、お父上のお築きなされた泰平の世の続くように……との配慮からでございます。お父上は今日日本中に、扶持にはなれた浪人どもがどれだけ巷にかくれて居るかご存知でござりましょうか」
「さよう、或る者は三十万と言い、或る者は五十万という。先ず、その間でもあろうかの」

「それがしの調べさせたところに依ると、これは凡そ四十万にござりまする」
「ほう……」
「四十万と申せば、これは日本中の武将大名の兵数にほぼひとしい。これをこのまま抛っておいたのでは、天下に乱は絶えませぬ。そこで、ここでは思いきった人心一新の策がなければならぬ。そう思うて大坂城を、忠輝に下されたいと申し上げたのでござりまする」
そこで忠輝は眼を光らせてひと膝進め、
「然るにお父上はお許しない。かと言って、将軍家に進言してもご嘉納はあるまいと……」
「待たっしゃい」
家康はおだやかにさえぎった。
「話というものは、一つの話にきまりをつけず、他へ飛んではもつれが深くなるばかりじゃ。将軍家の話は後にして、そなたに大坂城を遣わせば、どうして四十万の浪人どもが救われるか？
そのわけから先に話されるがよい」
「かしこまりました！」
忠輝は、ここでも一つの誤算をした。
父が自分に質問する……と、いうことは、それだけ父に思案がなく、自分が認められたもののような錯覚をおこしたのだ。
「ご存知のように、将軍家のご気性は堅実律義におわして、外国との交際などには向きませぬ。
それゆえ不肖忠輝、将軍家のご気性にはない欠点をおぎなうが舎弟のつとめと存じ、外国掛り総奉行を思い立ってござりまする。お父上もご存知のごとく、当今日本国を訪れるヨーロッパ人に

二つの勢力がござりまする。その一つは南蛮人、もう一つは紅毛人……忠輝ならば、この双方と円満に交際してゆく自信がございます。現にソテロ一派の南蛮とも往来し、又、イゲレス商館長のコックスをも引見して、よくよく双方の信頼を得ています。そこで、これ等一勢力の手を通じ、四十万の浪人たちを派遣して、世界各地の津々浦々に日本人町を造らせる……これが忠輝の考えた交易救国の浪人減らしにござりまする」

五

家康は聞いているうちに、思わずその意見に引き込まれそうになった。

(忠輝ならば、ほんとうにやるかも知れぬ………)

そんな気持になりかけて、慌てでまた冷静な以前の批判者に戻った。

「すると、上総どのは、ソテロ一派の旧教徒とも、イゲレス、オランダの新教徒とも、仲よう交易しようと申すのじゃな?」

「はい……現にお父上はもはやそれをおやりなされておわす、そのことでは意見の相違はございませぬ。それゆえ、忠輝は双方の根拠地には、巷にあふれている浪人どもをそれぞれ派遣して日本人町を造らせようというのでございます。しかも、そのご交渉に、々将軍家のお手を煩わすはおそれ多い。そこで忠輝が大坂城にあって、この面の処理交渉をお助け申したい。さすれば両三年の間に、交易による利得金をもって、浪人問題は解決され、国威はいよいよ発揚される……と」

「国威のことは口はばったい」

家康はまたポツリとさえぎった。
「只今上総どのは、南蛮人、紅毛人の双方と仲よく交際出来る自信があると言われたの」
「はい。申しました」
「では訊ねよう。南蛮人とは何をもって交際なさるぞ？」
「信仰です」
「ほう、では紅毛人とは？　ご存知であろうが、前者は後者を海賊稼業の者どもと敵視し、後者は前者を侵略の悪魔と呼んで憎しみ合う。彼等が出遭うたところは必ず戦場、ともに天を戴かぬ仲と聞くが」
「それには方策がございます」
忠輝は昂然として胸を叩いた。
「南蛮人とは信仰で結び、紅毛人とは武力で結びまする。このあたりが、実は、忠輝の思案の大切な背骨にござりまする」
「なるほど。紅毛人は新勢力ゆえ、まだまだ世界各地の出先きで、武力の要があろうからの」
「はい。一方は信仰の結ぼれゆえ問題はありませぬ。それゆえ大切なは紅毛人との結びつき……お父上は紅毛人では三浦按針（ウィリアム・アダムス）よりご存知ない。が、この忠輝はイゲレス商館長や館員どもとの往来にて、くわしい事情をよく知っておりまする」
「ほう……」
「彼等が世界の各地に新しく根拠地をつくるには、海軍は間に合っても陸兵は大いに手不足……そこで彼等と武力合併の約定を結ぶのでござりまする」

「待たれよ上総どの。するとお許は信仰で結ばれた南蛮人を、武力の面では裏切る所存か」
「ハハ……」
と、忠輝は思わず声を立てて笑った。
「お父上はまだ世界の事情にうとい。紅毛人が新しく根拠地を造るおりの敵は、南蛮人とばかりは限りませぬ。その土地土地には必ず土着の敵がいます」
「わしは、それを聞いているのではない」
家康は、表情を変えずにきき返した。
「万一、その根拠地へ南蛮人の船が攻めて参ったおりのことを聞いているのじゃ。そのおりには、上総どのはどちらへ味方せらるるぞ」
忠輝はもう一度フフッと笑った。
「その時には勝つ方へ……負け戦をしたのでは話になりませぬ。なに、紅毛人との約定を極く内々の密約に致しておけば、攻め寄せるおりには南蛮人から、先に諜報がとれまする。この思案は如何？」

六

忠輝はむしろ得意であった。
家康もまた、この思案が、二十歳を越えたばかりの若者の思案とすれば褒めてやってもよいと思う。
「お父上は……」

と、忠輝は自信満々の眼になって、
「物事に慎重すぎると存じます。南蛮人にせよ紅毛人にせよ、正面の目的は布教、交易と見せかけながら、その実法衣の下に鎧を着たる清盛入道。鎧着用の者共には太刀をかくして近づいても、一向に不誠実とはなりませぬ。それに、日本国にあり余っているのは戦好きの浪人ども、これに海外で思いきり働かせてやるのが、そのまま国内の泰平維持に役立ちます。さすれば、これぞまさしく一石二鳥と存じますが」
家康は又手をあげてさえぎった。
「上総どのの名案はようわかった。で、将軍家は、それを実行できるお方ではない……と、申すのじゃな」
「御意にござりまする。将軍家は、お父上もようご存知のとおり、かけ引きや嘘の申せぬお方、文字どおりの聖人君子かと存じます」
「ほう……」
と家康は、又親馬鹿になりかける自分の心に鞭を当てた。
「さすがに上総どの、将軍家を見る眼に狂いはないようじゃ。如何にも将軍家は、律義なお方じゃ。未だかつてこの父の意見に逆うたことすら無い。むろんわが身に相続させよとか、何れの城が欲しいとか、そうしたことを口外なされたことは一度もない」
「お父上が、心底から怖いのでござりましょう」
「と、いうと、こなたは父は怖くはないか」
「はい。尊敬は致しておりますものの、わが親のことゆえ、かくべつには」

「そうか。では、こんどは父からこなたに問いかけよう。怖ろしい父でないゆえ、思うままを述べてみよ」
「はいッ」
「こなた戦うための戦略は、覇道か王道か、その区別を存じて居るか」
「はい。知っている、つもりでございます」
「すると、法衣の下に鎧をまとう、南蛮人や紅毛人ゆえ、欺してもよい……と、考えるのはその何れじゃ？」
「それは、覇……覇道でございます」
「ほう、すると覇道は戦い勝つためには、時に不実も敢えてする……では、王道とはどのようなものと思うぞ」
「王道とは、慈悲と徳とによって民を治める道……と、お父上に聞かされました」
「よう覚えていてくれた。では、改めて訊ねよう。この父の泰平の世作りに賭けた悲願は何れと思うぞ。覇道と思うか、王道と思うか？」
「そ、それは、むろん、王道……と存じます」
「そうか、その答えもよし……父は王道に徹したい！　と申すは、豊太閤の末路の失敗をよう見て来ているからじゃ。豊太閤は戦をさせては不世出の偉人であった。しかし元来覇道の人ゆえ、泰平の世になると、われとわが覇気を扱いかね、ついに大陸出兵を敢えてして敗れたのだ……こなたの今度の思案も、名案ながらこれは覇道……覇道は父の志ではない。よいかの、父の志は王道にある……将軍はそれをよう知ってござるゆえ、わが身もそれになりきろうとしての聖人君子

なのじゃ」
　言いながら家康は、この子が戦国に生まれていたらと……ふっと惜しい気がした。

七

　忠輝はムッと表情を変えてしまった。
　それは素朴な子供の妬心に通ずる。律義一片の将軍秀忠を、父のまことの志を継ぐ、聖人君子といわれたことが口惜しかった。
　いや、それ以上に、自分の考え方を「覇道――」と決めつけられたのが心外だったのかも知れない。
　彼の儒学はまだ王・覇両道の区別がはっきりと識別出来るほどに深くはない。
（国内の浪人問題を片付けて、戦のタネを無くするのは、取りも直さず領民への慈悲ではないか）
　それに、父の希う泰平維持……への協力ならば、これは立派な孝ではないか……と無言の反撥を禁じ得ない。
　そこへ家康は又一つ、忠輝の気にそまぬことをいった。
「どうだな上総どの、こなたの思案と、豊太閤の思案とは、実はよく似ているとは思わぬかの」
「思いません！」
　と忠輝は、無言の反撥のハケ口を、そのまま感情に剝き出した。
「太閤のなされ方は無謀であった。大切な世界の窓、堺の諍臣利休居士に詰腹切らせて、高麗の

事情も、大明国の事情もわからぬ聾桟敷にあってあの戦を始められた……敵を知り、己れを知るが戦勝の要諦なるに、高麗王は唯々諾々と道案内に立つものと信じて兵をくり出す……第一歩から、無謀そのもの」

勢い込んでいい出すと、今度は家康の顔が緊った。

忠輝の秀吉評は、ハッとするほど伊達政宗のそれに酷似している。用語から言葉の抑揚までがそっくりそのまま政宗だった。

そうなると如何に子に甘い父親でも、さっきの海外進出論に、疑念を抱く結果になろう。

（やはり、あれも、政宗の口伝らしい）

「それに、そもそも太閤には、海運の知識が欠けていました。海外で戦わんとするほどの者が……」

「もうよいッ」

家康は語気を強めてさえぎると、

「太閤の発想も、実はお許と同じだったのだ。まっ先に考えたのは、どこかでもっと国を大きく奪らなんだら、手の空いたおびただしい侍どもを養い切れぬ。というて、捨てておけば国内に騒乱は絶えるときはあるまいと、お許と同じことを思うたのじゃ」

「これはしたり！　太閤はたかが高麗や大明国……われ等の考えているのは世界の海に……」

「世界であろうと、高麗であろうと、戦をすれば苦しむ民が必ず出る。それよりはの、今は、どうすれば戦の無い日本国が作れるか、父の苦心も兄の苦心もその一点にかかっているのじゃ」

「ハハ……それが視野の狭さでございます。こちらで外へ出向かなんでも、向こうからやって来

れば之れも戦……戦は決してこの世から無くなるものではありませぬ」
「なに!?　戦はなくならぬと……」
「はい。何時の時代、如何なる時世にも戦はある。それゆえ、ただ王道の聖人君子ではおさまらぬ。時に覇道、時に王道……現にお父上も兄上も、その戦を終わったばかり……」
そこまでいって、忠輝はふっと口を噤んだ。
父の表情が憤怒に変わり、くびれたおとがいの肉がブルブル震えているからだった。
(これはいいすぎた……かも知れない)

八

当然「——たわけ者!」という怒号が飛んで来るものと忠輝は思った。
感情に任せた自説を通そうとして、現に戦ったばかりでないか、と言い募ったのは無慈悲にすぎる。
いや、その前に、父の視野は狭すぎると言ったのも甘えに任せた不遜さだった。
(言いすぎた……)
そうした点では、忠輝の感受性は決して鈍い方ではない。
「お父上、言葉が過ぎました」
気付くと同時に彼は率直に詫びていった。
「ただ、戦はそう容易には無くなるまい……と、平素の考えを申し上げたかっただけなのでございます」

しかし、家康はジーッと眼を据えてわが子を見詰めるばかりであった。依然として、大きな顔にふしぎな歪みが感じられる。或いは怒っている以上に、大きな失望を噛みしめているのかも知れない。

「戦は無くならぬ……という意見を捨てきれない頑固者を、父は二人知っている」

　しばらくしてポツリと家康は言いだした。

「その一人は真田幸村、そして、もう一人は伊達政宗じゃ……ところが、お許もその説を支持する……となれば、これで三人目」

「いや、かくべつ忠輝は、そうと確信しているわけでは……」

「よいか忠輝。わしはのう、ずっと遠い昔に、釈尊もわしのような経験をなされたのに違いないと思うのだ」

「釈尊……と、仰せられると、釈迦牟尼仏のことでございますか」

「いや、仏道に入る前の釈尊と、悟られて仏になられた釈尊とでは違うのだが……まあよかろう。その釈尊が城を捨て、妻子を捨てて、生まれたままの裸になって仏道修行を志された、そのおりの世の中の様子がわかる気がする」

「は……？」

「戦に明け、戦に暮れる日々だけではない。その間に病苦もあれば貧苦もあった。右を見ても不幸、左を見ても不幸……仕合わせは仮にあっても、ほんの寸時の夢に過ぎない。あるのはただ不幸と不幸の欺きあい……」

　忠輝は父の意をはかりかねて、そっと小首を傾げていった。

「しかし、釈尊は失望なさらなかった。これは人間どもが進んで幸福を築こうとする、真剣な努力を怠っているからに違いない。そのしんけんな努力をわしが仕抜いてみせてやろうと……」

「は……」

「わしもな。若いうちには夢中で戦って来たものじゃ。何とか戦の無い世は来ぬものかと、周囲の不幸に悲憤しながら戦うて来たものじゃ」

「……………」

「そして、人間の知恵の持ち方で、戦は根絶出来ないまでも、数は減らせる。というのは、先ず強大になることじゃ。わし達に戦を挑んでも、勝てはせぬぞ……と、思わせる。それだけで戦の数は減らせるものと思うたゆえ、まっ先に信長公と手を握り、公は西を、わしは東を、……そして二人力を協せれば日本中に敵はない……そうした力を作りあげることに努めて来た。次に太閤と手を握ったのもそのためじゃ。ところがそれだけでは戦はなくならぬ。人間にはそれぞれの考え方に差異もあれば、意地もあるからの。しかし、今のわしが信じて疑わぬのは、人間の知恵と努力で、きっと戦は無くなせると……無くなせないのは、やはり努力が足りないのだと、いうことじゃ」

九

忠輝は、ふしぎな感懐を述べだした父親が、自分への怒りを柔らげたものと受け取った。

一応は、そうも受け取れる家康の態度であったからだ。

家康は、又憑かれたように言葉を強めて、

いってであろう。
忠輝がもう少し人生を深く知る年齢になっていたら、この頃から父の態度の異常さに気付いていたであろう。
家康は、いま、忠輝を相手にものを言っているのではないらしい。それはおそらく、彼自身の生涯に鋭い反省を加えているのに違いなかった。
「浄土には貧苦もなければ病苦もない！　もろもろの怨恨の根もなければ、戦の原因の、むさくるしい人間どもの欲がない……そうだ！　欲がないということは、不足がすでにないからじゃ」
忠輝は黙っていた。一々合槌を打つよりも、父の感情を静めるためには、そっとしておいた方がよいと思った。
「貧苦などというものは、働くことで救えるものだ。病苦は薬師如来の慈悲のお手をひろげてゆけばこれもやがては救えよう。人間どもが争うために、戦のために費やす無駄な力を、人間どもの仕合わせのために傾けだしたら浄土が出来る……そうだ！　浄土はきっとこの世に築けるものに違いない。そのために第一歩は……忠輝！　その浄土を築くための第一歩は何であるか、それがお許にわかっているのかッ？」
こんどはきびしい問いかけなのだ。忠輝はこれを無視するわけには行かなかった。
「はい。それは泰平と……そして、そうだ。富です」
「たわけめッ！」
「は……」

「お許はさっきから、父の言葉を聞いておらなんだのか」
「いいえ、聞いていています」
「聞いておらん！」
家康は癇立った声で一喝して、それから又しばらく口を噤んだ。
（怒ってはならぬ。通ずるように、よう話してやらねば……）
その自制は、これも忠輝のため……と、いうよりも、家康自身に必要な反省の鞭らしかった。
「富だけが人間を仕合わせにするものならば、あのようにおびただしい金銀財宝を積み得た太閤が、何故仕合わせになれなかったのじゃ？」
「それは、無理な戦をしたからです」
と忠輝は言った。
もう忠輝は、父を立てるためには、時に機嫌も取らねばならぬという、平素の子供に還っている。
しかし家康は逆のようであった。
表情を怒りと自制にゆがめながら、何か必死で追究しようとしている、思いつめた姿であった。
「富と申すはな、その内実に心得違いがあっても積める場合がある。その場合の富は、これは悪業のかたまりじゃ。そうではないか。人を斬り、人を苦しめ、人の怨みで積みあげた富……そのようなものが何で人間を仕合わせになし得るものか、そのような富は、浄土を築く浄財にはなり得ぬのだ」

口調は再び柔かさを取り戻しているものの、その眼はやはり憑かれた者の眼であった。
忠輝は固唾をのんだ。

十

家康は、深い霧の向こうの敵情をさぐるような凝視を虚空に投げながら、
「地上へ浄土を築くには……」
一語一語を嚙みしめるようにして、
「おのれが野心、おのれが慾望を超えたまことに、一心不乱の努力を積みかさねてゆかねばならぬ。わしの浄土作りの第一歩は、先ずもってこの世から戦を無くすることじゃ」
「は……」
と、忠輝はあいまいに頷いた。
(無くなるものか。戦が……)
という反撥は依然として胸にあったが、今はそれをいい出すことはしなかった。
(いずれ永くはない老父……)
媚びではなくて労りのつもりなのだ。
「わしはの、実のところ関ケ原で、もう戦は終わらせ得たつもりであった。ところが、あれだけではまだ終わらず、その後の努力を強いられている……と申すのは、あの戦によって又々新しい怨恨が根づいたからじゃ。戦というものの宿縁の恐ろしさはそこに在る……主家を離れたもの、親兄弟を討たれたもの、親類縁者を亡くした者……これは別段の野心や欲望ではなくてただの怨

恨じゃ。したがってこの怨恨には、すぐさま、打算と利己の悪縁がまつわり付く」
　忠輝は、もうしんけんに聞いてはいなかった。何よりも坐ったままなのでしびれが切れだし、それがしきりに神経を刺戟しだして困っていた。
「わしはな、関ケ原の終わったおりに、神仏が、わが努力に感応して、もはや戦のない世を作らせて下さるよう、細心の努力を積んだつもりであった。わかるであろう？　わしの意見の及ぶ限りの旗本や譜代の者には、決して厚くは酬いなかったが、その代わり、外様の大名たちには、太閤に劣らぬほどの知行を分けてやったつもりじゃ。むろんこれは手柄があったによって、領地を与えるぞという思いあがったものではない。そもそもこの世に、わがものなどは一つもない。領地も領民も、財物も生命も、みなこれ神仏からの預りものじゃ。したがって――よう、わしの世作りがわかって手伝ってくれた……そうした感謝の預け分じゃ。立派な器量を預けられてこの世に出て来ている人々ゆえ、この後の事も宜しゅう頼みまするぞ。領地も、領民も、そこから上る年貢も上納も、みな天下より預けられたものゆえ、大切にして、戦の根になる怨恨を領内から拭きはらってくれるように……そうした祈りで、神仏の預けた、その人、その人の器量に応じて封地を托した。太閤の七周忌は、南蛮人から唐人までがびっくりするような豊国祭も執行したし、秀頼どのが、威厳を傷つけることなく、ゆくゆくは関白にもなれるよう、公家であって武将という坐る位置への配慮もした……したが、それでもまだ神仏の眼から見れば、努力が足りなかったらしいと、内心、実は恥じている。わかるであろう……ただ戦に勝つだけならば、七十四歳にもなったこの父が、何でわざわざ陣頭に立とうや。誰が考えても将軍家の采配だけで立派に勝てる戦なのじゃ。したが、わしは、それではならぬと思い、老軀をおして出て参った。神仏のお眼が

ござるゆえ、ほんとうの努力を積まねば済まぬと思うてな」

そこまでいうと、家康は不意に顔を蔽って泣きだした。

忠輝は再びギョッとし、次にはうんざりして眼をそらした。

十一

(もはや、父は、ほんとうに老衰してしまっている……)

時々鋭い若さを見せるかと思うと、ついには愚痴になったり、繰り言になったりする。

(年齢を考えると無理もない)

と、忠輝は同情しようとするのだが、それにしても、今日の老父の説教は、何という長さであろうか。しびれがひどくなって足首の痛みはとにかく、指尖の感覚などは完全に無くなってしまっている。この分では、もうよいから退れといわれても、立つことすらおぼつかないだろう……と、思ったときに、また家康は、憑かれた視線を忠輝に据え直した。

「忠輝……いま、わしが泣いたわけがわかったか？」

「はい……いいえ……」

「そうであろう。わからぬ筈じゃ。今度ものう、神仏は、それでよろしい……とは仰せられなんだ。まだ努力が足りぬぞと、きびしいお叱りようじゃ」

「お父上！　そのようなことはありませぬ。もはや浪人どもも、大坂城も完全に落ちているではありませぬか」

「やれやれ……」

と、家康は涙を拭って肩を沈めた。
「いや、無理もない。忠輝にわかれと申すのはなあ」
「………」
「実はの、今度の戦の結果は、そのまま大きな家康への叱りであったのだ。よいか、わしは秀頼どのを助ける気であった……ところがあれは自害してのけた」
「その事ならば、お父上の罪では……」
「罪じゃ!」
家康ははげしくさえぎって、
「助けるつもりが自害された……ということは、わが願いを拒絶されたということじゃ。むろん拒絶したのは秀頼ではない。神仏だと申すのじゃ」
「ほう……」
「いや、それだけならば、まだわしは救われていたかも知れぬ。ところが、その後ではもっと大きいお叱りを受けた……」
「また……で、ございますか」
「そうじゃ。そうじゃ。秀頼どのの死はのう、まだこの世にあり勝ちな手違いであった……と、思えないこともない。が、その次の傷手は手違いでは済まぬことじゃ」
「いったい、何が起こったので?」
「そなたにはわからぬ。それで先刻そなたにたずねたのじゃ。覇道と王道の差を存じて居るかと……そのおり、こなたは将軍家を聖人君子と申したのう……珍しい律義なお人じゃと……それ

はそれでよい。そうかも知れぬ。が、神仏がわしを責めているのはその将軍家も、まだまだ覇道に踏みこむおそれがあるぞというお叱りなのじゃ」

忠輝はまたうんざりして、思わず顔をしかめかけた。家康がまた泣きだしそうな気がしたのだ……

ところが家康は危いところで慟哭をおさえた。

たぶん彼は、その聖人君子といわれるほどの秀忠が、実は、家康の浄土顕現の理想の底までは解し得ず、側近と共に、秀頼を自害させるように仕向けたことをいいたかったのに違いない。

だが、それはうかつに忠輝の前で口にしてよいことではない、と、辛うじて自制したものらしかった。

十二

家康は、いぜんとして視線を忠輝に据えてはいたが、その眼は次第に憑かれた光りを失っていた。うかつに声をかけたらオロオロと泣き出しそうな感じである。

忠輝は、胸のうちで舌打ちしながらようやく父の視線に耐えた。

（わしはもう、何も反抗しようとしてはいないのに……）

大坂城も当分はあきらめようし、激しい議論も慎しもう。やはり父は疲れている。いや、疲れているというよりも、すでに子たちがやさしく労ってやらねばならぬ限界に達した老人だったのだ……

（永くは生きまい）

改めてそう思うと、その父を、父の絶えず口にする浄土へ見送るまでは、自説をまげても笑顔で接してやるべきだったと反省した。
「上総どの……」
再び家康はわが子への呼び方を変えた。忠輝！　とか、辰千代！　とかいうときには、あとははげしい叱言であったが、「上総どの——」と呼ぶ時には、充分にわが子の人格を認めた愛を滲ませている。
（どうやら機嫌は直ったらしい）
と、忠輝は思った。
「この家康はの、こたびの神仏のお怒りに何と答えようかと、いま、今生最後の思案中なのじゃ」
「お父上らしい……と、存じます」
「わが願いとは逆に、秀頼どのに、自害させたということは、一も二もなく父の甘さであり怠慢であった。これほど努力してあったら、もはや掌の水も洩れまい……そうした油断を、神仏は、しかし見のがしては下さらなんだ」
家康は、そこまでいうと無理に笑った。泣くかわりに笑っているのがよくわかる。笑ったあとで家康は続けざまに嘆息した。
「どうやら上総どのは、父の生きている間は、これ以上逆らうまいと思うたようじゃの」
「これはおどろきました。その通りでございます」
「やはり、そうであったか……」

「お父上の前では、見栄も嘘も通りませぬ」
「将軍家を見習うて、せいぜい律義な孝養をと考えた……そうであろう？」
「は……はい。全くその通り」
「よかろう。そなたもそういい、わしの眼にもそう写る。もう退がってよい。それとも……」
といって、家康は、一層声をやさしくした。
「何かまだ父に申したいことがあるか？　あらば、聞いておいてもよいぞ」
それは忠輝をギョッとさせるほど心に残る、ふしぎなひびきを持った声音であった。
「いいえ、ありませぬ。お父上は、お疲れなされておわします。しばらくお休みなさるよう」
「そうか、何も申すことは無いか」
「はい。ではこれにて」
忠輝は起ちかけて、しびれのはげしさに顔をしかめ、テレて笑って、よろめきながら出ていった。
家康はその後姿を見なかった。手を叩いて板倉重昌を呼び寄せると、重昌を睨むようにして、
「父を呼べ。こなたは遠慮を」
そして、父の勝重が入って来た時には、脇息に面を伏せ、全身をふるわして泣いていた。
「勝重よ……わしは……わしは……また一人、伜を失うことになったぞ」
勝重は、無言でその場に平伏した。

王道門

一

将軍秀忠が、二条城に呼ばれて家康に対面した時は、家康は見違えるように元気であった。いや、ただの元気さ……というよりも、それは必要以上にきびしさを装った、憤怒をかくした姿勢に見えた。

「隠居の身をもって、将軍家をお呼び立て申すは理義にそわぬ事ながら、老齢なればお許しなされたい」

声も重々しかったし、切口上でもあった。

秀忠は少なからず面喰った。

(やはり、秀頼の死にこだわっている……)

実はその事で、秀忠自身にも思案にあまることがあった。

もともと彼には、父の意にそむく気などはみじんもなかった。にもかかわらず、秀頼をこのまま助けておいては、あとの天下の示しがつかぬ……そうした不安は絶えず心のどこかにあった。

その迷いが諸将に、諸将の憎悪を制禦させず、わざわざ秀頼を自殺に追い込む結果になった。

しかも、そうなってみると千姫の生きているのが二重の負担になって来る。秀忠は、千姫から秀頼と淀の方の助命嘆願があった時、困惑以上、あきらかに狼狽していた。

秀頼が、城と運命を共にする気になった時には、当然千姫も良人に殉ずべきもの……と、秀忠は信じもし、覚悟もしていた。
（わが兄の信康が、信長のために詰腹切らせられたおりの、父の苦しさに比べたら、これしきのことは忍ばねばならぬ）
それで実は、江戸にある奥方阿江与の方にも書状で懇々とさとしてあった。
ところが、千姫だけは助かり、秀頼も淀の方もこの世に亡い。淀の方は阿江与にとっても実の姉。決して寝ざめのいいことではあるまいと気にかけていた。
「何の……私の方からご機嫌伺いに参上しようと思うていた矢先のことゆえ、喜んで参ってござりまする」
「将軍家よ」
「はい」
「わしはの、あとは将軍家にお任せ申して、早々に駿府へ引きあげるつもりであったが、それではならぬと思い返してござる」
「それではならぬ……と、仰せられまするると？」
「将軍家への忠誠が足りぬ。早々退隠はわしの我儘と気付いたのだ。とにかくわしは、諸侯一統に、泰平の世を完きものにするために、将軍家へ忠誠を励めよとつねづねきびしく言い聞かせている。そのわしが、真先に引きあげようと考えたのは怠慢至極……」
「しかし、ご老体のことゆえ……」
「その労りはご無用。今度の戦でも、戦場に生命をかけて奉公した者は無数にござる。家康だけ

が身勝手を通してよいものではない。依って将軍家には、後始末の儀を諸侯にご下命、出来るだけ早く江戸に帰ってご政務をなさるよう。家康は、そのご下命どおりに事の運ぶを見届けて、将軍家へご報告のうえ駿府へ引きあげ申す。その儀ご承引ありたく存ずる」
　秀忠よりも、同席している土井利勝や本多正信の方がびっくりして顔を見合わせた。
「さて、その儀ご承引下されたものとして、次にこのたびの戦場で、不本意ながら処罰せねばならぬ者が一人出まいてござる」
「あの、恩賞ではなくて、処罰……」
「さよう、松平上総介忠輝……」
　さすがに家康の語尾はふるえた。

二

　秀忠には、父の言葉の意味がよくわからなかった。
（松平上総介忠輝……）
　忠輝が、こんどの戦で出遅れたのは確かであった。しかし、伊達政宗がついていてのことではあり、伊達勢そのものは、肝心のところへ出て来て戦っているのだ。
（わざわざ忠輝を、罰さねばならぬほどの事とは思えないが……）
　若し忠輝の出遅れを罰するとなれば、当然、越前の忠直の出過ぎた戦ぶりも又叱らねばならぬことになる。
（いったい、何を考えているのであろうか？）

忠輝を処罰するという言葉も気になったが、それ以上に一度決めておきながら、秀忠から先に江戸へ帰れというのは、それ以上に気にかかる変更であった。
（何かあった……）
そう感じながら、秀忠は慎重に問い返した。
「恐れながら、上総介忠輝、何ぞ、ご機嫌を損ずるような所業がござりましたので」
「将軍家よ」
「はい」
「この家康を、わが身の機嫌次第で賞罰をいい出すほどの我儘者とご覧なされてか」
「いいえ。決してそのようには……」
「そうであろう。わしの機嫌を損じた……というほどの事ならば、わしが我慢すればよいのだ。しかし公儀のことはそうはならぬ。われ等は今、新しい世に新しい道をつけようと、苦心に苦心を重ねているところじゃ」
「御意にござりまする」
「されば、先ず第一に正さねばならぬのは公・私の区別。これは断じて混同しては相成らぬ」
「それで……忠輝を罰さねばならぬ不都合とは？」
「第一に、働き盛りの若者の身をもって、戦場に遅刻し、道明寺口の戦に間に合わなんだこと……これ以上の不覚が又とあろうや」
秀忠はホッとした。それは確かに彼も歯痒ゆいものには思っていたが、それだけならば、秀忠が忠輝に代わって詫びても事は済もう。

「第二の不都合は……」と、家康は一気に言った。「兄弟という私情に甘え、わが身は一国一城のあるじに過ぎぬ身分をもって、将軍家の家人を無礼討ちに致した儀じゃ」
「あ……」
「それに相違ござるまいが。あまりといえばご短気ななされ方と、肉親よりも苦情があった。この公私混同の我儘を、そのままさしおいては、天下の法はまもりぬけまい」
「は……」
「第三の不都合は、考えようによってはそれ以上の一大事じゃ」
「まだ……まだ、その他にござりまするか？」
「無くて欲しい……と、将軍家も思召されよう。が、あった事は捨ておけまい。実は去る日、家康は帰国のご挨拶に禁裏へ参上のことお届け申した。そのおり、忠輝も伴い参ろうと存じ、前もってお許しを蒙ってあったにもかかわらず、当日忠輝は、われ等の申し入れにそむき、川干しに出歩いて参内を怠った。日本人として許すべからざる不届……」
　そこまで力をこめていい継ぐと、家康は不意に声を落として、秀忠、正信、利勝と、同席の老臣たちを見ていった。
「よいかの、太閤の子に不都合あればとて、これをむごく罰したわれ等じゃ。それが、わが子の不都合は見のがした……と、あっては天下に道が立とうや」
　秀忠は一瞬さっと蒼ざめた。

三

「他人にきびしい者は、わが身に最もきびしくなければならぬ」
家康はふしぎな気負いを見せて言葉を続けた。
「それで無くても、あらぬ噂を立てて喜ぶ世間なのじゃ。世人はの、わが身の至らなさを、他人の失敗に引きくらべて自慰する癖を持っている。大御所も将軍家も、身勝手な子煩悩……と、思われたのでは天下の仕置は相成るまい。いや、そうした想いが内にあっては、事毎に天下の政治が歪んだものに見えてくる。公私の区別はきびしい上にも、厳しいものでなければならぬぞ」
本多正信がまっ先に啜りあげた。
彼は、すでに、この事あるを予感していた。
（秀頼を殺してしまった……）
そうした苦悶が、何等かの形でみんなを愕かしそうな不安があった。そうした意味では、家康は、世のつねの政治家ではなくて、潔癖すぎるほど潔癖な、個小心な修道者でさえあった。
（到頭、上総どのが、供御になったか……）
家康のあげた上総介忠輝の不都合三箇条は、将軍家と老臣たちが揃うて詫びたら許されないほどのことではない。しかし、太閤の附托に応えきれず、秀頼を自害に追いこんでしまったという、この良心の負い目だけは、誰にも何とも仕様のないものだ。
秀忠は果たして、そこまで深く、父の心を感じとっているのか何うか？　彼の額には粟を吹きつけられたような汗がびっしりと浮き出している。

案外平気なのは土井利勝で、彼は、家康が今日は、本多正純まで同席させなかったわけを冷静に理解していった。
（そうか、大御所は、忠輝を秀頼に殉死させて、故太閤に義理を立て、わが良心の慰撫をしようというのだな……）
そして、そうした理解は、更にもう一つ次の物騒な連想にもつながった。
（これは……この正月あたりは、いよいよ伊達攻めになるやも知れぬなあ）
とにかく忠輝を、兄を兄とも思わぬ人物にしてのけたのは、大久保長安と伊達政宗なのだ。その長安は大恩ある大久保忠隣まで巻き添えにして今は亡い。
と、すれば、伊達政宗ひとり無事に威張らしておいてよいものではない……というのが土井利勝の考え方だった。
「お父上に申し上げます」
将軍秀忠は、額の汗を拭おうともせず、
「忠輝不都合の条々、一々ごもっともな仰せながら、これは考えてみまするると、みな、それがしの落ち度にも通じまする」
「さようのことは無い……が、まあ伺いましょう。それで、何とせよと仰せられる」
「忠輝処罰の儀は、この秀忠にお任せ下されとう存じまする」
「将軍家よ！　異なことを仰せられるな」
「はッ」
「いま、天下の主は誰だと思わっしゃる？　しかも上総介忠輝はわしの家臣ではない。お任せあ

からのう……」

「そうじゃ。将軍家のご舎弟なればこそ、この隠居の子に当たる……よいかの将軍家、それゆえ、涙をのんで不都合は裁かねばならぬ……と、敢て申しているのだ。父の……この、わしの口

「でも……忠輝は、われ等の舎弟にござりまする」

れとは何と言わっしゃるぞ」

四

秀忠は、父の眼がうるみかけているのに気付いてハッとなった。

(これは三箇条だけのことではないらしい……？)

三箇条は表面の理由にすぎず、ほんとうの原因は他にある……と、したら、それはいったい何であろうか？

秀忠にも、秀頼の死が家康に想像以上の打撃を与えたらしいことはわかった。しかし、彼の思考はそこから「忠輝の処罰――」に繋がるようなことはなかった。

(そのように、感情に溺れて無理をいい出す父上ではない)

「仰せ、ごもっともに存じまする」

秀忠はゆっくりと頷きながら考えた。

(これは、事によると忠輝が、またしても大坂城が欲しいと父に強請んだのではあるまいか？)

しかし、そうしたことは、秀忠の感じではありそうにもなかった。高田の城は立派に出来上がったところであり、その地が全日本統治のうえから、どのように重要な意味を持つかを、秀忠

もそれとなく説いて聞かせていたし、忠輝もすでに悟ったようであった。
（では、いったい何であろう？）
やはりこれは、伊達政宗への疑惑につながるものでは……？　と、思った時に家康は又いった。
「とにかくこの三箇条の不都合は黙過出来ぬ。戦場で気おくれし、兄をないがしろにして、父の命にそむき、おそれ多くも参内に無礼の汚点を残した。このような者では六十余万石の領地と領民を預けてよい器とは思われぬ。処罰はむろん将軍家のなすべきこと、充分に老臣どもとご協議あってお計らい願いたい」
秀忠はすぐに答える代わりに、もう一度静かに父を見返した。
依然として、胸を張るようにして気負っている。しかしその眼のくまには心労のあとがにじみ、こめかみに癇筋が浮いてみえる。
「将軍よ。まだ何ぞ、ご納得出来ぬことがあると見えるの」
「はい……いいえ、たしかに仰せの三箇条、不都合には存じまするが、しかし、これにはいろいろわけがあるやも知れませぬ。一応この場へ忠輝を呼び寄せて、釈明を聞いてやりとう存じまするが、如何でござりましょう」
「ご無用じゃ」
家康はあっさりと首を振った。
「わが身にとっても伜のことなり……釈明ならば、この家康がよう聞いてやったと思わっしゃるがよい。むろんそのうえでの申し出じゃ」
「では……」

と、秀忠は慎重に父の顔色を読みながら、
「三箇条の不都合、この秀忠の判断にて罪科を決めまするが、異存はござりませぬか」
「その事よ。将軍家のお考えでは、何ほどの罪科が相当と思わるるぞ」
「まず、謹慎のうえ当分蟄居……それでよいかと心得まするが」
「軽い……軽すぎる」
「では削封、転封の要がある……と、仰せられまするか」
「軽い」
家康はポツリといって脇を向いた。と、同時に大きく見張った眼からすーっと一筋、老いの涙が皺の堤を超えて流れた。
「フーム」
身を乗り出して、大きく唸ったのは本多正信であった。

五

「これは、われ等の口をさしはさむところではござりませぬが、まだ二十四になるやならずの上総さま、削封だの、お国替えだのというほど、きびしいご処分は、ちと重きに過ぎるかと……」
本多正信は、わざと問題をそらして言った。
彼の判断では家康は、秀頼を殺した償いに、忠輝も殺そうとしている。次に言い出す言葉は「切腹――」であろうと感じとっての防壁であった。
「佐渡よ」

家康は、ちょっともつれた声になり、
「お許も耳が遠くなったの。わしは、削封や国替えなどは、軽すぎると申したのじゃ」
「えっ!? では、あの、それ以上の……」
「そうじゃ。わるいことには、器量の足りぬ我儘さだけではないのじゃ」
「と、仰せられると、三箇条のほかに何ぞ？」
「いや三箇条で充分じゃ」
家康は刺刀を刺すように言ってから、
「あれの周囲に、あれの不都合をたしなめて、あれを誤らせぬほどの人物もない。とすれば、そのまま捨ておくと、将軍家の世の大きなさわりになりかねぬぞ」
秀忠はその一語で、ようやく父の心が覗けた気がして溜息した。
（父は、忠輝と伊達家の縁組みを悔いているのだ……）
伊達政宗が、どのような人物かは秀忠もよく知っている。
とにかく豊太閤も大御所も屁とも思わぬ不敵な人物だ。
太閤の時代にこんな話があった。
あまり、政宗が人を人とも思わぬ横着さを持っているので、当時伏見城の御学問所に、太閤は、家康と前田利家と政宗の四人で枕を並べて寝ながら、伏見中の大名を四人で茶会に招待しようじゃないかと言い出した。
四人が亭主になり、伏見城の数寄屋に、それぞれ手分けして大名たちを招待し、大いに勢威を見せてやろうというのであった。

そして、太閤は、政宗の受け持つ客を、客同士も仲がわるく、又政宗嫌いで有名な、佐竹義宣、浅野長政、加藤清正、上杉景勝などを割り当てた。
「――いまに見よ。数寄屋で大喧嘩ぞ」
ところが、太閤の期待は見事にはずれて、何のことも起らなかった。
というのは、政宗が最初に出した「つまみ菜の汁――」を煮え沸らせておいて、客たちはみな口をやけどし、箸で唇やら舌やらを支える騒ぎで、口論しようにも出来なかったという……
そうした政宗ゆえ、秀忠などは腹の中では問題にしていまい。忠輝はその政宗の婿になってしまった。
もともと勝気な気性に、政宗の不遜さを吹き込まれて、忠輝もまた、兄を兄とも思わぬ放言をしてのけたのに違いない。
(それでなければ父が、将軍の世のさわりになろう……などという筈はない)
秀忠はそう解すと、この場は、もはや、これ以上父に問いを発すべきではないと思った。
父の口から若しも「切腹――」を言い出されたのでは忠輝を救う道は閉ざされる。
「ご意見、よくわかってござりまする。上総介儀は、老臣どもと相談のうえ、秀忠自身が決しまする」
家康は、あっさりと頷いて、すぐに話題を次へ移した。

六

家康にとっても、これ以上この場で忠輝処罰の話をすすめるのは耐えられない苦痛であった。

そこですぐさま戦後の賞罰に話題を変えていったものの、その心はやはり忠輝の身を離れ得なかった。
(わしは、太閤への義理にとらわれて、あれに酷くあたっているわけではない……)
しかしそれは、その逆のようであった。心のどこかで絶えず、もう一つの愚痴ともいいわけともつかない感情が、胸にわだかまって消えなかった。
(許されよ太閤よ。わしは、こなた様のお伜だけを罰するのではない……)
泰平の邪魔とあれば、何ものも除く勇気がなければならぬ。その勇気を神仏はわしに求めておわすのだ……と。
しかし、もう一人の家康が忠輝の処罰を決意させたのは、決して感情の波に押し流されたからではなかった。
(とにかく、忠輝と政宗は引き離さなければならぬ)
すべては、向後の泰平維持のために。
伊達政宗という人物に、忠輝という悍馬を近づけたのは返すがえすも誤りであった。いや、忠輝だけではなくて、曾つて宣教師のソテロを政宗に預けたことすら誤りだった。
ソテロを領国に連れてゆき、洋船建造を思い立つと、政宗の夢はもはや止めどなくふくらんでゆく……政宗とはそうした型の人物だったのだ。
その根底にはむろん抜きがたい戦国人の「天下盗り病」が病根を張っている。
(――秀吉も盗み、家康も盗んだ天下を、政宗が盗んでわるいいわれがあろうや?)
そうした不敵な野心と夢を消しきれず、いまだに大きな炬火を抱いている政宗に、家康は不用

意にも、忠輝という油壺を与えてしまったのだ……
いうまでもなくこれは家康の自信過剰であった。政宗も年と共に、そうした無謀は考えなくなるに違いない……そう信じ、そうさせてみせる気でした縁組みだったが、それは見事にあてが外れた。
政宗の覇気と野心の袋は、家康が考えているよりも遙かに大きく遙かに強靱だったのだ……
（わしの死後、仮に天下を乱すものがあるとすれば……）
それはやはり第一に伊達政宗という答えが出る。……その政宗に、兄の将軍秀忠を、律義すぎて話にならぬ、と内心では軽んじている忠輝をわざわざ掌中に握らせてしまったのだ。
政宗にとっては、将軍秀忠に忠輝を嚙みつかせ、「徳川家の御家騒動よ」と、横手を打って見物する位のことは、まことに楽しい茶飯事に違いない。
（忠輝がしっかりして居れば、それも問題にするには足りないのだが……）
しかしその忠輝は、まだ口先で王道だの覇道だのといいながら、父の理想や苦心などまるきり理解出来ないらしい。
（となればこれは、泰平維持のためにも処罰はせねば……）
いや、処罰という名で、まず政宗と忠輝の縁を切らせなければ、今度の大坂の役よりもっと無意味な戦をせねばならぬ結果になろう……それが家康の理性のたどり着いた悲愁の覚悟であった。

七

(むろんここで忠輝だけに厳しく当たろうというのではない……)
家康は、当分大坂城の守備を命ずる孫の松平忠明に、五万石を賞与して、整理を終わった後は大和の郡山に移すよう、秀忠に進言しながら心の中では、まだ忠輝がふびんでならなかった。
(いったい、将軍家は、わしの言葉をどう受け取っているのであろうか?)
そのまま切腹を命じてゆくか?
それとも肉親のことゆえ、生命だけはと考えるか……?
ただの移封や減封では伊達家から迎えた姫を離縁出来まい。離縁出来ぬとすれば、すべては無駄、また政宗は悪い夢を見続けよう……
と、いって、いま大坂の片付いたところで、すぐ又奥州征伐などは、神仏をおそれぬ乱暴さといわねばならず、家康自身、その片付かぬうちに他界せねばならなくなろう。
「大坂城に残っている金銀は、安藤重信に命じて監視させ、後藤光次をして通貨を鋳させるように……」
一々秀忠の諮問に答えながら、やはり、もう一度、忠輝のことに言及しなければいられなかった。
「将軍家は、今度の賞罰について、むろん規準をお持ちであろうが、その心は、どこまでも王道に叶うおつもりでござろうな」
「は……」

と、秀忠はとまどった。
いきなり通貨鋳造の話から、また賞罰の話に戻ったからであった。
「むろん……むろん、そのつもりでござりまする」
「そうであろう。将軍家は、覇気に任せて無理を通そうとするお方ではない」
「はい」
「と、申して、とにかく戦のあとなのじゃ。甘い慈悲であとへ禍根を残したのでは征夷大将軍の重責は果たされぬ」
「秀忠も、さよう心得まする」
「仮に上総がことじゃが……これに肉親の慈悲をかけ、移封、転封などで済ますと、あれの女房どもは出てゆくまい……」
秀忠はハッとして本多正信を見ていった。
正信はしかし、白い眉毛の下で眼を細めていて、表情らしい表情の動きは見せなかった。
「女房どもと、仰せられまするると、伊達家から嫁いで参った五郎八がことにござりまするか」
家康はわずかに頷いて、
「仲がよいそうな。それゆえ、不便な土地で、小身になり下っても、付いて参ると申すであろう」
「妻ならば、当然のことかと存じまする」
「それはならぬ」
「は……」

「将軍家は、われ等より先に江戸へお帰りなされたら、すぐさま伊達家へ、上総が女房どもを引き取るように申し入れられるがよい。女房どもに罪はない。罪のあるのは忠輝なのじゃ」
秀忠は素直に頭を下げていったが、家康の言葉の底の意味までは汲みかねた。
（何故、このようなことを……？）
そう思ったとたんに秀忠は、五郎八姫と同年輩の千姫の顔を思い出した。
（そうだ千姫をまだ罰してない……）
「上総が女房が儀は心得ました。が、別に秀忠からも、一つお願いがござりまする」

八

家康は、おだやかにうなずいた。
「——上総が女房の儀は心得ました」
秀忠のその一語で、ホッと肩の荷をおろした。秀忠の律義さは信じきっている。仮に家康の真意を底の底まで汲み得なかったとしても、五郎八姫の離別は実行されるに違いなく、そうなれば、伊達政宗の野心の火も、燃え付く手がかりを失って、自然に消滅するであろう……と、思ったからだ。
ところが秀忠の方ではすでに次の問題へ思考を移してしまっていた。
「お願いは、余の儀ではござりませぬ、千姫のことにござりまする」
「於千……が、どうか致したのか」
「いいえ、あのまま伏見へ伴い帰って居りますものの、この処分もまた、秀忠にお任せ願いとう

存じまする」
家康は、思いがけないところで、傷心の孫姫を思い出させられて眼をみはった。
「於千の処分……とはいったい何事であろう？」
「はい。あれは、離別されて城を出て来たのではございませぬ。したがって、豊家の大坂城は無くなりましても、道理の上からは、わが娘とは申されぬかと心得まする」
「すると、いまだに将軍家は、於千は豊家の者、豊家の後家、と見るのじゃな」
「御意にござりまする」
はっきりと言いきられて、明らかに家康は狼狽した。向後はいよいよきびしく物事に筋を通さねばならぬと言った家康の主張に、このような反撥の伏兵があろうとは思ってもみなかった。
「なるほど……ならば、こう致すがよい」
家康は辛うじて一つのことを思い出し、
「それは、高台院を前例にしては如何じゃ？　高台院は、豊太閤の後家、それゆえしばらくは三本木に思いのままに住まわせ申し、仏心のおもむくままに、今の寺院を建立させた。それを前例にして於千がことも……」
そこまで聞くと、秀忠は姿勢を正してさえぎった。
「それとこれとは、別儀かと心得まする」
「ほう……」
「高台院は、お父上に亡き後の事を懇々と遺託して逝去なされた太閤殿下のご正妻。於千は、天下の謀叛人として、最後まで抵抗を続けて敗れた右府の妻にござりまする」

「なるほど」
「それとこれとを混同しては、将来天下に公私の別を戒告出来ぬ当家の瑕瑾に相成りましょう。それゆえ、これが処罰の儀も、秀忠にお任せ願いとう存じまする」
筋を通す……という点からは確かにそうなければならぬことだけに、家康は少なからず狼狽した。
（これが秀忠の王道か……？）
律や法度は守らなければならない。しかし、その上により大きな自然の法則がある。この、何者もその掟の外へは出られぬ法則の周囲には、「人情――」という大きな垣が設けられている。この人情は、道徳や人為の法度の下におかれてよいものではなく、これはそのまま神仏の意志によって根付けられているものなのだ。
「将軍家よ。それはお許の考え違いと思うが如何であろうな？　人情までを無視しなければ、天下の仕置が出来ぬ……と、あれば、それは人のための法とは言い難い。人情を離れた王道などはありようがないと思うが如何？」

九

秀忠はちょっと首を傾げて考えて、
「その人情のことでござりまするが……」
と、押し返した。
「ここで於千に厳しくするのは、上総介を処罰するのと、世間に対し、同じ意味にひびくことか

と心得ますが」
「なに、上総介の処罰と同じ……」
「はい。仮にそれがしが、上総介に重い罪科を申し渡し、五郎八との離別をせまったと致しまする。そのおりに、上総介から於千はどうするのだ……と、問い返されまするると、秀忠は答えに窮しまする。わが娘のことはさておき、舎弟だけは厳しく罰する……そうなっては、世間に流布されている兄弟不和の噂を、わざわざ根付ける結果になる。それゆえ、上総介の処罰同様、於千がことも秀忠にお任せ願いとう……それが、結局お父上の仰せられる人情にも叶うた処置かと心得まする」
　家康は、危うく咳込みそうになった。
（そうか。そのこだわりだったのか……？）
「律義な将軍家のお気性では無理もない配慮ながら、それは大きな誤りじゃ」
「はて、何故でござりましょう」
「考えてご覧なされ。世間の噂や受け取り方はとにかく、忠輝の立ち場と、於千の立ち場とは全く異質なものであろう。ただ同じなのは、忠輝は舎弟、於千は娘という、肉親の感情だけ……その感情にこだわって、双方とも罰さねば……と、考えるのは婦女子の義理の立て方じゃ。決して高い人情の履行ではござるまい」
「……で、ござりましょうか？」
「よいかの。忠輝は、われ等の、王道による世作りの理解出来ない不肖な子じゃ」
「………」

「しかも、その不肖の子は、六十万石の領地領民を預けられ、権力も武力も持った男なのだ。それが、現に三つの大きな罪を犯している。それに引きかえて、於千は何の力も持たぬ哀れな女子じゃ」
「は……はい」
「しかも、その於千は、秀頼どのと共に死ぬのをいとって逃げ出したというのではない。良人や姑の生命乞いをしようとして、わが陣中へも、将軍家の陣中へも嘆願して来ている貞女なのじゃ。それが事志と違うて……良人も姑も、自害して果ててしまった……将軍家よ」
「はいッ」
「於千をわが娘と思わず、又、わしの孫とも思わず……ただ一人の不運な女性……と、見たおりに、お許は不愍とは思わぬのか？」
秀忠はぐっと上体を立てたまま眼を瞑って黙ってしまった。
「ふびんであろう……不愍と思わぬようでは人ではない。わしが人情の自然を大切に……というのはそこの事じゃ。高い人情は、その者の意志によらずして招いた、不幸の底にある者への労わりや同情を申すのだ。それが無ければこの世は乾ききった砂原同様、温い人間の芽生えは絶えてあるまい……」
家康はそこでそっと眼頭をおさえて、
「於千が行為は、大坂の城を出でて三本木の別邸に移り、やがて太閤の菩提を一向専心にとむらって参った高台院に劣るものではない。高台院の前例にならわっしゃい。秀頼どのと共に死なぬは不都合……などと考えるは、チト狭量なお許の我執じゃ」

と、秀忠は眼を開いて、
「この儀、まだ納得が……」
と、首を振った。眼が血走っているようだった。

十

家康は、おどろいて声を震わせた。
「まだ……まだ、納得出来ぬと言われるのか将軍家は!?」
それはどの面から考えても意外であった。
今まで殆んど父に抗らったことのない律義な性格。千姫を罰することはならぬという意見は、父として当然喜ぶべきものであったし、喜ぶものと期待していた。
それが、眼を血走らせて抗弁して来るとは何ということであろうか……?
「聞こう！　聞きましょう。千姫を罰さねばならぬ理由を」
秀忠は、ジッと視線を父に据え直し、あるか無きかに呼吸を整えた。
「お父上は……まれに見る、非凡なお方にござりまする」
「そ、それが、何としたのだ!?」
「百年に……いや、千年に一人、生まれ出るかどうかと、秀忠の側近どもは恐れもし、尊敬も致して居りまする」
「それが、どうしたと訊いているのじゃ」
「そうした非凡なお方が……しかし、そのまま生き通せるというわけには参りませぬ。それゆ

え、秀忠には、お父上とは違うた、凡愚の道がなければならぬ……かと、心得まする」
「持ってまわったことは仰せられるな。それが、どうして千姫のあわれな身の上に、眼を瞑れとなってゆくのか……そのわけを、早く仰せられよ」
家康はじれきって脇息を叩いたが、秀忠はそれには乗らなかった。いよいよ落ち着こうとして切ない努力をしているらしい。
「先程仰せられました人情という一語にせよ、すでにお父上の人情と、秀忠の人情には大きな差がござりまする。秀忠の人情は、まだまだわが身をつねって人の痛さを知る程度……時おりわが身をつねらぬと、ついに他人の痛さも忘れるほどの、浅く愚かなものでござりまする」
「待てッ！」
と、家康はさえぎった。
「すると、お許は、わが身をつねる……その痛さを忘れぬために、於千を許さぬと言われるのか」
はげしく問い詰めて、相手を論破しようとしたのだが、
「御意にござりまする」
意外にも秀忠はきっぱりとそれを肯定した。
「於千にも自害をすすめ、ここで豊家の根を断たねば、凡愚には、次の泰平を磐石にしてゆく自信がござりませぬ」
「なに、豊家の根を断たねば!?」
「はい。於千は懐妊している……やも、知れぬ節がござりまする」

「それは芽出度い！　将軍家も覚えておわそう。武田勝頼が天目山に自害のおり、われ等はその血縁を探したものじゃ。血縁を断つ……そのようなことは神仏が許し給わぬ。ところが於千が懐妊……ならば尚更もって於千の自害などは相成らぬ。その子たちが大きくなる頃には世間はすっかり変わっていよう。もはや戦国の憎しみなどは遠い遠い昔語りになっている」

「それが、そうは参らぬわけが」

秀忠はまた冷静に切り返した。

「それでは秀忠は、わが身もつゝならぬ身勝手な不人情者になり下りまする。と、申しまするのは、一両日中に秀頼の遺子国松が捕われて参りまする。秀忠はそれの処刑をすでに命じてござりまする……」

十一

家康はわが耳を疑った。

「何と言われる、秀頼の遺児を……？」

「はい」

秀忠は、きりりと眉をあげて、きっぱりと頷いた。

「国松と申しまする。伊勢のはした女が産んだ遺児にござりまする」

「その小伜ならば、始めから城内には居らぬ筈じゃ。とうに豊家とは縁をきり、京極家出入りの町人の手に……そうじゃ、京極の後家常高院の手で、如何なる成行きになろうと、息災に暮らせるよう、低い身分の者に養われてある筈……そのようなものをわざわざ探し出して何とするぞ。

られて参りまする」
「はい。その者の名は申し上げませぬ。しかし探し出して、一両日中にわれ等の手許に引き立て
「と、申すと、誰ぞ、おせっかい者が訴人でもして来たと申すのか」
「それが、そうはならなくなりました」
探し出せば面倒になる、忘れておれば済むことじゃ」

「何ということ!?」
家康は顔をゆがめて舌打ちし、それから改めて驚き直した。
「これは一大事じゃ！　で、将軍家には、その小伜の処分をお命じなされたのか」
「謀叛人の伜……と、なれば罰さねばなりませぬ。それを差し許した……と、相成っては、爾余の者共も処刑出来ず、天下に示しがつきませぬ」
「そ、そのような事は……」
と、家康は急きこんだ。
「将軍みずからなさる必要はない。板倉にお任せなされ。勝重がよいように取り計らうに違いない」
秀忠はそれを待っていたかのように、
「国松の処刑を決めたは、その板倉勝重にござりまする」
「なに、勝重が……」
「勝重には、勝重の深い思案があるようで。国松の存在が世間に知れ、その隠れ家を訴え出て来た者がある。それを敢えて取りあげず、見逃すことに致しますると、別の者を罰さねば済まなく

なる。と申しまする」
「別な者……とは、誰のことじゃ」
「はい。常高院の一家、京極家にござりまする」
家康はギクリとして口を噤んだ。
なるほど、それは一つの道理であった。
謀叛人の秀頼に国松という遺児があった……しかもその遺児はひそかに京極家の庇護のもとに育っていた……と、世間に知れてしまったのだ。
国松はどこへ遁げたか、行くえが知れぬと言って見のがしても、京極一族が姿をかくせるわけはない。とすれば、これを逃がした責任者として京極家は取り潰さなければならなくなる。
「フーム。そうか」
板倉勝重の計算では、国松を見のがすか、淀の方の妹として、あれほど熱心に和平のために働いた常高院の一族の安泰を計るか、二者択一の立ち場におかれて、国松の処刑を秀忠に上申して来たのに違いなかった。
「さようなわけで、秀頼母子を自殺に追い込んだ秀忠は、国松をも処刑致しまする。それゆえ、凡愚の人情……わが子の千姫も、このままは許せませぬ。この儀、お許し下さるよう」
それは、いかにも秀忠らしい、悲しい決意の筋道だった。家康は途方にくれた表情で眼をそらした……

そば杖

一

「戦争――」という非常の悪業は、これを絶滅しようと努める者にとっては不思議な逆作用で、ふしぎな犠牲を求めてくるものだった。
家康の、これを絶滅しようという悲願は、言うまでもなく仏者のいう大慈大悲に根ざしている。
しかし、その下にあって、これが根を絶やそうとしてゆくと、その動きは、もっと表面的な人間の愛憎につながりを持って来る。
京、大坂は、今、そうした表面を追う人々の手で、落人狩りが執拗にくり返されていた。いや、これは今までの常識でもあった。理由はしごく簡単である。敵として戦った者の遺族はことごとく生命の根を断って、遺恨の対象とされることから免れたいという、復讐忌避の本能である。
そうした常識からすると、秀頼の遺児、国松もまた大きな憎悪の対象になされてゆく。
「――たしか、秀頼には男の子が……」
すでにこの時、於みつの産んだ姫の方の身のふり方は決まっていた。
女児の責任はあまり強くは問わない常識に従って、千姫の養女としてゆだねられ、やがて千姫

が出家させることになっていた。
しかし男児となるとそうはゆかず、秀忠の側近では、誰が言い出すともなく、それが問題になりだしていた。
「――国松どのの儀ならば案ずることはない」
と、本多正信は言った。
「――あれはの、まことのお胤かどうか疑問だったのだ。つまり、秀頼どのご幼少のいたずらでの。実の相手は他人であろうという……そこで、生まれるとそのまま常高院さまのお手にて側からしりぞけられ、どこぞの町人の子として養なわれている筈じゃ。或いは死んだやも知れぬ。とにかく本人は素性も知らずにいるものゆえ構うことはないぞ」
「――ところが、それがそうでは無かったので」
そう言ったのは井伊直孝であったとされている。
「――秀頼は後に至って、わざわざその子を城内に貰い返し、愛育していたよしにございまする」
この風聞もまた嘘ではなかった。
秀頼が、わざわざ貰い返したのではない。実は、この子には大叔母にあたる京極家の常高院が、さる町人にわざわざ遣わしてあったものを、この前の冬の陣の開戦がやかましく取り沙汰されだすと、その町人は、後のいざこざをおそれて、わざわざ大坂城へ返して来てしまった……というのが真相だった。
その意味では国松の出生は、はじめから呪われていたと言ってよい。これが秀頼の胤と言わ

れ、豊太閤の孫と言われていなければ、こうした不運にはならなかったのに……
世間の常識では、関東関西お手切れの戦となれば、当然勝利は関東側……そうなって、若しも太閤の孫をかくしてあったとなっては身の破滅……と考える。
事実、常高院が、あとで千姫の腹から産まれるであろう嫡子をはばかり、淀の方と相談したうえで、国松を養子につかわした相手は、若狭の町人で、伏見農人町に乾物の店も出している砥石屋弥左衛門という者だった。
常高院は京極家の家臣田中六左衛門を介して国松を養子にやる時に、
「――由緒のあるお方の血筋ゆえ、相続人にしてたもれ」
ただそれだけ言ってやったのを、六左衛門が素性を洩らしたものらしかった。

二

国松を貰った砥石屋弥左衛門は、弟の嫁が若くて後家になっているのを乳母になおし、七歳まではこの秘密を、却って楽しみながら大切に育てて来た。
豊太閤の孫で、今を時めく大坂城主の落とし胤……それだけで町人の子の秘密にしては大きすぎる。
(何時かは召出されて、大大名に取り立てられるやも知れぬ)
そうした夢もたしかにあった。
今は徳川家から嫁いでいる正夫人をはばかってはいるものの、親子の情は断ちがたい。やがてまた召出されて……そうした夢を描いて、品性も卑しくせぬようにと、その後もひそかに田中六

た。

左衛門を招いて武家風の立居ふるまいを教えこんだり、手習いの手ほどきを受けさせたりしてい

ところが事情は一変して、いよいよ徳川家と豊臣家とは敵味方として戦うことになりそうな空気なのだ。冬の陣の三月ほど前である。

弥左衛門はびっくりして、再び田中六左衛門を通じ、引き取り方を願い出た。

「――高貴なお方のお血筋は、われわれ町人どもにおそれ多くて育てかねまする。何とぞお引きとり下されまするよう」

当時の常高院は、家康の内意を受けて大坂城内にあり、しきりに内部から和平を計っている頃で、京極家の家老たちが一存で国松を引き取ると、これを常高院の許へ送りつけたものなのだ。

この時常高院は、自分の力で和平は成ると思いこんでいた。そうでなければ、もう一度押し返したに違いない。とにかくこうして再び大坂城に戻ることになった国松の生涯は、風の中の羽毛のように変転していった。

秀頼は七歳になった国松を見て、愛情よりも興味を感じ、再び生母を呼び出して、国松を「若君――」と呼ぶように命じていった。

千姫にまだ子供はない。関東との間がおもしろくない時だけに一つの憂さの晴し場でもあったのだろう。この事は国松よりもその生母が喜んだ。再び秀頼の側に召されて寵を取りもどし、千姫がうまず女ならば、わが子が世継ぎになるかも知れない。

しかしその夢も夏の陣を迎えると、千切れ雲のようにはかなく飛び去った。

幸い国松を育てた弥左衛門の弟後家が、乳母として大坂城にそのまま仕えていたので、これに

託して、再び伏見農人町の弥左衛門宅へかくれる事になった。
　弥左衛門はびっくりした。一行は、前からの縁で田中六左衛門夫婦と乳母の後家と、そして京極家の大津の蔵奉行である宗語という者の伜で、国松の遊び相手をつとめていた十一、二歳の子供とであった。
　田中六左衛門夫婦は別にして、一年足らずとはいえ、大坂城内で若君暮らしをして来た国松である。乳母や遊び相手の子供までがそこで仕えた習慣の家来になってしまっている。
（これは、わが家におけるものではない……）
　そこで万一の場合を考え、懇意な伏見の加賀衆宿、材木屋という家に預けた。
　ここならば加賀の侍たちがよく泊まる。それだけに眼立つまいと思ったのだが、実はそれが却って噂にのぼる結果になり、噂にのぼった頃には、大坂城は焼けおちて、国松の父も母もこの世になく、大坂から京は、落人狩りに明け暮れる街になってしまっていた……

三

「――加賀衆宿の材木屋に、おかしな子供が泊まっているぞ」
　そうした噂が立っていったのは、大坂城が落ちて四、五日してからであった。
「――おかしな子とは、どのようにおかしいのだ」
「――年齢のころは七ツか八ツか。近所の子供に名を問われての、わしが名は若君だと答えたそうな」
「なに、若君と……？」

「そうじゃ。何時も十一、二歳ほどの家来を連れていての、その子も若君さまと呼んでいる。いったいどこの若君かじゃ」

こうした事が、簡単に聞きのがされる時ではなかった。大坂の残党らしいものは訴え出よと布令られて、毎日あちこちで訴人の出ている時なのだ。

当時の伏見警護は井伊直孝。井伊の許へ誰が訴え出たのかつまびらかではない。むろん取り調べに出向いた者も、身分ありげな……ということだけで、それが秀頼の子の国松であろうなどとは思ってもいなかった。

「その方の許に、若君と申す、あやしい子供が泊まって居るそうじゃの。これへ連れて来てくれぬか」

材木屋の亭主はびっくりして、その旨を乳母に告げ、乳母は裏口から田中六左衛門の許へ走ってそれを告げた。

六左衛門は真ッ蒼になって考えた。もう少し早く若狭へ移してあればよかったのだが、京極家の老臣たちの間でも、これに反対するものがあり決定が遅れていたものらしい。

こうして六左衛門が衣服をあらためて、材木屋の店先へやって来た時には、すでに事態は手のつけられぬことになっていた。

田中六左衛門は、これを京極忠高の落胤といいくるめるつもりで、

「これは、何のご不審か存じませぬが、実は若君ことは、われ等主人のお血筋ゆえ、早速にも領国へお伴い申す筈のところ、戦後の多忙にとりまぎれ、本日まで延引仕り……」

丁重に言い出すと、相手はムッとした表情でさえぎった。

「これはおかしなことを申される。ただいまこれなる女性の言葉と、お身の申し条とは相違してござるぞ」

六左衛門はあわてていて、役人の前に引き据えられている乳母に気がつかなかったのだ。

「お身はただ今、京極どのお血筋の方……と、申されたの」

「如何にも」

「これなる女性はそうは言わなんだ。お女中衆、こなた申した通りを今一度述べてみよ」

「は……はい。われ等がお仕え申して居りまする若君さまは、この世に二人とない、高貴なお方の若君さまと……」

「この世に二人とはない……と、申すと、並々ならぬお方。とにかくその名を明されよ」

「そ、それは申し上げられませぬ！」

あわててさえぎる乳母の姿に、田中六左衛門はしまった！　と、ほぞを噛んだ。

世に二人とはない高貴なお方……そんな言い方で相手の興味をそそっておいて、名前を告げずに済ませる筈のものではない。

「申し上げます。これには深い事情がござりまする。所司代板倉伊賀守に直々申しあげとうござる。何卒よしなにお取り計らいのほど」

その時もう別の一隊は、宗語の倅と国松を昼寝の部屋から連れ出していた。

四

乳母の砥石屋の弟後家は気の強い女であった。同じ伏見の商家の出で、それが大坂城での乳人

奉公を経て来ているので、今ではすっかり「忠義——」が板につき出している。
いや、それよりも、秀頼の子と言えば下ッ端役人などは恐れ入って手も出せまいと錯覚していた。
彼女のうしろには、京極家のご後室がついている。ご後室は高台院さまや大御所ともご懇意で、そちらから手を廻せば、井伊にせよ、板倉にせよ問題はあるまいと思ったのだ。
そこで到頭最後の切り札のつもりで、引き立てられて来た国松をかばった。
「無礼しやるな。そなたたちの手をかけてよいお方ではないぞ」
「では何者なのだ。この童は？」
田中六左衛門がハラハラしながら黙らせようとしたのだが、もうその時には、威猛高に乳母は国松の名を口走ってしまっていた。
「恐れ多くも、このお方は豊太閤さまの御孫国松君なるぞ」
「シーッ」と六左衛門はさえぎったが、さえぎり消せることではない。材木屋の前は黒山の人だかりで、
「えっ！　ではあれが右大臣さまの……」
いっせいに人々はわき立った。いま、京・大坂で、最も市井人の興味をそそる悲劇の主人公の登場なのだ。
「——国松君が捕まったぞ」
「——国松君が……」
そして、その噂はそのまま京極家の存亡につながる大事になってしまった。

「——京極家のご家来衆がかくまっていたものらしい」
そうなると、これは一つの叛逆とも見られかねない。
「——京極家は何のゆかりもござりませぬ。これは、高貴のお血筋ながら、それがしが養子に貰いうけましたもので……」
田中六左衛門は八方陳弁しながら、井伊直孝の陣屋に引き立てられ、そこから所司代屋敷に預けられることになった。
むろん、乳母も、そして宗語が伜も一緒である。
井伊直孝は恰度陣中で昼食を摂っている時で、引き立てられて来た国松に床几を与えて弁当を給した。
「こなたの名は若君というのか」
「そうじゃ。若君さまじゃ」
「フン、若君さまは酒を喰べるか」
「おお、喰べてもよいぞ」
「そうか。では注いでやれ」
国松はうまそうに朱盃に一杯の濁酒をほして盃を前においた。直孝は笑いながらその盃を取り上げ、自分も一杯注いでから、
「武運きわまった若君さまの盃、われ等が呑んではならぬ盃じゃ」
思い直して抛り出した。
とたんに乳母の後家が絶叫した。

「無礼者め！」
「なんだと」
「仮にも右大臣さまの忘れ形見、世が世ならばその方ずれの御前へもまかられぬ身じゃ。そのお方の盃を投げ出すとは礼儀もわきまえぬ田舎侍めが」
直孝はすさまじい女性の悪罵に苦笑して、
「これはとんだ忠義者……京極家まで抱いて死ぬ気でいくさるわ」
こうして、その日のうちに国松は板倉勝重の手に渡された。

五

板倉勝重は、国松丸を風呂に入れ、それから乳母に、彼の好物は何かと訊ねた。
これは年輩でもあり態度もいんぎんだったので、乳母もおとなしくなっていた。
「はい。若狭の鰈がお好きでございます」
「ほう、あの蒸した乾しがれいか。早速調えて進ぜようのう」
そういってから勝重は、腹の底からため息した。
「その方の若君は、たしかに、秀頼さまの忘れ形見か」
「はい。決して間違いはございませぬ。京極のご後室さまから、田中六左衛門どの夫婦の手を経て、砥石屋弥左衛門がご養育申し上げました。間違いのあろう筈はございません」
「その方は、何時から乳母をつとめたぞ」
「はい。ご養育を任されたご当歳のおりからでございます」

「そなたの名は？」
「砥石屋弥左衛門の分家、弥三郎の後家で、らくと申します」
「すると乳呑児のおりから育てたのだ。いとおしかろうな」
「それはもう……生命に代えても、お守り申さねばならぬ、お方でござりまする」
「仮に……」
　と、いって勝重はまた大きくため息してみせた。
「京極家のご後室から、田中某の手を経て砥石屋に下されたという経路には間違いはない……が、もしもご後室が、実はそれは秀頼さまのお子ではない……と、申されたとしたら何とするぞ。まことの事情を知るはご後室の常高院さまだけの筈じゃ。その方たちは噂を信じて、そう思いこんでしまったのでは無かったのか」
「滅……滅相もない。そのようなことがどうしてござりましょう。現に私はご城内に召されてご奉公申し上げたのでござりまする」
「そのことじゃ。あれは冬の陣の直前での、ご城内でもいろいろ取り込み中であった。それゆえたしかな詮議もせず、そのままさしおいたのだ……と、わしは常高院から伺っているのだが」
「ご後室さまが、そのような……？」
　乳母は舌打ちして身をのり出した。
「ご後室さまに会わせて下さりませ。今更ニセ者……などといわれては、若君さまの立ツ瀬がござりませぬ。現にご城内では、たびたび御父君の膝にも乗られ……」
「待たっしゃい！」

勝重は苦々しげにさえぎった。

「その方はそう思い込んでいるようじゃが、それがしの調べたところはそうではない。どうやら田中某と申すが曲者でな」

「あの六左衛門ご夫婦が……!?」

「そうだ。常高院さまに頼まれたお子は田中某の手許ではしかで死んだといわれている」

「えっ……そんな、そんなことが」

「待たっしゃい。それで六左衛門は、砥石屋との約束に困りはて、わが子を養子にやったという噂じゃ。若しそうならば不届至極、その後その伜を秀頼さまご落胤などといい立て、あわよくば大坂城の主にもと、とんだ悪心を起こして取り返したものと申すが、どうじゃ。こなたにそうした心当たりはないか」

勝重は、家康の失望の大きさを知っているので、国松だけは助けたかった。いや、悪人は田中某……ということで、国松も救い、京極家の秘匿の罪も免がれさせたかったのだ……

六

板倉勝重はわざわざ、乳母一人を居間に呼んで、この女の、記憶の糸を巧みに攪乱してゆく気であった。

実は、捕えられた子は、以前京極家に仕えていた浪人の子であった。それを秀頼の落胤などと、偽った不届至極の者……となれば、その親も子も、洛中洛外に住まうことは許さぬぞという追放ぐらいで事は済もう。噂好きな世間もこれで一応納得するであろうし、田中某は武士のこと

ゆえ、勝重の心を読みとって、喜んで在所へ身をかくすであろうという計算だった。
（そのためには、先ず乳母を呪縛しておかねばならぬ……）
ところがこの女は、それほど簡単に勝重の暗示にかかって記憶を紊すような女ではなかった。
彼女の胸計算は勝重とは逆らしい。これがほんものの秀頼の子と証明出来れば助かる道はきっとある。それを敢えてニセ者呼ばわりするのは、斬る気なのだと思ったらしい。
「所司代さまに申し上げます」
乳母は眼をひきつらせて、
「若君さまが六左衛門のお子……そのようなあらぬ噂をまきちらすのは、井伊のご家中でござりましょう。井伊どのは、あまりに無礼をなされたゆえ、私が見かねて罵りました。それを根に持たれて、そのような……」
「そうではない！」
勝重はもて余した。どうしても暗示にかからぬほどならば、自分の胸中を読みとらせるより他にない。
「わしは、田中六左衛門とか申す者の口からそれを聞いて居るのだ」
「えっ⁉　六左衛門さまがそのような」
「そうだ。いま呼んで対決させよう。よいか、気を静めてよう聞くのだ。そして六左衛門の申すとおりならば、憎い奴ながら父子ともに追放……そなたは知らずにそう思い込んでいたもののゆえ、かくべつとがめるほどの事もあるまい。砥石屋を呼んで引き渡すゆえさよう心得よ」
語尾に無限の謎を匂わし、手を叩いて手代を呼んだ。

「田中六左衛門夫婦を連れて参れ」
乳母は一瞬キョトンとした。
（そんなことはある筈がない。彼女の知る限りでは、田中夫婦に子供はなかった……あったら、宗語の伜などわざわざ大津から呼び寄せて遊び相手に差し出すものか……？）
何かありそうだと一抹の疑惑は抱きながら、しかしまだ乳母は板倉勝重を油断出来ない敵側の者だと信じこんで警戒している。
田中夫婦が呼び出された。女房は町家生まれの乳母以上におびえていたが、六左衛門はさすがに武士の落ち着きを捨ててはいなかった。
「その方が、田中六左衛門か」
「いかにも」
「その方は不届至極のものじゃ。現にその方たちが加賀衆宿の材木屋に匿まいあったその方の実子を、何を考えて大それた罪人の国松などといいふらしたぞ。国松丸とでも申せば、豊家の遺領にでもありつけると思うたのか。若しそう思うての悪戯ならばとんだ事じゃ。秀頼は天下の謀叛人、その子の国松ははりつけじゃ。どうじゃ。それでもわが子ではないと申すか」
「恐れながら」と、六左衛門はすぐに応じた。
「それがしは、いまだ国松を、右府の忘れ形見……などと申したことはございませぬ」

七

勝重はホッとして乳母をかえりみながら、

「そうか、すると、噂好きの世間が、勝手に国松丸だの、右府の忘れ形見だのと申しふらしたに過ぎず、その方は知らぬことだと言うのだな？」
「いかにも左様でござる」
と、六左衛門は重ねて答えた。
彼は、かけられた謎を解いたと見えて、視線にありありと感謝のいろを滲ませている。
「そうか、ではもう一度たずねる。加賀衆宿の材木屋なる旅籠に止宿してあった童は、その方の実子に相違ないな」
「仰せの通り、それがしの伜に相違ございませぬ」
「よろしい、では退って追っての沙汰を待つように」
そう言ってからもう一度勝重は念を押した。
「よいか。将軍家ご側近から、或いはその方に改めて事情をただすことがあるやも知れぬ。そのおりには、冷静に事の次第を述べるように」
「心得てござる」
「されば、両人を引き立てよ」
勝重の考えでは、先ず二人を去らせておいて、井伊直孝を呼ぶ気であった。直孝の口さえ封じておけば……と、思ったのだ。
ところが事は意外な訴人が現われたことから、この時すでに本多正純の手で別の調べが開始されていたのである。
訴人は、国松丸の遊び相手、宗語が子の母親であった。

させたのに違いなかった。
おそらく大津の蔵奉行をしていた宗語は、累が主家の京極家に及ぶのをおそれて、妻に訴え出
「――国松丸は、秀頼さまお血筋に相違ございませぬ。そこで後難をおそれて、砥石屋弥左衛門が、これを大坂城に送り届けたのでございまする。はい、この事はむろんご後室の常高院さまもご存知ないこと……田中六左衛門と砥石屋とで相はかり『京極様御道具――』として、長持の中へ国松丸さまと、われ等の子とを秘ませて送り届けました。ご城内でこれを受け取ったのは、国松丸さまご生母の伊勢のお方……それがご落城のおりに、又々砥石屋へ送り返されたもの……事情ご了察あって、わが子をお返したまわりたく、お慈悲をお願い申し上げまする」
表面はわが子の助命嘆願のように取りつくろいながら、その実、京極家には何の責任もないという証明のための訴人であった。
訴人を受けた本多正純はすぐさま召し捕られたおりの事情を井伊家にただし、それからそれを秀忠の耳に入れて、自身で所司代屋敷へやって来た。
この時すでに正純の肚は決まっていたらしい。いろいろ詮議してゆくと、常高院が疑われ、京極家に処分が及ぶことになる。
(これはもはや包みきれぬ。戦国の習慣どおり、謀叛人の子として処罰し、法のきびしさを天下に示しておかねばならぬ)
こうした場合に、秀忠は自分の意見を強硬に主張するようなことは殆んどなかった。
「所司代に密々で相談したいことがござる。お取り次ぎを」
本多正純が、板倉勝重の許へ馬を乗りつけて来たのは、国松丸が、六左衛門と乳母にはさまれ

て、若狭の蒸し鰈で夕餉の膳に舌つづみを打っている時であった。

八

本多正純と板倉勝重の密談は、明けはなされた勝重の居間で、一刻半ほども続いた。
その間二人は、小姓も手代も一切近づけず、時おり、はげしくいい争う声さえもれた。
いうまでもなく、勝重は助けようというのであり、正純は処刑を主張して譲らなかったのだ。
そして最後には更に井伊直孝が呼ばれ、安藤重信も呼び出された。
そうなると、どうやら処刑組が殖えるばかりで、勝重の旗色はわるそうだった。
しかし勝重も仲々譲らず、やがて重信が、将軍秀忠の決定を仰ぐために伏見城へ出かけていった。
しかし、その時重信は秀忠には会わず、土井利勝と密談して、そのまま所司代屋敷へ引っ返した。
「――ご決定じゃ」
重信は帰ると同時に大声でいった。
「将軍家は御法どおりに扱えとある。国松丸は六条河原で斬られることになりましょう」
一瞬、一座はシーンとなり、勝重はハラハラと涙をこぼした。
「して、田中六左衛門は？」
「むろん斬罪、あらぬところで主家の名を出し、危く主家に迷惑を及ぼすところ、武士にあるまじき不所存者と」

「では、あの乳人は……何となされまする」
「乳人は女性のことゆえ、おかまいなし」
「侍童は……宗語の子は？」
「これとて童のことなれば……」
と、いいかけて重信は首をかしげて、
「そうだ。これは共に斬れとあったわ。国松ひとりでは黄泉への旅が淋しかろうゆえ」
おかしな同情だったが、戦国の謀叛は、その罪九族に及ぶといい継がれている当時としては、こうした独断はしばしばのことであった。
彼等が、こうも国松の処刑を主張して譲らなかった最大の理由は、豊家への憎しみ以上に、まだ捕まらない落人どもへの力の誇示が目的だった。
(震えあがらせぬと、又々何をしでかすかわからぬからなあ)
暴力は暴力を極度におそれる。そして、いよいよ暴力をふるい合うという悪循環になるのだが、その環はまだまだほんとうに断ち切られてはいなかった。
板倉勝重が、そっと立って、長い廊下を国松丸の泊まっている別棟にわたっていったのは、もう亥の刻（午後十時）過ぎであった。
決定は、彼の意に反して、みんなに押しつけられた結果になったが、それを実行するのは皮肉なことに所司代の役目であった。
真夏の六条河原の灼けつくような暑さとそこに光って流れる一条の清流が瞼にうかんだ。
いや、その灼けつくような河原の小石をふんで死の座につく、あどけない国松丸の小さな姿

が……

（いったい、あの子に何の罪があるというのか……）

廊下をわたって座敷の内をのぞきこむと国松丸は、もう宗語の子と枕を並べて眠っている。そばで、げっそりとやつれを見せた乳母が、静かに団扇をうごかして国松丸の蚊を追ってやっている。

田中六左衛門は、小さな手帳をとり出して何か認めていた。

板倉勝重はそっと又長い廊下を引っ返して、

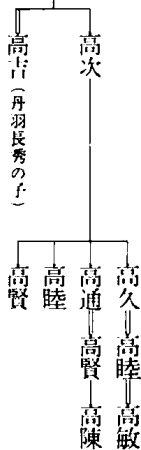
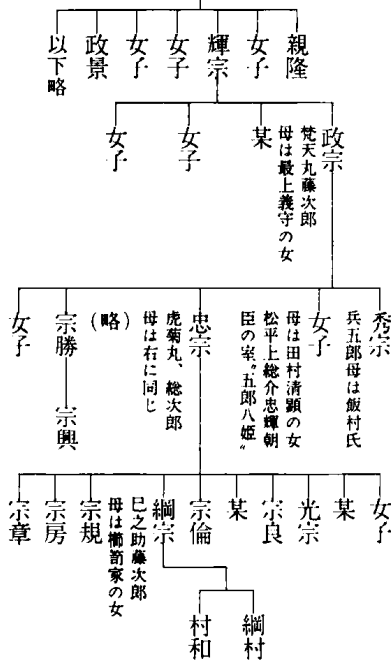
「蚊やりを届けてやりなされ」

小声で手代にいい、再び居間へ入っていった。

藤堂氏・伊達氏系譜

（—は直系或は直系編入の別の明らかでないもの。＝は同族・異族よりの編入）

大坂夏の陣参考図

天王寺岡山戦図（元和元年5月7日）
0
1
2km
東軍
西軍
天満
鴫野
土佐座
上博労
阿波座
下博労
船場
大坂城
三之丸
松屋町口
八町目口
黒門口
小橋村
王造村
木野村
三軒家
木津村
岡山
一心寺
茶臼山
天王寺
前田先鋒
片桐且元
本多康紀
舎利寺村
前田利常
林寺村
大坂湾
平野
住吉
八尾若江戦図
（元和元年5月6日）
0
1km
若江村
八尾村
道明寺戦図
（元和元年5月6日）
0
1km
片山

大坂夏の陣の火ぶたは慶長二十年（元和元年）四月、切って落とされた。濠を埋められた大坂方は城外に出て徳川勢に立ち向かったが、名ある猛将も相次いで斃れ、五月七日には家康の心胆を寒からしめた真田幸村の軍勢も玉砕……。翌八日秀頼と淀君は城中の糒蔵で自害し、豊臣家はついに滅亡した。